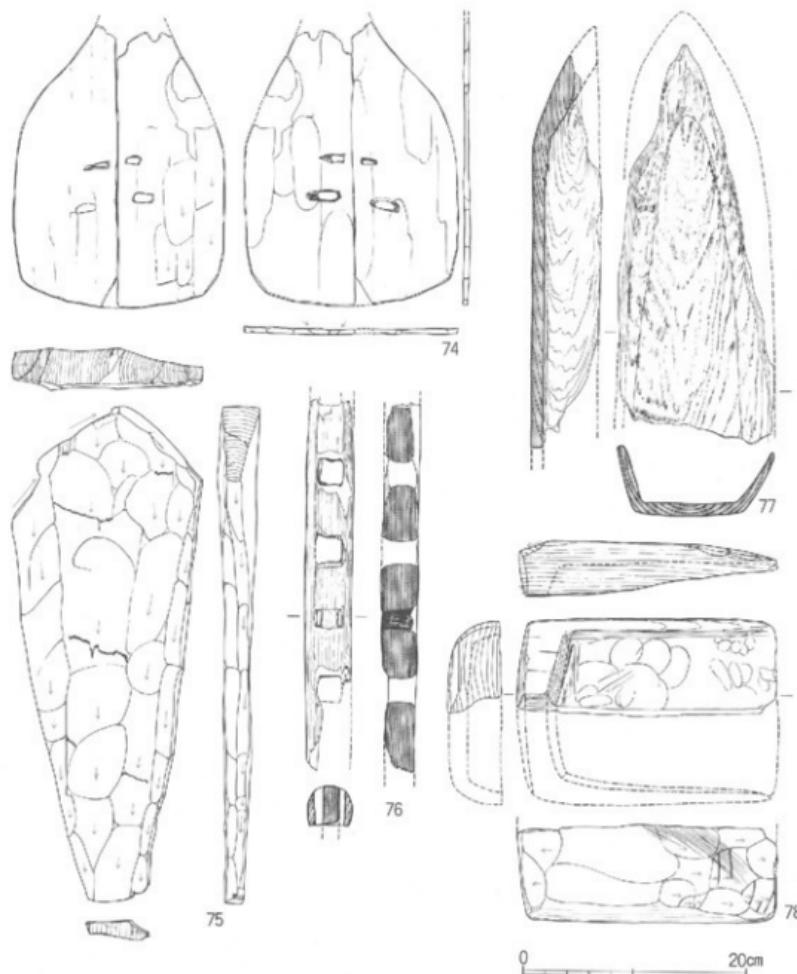


(第104図74) は木製鋤先で柾目木取りの材を杓文字形に加工するもので残存長25cm、幅19cm、厚さ0.6cmを測る。検出時には中央から二等分する形で割れていたが、形状・法量等から、同一個体と判断したものである。中央には柄を固定するための双孔が上下二段に穿たれている。

(77) は舟の舳先を思わせる木製品である。これは芯持材を削貰したもので、横面「コ」の字状



第104図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図

を呈す。先端の一部及び、後半部が欠損しており、残存長35cm、舟べり高5cmを測る。

(75) は楔状木製品と仮称していたもので全長44cm、最大幅16cmを測る。柾目材を使用しており、上端木口を山形に削り、下半の両側辺を削り込むことによって徐々に細く穿らす。粗雑な加工痕があり、使用痕跡は認められないことから、未成品である可能性が大きい。

(76) は框状を呈すもので、残存長33cmを測り、断面は蒲鉾形となっている。本資料には長さ2.8cm、幅2.4cmの方形貫通孔が6cm間隔で5個穿たれている。そのうち下から2つ目の孔に胴付き部分から折れた釘が残存している。枘とも木目の細かい柾目材である。

(78) は板目材を削り貫いて「ちり取り」状を呈す形としている。約半分を欠損しているが残存幅8cm、最大高5cmを測り、復元幅は今の倍ほどあったと推定される。先端部がやや薄くなっている。裏面に擦痕らしいものが認められることからすると、ちり取り、あるいはあか取りとされるもののような用途に使用されたものと推定される。

(第105図・第106図)に示した3点は板状を呈す用途不明木製品である。いずれもSD01内中央やや北寄りの流木に混在する形で出土した。

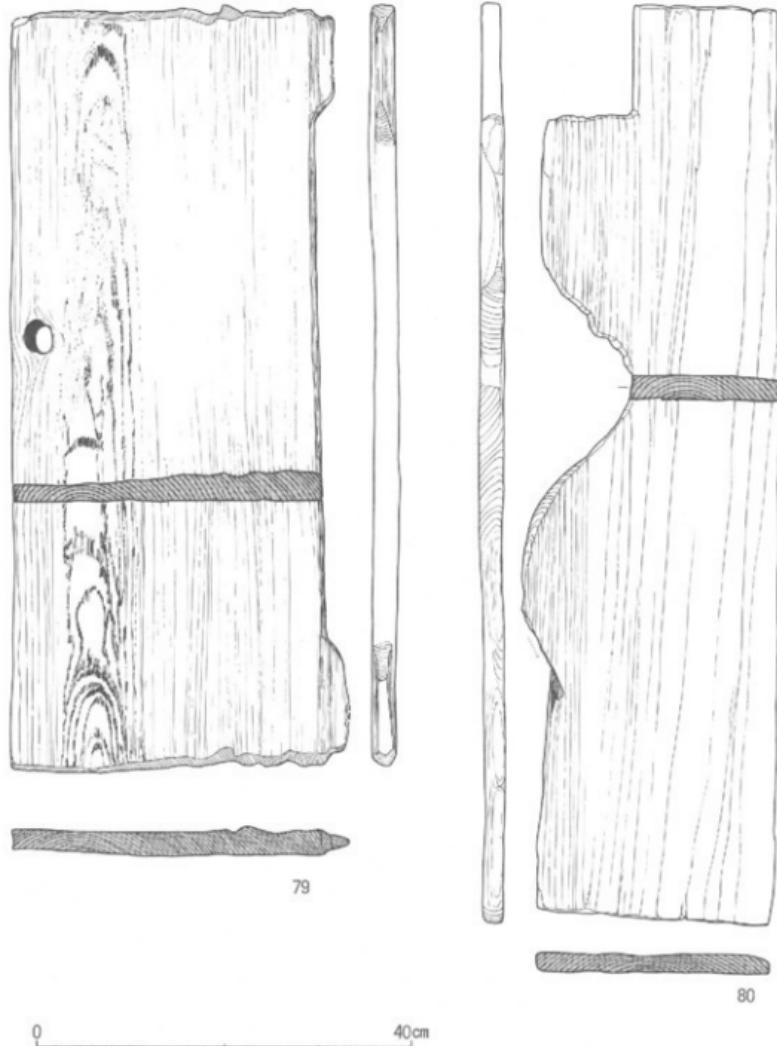
(第105図79) は柾目木取りとするもので、全長80cm、幅30.2cm、厚さ5cm~2cmを測る。

一方の側面は両端12.5cmを残して「コ」の字状に欠き取られており、側辺両端は突出した形となっている。突出部の横断面は三角形を呈し、頂部は鋭い。他の側面寄りの中央やや上方に円孔があるが、節穴で意図的なものではない。両木口は凹凸が著しい。全体に摩滅が著しく加工刃物痕等は認められず、木理が洗い出された感じとなっている。

(80) は板目木取りをするもので、全長96.5cm、幅27cm、厚さ2.3cmを測る方形板の左上隅を「L」字状に欠取り、その下16cmを隔てて、「U」字状に削込みを施している。「U」字状削込みの下方に木理に対して左上から約65度の傾きをもって切り込む刃物痕が認められる。この刃物痕は途中で止まっている。

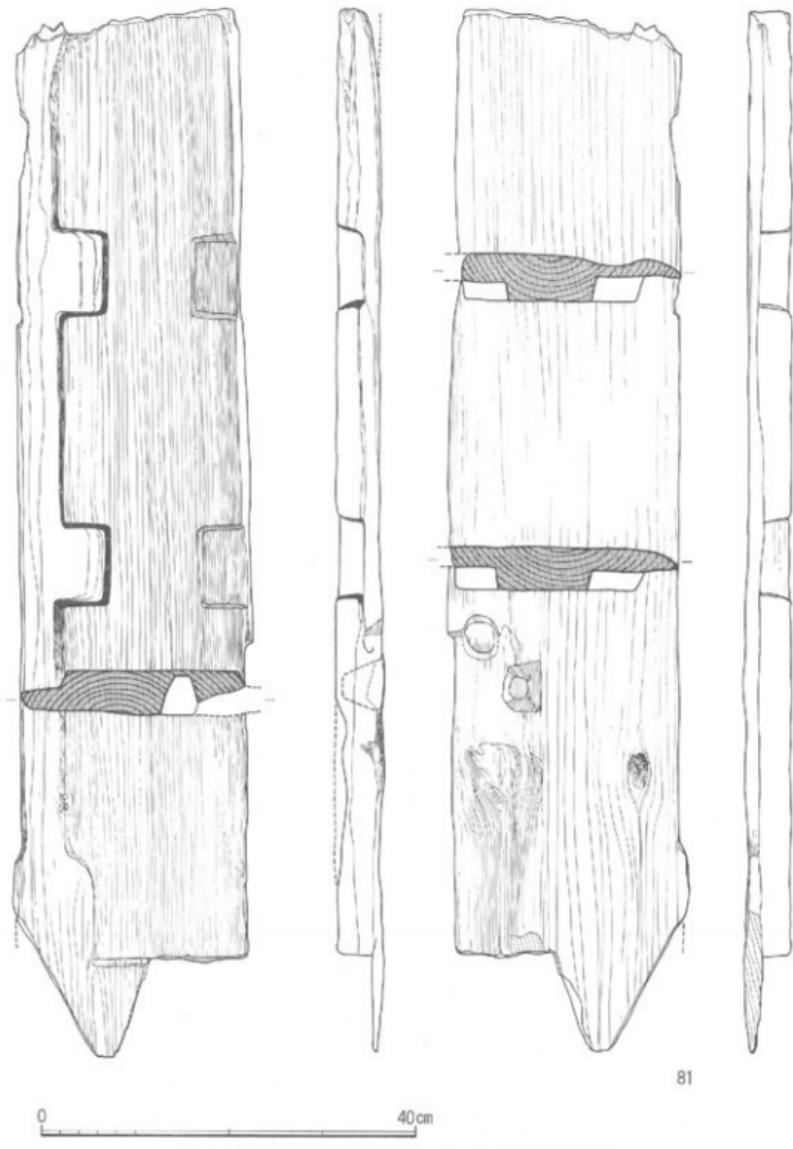
(第106図81) は板目木取りとする板状を呈す製品で、両木口と一方の側面とが破損しており、残存長111cm、残存幅24.5cm、厚さ4cmを測る。A面の左側辺付近は20cmの幅で厚さの約1/2を残し、浅い欠き込み面となっている。この欠き込み面からさらに「コ」の字状を呈す削込みを2箇所に入れている。削込みは横5cm、縦8cmを測るもので、22cmを隔てて施されている。一方の側辺は破損しているため、欠き込み面の形態を残さないが、前述したと同様な「コ」の字状を呈す削込みが対称的に配されていたものであろう。B面は比較的平坦となっているが残存側面は断面が円形になるよう若干の面取りがなされている。なお中央やや左下に位置する凹みは人工的なものか否か判断し難い。全体に摩滅が著しく、破面と加工面との判定がし難い状態である。

(第107図82) は柾目木取りとする長材である。長さ109cmを測るもので、断面は略台形を呈す。

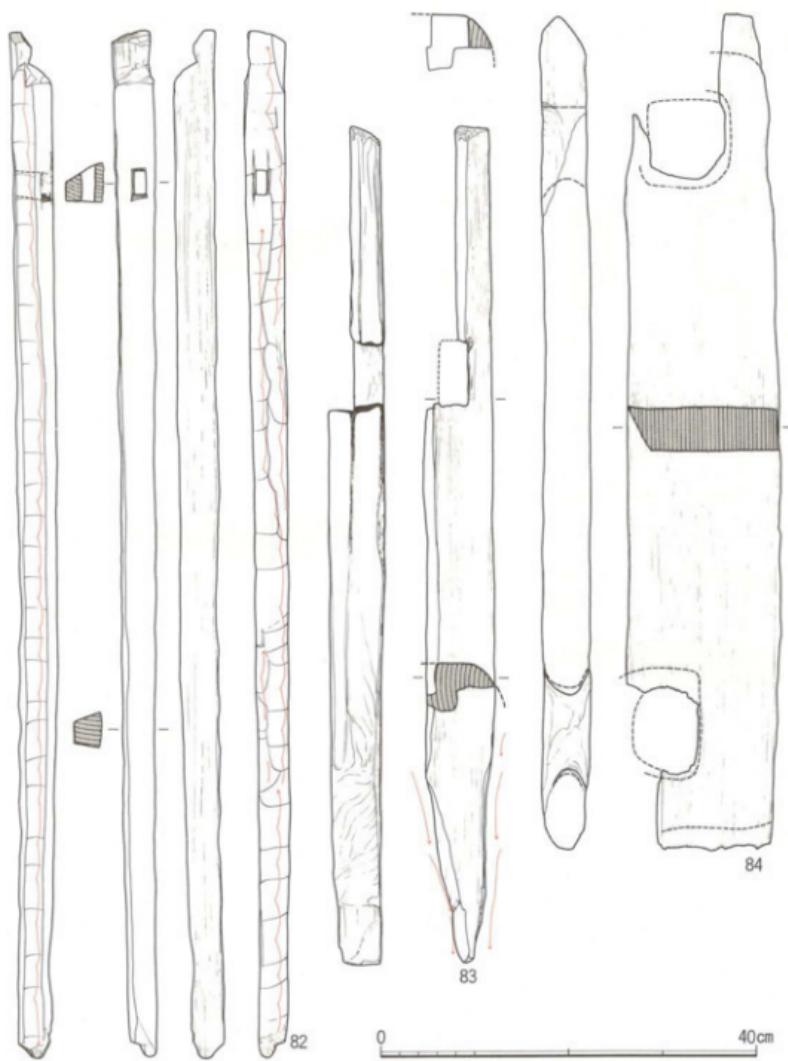


第105図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図

上部木口には厚さの約2/3を欠き取り、枘状とする加工がみられた。上端部より下方へ15cmの位置に長さ3cm、幅1.5cmを測る方形貫通孔が穿たれている。



第106図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図



第107図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図

(第107図83) は柾目木取りとする残存長89cmを測るものである。現在断面、略三角形を呈し、隣接する2面の側面は杭に加工するために分割された面である。他の1面は元の加工面で、円形に面取りがなされている。元来は断面円形に近い柱状のもので、本資料は4分割された内の1本であろう。下方は杭の先端部で2方向から削り込まれ鋸く尖っている。中央やや上方に長さ7cm、幅3cmを測る貫通孔が穿たれている。

(第107図84) 柾目木取りとする、残存長89cm、残存幅11cm、厚さ4.5cmを測る板状材である。全体に摩滅が著しい。両木口付近には略方向の貫通孔が穿たれており、上の孔は8×8cm、下の孔は7×9cmの不整形なものである。

(第108図・第109図) はSD01北寄りの東岸斜面に設置されていた鳥居形の施設である。これを構成する材は各所に枘穴等が穿たれており、明らかに転用材であることがわかる。両挿図上方に示した模式図は東方からの見通しである。この模式図に示した縦方向に打ち込まれている材から概要を記すことにする。

(85) は柾目木取りとするもので、上端は腐植している。残存長77cm、残存幅14cm、厚さ3cmを測る板状材で、下端が鋸く尖らされているため平面は全体に略三角形を呈す。右側側面には元の手斧痕が残存するが他の側面は割れ面となっている。中央やや下方に長さ9cm、幅2cmを測る方形貫通孔が穿たれている。

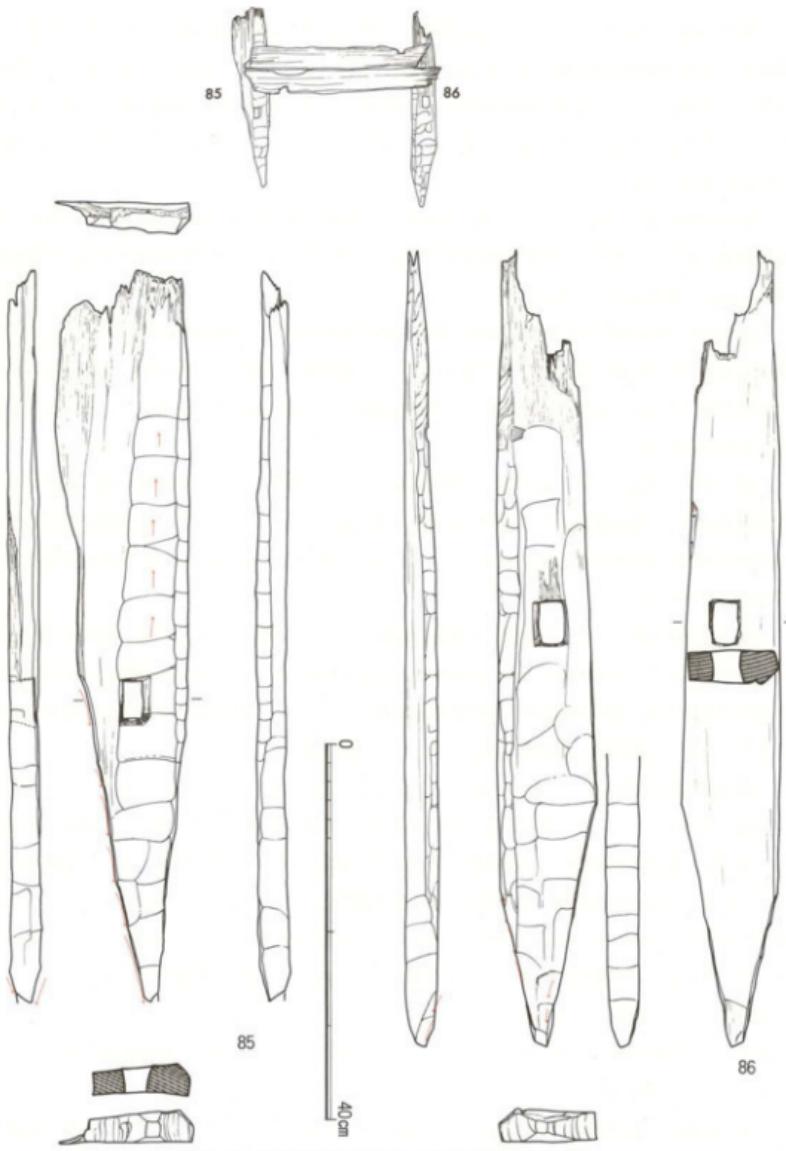
(86) は柾目木取りとするもので、上端部は腐植している。残存長84.5cm、残存幅10cm、厚さ3.5cmを測る板状材で、下端が鋸く尖る。表面は粗い手斧痕が認られるが、表面は分割面となっている。中央には長さ9cm、幅4.5cmを測る方形貫通孔が穿たれている。裏面の貫通孔周囲に鑿痕が認められることから、この面は二次的な加工はなかったと判断された。

(第109図87) は横木として転用されていたもので、柾目木取りとするものである。一方(88)も同様な内容をもっている。両者は互いに反転させると接合が可能となる。接合した場合、長さ85cm、幅18cm、厚さ3cmを測り、上端部木口は右下り、木埋に対して35度の傾斜をもって切断されている。その下方10cmには長径6cm、短径4cmを測る楕円孔が穿たれている。楕円孔から下方へ46cm隔てた位置には木埋に対し垂直方向から打ち込まれた刃物痕があるが、途中で放棄したかたちとなっている。これは上方の楕円孔のようなものを穿つ下孔であった可能性も考慮されよう。

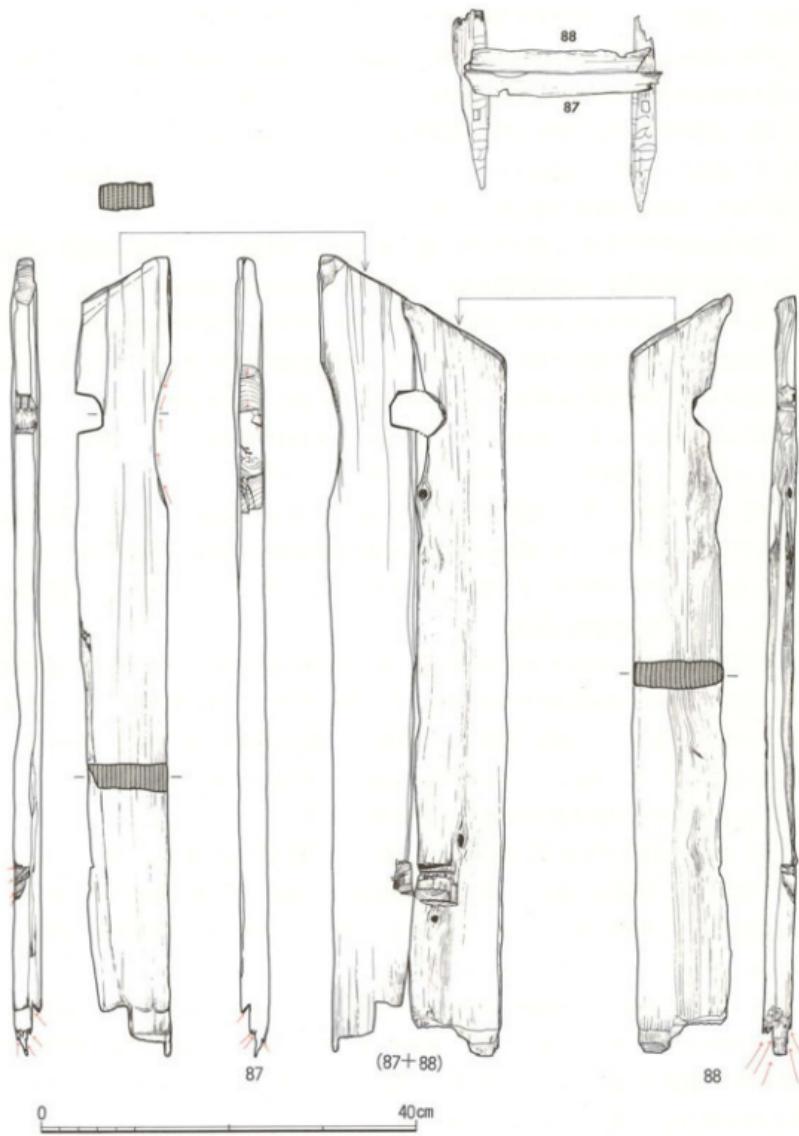
左側側辺には上端部から11cm離れて、半円形の割込みがみられる。

両者とも下端木口には木埋に垂直する方向から、刃物を打ち込み切断した痕跡が認められ、これは二次的なものと判断された。

(第110図89) は芯持材で、残存長171cm、径6.5cmを測るものである。一方の木口付近に粗雑な加工がみられた。それは木口から10cmほど下を長さ11.5cm、深さ2.5cmの略「L」字状に削ったもの



第108図 神田遺跡II区SD-01内出土矢板実測図



第109図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図

である。上端木口に「L」字状の欠き取りのようにみえるのは材料切断時のものであろう。

(90) は芯持材で、長さ60cm、径9cmを測り、両端木口には粗雑な切断痕が認められる。上端部から下方15cmの位置に幅5cmの削込みが施され、「コケシ」状を呈す。

(93) は芯持材で、長さ189cm、径5cmを測るものである。上端には略「L」字状の削込みがあり、その裏面は木口部分を径の約1/3にわたって研り取る加工がなされている。全体に樹皮が残されているが、小枝は入念に研り落されている。

(91) は柾目木取りとする、長さ69.8cm、幅3cm、厚さ2.8cmを測るものである。断面は上方は方形、下半は円形を呈す。上端は両側面から「V」字形に削込む加工が施されている。

(92) は柾目木取りとするもので、現存長65.5cm、幅3cmを測り、断面は略一三角形を呈す。元来は円柱状をしたものを、縱4分割にしたと考えられ、上端には粗雑な納が造り出されている。二次的な加工によって納は元來の形態をとどめていないが、胴付面は一応平面を保っている。

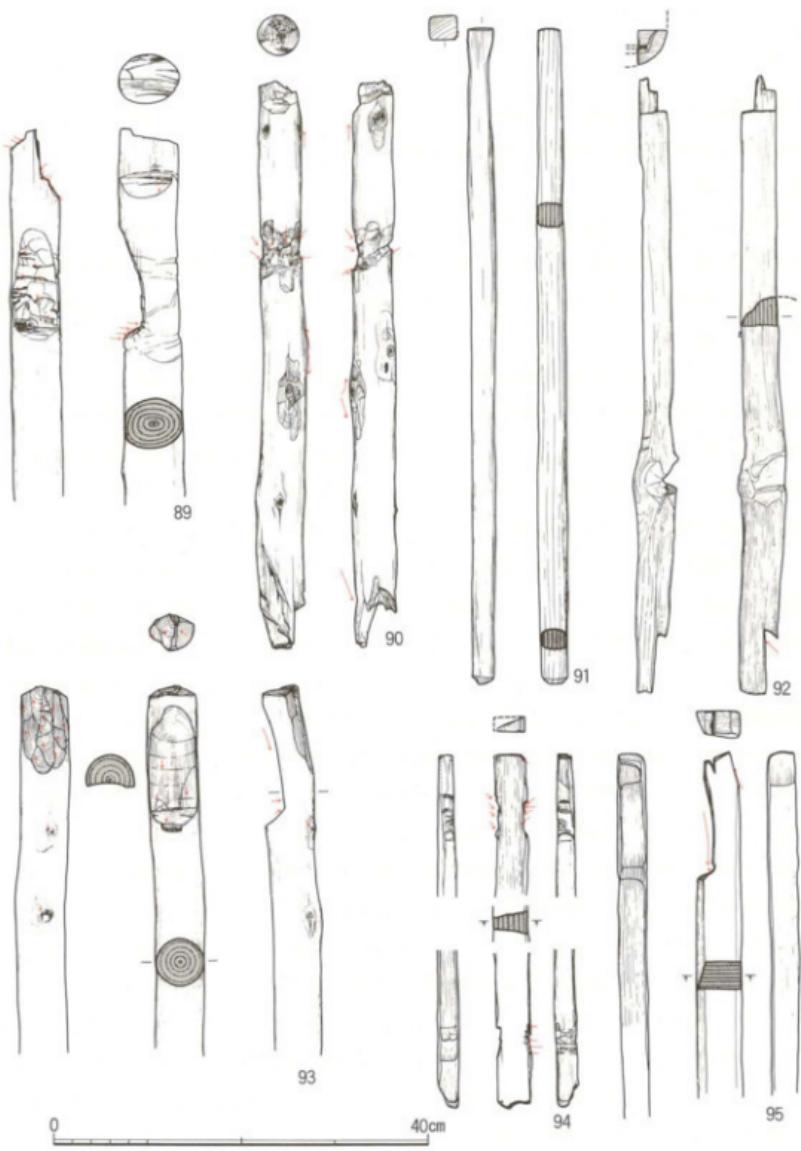
(94) は柾目木取りとする、長さ144.5cm、幅3.5cm、厚さ2cmを測るものである。断面は台形を呈す。上下両端には両側邊から「コ」の字状の難な削込みを入れている。

(95) は柾目木取りとする、残存長121cm、幅5cm、厚さ3cmを測るものである。上端には略「L」字状の削込みがあり、その裏面は端部から3cmの位置を斜め方向に研り取る加工がなされ、芯持ち丸木材と角材との差はあるが(93)と類似する加工となっている。なお上端木口には年輪方向に沿って、切り込みが認められる。

(第111図) はいすれもSD01内出土の梯子で、(96)は調査区北壁に接する形で出土した長さ3.5m、幅20cm、厚さ5~11cmを測るものである。これは芯持材の木元を二支に削り出し、ここが下端になるよう加工されている。表面は下端から上へ5段までの踏み面が良好な形で残存し、30cmのピッチで削り出されている。それより上方3段は摩滅が著しく、わずかな隆起がみられるだけである。裏面には木芯に沿う形で断面蒲鉾形を呈す隆起帯が削り出されている。

(97) はSD01の中央やや南よりの南岸に沿って出土した残存長2.4m、幅20cm、厚さ3.5cmを測るものである。上半部及び下端部を欠損し、踏み面がかすかな隆起となるなど全体に摩滅が著しい。上方は両側面からやや細く削り込んでいる。削り込んだ中央に一辺 6×6 cmの方形貫通孔が穿たれている。

(98) はSD01内南隅で排水用留枠を設置する折に出土したので、幅25cm、厚さ2.5cm~10cmを測る。柾目木取りとするもので、(96)と同様下端部を二支に削り出している。踏み面をなす断面台形の隆起部は4個残存し各木口等には入念な加工が認められる。裏面については縱方向に中央を隆起させる形に削り出しておりこの点3者は共通している。



第110図 神田遺跡II区SD-01内出土遺物実測図

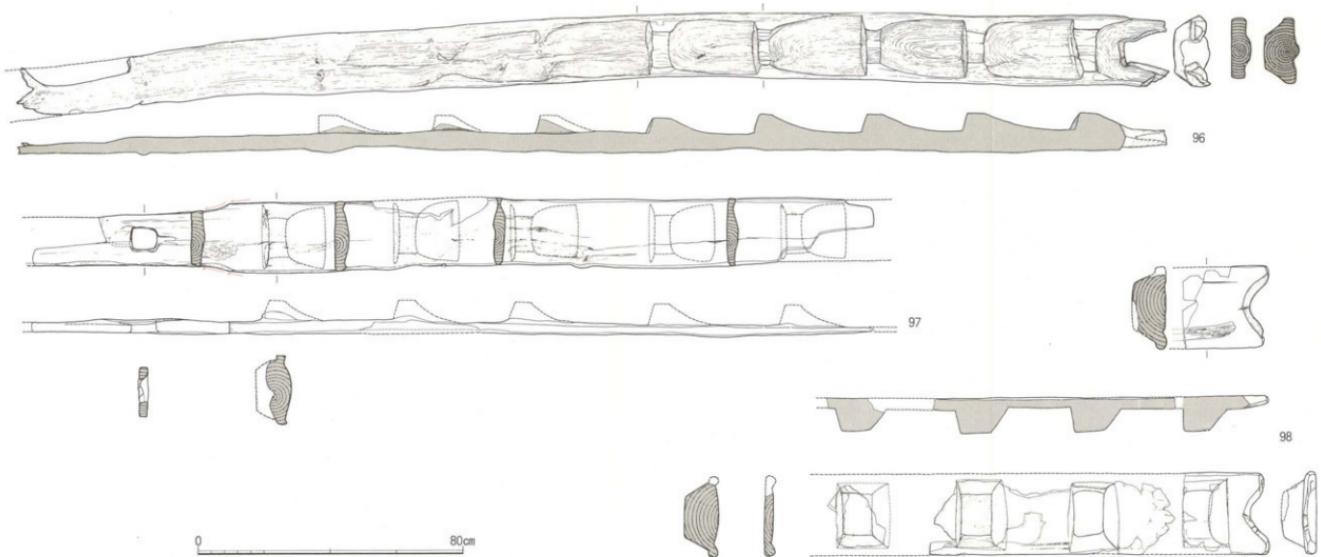
ま　と　め

神田遺跡の初年度の調査では小規模な落ち込みSK01を、2年度の調査では上縁幅5.6m、深さ1mを測る大形溝状遺構SD01の他、小規模なSD02・03を検出した。SK01、SD01とも人工のものであるという確証を得るに至らなかったが、内から各種の遺物が出土した。

SK01内から出土した遺物は曲物の底部、瓦片、玉磨き砥石、須恵器壺、同壺があった。このうち須恵器小壺、同壺は完形に復しえるものであった。しかも後者の須恵器類は数個が入子の状態で出土したこと等から、遠方から流れて来たとは考え難く、一時期に意図的に納入あるいは投棄されたことを示唆していた。

ところで、これら須恵器壺の所属時期については、当地における編年作業も途についたばかりで具体的なものは示されていないが最近調査された松江市竹矢町長峯遺跡⁽¹⁾、松江市古曾志平廻田4号窯跡等に類似資料を見る事ができる。特に前者長峯遺跡例では神田遺跡出土A類須恵器壺に長頸瓶が共伴している。長峯遺跡例長頸瓶は出雲国庁の須恵器編年のうち最も新しい9世紀初頭に位置づけられる第5形式⁽²⁾の土器群中にも認められることからささらに時期が降ることが予想される。この時期の編年が試みられている平安京周辺の成果を参考にするならば「9世紀末には胴部下半が細長くなる反面、口頸部が短くなり口縁端部を上方につまみ上げるもののが増す。また大形のものにも小形のものと同様に高台をつけないものが現れる。」⁽³⁾ことが指摘されている。長峯遺跡例は肩部から胴部にかけて球形を保つものの頭は短くなり、底部は糸切りとなっていることからほぼ9世紀末の時期があたえられているが、諸編年案をみても10世紀中葉までは降らないと考えられる。よってこれと共に共伴した壺に法量・技法が酷似するSK01出土壺も同様な時期であろうと推測される。

SD01内から出土した遺物には土師器の小形丸底壺、同壺形土器、同高壺の他、多数の木製品が認られた。このうち土師器類はいずれも流水中にあったとは言え、磨滅もなく比較的短期間に泥中に没したものと推定された。これらの土師器類は当地ではこれまで大原郡大東町所在大東高校々庭遺跡出土の土器で大東式と呼称されるもの、あるいは米子市青木遺跡土器編年W期⁽⁴⁾の範疇に属すると解されるものである。県内においてはこの時期の資料は類例も少なく、編年を行うにも苦慮する点が多かった。また大東高校々庭遺跡例は層位的な確認がされていないことなど標式としての位置付けにやや難点があり、提示されたものについてはそれ以前に編年されるものとの間にかなりの隔たりも感じられた。その点では今回出土した土器が一時期の良好な組成を示すものであろうと考えられるが、しかし、溝状遺構内の上層堆積のしかたについて、時期を隔てて他の資料が混入する可能性はないのかといった問題等、検討されるべきことは多い。ところで、この土器群については、応古墳時代中期のもので、須恵器が当地に出現する以前の時期としておきたい。



第111図 神田遺跡II区 SD-01内出土遺物実測図

木製品は多量の流木に混在して認められ、田下駄や木製鋤等、農耕具の他、建築部材あるいは調度品の一部と推定されるものがあった。その中には狭い調査区であったにもかかわらず、形態の異なる梯子が3点も認められたことは特筆すべきことと言えよう。それは古墳時代中期の建築物が付近で解体されたであろうことをうかがわせるものであり、これらの部材は当時の建築構造や集落の形態を考えるうえで貴重な手がかりを提供したことになろう。

注

- (1) 松江市教育委員会 『出雲国広島発掘調査報告』 1970年
- (2) 松江市教育委員会 『中竹矢後1号墳・長峯遺跡』 1987年
- (3) (1)と同じ
- (4) 宇野隆夫
「後半の須恵器－平安京・京都出土品による中世的様相の形成－」 『史林』 史学研究会 1984年
- (5) 青木道助発掘調査団 『鳥取県米子市青木道助発掘調査報告書』 II 1978年

第7表(1) 神田遺跡出土遺物観察表

検査 図号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口直	底直	厚					
90-1	須恵器	6.0	4.8	9.9	口縁部はコッパ状に開き、胴部は球形に近い。底部は内外面とも回転ナダ。底部外縁はヘラグスリ、他は全て回転ナダ。	灰~白灰色	2mm程度の 砂粒を含む。	良 好	
-2	*				肩部は大きめ張り、ゆるやかにカーブして脚部となる。胴部に1条の沈線を有す。内外面とも回転ナダ。			*	肩部最大径: 15.3cm
-3	瓦				外側は丁寧なナダ、内面は布目窓を残す。	暗灰色	石英・長石 を含む。	*	
-4	*				外側は糊目窓、内面は布目窓を残す。	桃白色	石英・長石 を含む。他。	*	
-5	*				外側は斜格子状のタタキ目、内面は布目窓を残す。	明灰色	石英・長石 を多く含む。	*	
92-8	須恵器	12.2	7.2	3.5	底部は上げ底ぎみで、体部は逆ハの字状に開き、口縁端部はわざかに外反する。体部は回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	外一灰白色 内一墨灰色	石英・長石 を含む。	*	
-9	*	12.0	6.7	4.2	体部は逆ハの字状に開き、口縁端部はわざかに外反する。体部は内外面とも回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	黄灰褐色	微砂粒を含む。	やや良好	
-10	*	12.9	7.0	3.7	体部は逆ハの字状に開き、口縁端部はわざかに外反し、先端となる。内外面とも調整不明。	灰白色 一部墨灰色	砂粒をほとんど含まない。	やや軟質	
-11	*	12.7	7.2	4.4	体部は底部との境が明瞭で、わざかに内折して脚部、体部は内外面とも回転ナダ、底部外縁は回転糸切り。	茶褐色	1mm以下の 砂粒を含む。	良 好	
-12	*	12.4	7.8	3.7	体部は逆ハの字状に開き、口縁端部はわざかに外反する。体部は内外面とも回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面磨滅。	明茶褐色	微砂粒を含む。	やや良好	
-13	*	12.1	7.2	4.1	体部は逆ハの字状に開き、口縁端部はわざかに外反する。体部は内外面とも回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面磨滅。	暗灰色	3mm程の微 砂粒を含む。	*	
-14	*		7.0		底部はやや上げ底ぎみ、底部は逆ハの字状に開く。体部は内外面とも回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面磨滅。	明茶褐色	微砂粒を含む。	良 好	
-15	*	11.6	7.7	3.7	体部は逆ハの字状に開き、薄手である。体部は内外面とも回転ナダ。底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	明灰白色	1mm以下の 微砂粒を含む。	*	
-16	*	11.4	6.8	4.0	底部は逆ハの字状に開く。内面と体部外縁は回転ナダ。底部外縁は調整不明。	灰褐色	0.5mm程の 微砂粒を含む。	やや不良	口縁部と底 部外縁は無 色
-17	*	12.0	6.9	4.0	底部は外反ぎみに開く。体部は内外面とも回転ナダ、底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	明灰褐色	6mm程の小 石を含む。	やや良好	
-18	*	11.4	7.8	3.6	底部は中央が極端に薄く、体部は逆ハの字状に開く。内面、底部外縁は回転ナダ。底部外縁は回転糸切り。	明灰白色	微砂粒を含む。	良 好	多少ひずむ
-19	*	12.4	9.7	3.2	体部は逆ハの字状に開き、やや厚手。底部は内外面とも回転ナダ。底部外縁は回転糸切り、内面磨滅。	明黄褐色	*	やや良好	
-20	*	12.8	7.2	4.4	底部は上げ底ぎみ。体部は逆ハの字状に開き、薄手。体部は内外面とも回転ナダ。底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	明灰褐色	細かい石英・ 長石を多く含む。	やや軟質	
-21	*	11.5	7.2	4.1	体部は逆ハの字状に開き、内面には葛泥との變に鉛の沈線など。体部は内外面とも回転ナダ。底部は外側回転糸切り、内面ナダ。	灰褐色	微砂粒を含む。	やや良好	
-22	*	12.2	7.6	3.4	底部はやや上げ底ぎみ。体部は逆ハの字状に開き、底部との境は極端に薄くなっている。内面、体部外縁は回転ナダ。底部外縁は回転糸切り。	*	2~3mmの 砂粒を含む。	*	

地番 図号	品種	法 全 高 底 面 厚			形態・手法の特徴	色 調	植 土	発 成	備 考
		上 部	底 部	厚 度					
93-23	浜喜春	13.0	10.2	3.5	体部は逆八の字状に開き、体部内外面は回転ナゲナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	灰褐色	砂粒を含む。	やや良好	
-24	〃	12.4	8.3	3.7	体部は逆八の字状に開き、体部内外面は回転ナゲナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	灰褐色 底部は黒色	砂粒を含む。	不良	
-25	〃	12.5	7.9	4.3	体部は逆八の字状に開き、内面は底部との境が凹む。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	灰褐色 底部は黒色	2 mm以下の砂粒を含む。	やや良好	
-26	〃	12.8	7.7	4.3	体部は逆八の字状に開き、内面は底部との境が凹む。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面は不明。	灰褐色	2 mmの砂粒を含む。	〃	
-27	〃	13.0	6.0	4.0	体部は逆八の字状に開き、内面は底部との境が凹む。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面は摩滅。	〃	〃	〃	
-28	〃	12.5	7.8	3.9	体部は逆八の字状に開き、やや先細となる。内面は底部との境が凹む。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	黄褐色	〃	〃	
-29	〃	12.2	7.6	3.8	底部は上げ底ぎみで、体部は逆八の字状に開く。内面は底部との境が凹む。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	白灰色 底部は黒色	砂粒を含む。	〃	
-30	〃	12.6	6.6	2.7	体部はやや外反ぎみに大きめ開き、中段が薄い。内面、体部外面は回転ナゲ。底部外面は回転系切り。	〃	〃	〃	
-31	〃	14.6	10.0	2.0	体部は逆八の字状に大きく開く。体部外面は回転ナゲ。底部外面は回転系切り。内面は摩滅。	明灰色	1 mmの砂粒を含む。	良好	
-32	〃	13.5	7.5	2.4	底部はやや上げ底ぎみで、体部はやや外反ぎみに大きめ開き。口縫底部は外反する。体部は内面系切りとも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	灰色	1～5 mmの砂粒を多く含む。	やや良好	
-33	〃	15.0	7.7	6.1	低い高台をもち、体部は逆八の字状に開く。体部内外面とも回転ナゲ。底部は外側回転系切り、内面ナゲ。	灰白色	2 mmの砂粒を含む。	不良	かなり、ゆがむ。
-34	〃			7.4	底部に回転系切り後、高台を貼り付ける。内面は回転ナゲ。	明灰褐色	石墨・長石を多く含む。	やや軟質	
97-35	白磁綱	16.4			口縫部は白線となる。糸は全体にうすぐ、体部外側下半は遮断されている。	乳白色	緻密。	良好	
-36			8.2		低い高台をもつ。高台、底部外面はケメリ。遮断されていない。糸は全体にうすい糸が施されている。	〃	〃	〃	
-37	青磁綱	14.0			口縫部はわずかに外反する。体部外側にヘラ状工具による波状の沈線を入れ、内面はタシ状工具による文様を入れる。	断面は白灰 色、糸は淡 緑灰色	〃	〃	同安窯系青 磁
-38	〃		5.0		内面見込みに花文を入れる。高台はケメリ。糸は施されてない。糸は全体にうすい糸が施されている。	新面は青灰 色、糸は淡 灰色	〃	〃	熊泉窯系青 磁
99-39	土輪器	8.0			口縫部はやや内湾ぎみに開き、体部は球形に近いと思われる。口縫部は内外面ともヨココナゲ。体部は外側が磁方向のハケメ後ヨココナ。内面が横方向のヘラケズリ。	乳色	大きめの砂 粒を少量含む。	不良	
-40	〃	8.0		8.8	口縫部は逆八の字状に開き、端部は球形に近い。口縫部は内外面ともヨココナゲ。体部は外側が磁方向のハケメ後ヨココナ。下半は外側が不規方向のハケメで指頭凹痕もあり。内面がヘラケズリ。	灰色	良好		

場 番 号	器 種	法 量(cm) 口 径 底 面 高	形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
99-41	土 器 類	9.9	口縁部は逆八の字状に開き、底部は鋸歯立形である。口縁部は外側がヨコナダ、内面は斜方向のハケメ。腹部をヨコナダ、脇部は外側が斜方向のハケメ、後端ヨコナダ、内面は上方向か右方向のハケメ。底部ヨコナダ、内面は上方から指頭圧強いナデ、ヘラケズリ。	青灰色	砂粒を含まない。	良好	
-42	*	10.0	口縁部は逆八の字状に開き、底部は鋸歯立形である。また脇部近くに弱い段差がある。体部は球形で、近く丸底となる。口縁部は外側が斜方向のハケメ、後ヨコナダ、内面はヨコナダ、斜方向か右方向のハケメ。腹部は外側が斜方向のハケメ、後横方向のハケメ、底部ヨコナダ、前部は不整方向のハケメで、脇部との境に指頭圧強いナデを残す。内面は上方から指頭圧強いナデ、横方向のヘラケズリ、縦方向のヘラケズリ。	灰黄色	1.5mm以下の砂粒を少々含む。	*	
-43			体部は球形に近く、丸底となる。外側は上方向か左方向のハケメヨコナダ、中程は横方向のハケメ。下部は不整方向かハケメ。脇部と底部の脇部は指頭圧強いナデを残す。内面は上方から指頭圧強いナデ、横方向のヘラケズリ、縦方向のヘラケズリ。	肌色	3mm以下の砂粒を少量含む。	*	
-44	土 器 類	14.0	体部は球形にして立ち上がり、口縁部は立形である。底部は平底となる。口縁部外側は斜方向のハケメ後ヨコナダ、体部外側は縦方向のハケメ後ヨコナダ。内面ヨコナダ。	肌色	砂粒を含まない。	*	
-45	土 器 類	16.0	口縁部は逆八の字状で、辺り直立し、底部は平底である。外側は指頭による圓滑。脇部内面にはすこし厚膜する。脇部内面は横方向のハケメ。口縁部は内外面ともヨコナダ。	白灰色	1mm以下の砂粒を含む。	*	
-46		5.6	平底の底透形、内外面ともヘラミガキ	外一淡赤色 内一灰色	1mm以下の砂粒を多量に含む。	*	
-47		5.6	底部は上げ底ぎみで、外表面は指頭による圓滑。体部は外側が縦方向のハケメ。内面はヘラミガキ。	灰 色	3mm以下の砂粒を多く含む。		
100-48	*	14.1	口縁部は逆八の字状に開き、底部は内側に突出して凸状となる。外側はヨコナダ、内面は横方向のハケメ。脇部以下の外側は横方向のハケメ、後脇部ヨコナダ、脇部内面は指頭圧強いナデ、ヘラケズリ。体部内面は斜方向のハケメ。	灰黄色		良好	口縁部と脇部の下方に焼付着。
-49	*	15.6	口縁部は内側ぎみに開き、底部は外側へ突出して凸状となる。脇部はヨコナダ、内面は横方向のハケメ。脇部以下の外側は横方向のハケメ、後脇部ヨコナダ、脇部内面は指頭圧強いナデ、ヘラケズリ。外側が縦方向のハケメ。中程が横方向のハケメ。内面は脇方向のヘラケズリ。	口縁部は黄白色 脇部は灰黒色	砂粒をほとんど含まない。	*	外側に焼付着する。
-50	土 器 類	18.2	口縁部は逆八の字状に開き、底部は内側に突出して丸くなる。脇部はヨコナダ。体部は内外面ともヨコナダ。体部は上半外側が横方向のハケメ後斜方向のハケメ。内面は上半が横方向のヘラケズリ。下半は斜、ヘラケズリ。脇部と底部の脇部の内面に指頭圧痕を残す。	外一黑色 内一灰黄色	2mm以下の砂粒を多く含む。	*	
-51	土 器 類	15.0	口縁部は逆八の字状に開き、底部は外側に突出して丸くなる。体部は球形。頭部以上は外側が横方向のハケメ後ヨコナダ、内面はヨコナダ。体部は上半外側が横方向のハケメ後斜方向のハケメ。内面は上半が横方向のヘラケズリ。下半は斜、ヘラケズリ。脇部と底部の脇部の内面に指頭圧痕を残す。	黄白色	幾砂粒を少量含む。	*	体部に焼付着。
-52	*	18.3	口縁部は内側に立ち上がり、脇部は外側に突出して丸くなる。脇部はヨコナダ。体部は内外面とも斜方向のハケメ。内面は横方向のハケメ後斜方向のハケメ。内面は上半が横方向のヘラケズリ。下半は不整方向のハケメ。内面は上半が横方向のヘラケズリ。下半は指頭圧痕を残す。	灰 色	*	*	*

序番	器種	表面 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	無成	備考
		口徑	底径	高さ					
100-53	土器	16.2		23.0	口縁部は強、底面部をもちながらも進化の字状に開き、底面は外側にわざかに突出してく傾向となる。体部は内面に横溝状の凹部があるつまみ上げ。下半部はヨコナデ、内面は横方向のハケメ、下半が縱方向のハケメ後横方向のハケメ、上半が縱方向の想いハケメ、内面は上部に指跡によるかきあげ痕、底部は放射状のハラケズリ、他は側方向のヘラケズリ。	外一青灰色 内一黑色	砂粒をあまり含まない。	良 好	
-54	々	15.5			口縁部はやや直立ぎみに立ち上がり、底面は内側で斜面をもつて平坦となり、底面には横溝状の凹部がある。体部は内面に横溝状の凹部があるヨコナデ、内面は横方向のハケメを残す。体部は外側が横方向のハケメ後下半を方向のハケメ、内面は側方向のヘラケズリ。	口縁部外面 底面下部外 面は黒色。 側は紅色か 黒色	砂粒をあまり含まない。	々	
-55	々	15.4		29.5	口縁部はほぼ直線的に開き、端部に近い位置で段をもつて襷くなり、内溝して立ち上がり、底面は丸くおさまる。体部は腰部附近に、中央よりやや下に横溝状の凹部がある。内面には内外面ともヨコナデ、内面は横方向のハケメを残す。体部外側は、上部が横方向のハケメ、中部以下が縦方向のハケメ。体部内面は上部以上が側方向のヘラケズリ、下部に指頭压痕。	黄灰色	砂粒を含まない。	々	
101-56	土器	16.0			杯体部は内側で直線的に開き、口縁部は先細となり、底部は細い。外側は横方向のハケメ後、側方向のハケメ。口縁部内面には側方向のハケメを残す。	々	1 mm以下の 砂粒を含む	々	
-57	々	20.0			杯体部はゆるやかに内溝して開き、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部は外側は仰頭狀となる。外面に突帯をもつ、外側は縦方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後放射状の筋文を残す。	白黄色	砂粒を含まない。	々	
-58	々	18.0			杯体部はゆるやかに内溝して開き、口縁部は外反して先細となり、底面は斜面が横方向のハケメ後縦方向の筋文、内面は側方向のハケメ後側方向の筋文を残す。	黄灰色	砂粒をあまり含まない。	々	
-59	々	17.5			杯体部は内溝ぎみに開き、口縁部は直線的にのびる。脚部がわざかに残存し、内面にたてじわが認められる。杯部は外側が縦方向のハケメ後横ナデ、下半はヘラミガキ。内面は側方向のハケメ後側方向の筋文。	々	3 mm以下の 砂粒を含む	々	杯底部内面 が剥離。
101-60	土器	20.0			杯底部は平坦で、体部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、底部は仰頭狀となる。外側は横方向のハケメ後横線を残す。外側は縦方向のハケメ後ヨコナデ、内面は平滑な面をもつて杯部は内外側とも横方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後、放射状のヘラミガキ。他は側方向のハケメ。脚部内面は側方向のハケメ。	明月色、底 部内面は黑 色	砂粒をほと んど含まない。	々	
-61	々	19.0	11.0	12.2	杯底部内面はやや盛り上がる。体部から口縁部にかけ直の字に開き、端部外側は横溝状となる。先細の脚部。外側は横方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後横方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後放射状のヘラミガキ。脚部内面はヘラケズリ、脚部内面は側方向のハケメ。	肌 色	砂粒を含ま ない。	々	
-62	々	18.0	11.7	11.5	杯底部はほぼ平底で口縁部は外反し、底面は内側に突出してやや平坦となる。脚部内面は内側に突出してやや平坦となる。脚部外側は横溝状となる。先細の脚部。外側は横方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後横方向のハケメ後ヨコナデ、内面は側方向のハケメ後放射状のヘラミガキ。脚部内面はヘラケズリ、脚部内面は側方向のハケメ。	黄土色	砂粒を少量 含む。	々	

器 器 番 号	器 種	重 量 (g)		形態・手法の特徴	色 調	胎 土	施 成	備 考
		口 径	底 径					
				リで底部は横方向のハケメ。脚部下端に内形の透かしをもつ。				
101-63	土器 高 脚 器			杯底部は丸く、脚部がわずかに残る。脚部外側は縦方向のハケメ。内面はヘラミガキ。嵌合縫を残す。	灰 色	砂粒を含ま ない。	良 好	
-64	*	11.1		杯底部は丸く、脚部は先細りとなり。脚部は先細りとなる。脚部外側は不整方向のハケメ。内面は放射状の窪文。口縁突起はヨコナテ。脚部外側に指テ巻ハケメ。筒部内面はヘラケズリ。脚部内面はヨコナテ。	灰 黃 色		*	
-65	*	11.2		脚部はやや丸みに開き、口縁脚部はやや細くなる。脚部は先細りとなる。外側に指跡によるナデ、一面ハケメ。脚部外側は横方向のハケメ。3方向に内形の透かしを入れる。	黃 灰 色	砂粒を含ま ない。	*	
-66	*	11.9		脚部はやや丸みに開き、外反して瓶立ちの脚部となる。脚部は外側が縦方向のハラミガキ。内面はヘラミガキ。筒部外側に指跡によるナデ、一面ハケメ。	淡 黃 色	1.5 mm以下 の砂粒を含む。	少 良	
-67	*	12.9		筒部は外反して瓶立ちの脚部となる。脚部は外側が縦方向のハラミガキ。内面はヘラミガキ。筒部外側はラセン上のヘラミガキ。内面は一部横方向のハケメ。	黃 灰 色	砂粒を含ま ない。	良 好	

第7表(2) 石器計測表

No	種 類	長 径(cm)	短 径(cm)	厚 さ(cm)	材 質	備 考
-7	石 器	37	30	17.0		5本の施溝は、いずれも断面半月形を呈し、細かい条痕が走る。

大屋敷遺跡・才台垣遺跡

—松江市大草町—

Ⅷ 大屋敷・才台垣遺跡

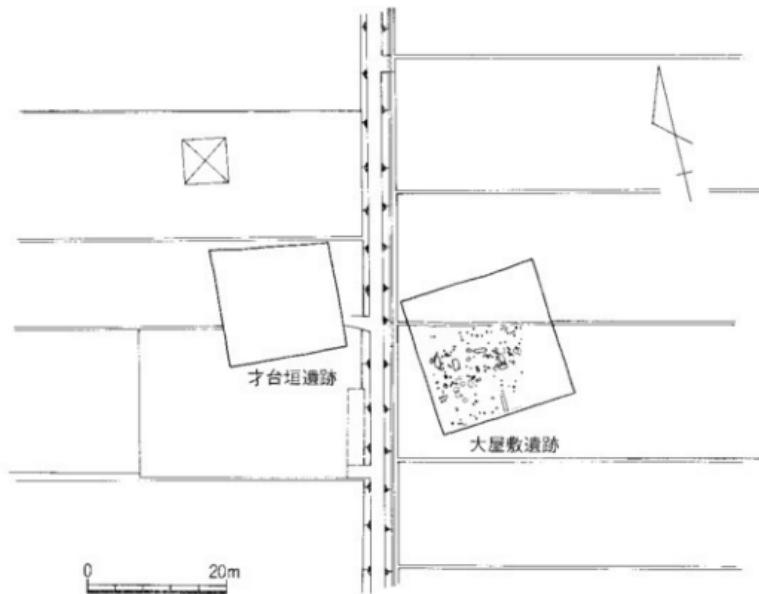
遺跡の概要

16号鉄塔予定地内の遺跡は、北松江幹線が大屋敷遺跡、松江連絡線が才台垣遺跡（第112図）である。大屋敷遺跡、才台垣遺跡は、松江市大草町437-4, 438-1に所在する。

遺跡の所在する場所は、意宇平野の中央南端水田中に位置し、南方200mを意宇川が東流している。遺跡の西側150mの所には、史跡出雲国府跡が所在する。この周辺は、標高6.7mを測り、ここから平野中央部の神田遺跡へ向けて標高が徐々に下っていく。進入道路の調査では、耕作土下に黄褐色土の基盤層がみられたが、この16号鉄塔付近ではみられなかった。

大屋敷遺跡

大屋敷遺跡の調査区は、現状で南側が畑、北側が水田となっている。畑は、標高6.7mを測り、水田は6.5mを測る。畑の方は、耕作土の下に明灰色土、暗灰色土、黄灰色土と続いている。この



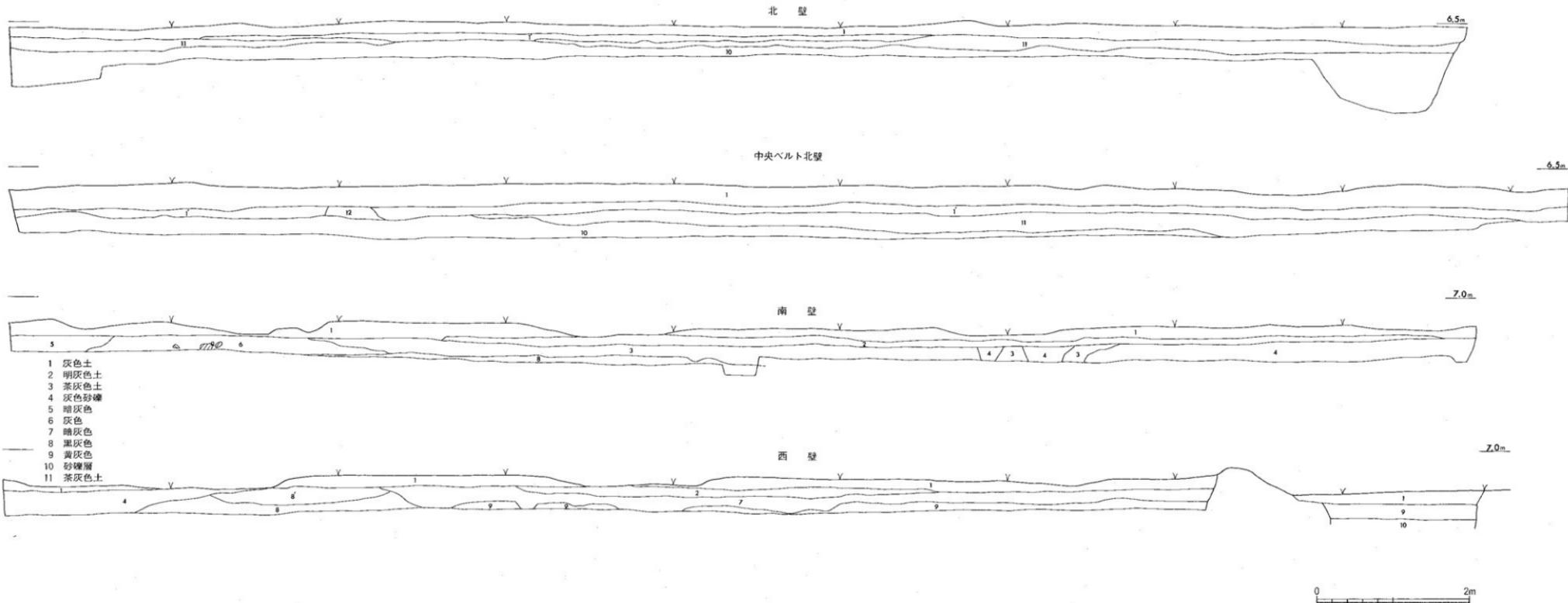
第112図 大屋敷遺跡・才台垣遺跡調査区配置図

黄灰色土上面にて、土壤、ピットを検出している。土壤、ピットとも深いものは、底が砂礫となるものがあり、そこからは水が湧き出している。調査区の南側の部分は、耕作土の下が砂礫層となる。これは意宇川の氾濫に伴うとみられるもので、調査区の全域、全土層中に礫がみられる。水田部分は耕作土の下が黄灰色土か茶灰色土となっており、その下は全域に砂礫層となっている。この砂礫層上面と層中より遺物が出土しているが、殆んど流された遺物である。

今回の調査では、黄灰色土上面にて掘立柱建物2、柵列2、土壤5、ピット多数を検出している。遺物は主に明灰色土、暗灰色土中より出土している。



第113図 大屋敷遺跡遺構全体図



第114図 大屋敷遺跡調査区土層図

検出した遺構

今回検出した遺構は、掘立柱建物址 2, 十塙 5, ピット多數である。SB-01, 02, SA-02は、主軸が同方向であり、SK-01, 04, 05もこれらと主軸が同様で、SK-02は主軸が直交するという関係にある。これらの遺構は、黄灰色土の上面にて検出している。

SB-01 (第115図) 調査区のはば中央部に位置し、北東部分は畦のために不明である。平面形は、長方形で南北に庇を伴う3間×3間の掘立柱建物址である。主軸方向は、N-10°-Wを指している。桁行6.0m, 梁間5.2mを測る。柱間距離は、P₁-P₂, P₂-P₄, P₄-P₅が2.2m, P₅-P₆, P₆-P₈が2.0m, P₁-P₇, P₇-P₉, P₉-P₈が1.1mとなっており、P₇-P₈の間がやや広く、P₈-P₉, P₉-P₅はやや短くなっている。径0.15~0.65m, 深さ0.15~0.3mを測る。覆土は、暗茶色土で小砾を含んでいる。ピット中からは、土師質土器の破片が出土している。

SB-02 (第116図) 調査区の南端に位置し、2間×4間の掘立柱建物址である。柱穴を欠いた部分もあるが、平面形は長方形である。規模は、桁行8.8m, 梁間5.6mを測る。主軸方向は、N-13°-Wを測る。柱間距離は、P₂-P₁, P₁-P₅, P₁-P₃, P₇-P₆が2.5m, 他は1.8mと2.0mである。ピットは、径0.25m~0.6m, 深さ0.05m~0.25mである。覆土は暗茶色土である。遺物はピット中からは出土していない。

SA-01 (第117図) SB-01の西側に位置する。ピット4穴からなり、径0.13m~0.18m, 深さ0.1m~0.2mを測る。主軸方向はN-10°-Wにとり、SB-01, 02とは主軸が異なる。

SA-02 (第117図) SA-01の西側、調査区の西端に位置する。ピット間の距離は、0.9mを測り、ピット径0.08m~0.14m, 深さ0.08m~0.12mを測る。主軸方向は、N-17°-Wにとり、SB-01, 02と同一の主軸をとっている。

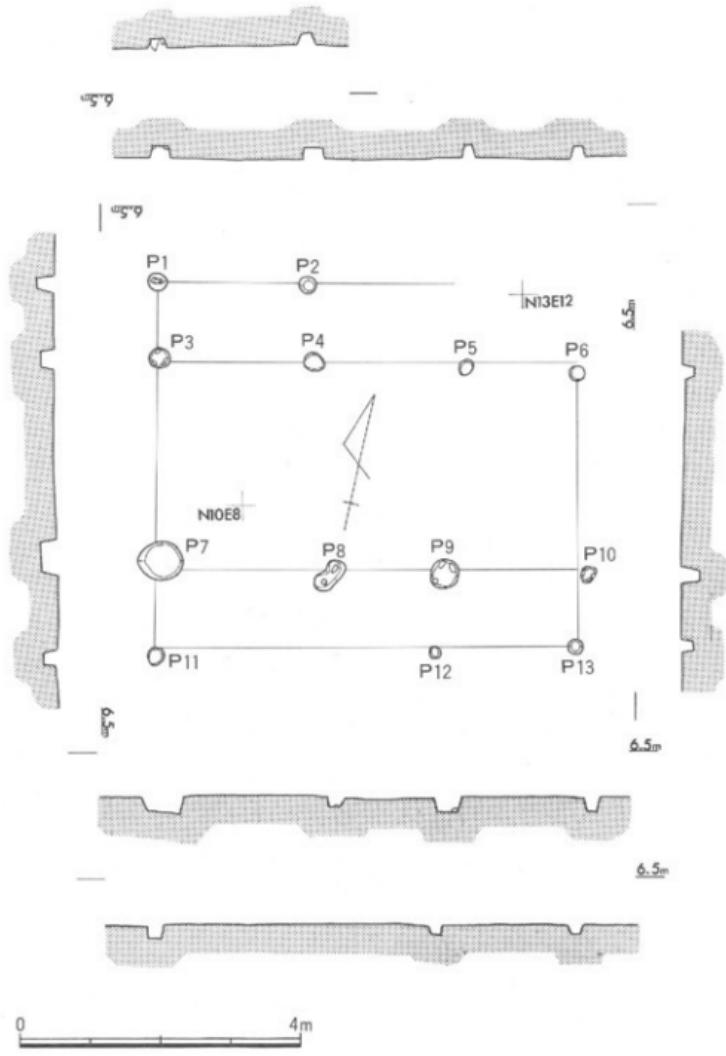
SK-01 (第118図) 調査区のはば中央部、SB-01と重複するという位置関係にある。平面形は不整長方形を呈している。規模は、長軸1.40m, 短軸0.80m, 深さ0.20mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は東壁が垂直近く、他壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向は、SB-01, 02と同方向である。

SK-02 (第118図) SK-01の南側、主軸方向が直交するように位置している。平面形は、長方形を呈し、規模は長軸1.26m, 短軸0.60m, 深さ0.10mを測る。壁は垂直近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

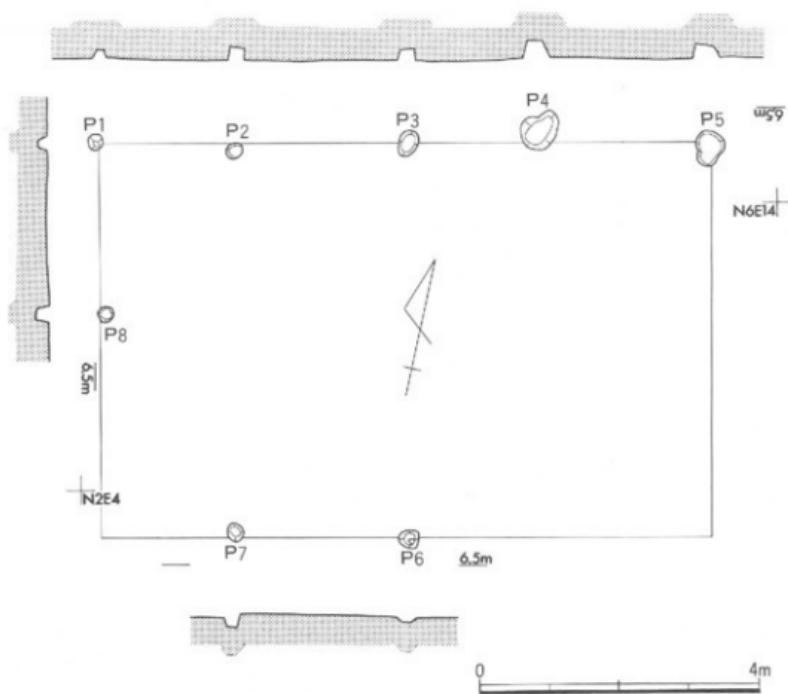
SK-03 (第118図) SB-01の西側に主軸方向を同じくして位置する。平面形は、不整長方形を呈し、規模は長軸1.70m, 短軸0.94m, 深さ0.10mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

SK-04 (第118図) SA-01と02の間に位置する。平面形は、不整長方形を呈す。規模は、長軸1.96m, 短軸0.84m, 深さ0.12mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

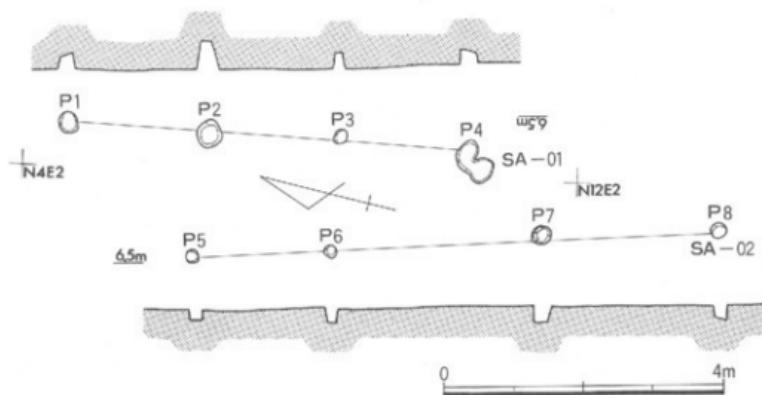
SK-05 (第118図) 平面形は、長い防円形を呈す。規模は、長軸1.82m, 短軸0.58m, 深さ0.12



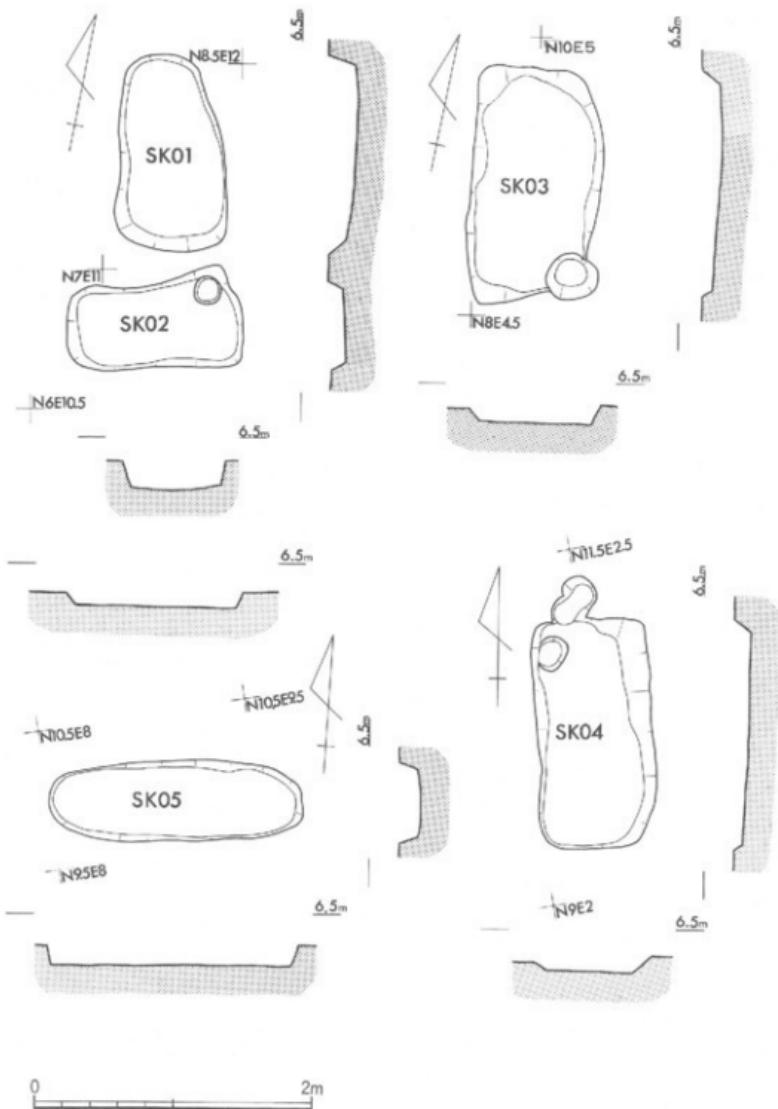
第115図 大屋敷遺跡 SB-01 実測図



第116図 大屋敷遺跡 SB-02 実測図



第117図 大屋敷遺跡 SA-01、02 実測図



第118図 大屋敷遺跡 SK-01、02、03、04、05 実測図

mを測る。

出土遺物 (第119, 120, 121, 122図) 大屋敷遺跡から出土した遺物は、明確に遺構に伴う状態で出土していない。大部分が包含層や遺構検出面より出土している。出土量の最も多いものは上部質土器である。出土地域における当該期の編年は、出土例が少ないとから進んではない。ここでは、形態を分類するにとどめておく。分類は、後述の天満谷遺跡において詳細を述べたい。

土師質土器 (第119図) 土師質土器は、小皿、環、台付杯、台付皿がみられる。(1~10)は小皿で(9,10)以外の底部には回転糸切り痕がみられる。(1・2・5)は、皿-a類としたものである。口径7.7cm~8.8cm、高さ2.0cmを測り、底部は平底を呈し、口縁部へ向け外反して立ち上がっている。体部に比ベ口縁部の方が薄くなっている。(4・6・7)は、皿-C類としたものである。口径7.6cm~8.4cm、高さ1.2~1.8cmと低くなってしまおり底部は平底を呈し、口縁部に向け外傾し立ち上がる。体部より口縁端部の方がやや厚みを持っている。(3)は皿で、口径7.8cm、器高1.1cmとかなり器高が低くなっている。底部と口縁部の器厚は同じで、口縁部はかなり外方へ向け開いている。(9,10)は口縁部内外面にヨコナデ、底部外面にナデが施され、(10)はやや上げ底状になっている。11~14は高台付皿で高台の高さがやや異なる。(11)は高台がやや外方へ向け開き、皿部は浅く口縁部が直線的に開いている。(12)は高台部の高さは(11)と同じであるが、やや外反して立ち上がっている。(13,14)は高い高台を持つが、皿部は不明である。(14)は、底部がかなり入り込んでいる。(15~18)の底部は、碗-a・b類に含まれるとと思われ、外底に回転糸切り痕を残している。(15)は、底部から体部にかけてやや外反し立ち上がっている。

台付皿 (第120図) 台付皿は底径より、I (5.0cm以下)、II (5.0~6.0cm)、III (6.0~7.0cm)、IV (6.0cm以上)と分けている。その中で皿の内面から底部までの高さを1とし底径との比率を求め、その比が2.0以上をa、2.0~1.5をb、1.5以下をcとした。I-a類、(21)は底径5.0cm、器高2.0cmを測り、底部に回転糸切り痕が残る。29は台部の裾が広がらず、直線的で皿の部分がやや深みを持つようである。I-b類、19は底径4.6cm、器高2.7cmを測る小形のものである。(30)は台部が(29)と同様の形態を呈しており、端部に向けて直線的に広がる。(22,23)は底径5.0cmを測りI類に含まれるが、台部の途中で折れており比率を求めるることは不可能である。II-a類、(24)は底径5.5cm、高さ2.8cmを測る。II-C類、(26)は底径5.8cm、高さ4.0cmを測る。台部の裾に厚みを持っている。(27)は、底径5.2cmを測る。台部の筒状になった部分がかなり広く開いている。II-d類、(31)は、底径6.0cm、高さ6.4cmと極めて筒部の細長いもので、底径と高さの比は0.93である。IV類、(25,28,32)はIV類であるが、器高の解るものはない。(25)は底径8.0cmと大形のものである。(32)は、底径6.8cmを測り、台部の内側が削り取られており、通常の中実のものではなく、高环状を呈している。

土 錘 (33) は直径3.4cm、長さ8.0cm、孔径1.3cm、重量8.0gと大形のものである。(34)は、長さ3.9cm、径1.1cm、孔径0.4cmを測る小形のものである。

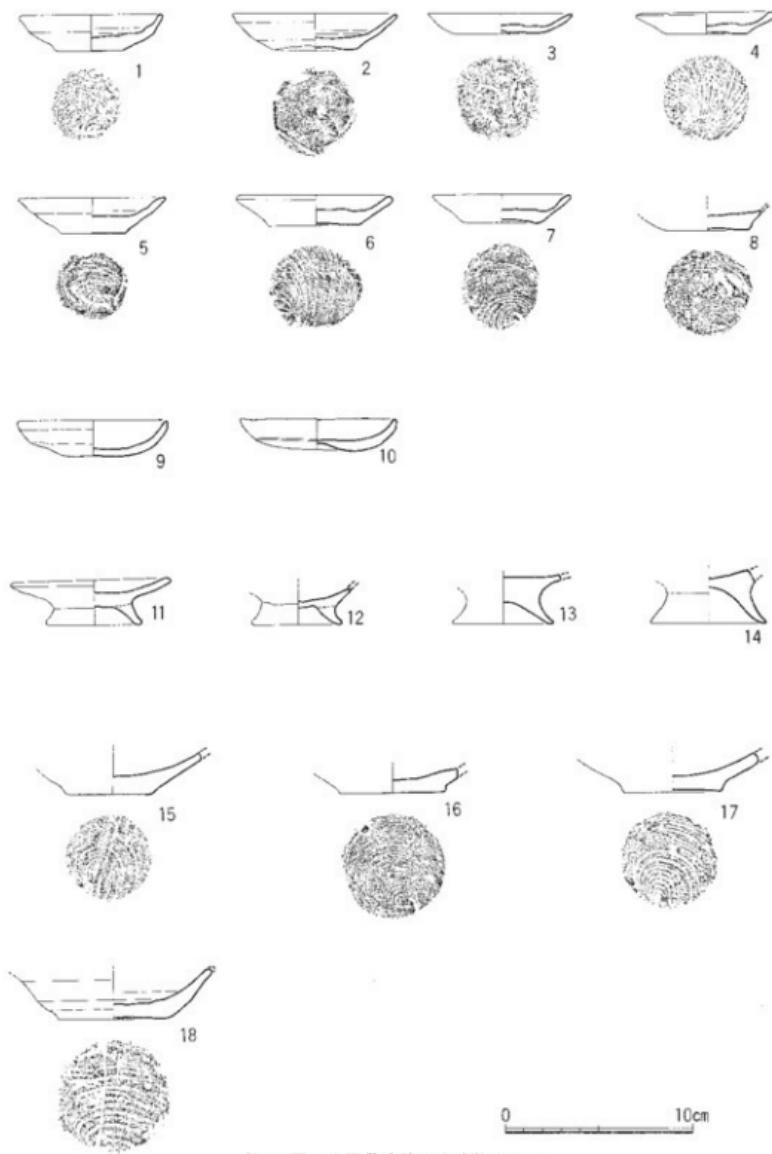
古 錘 35は「熙寧元寶」である。背は無文となっている。年代は、1068年である。

白 磁 (第121図) (36) は椀の底部、いわゆる蛇の目高台で、胎土は純白できめ細かく、釉は白色で高台疊付部から内側を除く全面に施されている。高台は低く、幅を持ち復元底径7.6cmを測る。これらの特徴から、大宰府分類I-1類⁽¹⁾に含まれると思われる。(37,38,39) は口縁部に小さい玉縁を持っており、体部に丸味を持っている。これらは大宰府の分類でII類に含まれる。

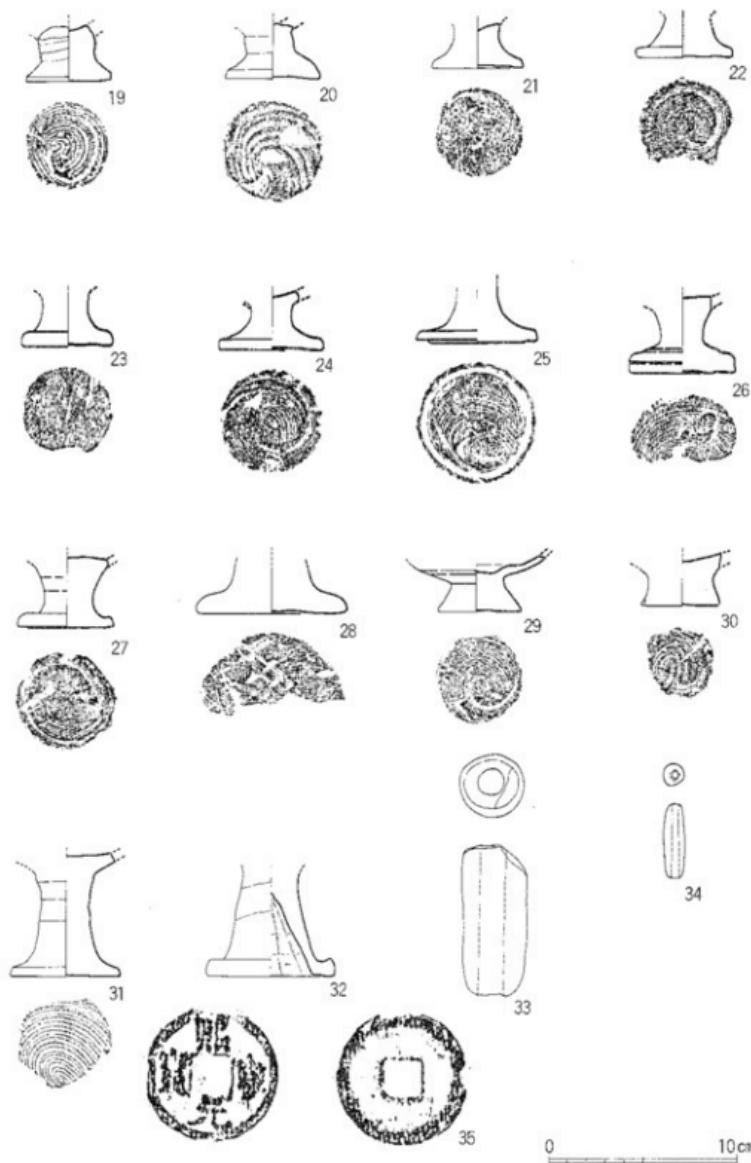
(40) は口縁部の玉縁が大きくなり、体部はやや直線的になっており、器壁もやや厚みを持っている。見込みに沈線状の段をもつ。(41) も口縁部が玉縁状となり、体部は直線的になっている。釉は灰色がかかった白色を呈す。(42~46) も口縁部が玉縁状になる椀である。(42) は胎土が黄灰白色、釉もやや黄味がかかった灰白色を呈しており、釉に貫入がみられる。(43) は、口縁部の玉縁がやや小さめである。(45) は胎土がうすい黄灰白色である。(47) は椀であるが口縁端部がやや外反している。胎土は黄灰白色で、釉はうすい黄緑がかかった灰色を呈し透明がかっている。(48) は口縁端部が外反し、胎土が灰白色、釉は灰色を呈す。(49~56) は椀の底部である。(49,50,52) はやや高さを持ち、外側は直立し、内側は斜めに削られている。(51,53~56) は、極めて低い高台で内側は浅く削られている。(49) の釉は乳白色、(56) は胎土、釉とも白色を呈す。他は灰色がかかった白色を呈している。(40~46) は大宰府分類のIV-1類⁽¹⁾、(47,48) はV類⁽¹⁾に含まれると思われる。(49,51~56) は、高台の形態よりIV-1類⁽¹⁾と思われる。(57,58) は皿で内面見込みに沈線を持っている。大宰府分類のV類⁽¹⁾に含まれる。(59) は壺の口縁部と思われる。胎土は灰白色、釉は青味がかかった白色を呈している。(60) は、四耳壺の頸部から体部上半にかけての破片であり、耳の部分は破損している。この部分に2本の平行沈線が施されている。胎土は灰白色、釉はややうすみどりがかった灰白色を呈す。

(61) は青磁同安窯系の椀の底部である。内面見込みが沈線状に凹んでいる釉はうす緑がかかった灰色を呈す。大宰府分類のII類⁽¹⁾に含まれる。(62) は龍泉窯系青磁の椀で、外面に錦襷弁を持ち、釉は青色がかかった緑色で厚く施されている。大宰府分類I-5・b⁽¹⁾に含まれる。(63,64) も龍泉窯系青磁で、口縁部内外面無文、底部は外面に2本沈線を施しうす緑色の釉がかかっている。

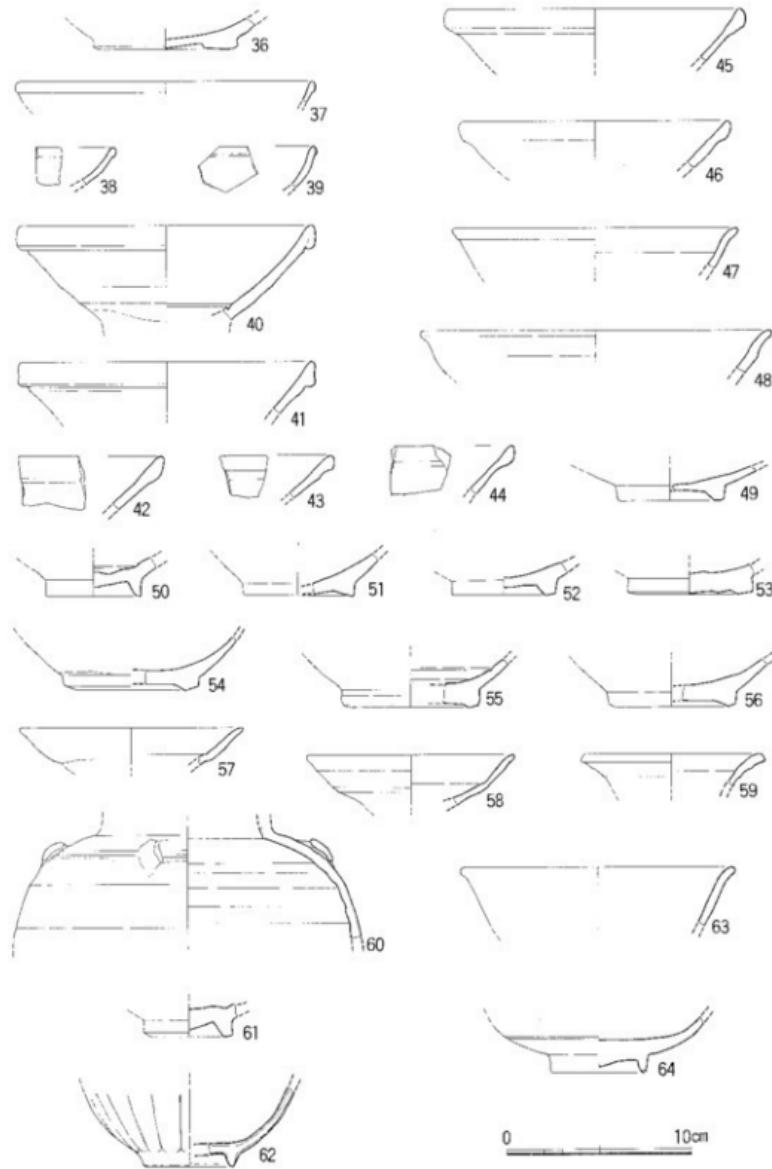
(65,66) は、須恵器、杯である。口縁端部をやや外方へ屈曲させている。これらの須恵器は、国庁編年の第4形式に含まれる。(67,68) は綠釉陶器である。(67) は胎土が須恵質で、釉は深い緑色を呈している。(68) は底部で、胎土は須恵質でやや軟質である。釉は黄緑色を呈し、内外面全体に施されている。(69,70) は、外面に格子叩きを施す須恵器甕である。(72) は備前焼の鉢であり、内面底部付近はかなり使用されている。(71) は砥石で内面とも良く使用されており、細かい擦痕が残る。



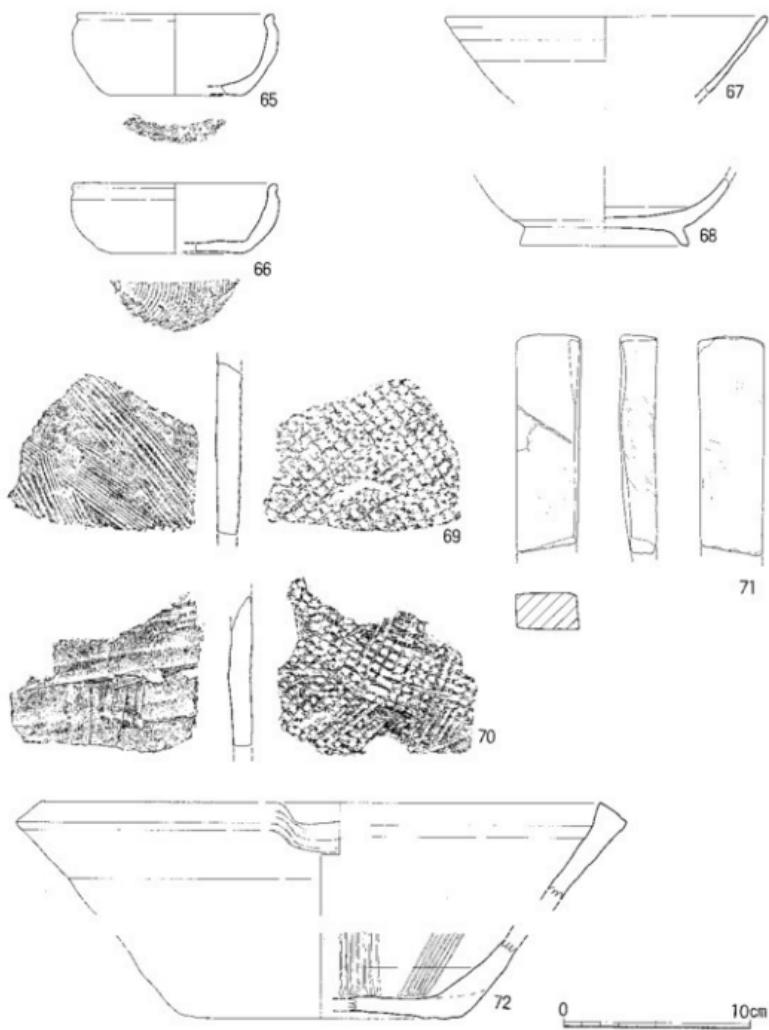
第119図 大屋敷遺跡出土遺物実測図



第120図 大屋敷遺跡出土遺物実測図



第121図 大屋敷遺跡出土遺物実測図



第122図 大屋敷遺跡出土遺物実測図

第8表 大屋敷遺跡出土遺物觀察表

標番号	器種	形 型 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	施 成	備 考
		口 直	底 直	高					
1	土師質器皿 上小	7.8	3.5	2.0	体部は内側ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部は厚く、口縁部は薄い。内外面とも回転ナデ。底部外面は回転系切り。	桃白色	細砂粒を少 量含む。密。	良好	
2	タ	8.8	4.4	2.0	体部は逆八の字状に開き、口縁端部は丸くおさめる。底部外面は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	桃黃白色	砂粒を少量 含む。密。	ア	
3	タ	7.9	4.2	1.1	体部は逆八の字状に開き、口縁端部は丸くおさめる。体部は内外面とも回転ナデ。底部内面はロクロ成形痕を残す。	赤桃白色	砂粒を含む。 密。	ア	
4	タ	7.5	4.5	1.2	体部は逆八の字状に開き、口縁端部は厚く、端部は丸くおさめる。底部外面は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	黄桃白色	細砂粒を多 く含む。	ア	
5	タ	8.0	3.6	1.9	体部は逆八の字状に開き、口縁端部はわずかに外反し、端部はやや鋸くおさめる。底部は厚く、外側は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	灰褐色	細砂粒を少 量含む。	ア	
6	タ	8.3	5.0	1.7	体部は逆八の字状に開き、口縁端部は厚く、端部は丸くおさめる。底部は厚く、外側は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	桃白色	細砂粒を含 む。	ア	
7	タ	7.5	4.2	1.5	体部は逆八の字状に開き、口縁端部は厚く、端部は丸くおさめる。底部は厚く、外側は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	灰桃白色	微砂粒を含 む。密。	ア	
8	タ		4.6		底部は厚く、体部は端端に薄くなる。底部外面は回転系切り。内面は回転ナデ。	外一灰白色 内一暗褐色	微砂粒を含 む。	ア	
9	タ	8.2		2.0	体部は底部との接がなく、内側して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部は外側が指屈正直、内面が不整方向ナデ。他は内外面ともヨコナデ。	外一暗灰色 内一灰白色	砂粒を含ま ない。極め て密。	ア	
10	タ	8.4		1.7	体部は底部と口縁端部との接がなく、内側して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外面は指屈正直。他は内外面ともヨコナデ。	桃白色	砂粒を少量 含む。密。	ア	
11	土師質器皿 高台付皿	8.8	5.2	2.5	高台は八の字状に開き、先端はやや外反する。体部は逆八の字状に開き、端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデ。	桃白色	I型現の砂 粒を含む。	ア	
12	土師質器皿 高台部		4.9		高台は外反して開き、先端よりとなる。体部はほぼ水平のひび、底部は厚い。内外面とも回転ナデ。	黄桃白色	砂粒を含ま ない。密。	ア	
13	タ		6.0		高台は外反して開き、先端よりとなる。体部はほぼ水平のひび、底部は厚い。内外面とも回転ナデ。	桃白色	細砂粒を含 む。密。	ア	
14	タ		6.2		高台は外反して開き、先端よりとなる。底部中央は薄い。内外面とも回転ナデ。	赤桃白色	砂粒を含む。 密。	ア	
15	土師質器皿 底		4.5		体部はほぼ直線的に開く。底部は厚く、外側は回転系切りの後腹目状圧痕が残る。他は内外面とも回転ナデ。	桃白色	細砂粒を多 く含む。	ア	
16	タ		5.7		底部外面は回転系切り。他は内外面とも回転ナデ。	明灰褐色	細砂粒をわ ずかに含む。	ア	
17	タ		5.3		体部はやや内側ぎみに開く。底部外 面は回転系切り。他は内外面とも回 転ナデ。	外一茶灰色 内一明灰褐 色	砂粒をわ ずかに含む。 密。	ア	

排 番 号	器 種	法 令 規 定 高	形態・手法の特徴	色 調	植 土	焼 成	備 考
18	土 部 器 底	6.0	体部はやや内湾ぎみに開き、口盤部付近でやや外反する。底部外側は回転余地あり。他の外表面とも回転ナデ。	桃白色	砂粒をわずかに含む。密。	良好	
19	土 部 質 器 台 付	4.7	脚部は短く、脚部はハの字状に開き、端部は平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚外側は回転ナデ、体部内面はナデ。	*	細砂粒を多く含む。	*	
20	*	5.1	脚部は短く、脚部はハの字状に開き、端部は平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚外側は回転ナデ。	黄白色 (一無色)	砂粒を含む。密。	*	
21	*	5.0	脚部から脚部にかけて外反し、端部は平坦となる。脚底部は調整不明。脚外側は回転ナデ。	桃白色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
22	*	5.2	脚部から脚部にかけて外反して開き、端部は平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ。	桃白色	微砂粒をわずかに含む。	*	
23	*	5.0	脚部から脚部にかけて外反して開き、端部は平坦ぎみとなる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ。	黄灰白色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
24	*	5.6	脚部から脚部にかけて外反して開き、端部は平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ、体部内面は回転ナデ。	黄桃白色	細砂粒を多く含む。	*	
25	*	6.0	脚部から脚部にかけて外反して開き、端部は平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚部外側で、周縁部に段がある。脚部外側は回転ナデ。	桃白色	細砂粒を含む。有。	*	
26	*	6.7	脚部は脚部との境が緩く、脚部はハの字状に開き、端部はやや広く平坦となる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ、体部内面はナデ。	明灰褐色 断一桃白色	微砂粒を含む。	*	
27	*	5.2	脚部は脚部との境が緩く、脚部は外反して開き、端部は上方にやや肥厚して平坦面をつくる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ。	桃白色	細砂粒を含む。密。	*	
28	*	8.1	脚部は外反ぎみに開き、端部は丸くおさめる。脚底部は回転余地ありと思われるが、全体に率直しているため調整不明。	桃白色、断 面一明灰色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
29	*	4.5	脚部は断面円形を呈し、脚部をつくらない。体部は内湾ぎみに屈る。脚底部は回転余地あり。脚部内面はロカコ底形模を残し、外側は回転ナデ。	黄桃白色	細砂粒を含む。	*	
30	*	4.2	脚部は断面円形を呈する。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ。体部内面はナデ。	赤系灰色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
31	土 部 質 器 底	6.0	脚部は長く、しだいに裾広がりとなり。脚部は外反して開き、端部は平坦となる。脚底部は回転ナデ。脚部外側は回転ナデ。体部内面は回転ナデ。	黄灰白色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
32	*	6.9	脚部は長く、しだいに裾広がりとなり。脚部は外反して開き、端部は上方に突出して粗面をつくる。脚底部は回転余地あり。脚部外側は回転ナデ。外側は回転ナデ。	桃白色	砂粒をわずかに含む。密。	*	
33	土 鍼		断面円形の棒に粘土を巻いて成形したものと思われる。表面は風化して調整不良。	純白～黒灰色	砂粒を含む。密。	*	長さ：8mm 鍼径：1.4mm 孔径：1.4mm

地番	図号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口徑	底径	高さ					
34	土 瓢					断面円形の体に胎土を譽いて成形したものと思われる。表面はナデ調整。	黒灰色	砂粒をわずかに含む。堅。	良 坏	長さ:4.0cm 径:1.1cm 孔径:0.4cm
36	白 瓢 碗		7.7			幅広の低い両台をもち、外付部以外に施釉している。	黒一白色	白色	ヶ	
37	ヶ	16.2				小さな玉縁状口縁をもつ。	黒一黄白色	白色で密。	ヶ	
38	ヶ					小さな玉縁状口縁をもつ。	黒一灰白色	灰白色で密。	ヶ	
39	ヶ					小さな玉縁状口縁をもつ。	黒一乳白色	灰白色で黑色を含む。	ヶ	
40	ヶ	16.1				体部はやや直線的で、大きめの玉縁状口縁をもつ。内面に沈線状の段をもつ。	黒一白色	灰白色で密。	ヶ	
41	ヶ	16.0				体部はやや直線的で、大きめの玉縁状口縁をもつ。	黒一白色	灰白色	ヶ	
42	ヶ					体部はやや直線的で、玉縁状口縁をもつ。	黒一灰白色	黄白色	ヶ	
43	ヶ					体部はやや直線的で、玉縁状口縁をもつ。その下方は凹縁状に薄くなる。	黒一薄緑白色	灰白色	ヶ	
44	ヶ					体部はやや直線的で、玉縁状口縁をもつ。			ヶ	
45	ヶ	16.2				体部はやや直線的で、やや大きめの玉縁状口縁をもつ。	灰白色	黄灰白色	ヶ	
46	ヶ	14.6				体部はやや直線的で、玉縁状口縁をもつ。	灰白色	灰白色で密。	ヶ	
47	ヶ	15.4				体部は丸みをもたらし、口縁部は外反し、底部外壁にやや肥厚する。	薄緑色	黄灰白色で密。	ヶ	
48	ヶ	18.8				口縁部は外反し、底部は丸くおさめる。外側は幅広の凹縁による棱をもつ。	灰白色	灰白色で密。	ヶ	
49	ヶ		5.8			高台は外側が直に、内面が斜めに削り出されている。外側下半は無釉と思われる。	明灰白色	灰白色	ヶ	
50	ヶ		5.1			高台は外側が直に、内面が斜めに削り出され、やや細く、高い。外側下半は無釉と思われる。	灰白色	灰白色	ヶ	
51	ヶ		6.0			高台は外側が直に、内面が斜めに削り出され、低い逆三角を呈す。外側下半は無釉と思われる。	白色	明灰白色	ヶ	
52	ヶ		5.6			高台は外側が直に、内面が斜めに削り出され、逆台形を呈す。外側下半は無釉と思われる。	灰白色	灰白色。器。	ヶ	
53	ヶ		6.7			高台は外側が直に、内面が斜めに多く削り出され、底部は厚い。	薄緑白色	灰白色で密。	ヶ	
54	ヶ		7.2			体部は内側ぎみに立ち上がる。高台は低く、外側が直に、内面が斜めに削り出され、逆台形を呈す。器は高台近くまで達する。	薄緑色	明灰白色		
55	ヶ		7.4			体部はやや直線的で、内面に沈線状の段をもつ。高台は外側が直に、内面が斜めに削り出され、底部は厚い。外側下半は無釉と思われる。	薄緑白色	灰白色で密。	ヶ	
56	ヶ		7.0			体部はやや直線的で、高台は外側が直に、内面は浅く、斜めに削り出され逆台形を呈す。外側下半は無釉と思われる。	白色	暗灰白色で密。	ヶ	

高 度 序 号	器 種	基 本 參 數			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
		口 直 径	底 直 徑	厚 高					
57	白 磁 盤	12.0			口縁端面はわずかに外反し、丸くおさめる。内面に段をつくる。外面下半は無脚。	薄緑白色	灰白色	良 好	
58	〃	11.1			体部はやや丸みをもち、内面に段をもつ。口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめる。	白 色	白 色	〃	
59	白 磁 壺	9.8			口縁部は外反し、壺部は平坦となる。	青白色	白色で密	〃	
60	白 磁 四 耳 壺				肩部は丸みをもって張り出し、偏平な把手を4方向にもつと思われる。	薄緑灰白色	灰白色で氣泡がみられる。	〃	
61	青 磁 瓶		4.8		台形状の高台を有し、内底見込みと体部の境に段をもつ。高台以下は無脚。	灰綠色	灰白色で張。	〃	
62	〃		4.8		体部は内湾して立ち上がり、高台は先端となる。胎は高台先端を除き施され。全体に厚い。外面に組合意蓮弁文。	明緑色	灰白色で密。	〃	
63	〃		14.8		口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。	灰綠色	灰白色で密。	〃	
64	〃		5.2		底部内面はやや広く平削となり。体部は内湾して立ち上がる。高台は細く、底部は厚い。高台内面は無脚。	明緑色	灰白色で密。	〃	
65	須 毫 杯	10.6	7.0	4.4	体部は内湾して立ち上がり、口縁付近で内傾した後、短く外反する。体部は内外面とも回転ナデ、底盤内面はナデ、外面は回転糸切り痕。	明灰色	砂粒をわずかに含む。密。	〃	
66	〃	11.0	7.2	3.8	体部は内湾して立ち上がり、口縁付近でわずかに内傾した後、短く外反する。体部は内外面とも回転ナデ、底盤内面はナデ、外面は回転糸切り痕。	暗灰色	微砂粒を含む。密。	〃	

才台垣遺跡

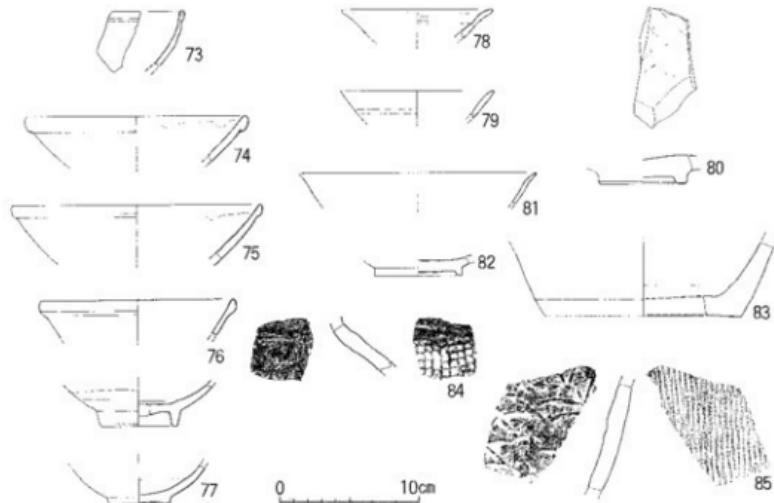
大屋敷遺跡の西側の道路を隔てた場所に位置しており、現状では畠と水田に使用されており調査区は水田部の方が多くを占めている。標高6.5cmを測り、大屋敷遺跡と大差はない。地番は、松江市大草町437-4、438-1である。

水田部は、厚さ30cmの耕作土を除去したところ砂礫層と一部赤褐色砂となっており、この砂礫層は厚く堆積し、深く掘り下げるところ湧水が出てくる。畠の部分も同様で耕作土中にも河原石の小さなもののが含まれており、その下は砂礫層となっている。

検出した遺構

遺構は検出できず、耕作土、砂礫層中より白磁、土師質土器等の遺物が出土しているが、層位的に良好な資料とはなり得ない。これらは、器壁の表面がかなり荒れたものも見られ、河川の氾濫により流された可能性がある。東側の大屋敷で見られたように黒色、暗褐色の土層は全く見られない。

出土遺物（第123図）（73～78）は白磁の碗である。（73）は、小さい玉縁の口縁部で、体部にやや丸味を持ち、器壁は薄い。釉はやや空色がかった白色で全体に薄くかかっている。（74～76）は、やや大きめの玉縁状の口縁部を有し、器壁がやや厚く、体部が直線的になっている。胎土は、灰白色を呈し、釉は灰白色を呈す。（77～78）は、碗である。（77）は、高台の幅が狭く、高くなっ



第123図 才台垣遺跡出土遺物実測図

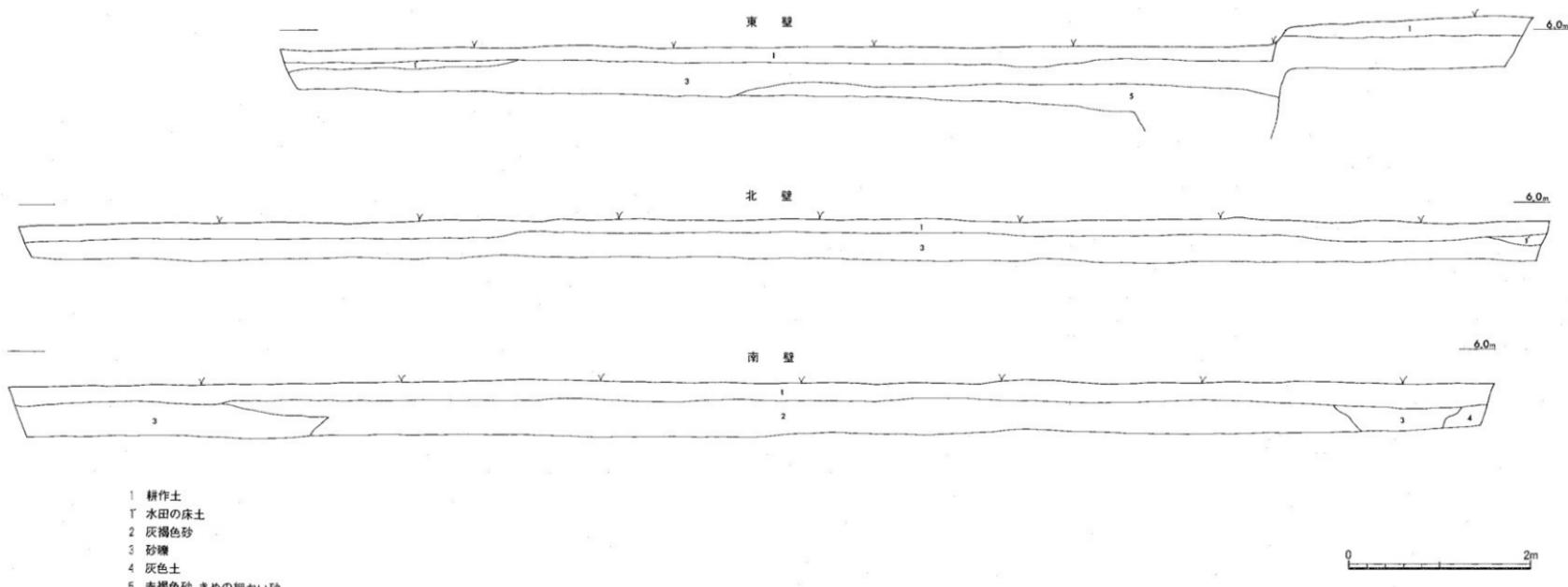
ている。内側の目込み内は一段と低く削られている。胎土は灰白色を呈し、釉は灰白色を呈し、内面と外面の体部下半まで施されている。(78)は、低い高台で内側が斜めに、外側が直線的になっている。体部に丸味を持ち、目込みに圈線を有している。胎土は灰白色を呈し、釉は灰色気味の白色を呈し、内面と外面体部下半まで施されている。(79・80)は、口縁部はやや外反し、厚みがある。内面に沈線を施す。胎土は灰白色、釉も灰白色で内面下半まで施される。(80)は、口縁部が直線的に立ち上がり、胎土、釉とも白色を呈している。(81)は、灰釉の椀で、体部は直線的、口縁部がやや外反して立ち上がる。口縁端部にかけ、薄くなっている。胎土は灰白色を呈し、やや灰色がかかった釉が内外面にかかっている。内面はややはげている。(82)は、龍泉窯系青磁の椀底部である。底部の器内は厚みがあり、内面には草花文を片彫りして表現している。胎土は灰白色で、釉はうす緑色で、内面と外面は高台付部に一部かかっている。(83)は、縁釉陶器の椀である。素地は土師質で明茶灰色を呈し、釉はうす緑色を呈し、内面と外面高台部付部までかかっている。(84)は、須恵器・壺の底部である。(85)は、須恵器・甕の破片で外面に平行叩き、内面に半輪文叩きを施している。

それぞれの時期は、(73)が大宰府の編年のⅡ類⁽³⁾で12世紀前半と思われる。(74~79)はⅣ類⁽⁴⁾で12世紀代と思われる。(81)の青磁碗はⅠ類⁽⁵⁾に含まれ、12世紀後半~13世紀前半にかけてのものである。83は、縁釉で素地が土師質ということであり、平安時代の前半と思われる。(85)は、外面に龜山焼にみられるような格子叩きを施しているが、他遺跡において伴出遺物等が明確でないため、平安時代末~鎌倉時代といった時代幅があると思われる。

ま　と　め

出土 遺物

大屋敷遺跡からは、土師質土器、陶磁器が出土している。土師質土器には、椀、小皿、台付皿がある。島根県内ではこれらの当該期の遺物を出土する遺跡が少なく未整理な部分が多い。その中でも最近は国造館跡⁽⁶⁾、石台遺跡⁽⁷⁾等より平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が相当量まとまって出土している。しかし、上師質土器の編年が出来上っていない現状では、輸入陶磁器との共伴により時期を決定せざるをえない。後述の天満谷遺跡においてSD-01内より白磁玉縁のつく椀と土師質土器小皿a類、台付皿が共伴して出土しており、概ね12世紀後半頃と考えられる。大屋敷遺跡出土の輸入陶磁器は、白磁碗で10世紀代に遡るものもあるが、大部分は平安時代後半から鎌倉時代のものである。現在のところ土師質土器と陶磁器の良好な共伴関係がたどれないため明確に時期を決定することは困難である。本遺跡出土の土師質土器は、平安時代から鎌倉時代といった幅の中でとらえたい。輸入陶磁器は、(36)が10世紀、(37~39)が11世紀といった年代が考えられるもので



第124図 才台垣遺跡調査区土層図

ある。白磁で大きな玉縁の付く椀（40～46.51～56）は、12世紀後半頃と考えられる。石台遺跡、国造館跡、出雲国府跡において最も出土量の多いのがこの形態の椀である。青磁は、（61）が同安窯系の椀底部で13世紀前半頃と考えられる。（62）は龍泉窯青磁碗で13世紀後半頃とされるものである。国産陶器として緑釉陶器がある。生地が須恵質となっていることなどから平安時代後半と考えられる。（69.70）の須恵器、甕は、外面に格子目叩きを持つもので、天満谷遺跡においてまとまって出土している。

才台塙遺跡出土の遺物も大屋敷出土遺物とほぼ同様の傾向がみられる。輸入陶磁器の白磁碗は、Ⅱ類が古く、他はⅣ類¹⁰に含まれることから、11世紀代と12世紀後半を中心としている。青磁は龍泉窯系青磁碗の底部でⅠ類¹¹に含まれ、12世紀後半から13世紀初頭という時期である。

検出遺構

大屋敷遺跡では掘立柱建物址2、柵列2、土壙5、ピットが検出されている。掘立柱建物跡は、砂礫層の上に黒褐色の土を盛り土して立てられたようである。建物の時期は、平安時代から鎌倉時代と考えられる。この時期の造構は国府の上層においても確認されており、国府を含めた周辺で面的広がりがみられたようである。

注

- 1～7、9～11、14、15：横田賢治郎・森田 勉
「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として」
『九州歴史資料部論集』4集 九州歴史資料館 1978年
- 8：松江市教育委員会 『出雲国府跡発掘調査報告』 1970年
- 12：松江市教育委員会 『出雲國造館跡発掘調査報告』 1980年
- 13：島根県教育委員会 『石台遺跡』 1986年

第9表(1) 才台垣遺跡出土遺物観察表

番 号	器 種	形 状 (cm)		形態・手法の特徴	色 調	胎 土	構 成	備 考
		口 径	底 面 高					
67	縁 陶 瓶	17.3		体部はやや内凹みに開き、口縁部は丸くおさめる。	深褐色	灰色で密。	良 好	
68	〃		9.1	体部は内側で立ち上がり、やや内凹みに開き、口部をもつ。	青褐色	灰色で密。	〃	
69	須 恵 器			体部の破片で、外側は格子目のような、内側はカキ貝状の調整板。	淡灰褐色	墨彩粒をわずかに含む。 青。	〃	
70	〃			体部の破片で、外側は格子目のような、内側はナデ。一部カキ貝状の調整板。	灰白色 黒面は純白色	細砂粒を含む。 青。	〃	
72	漆 鉢	30.0	15.0	体部は直線的に開き、口縁部は拡張し平坦となる。往々口を持つ。内面に7本を1単位とする舟ろし目が波状状に施されている。内面はかなり摩擦し、体部外側は剥離した。底部付近はケズリ、底面外縁は削損。	暗茶褐色～青 灰色 底面は赤褐色	3mm以下の 砂粒をやや 多く含む。 密。	〃	
73	白 陶 瓶			体部は内側で立ち上がり、口縁部は薄手で、小さい突起をもっている。	白褐色	灰白色	〃	
74	〃	15.8		体部はやや直線的で、やや大きめの玉縁状の口縁となる。脚は全体で薄い。	乳白色	灰白色でや や砂粒が混入。	〃	
75	〃	18.0		体部はやや直線的で、玉縁状の口縁となる。脚は全体で薄い。	〃	白灰褐色でや や砂粒が混入。	〃	
76	〃	14.0		玉縁状の口縁をもつ。脚は全体で薄い。	〃	〃	〃	
77	〃		5.6	体部内面に段落ちも、高台は先端部が先端部となる。体部下半はヘラケズリで、無釉。	薄緑乳白色	〃	〃	
78	〃		4.4	体部は内側で立ち上がり、内面に段落ちをもつ。高台は外側が直に、内面が後くわらに割り出される。高台、内面は無釉。	〃	灰白色でや や砂粒が混入。 墨。	〃	
79	白 陶 皿	10.8		口縁部は外反し、底部を丸くおそれ。内面に浅い段落ちをもつ。体部外側下半は無釉。	乳白色	〃	〃	
80	〃	11.0		口縁部はほぼ直線的に開き、底部は先端部が先端部となる。全体に薄く釉が施される。	灰白色	白灰褐色で緻 密。	〃	
81	青 陶 盤		6.3	底部は厚く、断面四角の高台をもつ。内面に蓮瓣文を割りしている。高台内部は無釉。	紺灰色	〃	〃	
82	灰釉陶 瓶	22.0		体部は薄手で、口縁部は外反し、先端部となる。脚が薄く一部にかかる。	乳白色	白灰褐色で砂 粒がわずかに混入。	〃	
83	綠釉陶 盤		6.2	高台は直線形で割り出されている。高台内部は無釉。	赤褐色	細かい砂粒 を含む。青。	〃	
84	須 恵 器		14.0	体部は直線的に立ち上がり、内外面とも回転ナブ。両面部付近はヘラナブ。	暗褐色	微砂粒を含む。 やや粗。	〃	
85	須 恵 器			頭部は内外面ともヨコナデ、肩部は外側が格子タクホ。内面がタクホの後ナデ。	青褐色	細かい砂粒 を含む。	〃	
86	〃			体部片。外側は平行タクホ、内面は扇状のタクホ。		粗砂粒を少 量。		

第9表(2) 石器計測表

%	種 類	長 辺(cm)	短 辺(cm)	厚 さ(cm)	材 質	備 考
71	燧 石	11.7	3.4	2.0		小口以外の4面を使用。

進入道路工事に伴う遺跡の調査

（昭和25年1月25日）

Ⅸ 進 入 道 路

遺跡の概要

進入道路は出雲国府址の東側を南北に走る農道を整備し、工事用車両が通行するためのものである。その工事に先立ち遺跡の存在が予想される2ヶ所で試掘調査を行なった。1ヶ所は15号鉄塔予定地内の神田遺跡より北へ200mの所で、神田遺跡として試掘を行った。もう1ヶ所は16号鉄塔予定地内の大屋敷遺跡の北側160mの所で、同様に大屋敷遺跡とした。

大屋敷遺跡は耕作土下の黄褐色の基盤層よりピットが検出された。本所は国府から伸びる微高地の東端に位置していることから付近の南北140m範囲の立ち会い調査を行なった。未舗装の道路を舗装する工事で、バックホーで盛り土を除きながらその下の基盤層を精査するという方法で行った。

神田遺跡は意宇平野の中央に位置し、試掘溝は耕作土除去後、その下から灰色の粘質土と砂層が

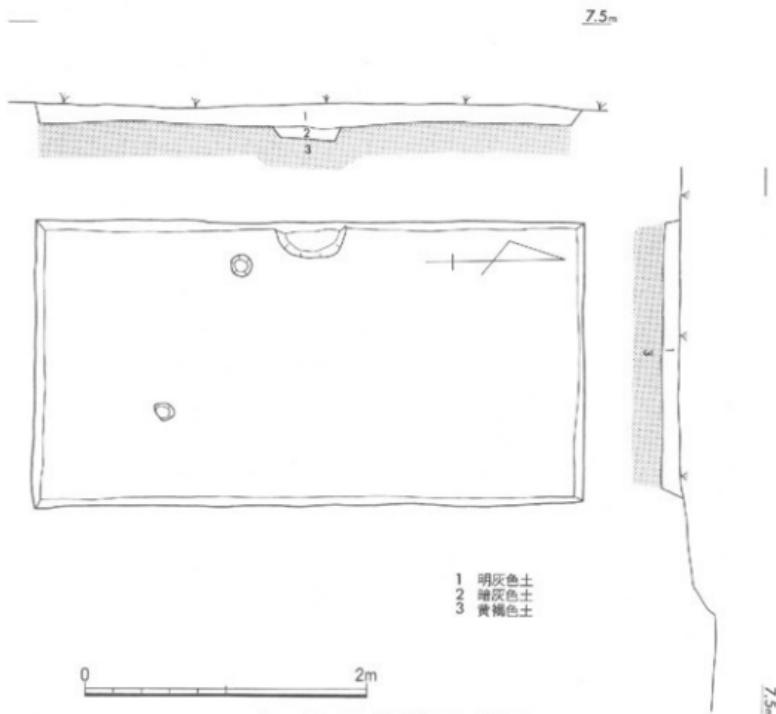


第125図 侵入道路調査地点図

互層に堆積し、最下層は砂疊層であった。遺物は弥生土器が出土したが遺構等は検出されなかった。

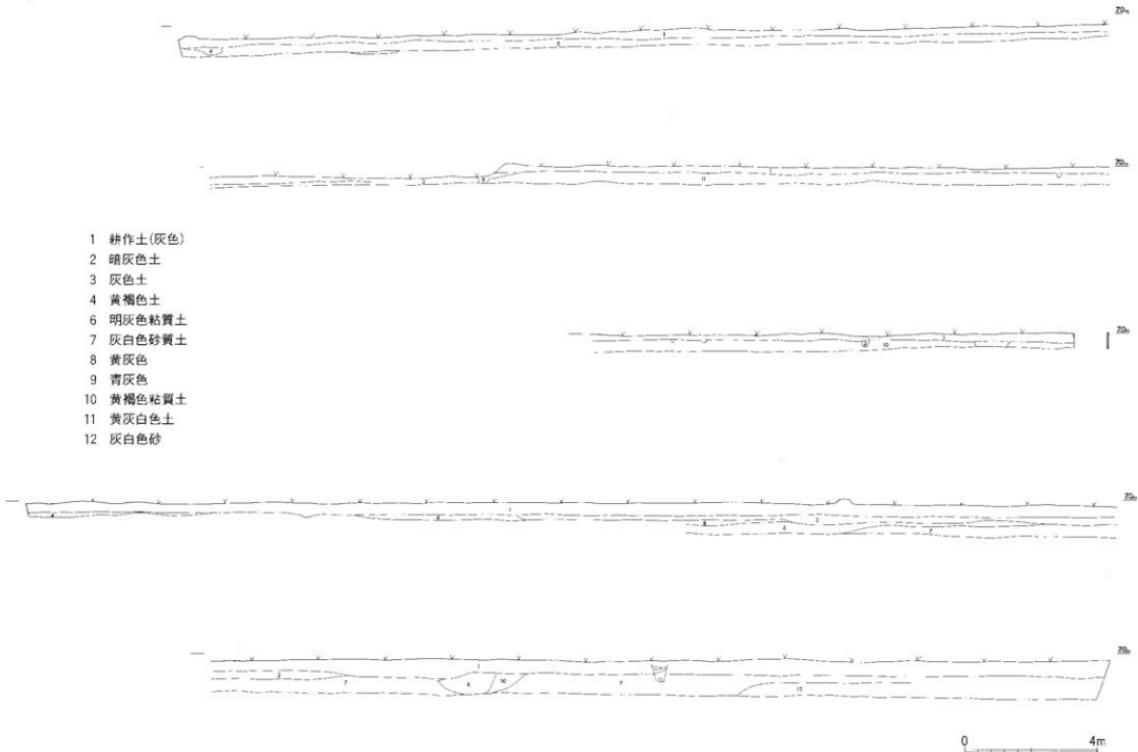
大屋敷遺跡

大屋敷遺跡で試掘溝を設定した場所は、16号鉄塔予定内の大屋敷から北へ同一の標高で水田が続いており、試掘溝から北へは徐々に低くなっている、15号鉄塔予定地内の神田遺跡周辺が最も低い場所である。試掘は、 $4 \times 2\text{ m}$ の範囲で行った。耕作土は厚さ1.0mで、その下は黄褐色土となっている。この黄褐色土の上面にてピット3を検出した。この中で径25cmのピット内から土師質土器の破片が出土し中世の遺構であると考えられた。この試掘溝を中心として南北140mの範囲で工事に立会ったところ、試掘溝から南へ30m、北へ15mの範囲に黄褐色土の基盤層があった。その中でピットを検出したのは、南へ20m、北へ10mの南北30mの範囲であった。ピットは、径10~30cmのもので小さなピットが多く、深さ10~15cmと浅いものである。立ち会う範囲の幅が狭く、長いため建物は検出し得なかった。土層図(第128図)は、試掘溝の付近の道路の横断土層である。1は、道

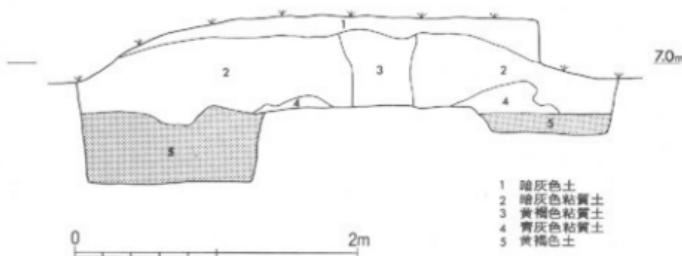


第126図 大屋敷遺跡検出遺構図

- 1 耕作土(灰色)
 2 暗灰色土
 3 灰色土
 4 黄褐色土
 5 明灰色粘质土
 6 灰白色砂质土
 7 黄灰色
 8 青灰色
 9 黄褐色粘质土
 10 黄灰白色土
 11 黄灰白色土
 12 灰白色砂



第127図 大屋敷遺跡西壁調査区土層図



第128図 大屋敷遺跡南壁調査区土層図

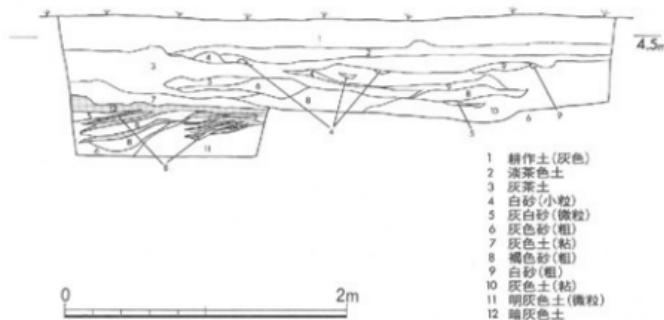
を作った時に盛った土で砂利を含む。2は水田の耕作土、5が黄褐色土でピット等が掘り込まれて いる土である。

神田遺跡試掘溝

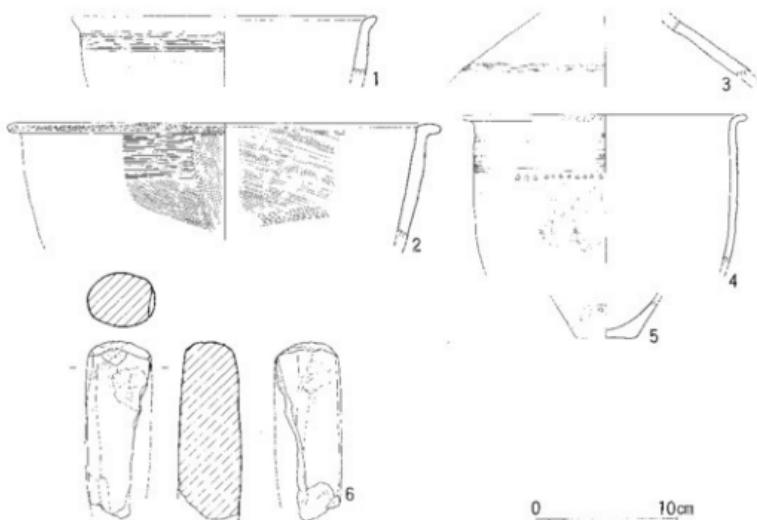
平野を南北に走る進入道路の中央に位置し、南北両方からこの地点へ向けて傾斜して低くなっている場所であり、そこに4×2mのトレンチを設定して調査を行なった。現在は水田となっておりその下は、砂層と粘土層が交互をなしている（第129図）。ここからは、第8層中より弥生土器の破片が数点、磨製石斧1が出土している。弥生土器は、表面がかなり荒れており流されて来た可能性がある。11層は明灰色土であり、南へ向け傾斜している。この付近では遺構等は検出されなかった。

神田遺跡出土遺物（第130図）

試掘溝内出土遺物で図化し得たのは、弥生土器5点、石斧1である。



第129図 神田遺跡西壁調査区土層図



第130図 神田遺跡出土遺物実測図

(1) は甕で、推定口径21.5cmを測る。口縁がゆるやかに外方へ屈曲し、口縁端部に厚みを持つ。体部外面に5条のヘラ搔沈線を入れ、その下は部分的にヘラミガキを施す。色調は灰褐色、胎土は砂粒を含む。(2) も甕で、推定口径30.5cmを測る。口縁は外方へ向け屈曲している。口縁外面にはヘラ状工具によりキザミメを入れ、体部内外面に細いハケメを施している。色調は黄灰色、胎土は砂粒を含む。(3) は壺で、頸部と体部の境に3条以上のヘラミガキを施している。(4) は甕で推定口径20.0cmを測る。口縁が外方へ屈曲し、外面にキザミメを施す。体部外面に櫛状工具により13条の沈線を入れ、その下に三角形の列点文を施す。色調は灰褐色、胎土は砂粒を含む。(5) は底部で、底径4.2cmを測る。外面に細かいハケ目を施しており、胎土、色調より(4)と同一個体と思われる。(6) は、磨製石斧で刀部を欠いている。現存長12.5cmを測る。1～3は弥生時代前期後半、(4・5)は中期前葉と思われる。

ま　と　め

今回の試掘調査と立ち合い調査で判明したことを記してみたい。

神田遺跡周辺は、意宇平野の中央に位置し、旧河道の一部と考えられる所であり、現在も水田の標高が南北方向と比べて低くなっている。試掘溝内の土層は砂層と粘土層が互層をなしており、土

器の表面も荒れており、流されたものと思われる。

大屋敷遺跡の試掘溝とその付近は、長さ33mにわたって黄褐色粘質土の基盤層があり、その上面にてビットを多数確認している。この基盤層は西側の国庁周辺へ続くものであり、国庁の上層で確認された中世の遺構と一連のものと思われる。

天 满 谷 遺 跡

—松江市大草町—

X 天満谷遺跡

遺跡の概要

天満谷遺跡は意宇平野の南側の丘陵上に位置する。ここから北へ50mの所を意宇川が東流しており、遺跡は狭い谷間に所在している。

天満谷遺跡の東側へ谷一つ隔てた丘陵東側斜面には安部谷横穴群があり、丘陵上には古墳群がみられる。この丘陵を南へ上ったところには、春日岩舟古墳、天満谷遺跡の南西丘陵上には古天神古墳、百塚山古墳群が所在している。これらは、総称して大草丘陵古墳群と呼ばれるものである。天満谷遺跡と関連する同時期と思われる

遺跡は、意宇川を渡った平野南端の出雲国庁址がある。国庁の調査時に上層より奈良時代の遺構を切り込んで柱穴・井戸等が確認され、土師質土器、陶磁器等が多く出土している。16号鉄塔子定地内の大屋敷遺跡においても中世の掘立柱建物址が検出されている。

遺跡の所在する谷は南北幅20mを測り、西側から東側へ向け緩やかな傾斜をなしている。南北には尾根が走っており、調査区はその間に挟まれるような位置にある。現状では杉林となっているが、以前は水田に使用されていたようであり、現在でも谷の奥から湧水が出ている。調査した時期が秋から初冬にかけてということもあるが、南側の丘陵により日光の照射が妨げられ北側の尾根により北西方向からの季節風は多少は和らげられている。北側の尾根上からは直下に意宇川が、遠くに意宇平野が広く見渡せる。同様に出雲国



第131図 天満谷、湯谷、春日シヌン谷遺跡周辺の遺跡と地形図

所址、国分寺址等も望むことが出来る。

検出した遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物址 6、柵列 2、溝状遺構 8、ピット総数 250 である。調査区が谷地形となっており、北側から南へ向け傾斜しており、西側の谷の奥から、東側の谷の出



第132図 天満谷遺跡地形測量図

口へ向けても傾斜している。北側斜面には、平坦な部分があり、遺構が北側へ伸びる可能性はあるが南側、西側では調査区域外へはさほどの広がりはないと思われる。

SD-01（第135図） 調査区の南西部に位置する。平面形は、不整な長楕円形を呈している。長さ7.75m、最大幅3.3m、深さ1.1mを測る。この溝は暗茶灰色土に掘り込まれており、壁は茶灰色土で、床面は暗灰色土に礫の混入した上で、水が湧き出している。底面はほぼ平坦で、壁は北東部分を除いては緩やかに立ち上る。覆土は暗茶灰色、茶灰色といった土が入っており、遺物は最下層の暗青灰色粘質土より出土している。

出土遺物（第136図） 出土した遺物は、礫が最も多く、その他に白磁、土師質土器が出土している。（1～5）は白磁の碗である。（1～3）は、口縁部が幅の広い扁平な玉縁状をなしている。



第133図 天満谷遺跡検出遺構全体図

(4) も同様に玉縁状の口縁を持つがやや丸味のある玉縁であり、体部にもやや丸味を持っている。
(1) は、全形が判るもので、口縁16.5cm、高さ7.5cmを測る。体部にやや丸味を持っており、高台は低くやや外方へ向け突出している。これらは太宰府編年のIV類^⑩である。(6,7) は、土師質土器の皿の類である。底部に回転糸切り痕を有し、器壁は薄い。(8~14) は、高台付皿、坏である。(8) は、台付皿I-b類、(12) は台付坏I-c、(9) がIV-a類、(11) がIV-b類である。(10) は、高坏の脚部状を呈しているが、台付の皿か坏と思われる。(13,14) は、かなり坏部が大形であり、直線的に開いている。台の部分もかなり大形のものと思われる。(15~19) は、土師質上器の椀である。(15) は、椀a類、(16,17) は、b、c類と思われる。(18) はかなりの大形品で体部が口縁へ向け開いている。(19) は、外方向へ向け厚めの高台が付いており、体部は直線的に開くものである。

SD-02 (第137図) 調査区の北壁に沿った場所にL字状に折れ曲る溝が掘られている。溝の幅は0.5m~1.65m、深さ0.1m~0.5mを測る。溝の中からは、土師質土器が出土している。この溝に囲まれるような位置にSB-01、SA-01が位置している。遺物は、(第138図21,23) が出土している。

SB-01 (第137図) SD-02と主軸方向を同じくしており、N-15°-Wを測る。規模は、2間×4間の掘立柱建物で桁行5.8m、梁間2.75mを測る。ピットは、径0.25m~0.40m、深さ0.20m~0.50mを測る。ピット内の覆土は灰褐色土である。

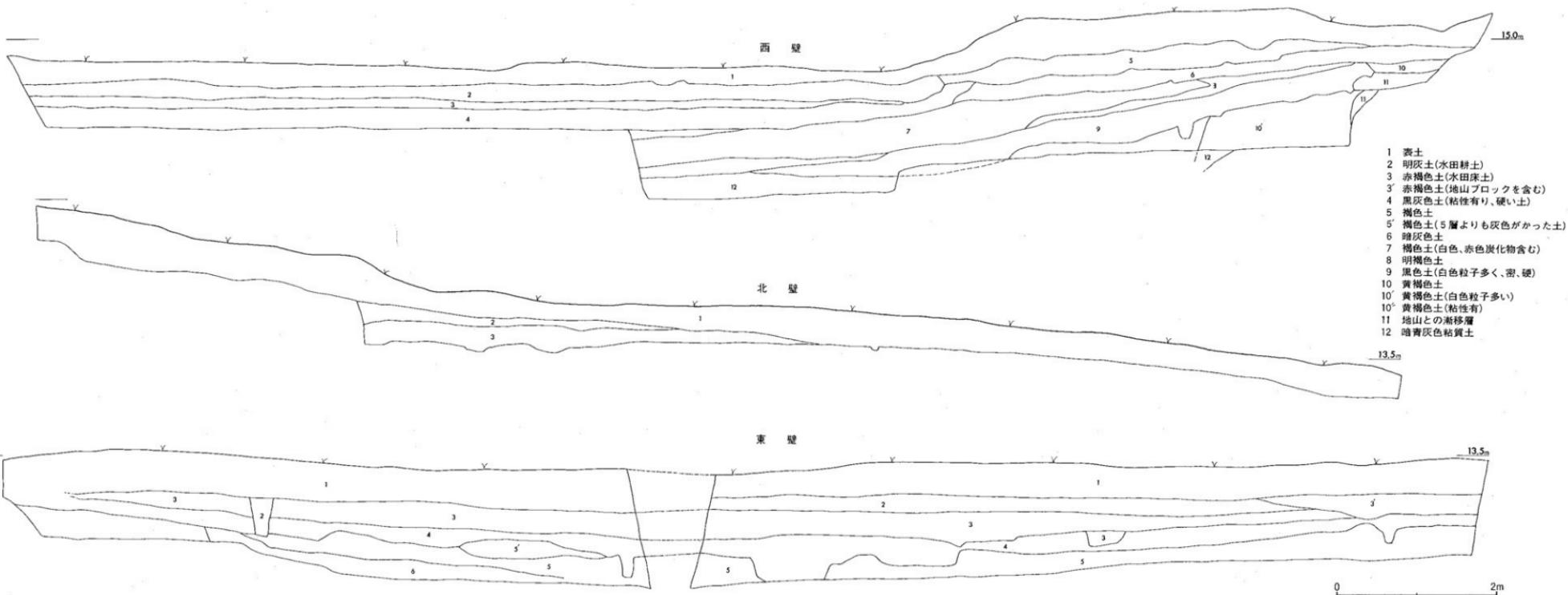
SA-01 (第137図) SD-02の内側0.4mの所にL字状に列んで位置している。柱穴間の距離は0.35m~1.45mと不揃いである。ピットの径0.2~0.4mを測る。

SK-01 (第139図) SA-02とSB-01に挟まれて位置している。平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.3m、短軸1.24m、深さ0.66mを測る。P-10、SK-02と切り合い関係にあり、新旧関係は、SK-02(古)-SK-01(新)である。

SK-02 (第139図) SK-01の東側に位置している。長軸1.8m、短軸1.55m、深さ0.05mと極めて浅い土壤である。土壤の大部分に炭化物を多く含んだ黒色土が広がり、その上には焼けた茶色土がある。

出土遺物 (第138図20~22) は、土師質土器の小形の皿である。底部には、回転糸切り痕が残り、20はa類に含まれる。23は台付の皿でI-C類に含まれる。

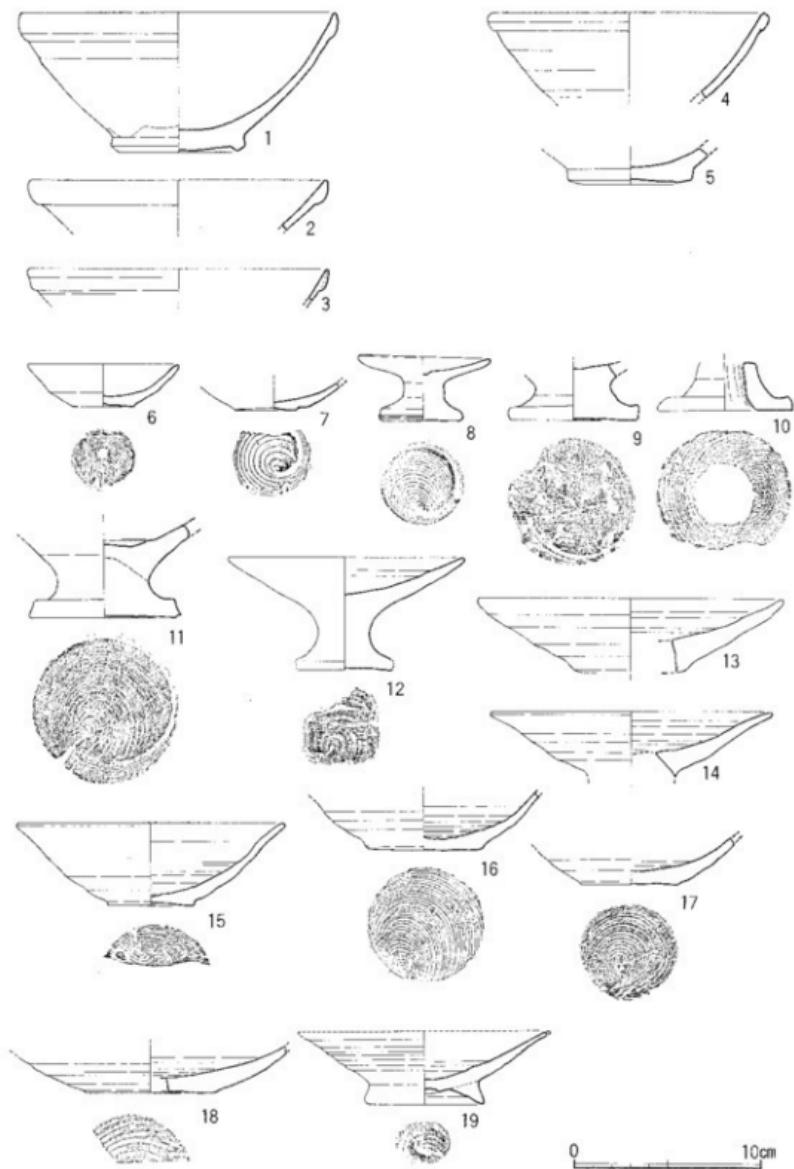
SB-02 (第140図) 調査区の北東部、SB-01の東側に位置する。SB-01と同様の溝が北側に走っている。規模は、2間×3間の掘立柱建物址で、桁行5.0m、梁間5.7mを測る。柱間距離は桁行側で2.5m、梁間側で1.0mと3.3mを測る。柱穴は、径0.3m~0.5m、深さ0.2m~0.35mを測る。北側の2列は、地中に掘り込まれており、他の柱穴は茶褐色土に掘り込まれている。柱穴内の覆土



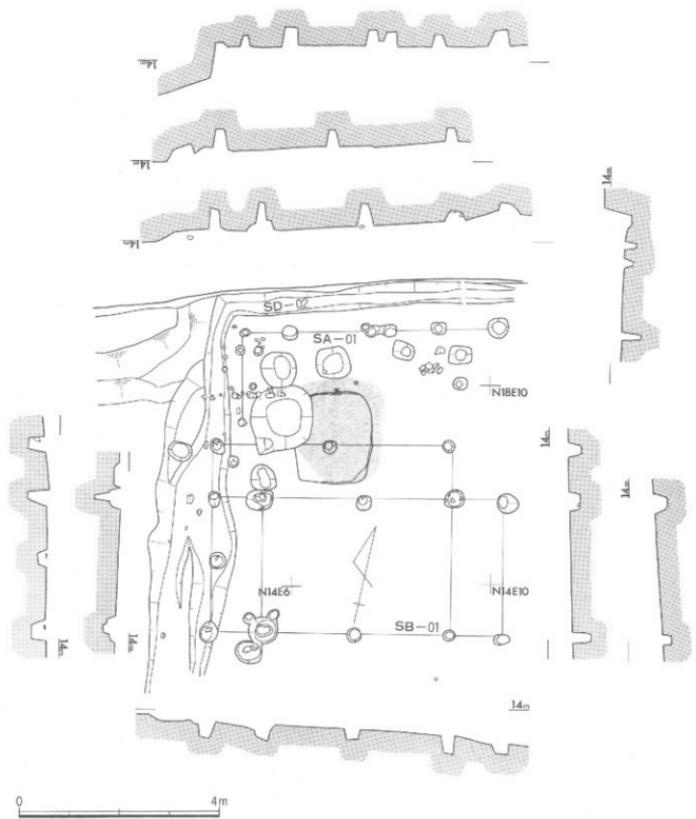
第134図 天溝谷遺跡調査区土層図



第135図 天満谷遺跡 SD-01 実測図



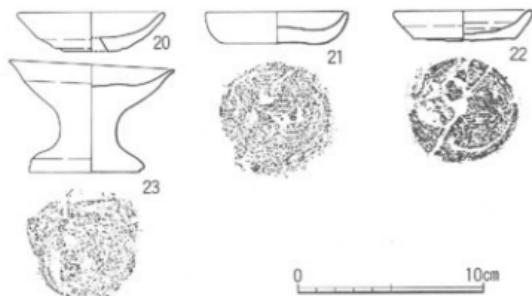
第136図 天満谷遺跡 SD-01 出土遺物実物図



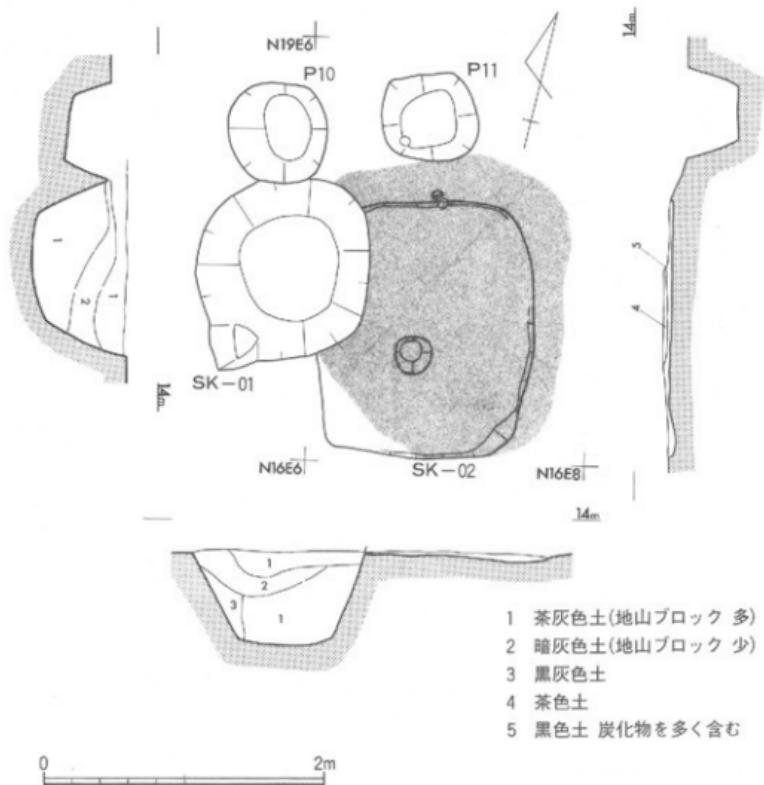
第137図 天満谷遺跡 SB-01、SD-02、SA-01 実測図

は灰褐色土である。

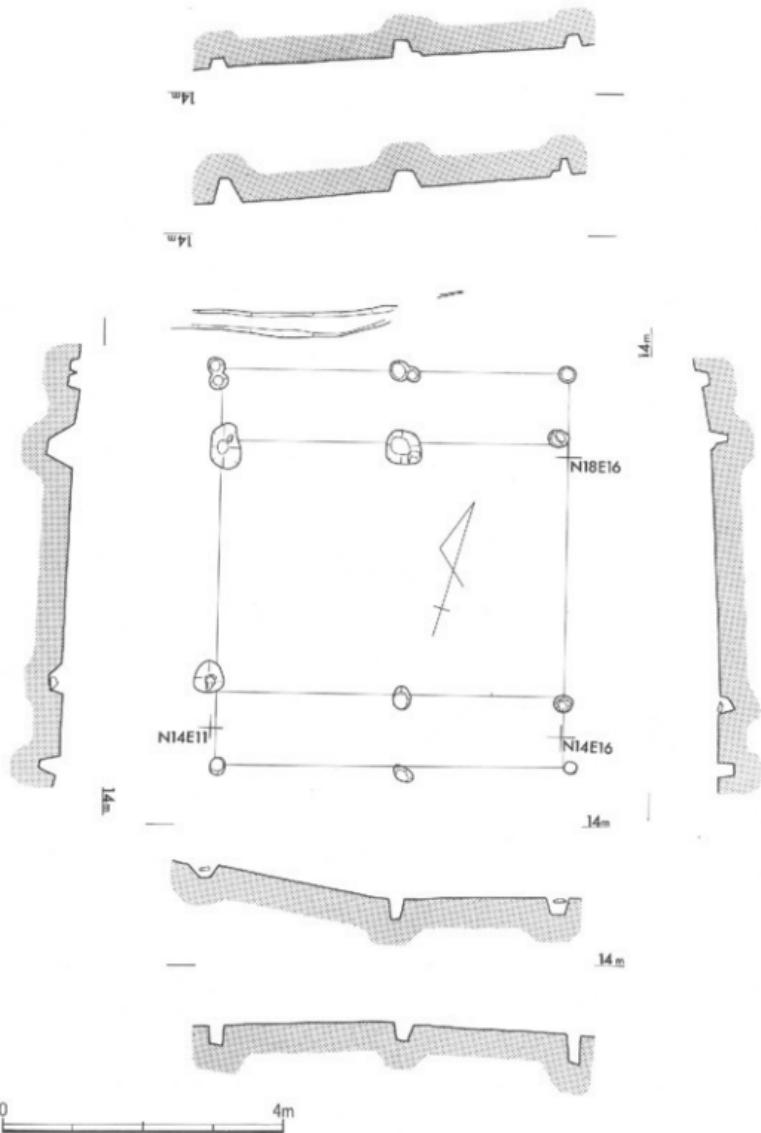
遺物は、建物の中央やや南寄りの位置から、土師質土器の皿（第141図24～30）が7個体出土し、それ以外にもここに掲載出来なかった小破片が数点出土している。これらはこの地点で重なるような状態で出土している。これらは、



第138図 天満谷遺跡 SB-01 出土遺物実測図



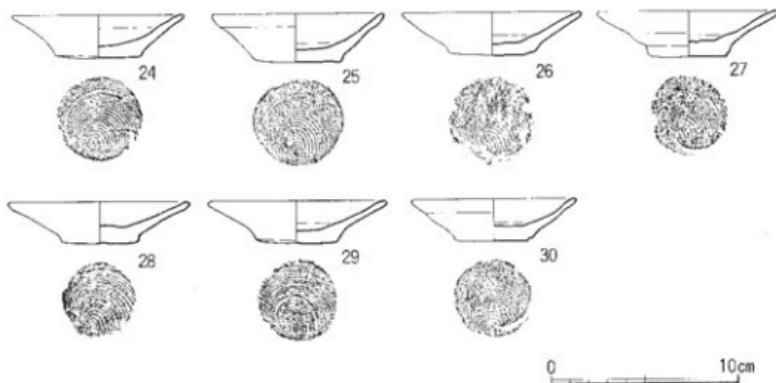
第139図 天満谷遺跡 SK-01、02、P10、P11 実測図



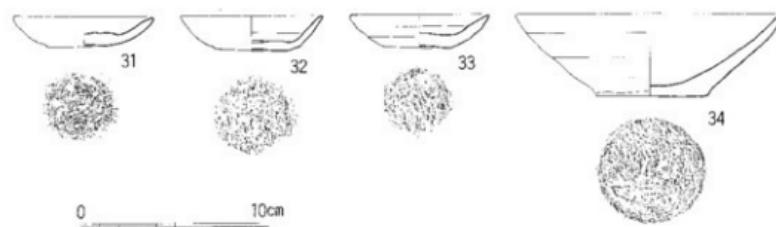
第140図 天満谷遺跡 SB-02 実測図

皿b類に含まれるものである。底部が平底で、体部がやや外反しながら口縁部に至る。口径9.2~9.7cm、高さ2.2~2.6cmとやや高さのある皿である。これらは、柱穴検出中に出土した遺物であり、この建物に伴う可能性がある。（第142図31~34）の土師質土器は、SB-02に直接伴うとは考えられないが、SB-02の東側、調査区の東壁近くから重なって出土したものである。皿a類と碗b類である。

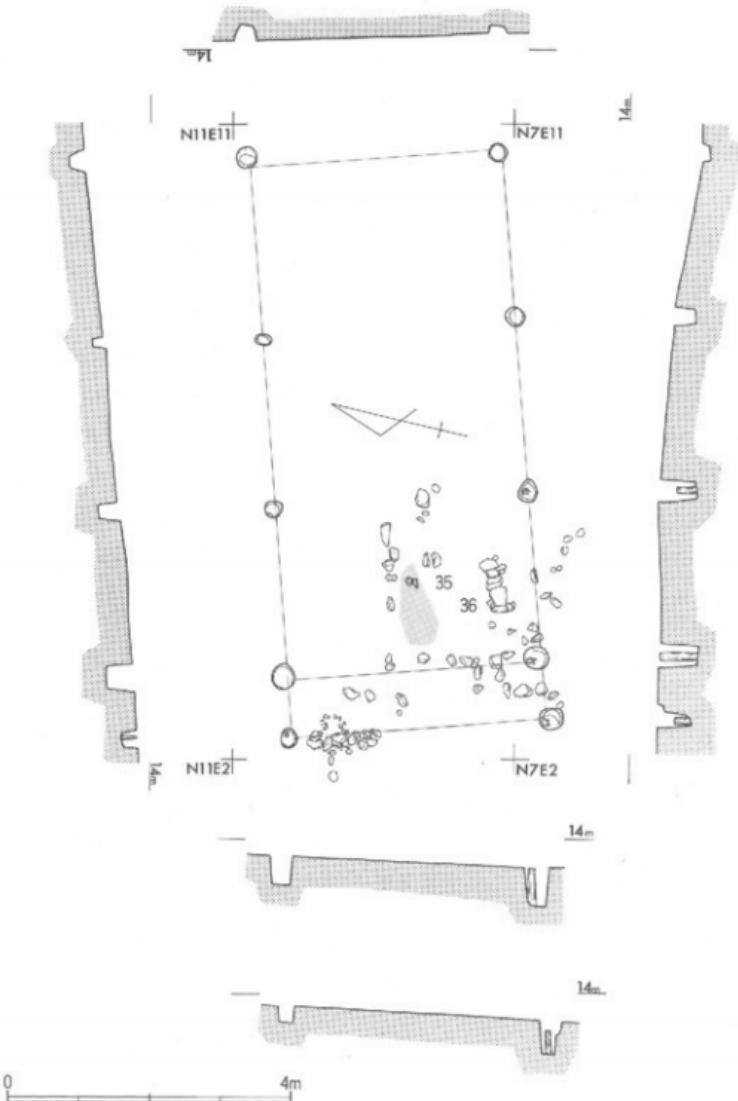
SB-03（第143図） 調査区の中央部に位置し、規模は1間×4間の掘立柱建物址で、桁行8.2m、梁間3.8mを測る。柱間距離は桁行側で0.9mと2.6mを測る。柱穴は径0.25m~0.4m、深さ0.2m~0.4mを測る。柱穴は茶褐色土に掘り込まれ、覆土は茶灰色土である。P1, P8, P9, P10内には柱根が残っており径約0.1cmを測るが、木がかなり腐蝕しており、本来より細くなっていると思われる。建物の西側には石列が認められる。この石列は方向性が建物と合致することから、何らかの施設であると思われる。この石列の中より、土鍋が2個体（第144図35, 36）出土している。この土鍋が出土した周辺は、炭化物を多く含んだ黒褐色土がみられることより、この地点で火を使



第141図 天満谷遺跡 SB-02 出土遺物実測図



第142図 天満谷遺跡 SB-02 東側出土遺物実測図



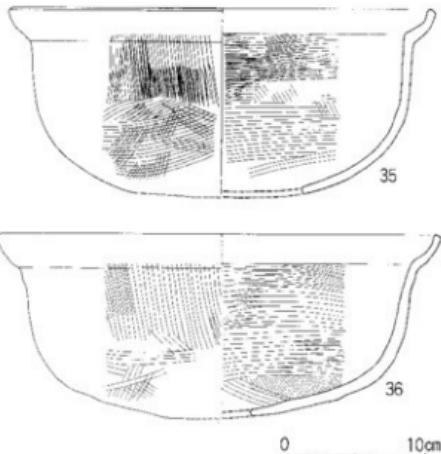
第143図 天満谷遺跡 S B-03 実測図

用したものと思われる。

出土遺物（第144図35）は、土鍋で外而全体に炭化物の付着が多く見られ、二次的な焼成により土器自体もろくなっている。底部は不明であるが、体部にかけて丸味を持ち、体部は直線的に立ち上り、口縁部は内湾して立ち上る。口縁端部にやや厚みを持つ。口縁は内外面ヨコナデを施し、体部内外面にハケメを施す。

(36)は、口縁に比べてやや器高が低くなっている。底部から体部にかけ緩やかに立ち上り、途中で丸味を持って屈曲し、

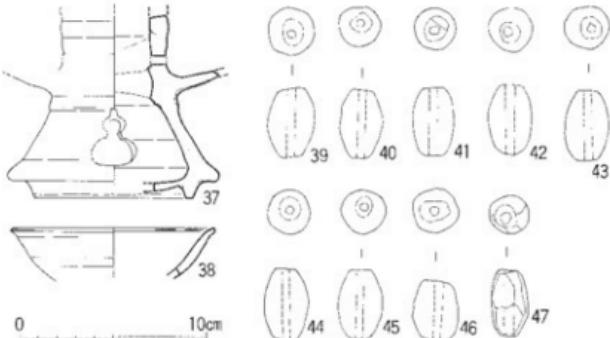
体部は直線的に立ち上る。口縁部は内湾



第144図 天満谷遺跡 S B-03 出土遺物実測図

して立ち上り、端部に平坦面を持つ。口縁内外面ヨコナデ。体部内外面ハケメを施している。（第145図37～47）はP 3の覆土上部より出土している。37は青磁の香炉もしくは、天目台様のものと思われる。高台を持ち、その上に透しを入れた空間が作られ、その上部には縁状のものが周っており、さらに上部が筒状に伸びている。胎土はうすい灰色がかった白色で、高台下部を除いた部分にうす緑色の釉が厚くかかっている。この青磁は龍泉窯系の製品と思われ、時期は13世紀末～14世紀初頭にかけてと思われる。（38）は、白磁の皿で口縁部が口禿状になっている。胎土は灰白色で、釉は灰白色を呈している。白磁皿Ⅱ類⁽¹⁾に含まれるもので13世紀後半と思われる。（39～47）は、土鍤でいづれも上下に平坦面を持つ、長椭円形を呈している。

SB-04(第146)
図 調査区の
南西部に位置す
る。平面形が長
方形を呈す、2
間×3間の掘立
柱建物址である。
主軸方位は、N
-10° -Wを測
る。桁行8.4m、



第145図 天満谷遺跡 P 3 出土遺物実測図

第10表 土錐計測表

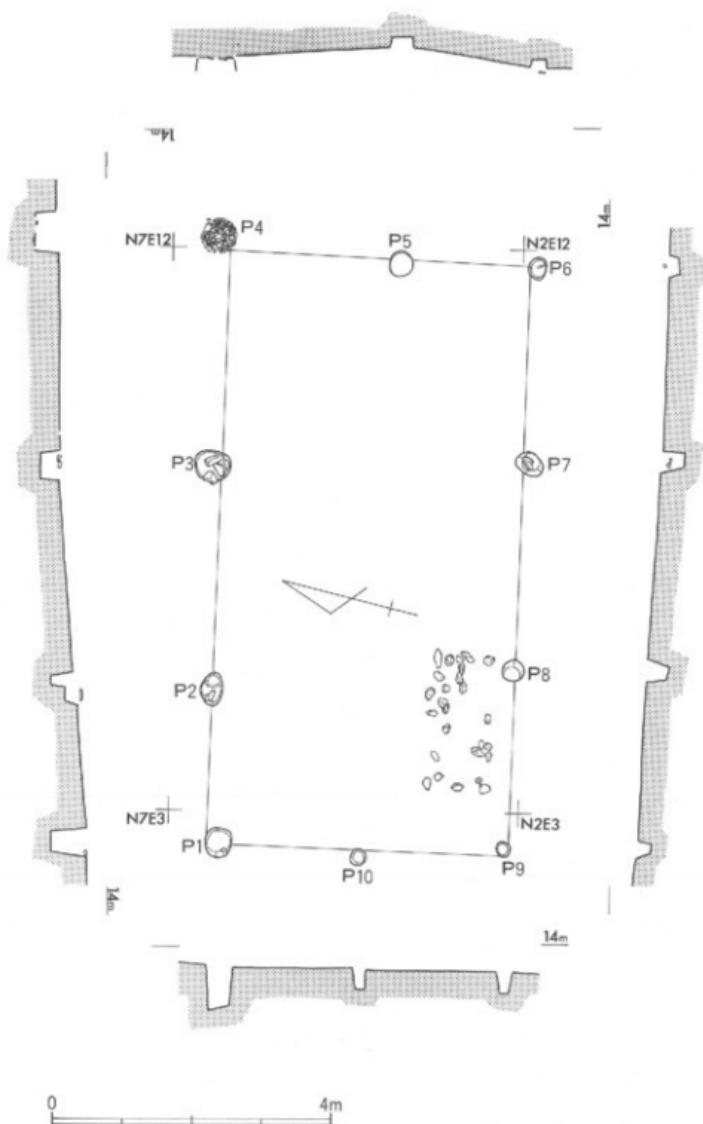
番号	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	番号	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
145図-39	3.7	2.5	0.5	19.25	145図-44	3.8	2.4	0.4	17.01
〃 -40	3.7	2.3	0.4	13.52	〃 -45	3.7	2.4	0.4	16.33
〃 -41	3.55	2.2	0.45	14.26	〃 -46	3.2	2.5	0.4	15.75
〃 -42	3.7	2.3	0.5	16.00	〃 -47	3.6	2.1	0.5	11.1
〃 -43	3.7	2.4	0.4	15.90					

梁間4.3mを測る。柱間距離は一定ではなく、桁行で2.2m～3.0m、梁間で2.0m～2.6mを測る。柱穴は、径0.2m～0.5m、深さ0.15m～0.5mを測る。P 4としたものは、柱穴の掘り方を検出しえなかつたが、大きさが2cm程の小礫が径25cmの範囲に散かれており、根固めの石と考えられる。他の柱穴では、このような礫を使用した根固めは見られない。建物の南西部において長軸1.0m、短軸0.5mの範囲内より礫を検出している。平面形が長方形を呈しており、主軸方位が建物と合致することより、建物に伴う施設と考えられる。しかし、この周辺においては、遺物もあまり出土せず、炭化物、焼上等も見られなかった。

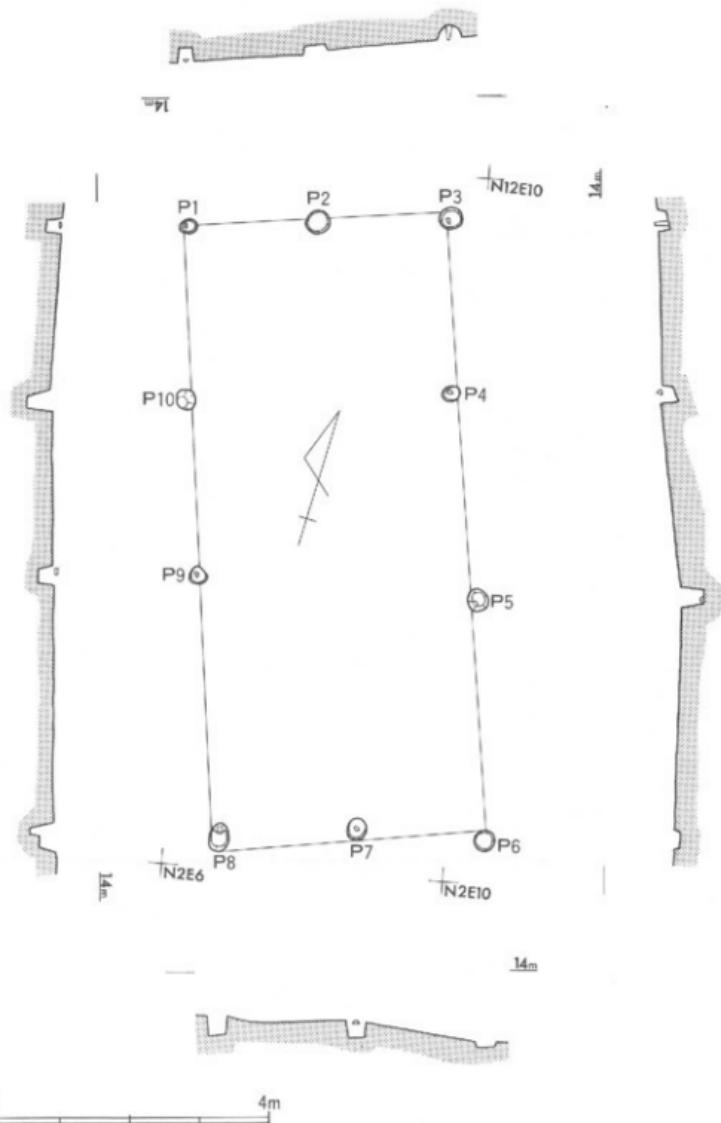
SB-05（第147図） 調査区の中央から南側にかけて位置する。平面形が長方形を呈す2間×3間の掘立柱建物址である。主軸方位はN-20°-Wを測り、他の建物とは長軸方向が直交するような位置関係にある。桁行8.8m、梁間3.9mを測る。柱間距離は、桁行で1.8m～2.0m、梁間で2.4m～3.7mと一定ではなく、柱穴の並びも極めて不規則である。柱穴は、径0.2m～0.3m、深さ0.2m～0.35mを測る。P 3内には、柱根が残っており、幅8cmを測る。柱の周りがかなり腐植しており原形は不明である。その他のピット内においては、根固め等は検出していない。この建物はSB-03、04と直交するような位置にあり、両者と重複している。また、南北方向に長軸を持つ建物はこれのみである。建物に伴うと考えられる遺物や柱穴内から出土した遺物はみられない。

SB-06（第148図） 調査区の南東部に位置する。2間×2間以上の掘立柱建物址である。桁行3.6m、梁間4.6mを測る。主軸方位は、N-25°-Wを測る。柱間距離は、すべて2.3mを測る。柱穴は、径0.25m～0.4m、深さ0.15m～0.4mを測る。この建物は、SD-07とその上部の石数と重複している。これらの柱穴は、石数を取り除いた後に溝とともに検出している。また、SB-06の西側にある南北方向に走る石列とは、方向性が同一である。柱穴内からは遺物は出土していない。

SA-02（第149図） 調査区の中央部から西にかけて位置する。SB-03、05の北側に、東西方向に向て並んでいるピット4穴からなり、それぞれの柱間距離は東から2.4m、1.4m、2.0mである。主軸方向は、南側のSB-03とはほぼ同様でN-70°-Eに向いている。ピット中から遺物は出土していない。

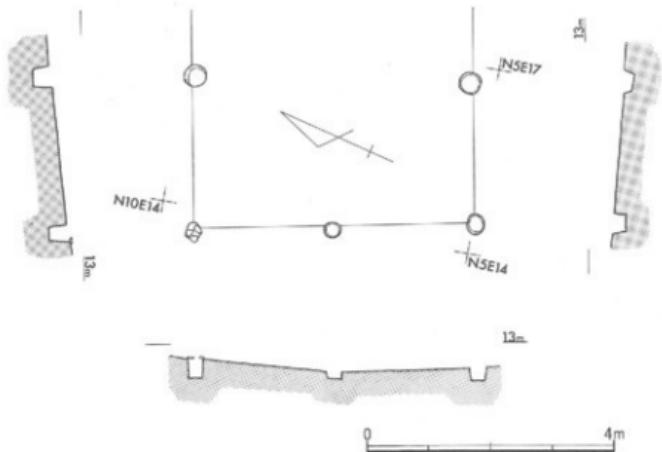


第146図 天満谷遺跡 S B - 04 実測図



第147図 天満谷遺跡 SB-05 実測図

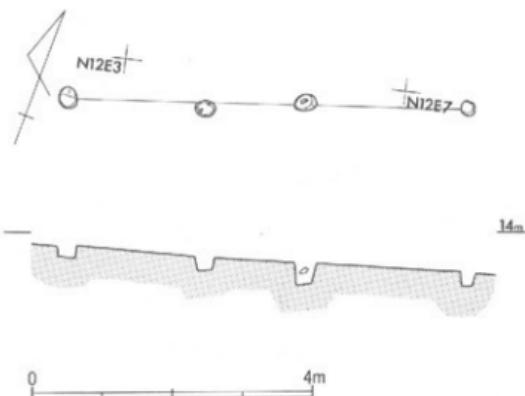
SD-05 (第150図) 調査区の南側に位置し、東西方向に走る溝状遺構である。平面形は、西側でT字形になって、南北の端は不明となり、やや蛇行して東西に走り、東側ではやや屈曲している。西側の方が東側より比高差0.5cmほど高くなっている。溝の幅は0.25m～0.5m、深さは0.04m～0.08mと極めて浅い溝状遺構である。SB-04、05と重複しており、東端では南北に走る石列の一部途切れた地点に続いており、そこで消滅している。溝内からは、図示されるような遺物は出土していない。



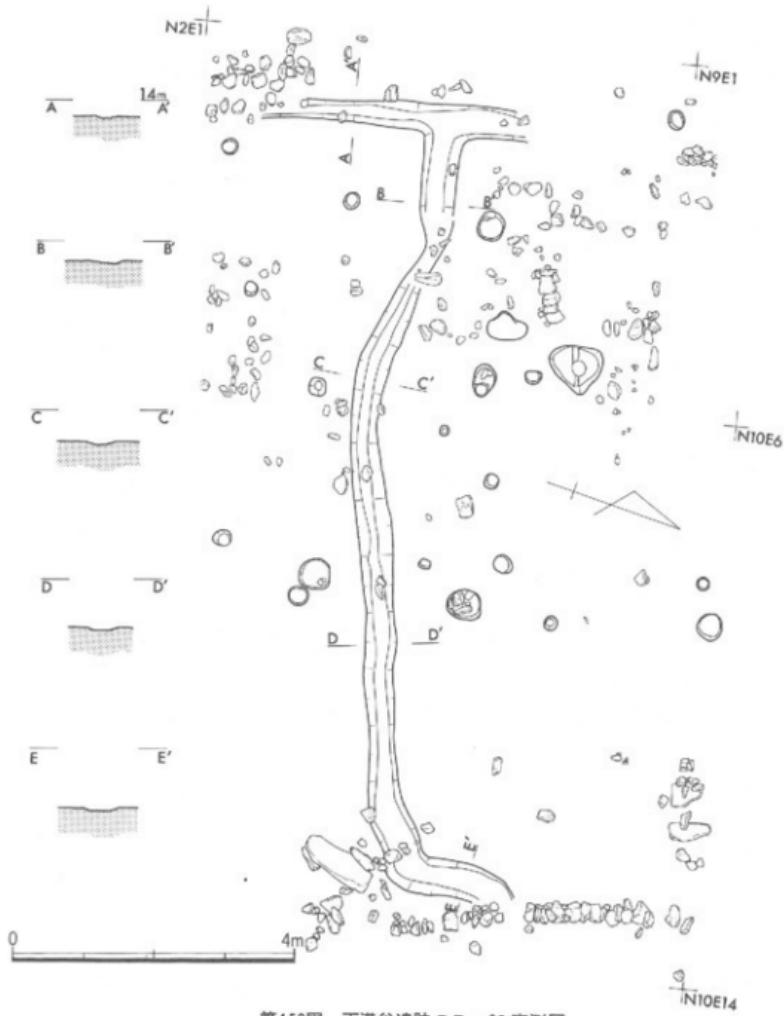
第148図 天満谷遺跡 SB-06 実測図

ない。この溝が、SD-01のようにSB-01、02の排水溝としての役割を果たしたとすれば、SB-03の排水溝として使用された可能性もある。

SD-06 (第151図) 調査区東側中央部に位置し、東西方向に走る溝状遺構である。西側から東側へ向けて緩やかに傾斜している。長さ2.5m以上、幅0.6m～1.0



第149図 天満谷遺跡 SA-02 実測図



第150図 天満谷遺跡 SD-05 実測図

m、深さ0.1mを測る。この溝は茶褐色土に掘り込まれている。

SD-07（第151図） 調査区の南東部分に位置し、平面形はT字形を呈している。西側では、南北の長さ3.4mを測り、最も幅の広い所で1.1mを測る。この部分は、南北方向に走る石列の東側に平行するよう位置している。この溝の北側は、一段高い場所であり、南側は一段下った所に位置

し、そこから直角に折れ曲り、東側へ緩やかに傾斜してドッている。東側半分では、上部に石が密集して出土している。溝の幅は1.1mを測り、その幅よりやや広い1.6mの範囲に石敷が見られる。この石敷は、溝の検出面よりも0.15cm高い位置にあり、西側の石列から東側へ向け緩く傾斜している。ここからは、図示できるような遺物は出土していない。

(第152図48~50)は、SD-07内より出土している。(48)は、白磁碗の底部から体部にかけての破片である。高台は幅広で底部の器壁が厚く、外面の下半分と高台部には釉が施されていない。太宰府の分類で碗Ⅳ類-1⁽²⁾と思われる。(49)は、土師質土器の台付杯の台部である。底部に回転糸切り痕を残し、筒部もやや太めである。Ⅲ a類に含まれる。(50)は、土師質土器皿の底部で外面に回転糸切り痕が残っている。

SD-08(第151図) 調査区の南西部分に位置しており、平面形はL字形を呈し、両端とも調査区域外へ伸びている。溝は、幅0.3m~0.5m、深さ0.1m~0.2mを測る浅い溝である。この溝も、SD-07と同様で東半分に石敷が見られる。溝の検出面よりも1.2cm程高い所に位置しており、石敷は西から東へ向け緩やかに傾斜している。石敷は溝と方向性を同じくしており、溝の両肩よりやや広い幅を持っている。この溝を境にして南東部分では、炭化物を多く含んだ黒褐色土が見られる。この部分で火を使用したものと思われる。この部分からは、土師質土器が重なり合った状態で出土している。

(第153図59)が最も下にあり、伏せられた状態で置かれ、その上に(54,55,58)が伏せられ、さらにその上に(56,57)、またさらに(60)がその上に伏せられている。

柱(第155図62, 63) 調査区の東端、南部に位置しており、上部は腐植しているが、土中に埋まっていた部分は、他の柱根に比べて極めて保存状態の良いものである。柱根の掘り方は、下層からの湧水により不明であった。この柱根2本を結んだ軸方位は、N-20°-Wを測る。柱根は、両方とも下端が平坦に切られており、平斧痕等は見られず、鋸様のものの使用が考えられる。側面は面が取られていて、樹種は杉と思われる。

石列(第151図) 調査区の南東部で、南北方向に並んでいる。南北の長さ4.7mを測り、途中の2.5mは石列が途切れており、その空白地帯の両端には、長さ1mの大きな石を石列の上に置いている。石列の主軸方向は、N-23°-Wを測る。この石列から東側にかけては、2本の石敷が直交するように続いている。石列から石敷に向けては、緩く傾斜している。石列、石敷を取り去った後より溝状遺構を検出していること、SB-06と重複していることなどから、建物の施設の一部と思われる。

P-01(第156図) 調査区の中央部、SD-01の東側に位置する。かなり大きめのピットであり、平面形は円形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上る。茶褐色土に掘り込まれており、覆

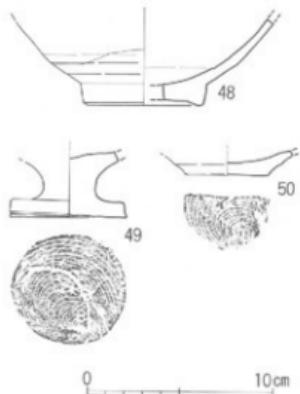


第151図 天満谷遺跡 SD-06、07、08 実測図

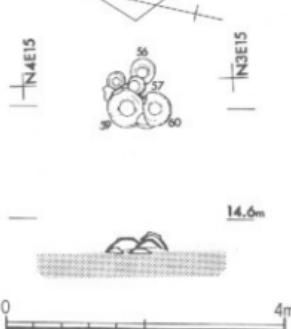
土は灰褐色土である。覆土中より、白磁碗、土師質土器碗の底部がそれぞれ1点づつ出土している。

出土遺物（第157図）

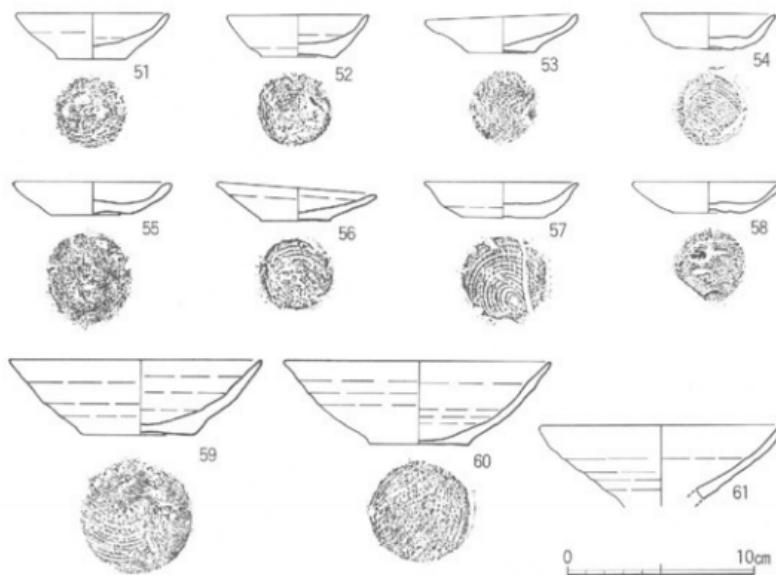
(64) は、白磁碗の底部である。高台は、外側が直立気味に、内側が斜めに削られている。内面



第152図 天満谷遺跡 SD-03 出土遺物実測図



第153図 天満谷遺跡 SD-03 付近土器出土状態



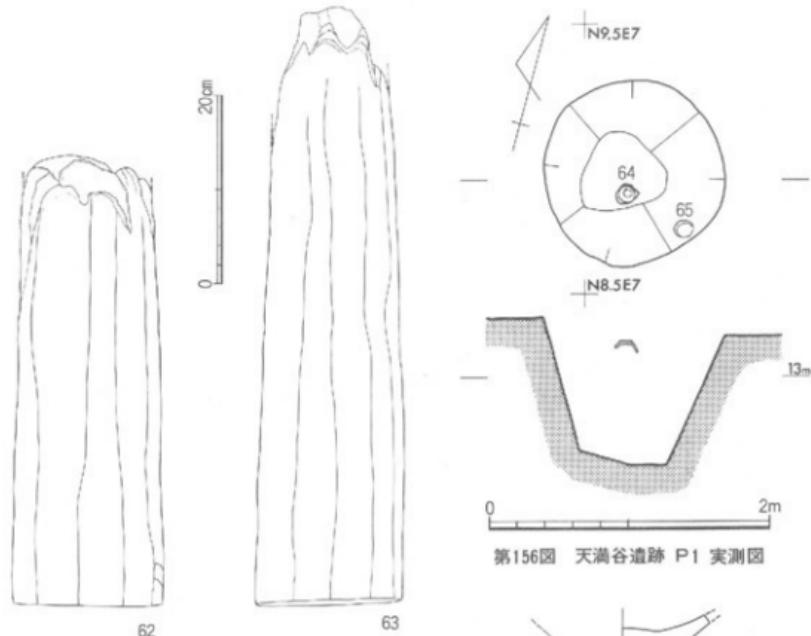
第154図 天満谷遺跡 SD-03付近出土遺物実測図

には乳白色の釉が施され、外面にはみられない。この椀は、太宰府の分類のV類⁽¹⁾である。(65)は土師質土器椀の底部である。平底で、底部は回転糸切りにより切り離し、体部内外面ヨコナデを施す。

出土遺物遺構外

出土した遺物で明確に遺構に伴うと考えられるものは各遺構の中で述べてきた。ここでは、明確に遺構に伴うとは判断し得ないものの本遺跡の時期を考える上で必要と思われたため、可能な限り図示し掲載した。

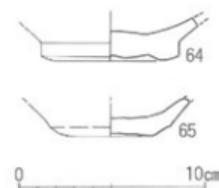
土師質土器 (第158, 159, 160, 161, 162図) 土師質土器は、小皿、椀、杯、台付皿、台付杯といった器種に分けられる。数量的にみると小皿、台付皿、台付杯といった器種が多く見られる。



第156図 天満谷遺跡 P1 実測図



第155図 天満谷遺跡出土柱実測図



第157図 天満谷遺跡 P1 出土遺物実測図

小皿 (第158図) 小皿は形態的特徴から a, b, c, d, e 類に分けた。

a 類 (66~72, 74~77) 口径は7.4~8.8cmを測り、8.0~8.5cmの間に集中するという傾向がみられる。口縁部がやや内湾して立ち上り、器壁はやや薄めである。

b 類 (第141図24~30, 158図78) 口径は8.4~9.6cmを測り、9.6cmを前後するように集中してみられる。口縁部はやや外方へ向け直線的に広がり、底部に厚みを持ち、器高がやや高い。

c 類 (22, 56, 79, 80) 口径8.5~9.0cmを測る。口縁部は外方へ向け直線的に広がり、器壁は全体に薄く、器高が低い。個体数は少ない。

d 類 (22, 81) 口径7.6cmを測る。口縁部の立ち上りが短かく、底部に厚みがあり、器高が低い。

e 類 いわゆる手捏で成形され、底部に丸味を持つ。

(73) は形態は a 類に近いものの、口径が9.9cmを測り、皿と呼ぶべきものである。(82, 83) の底部は b 類に含まれる。

椀 (第159図) 椓の形態では、体部の丸味の有無、口縁端部が内傾するか、外反するかという細かな差異がみられるだけである。それらを、a, b, c 類に分けた。

a 類 (15, 84, 85) 口径14.4~14.7cm、器高4.4~4.6cmを測り、法量は極めて近い値を示している。形態は、体部に丸味を持ち、口縁端部がやや外反気味に立ち上る。(84) は成形時のロクロ目痕と思われる沈線状のものがはっきりと残っている。

b 類 (86, 87) 口径14.6~14.7cm、器高4.7~5.3cmを測る。体部が直線に開き、口縁端部でやや内傾させている。

c 類 (34, 59, 60, 88) 口径13.6~14.4cm、器高4.0~4.5cmと法量にややばらつきがみられる。体部に若干の丸味を持ち、口縁端部に変化はみられず立ち上る。

坏 (第160図) 坏類の形態にもあまり変化は見られず、口径の法量により分けた。

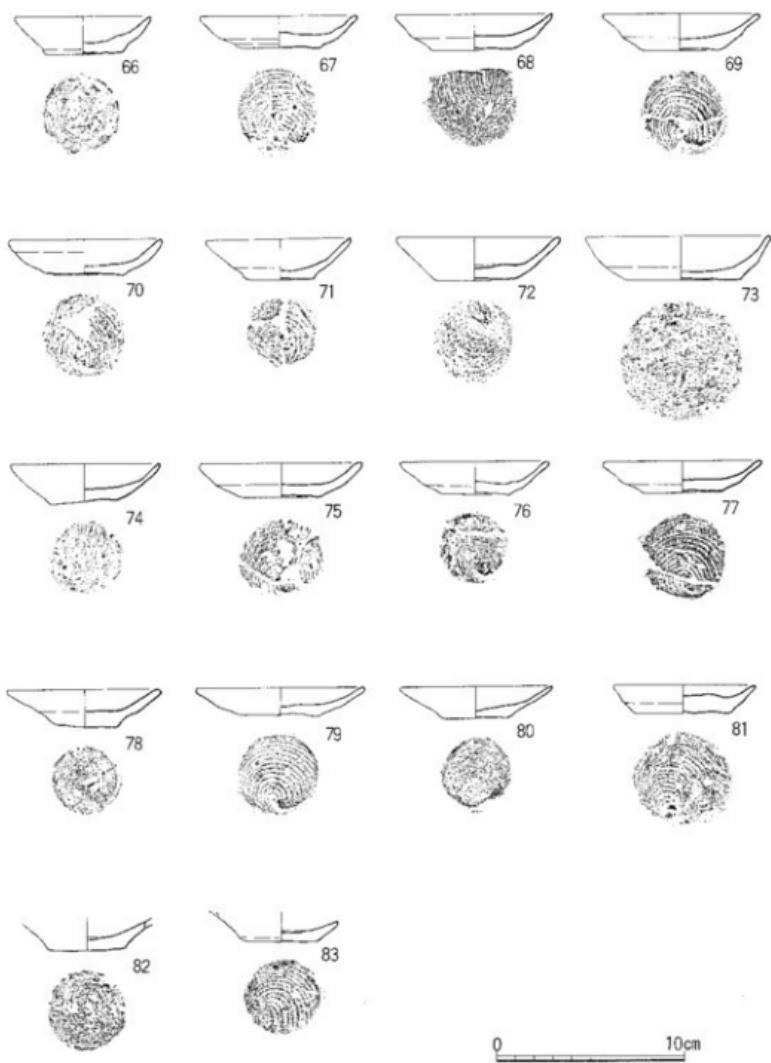
a 類 (95~99, 101, 102) 口径11.3~13.5cm、器高3.3~4.0cmを測る。底部は平底で体部にやや丸味を持ち立ち上る。器高に対する口径の比は、3.0~3.5という範囲である。

b 類 (106) 口径13.5cm、器高3.3cmを測り、口径に対し器高が極めて低いものである。底部は平底で段を有し体部に至る。

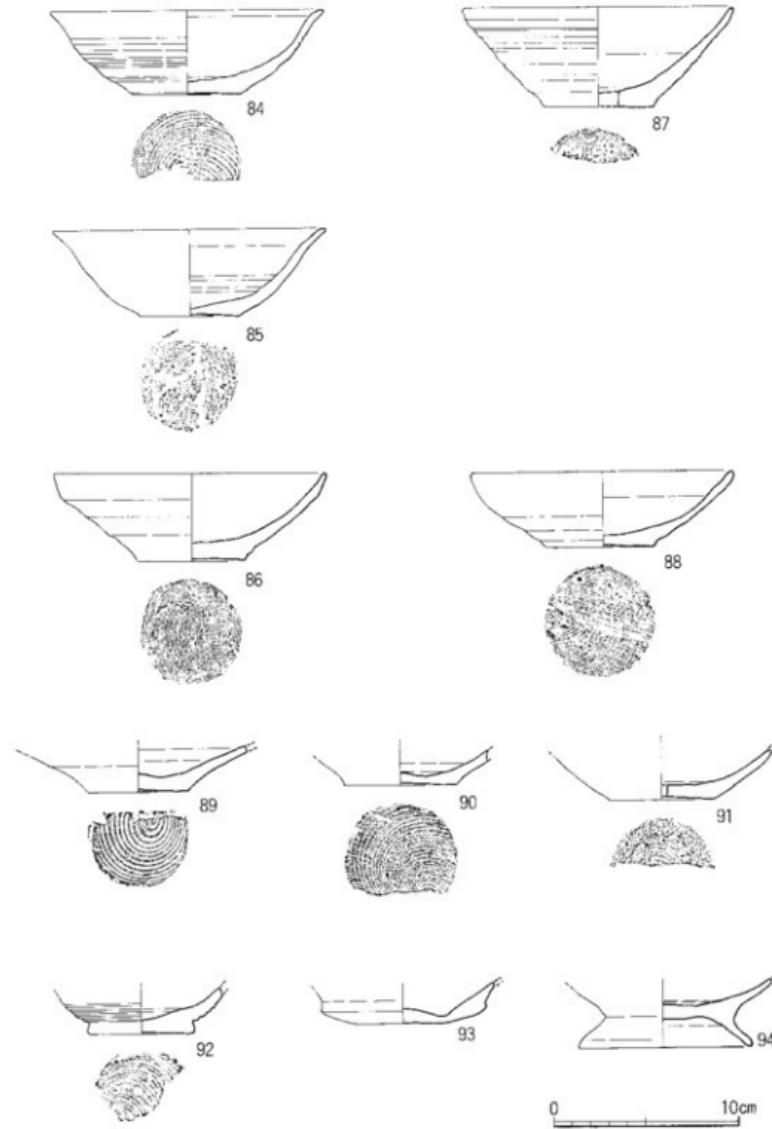
c 類 (103) 口縁端部が欠損しており口径不明、体部は直線的に開き口縁部に至る。

その他 (89~94, 101~105) のうち89~91, 104, 105は椀の底部と思われる。(92) は、底部に厚みのある台状を呈している。(93) は、丸底状を呈している。(94) は高台の付く坏である。外方に長く開く高台を有す。

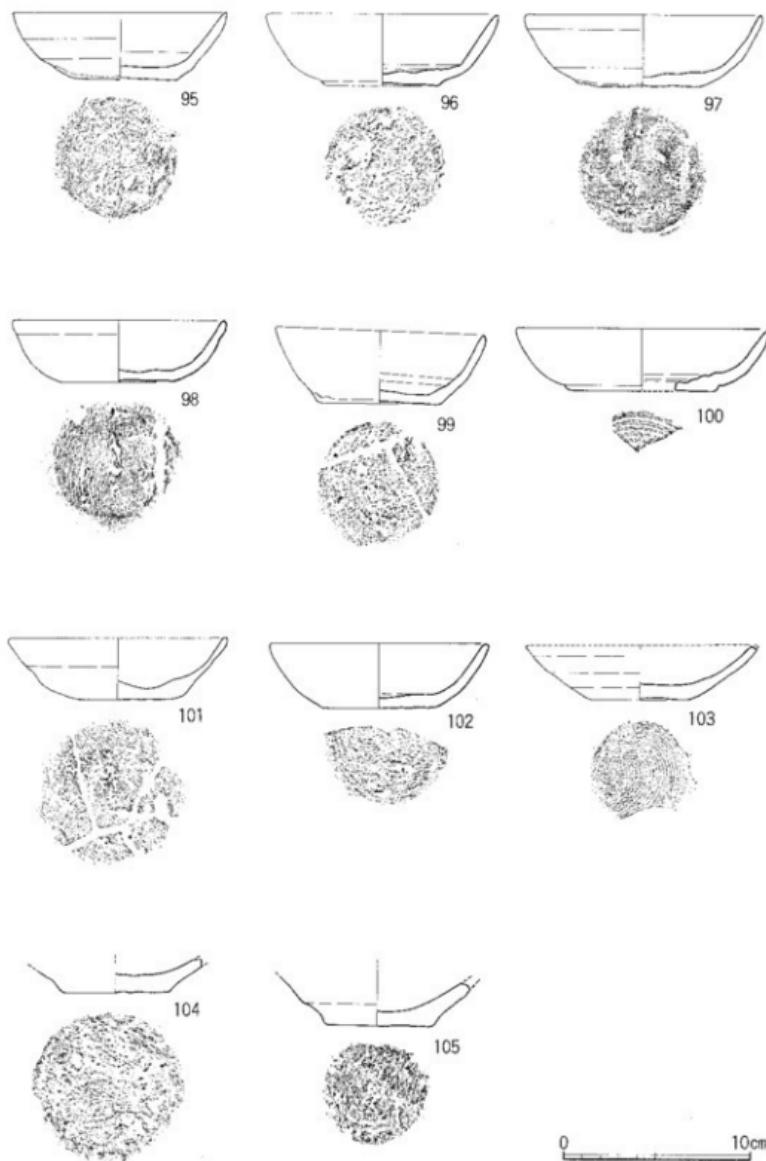
台付皿 (第161, 162図) 台付皿、坏は数量的には最も多く出土している。しかし、台部のみ残



第158図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第159図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第160図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

るものが多いため全形が伴るものは極くわずかである。ここでは台部の特徴から分類を行なうこととした。また、この分類は天満谷遺跡に限ったものであるため他の遺跡出土の遺物とは対応しない部分もある。

台部の径により I (5.0cm以下), II (5.0~6.0cm), III (6.0~7.0cm), IV (6.0cm以上) に分けた。これらの中で皿部の内底から脚部の底までの高さを 1 とし、底径との比率を求めた。比が 2.0 以上を a, 2.0~1.5 を b, 1.5 以下を c とした。

I - a 類 (106) 底径 4.0cm, 高さ 2.0cm と極めて小形のものである。

I - b 類 (107~109) (107) は全形が残っている。台部と同じ高さの皿部が付き、皿部にやや深さを持っている。(108) も全形が残り、これは台部の裾はあまり広がらず皿部は歪んでいるが、(107) と同様で皿部に深みを持つ。

I - c 類 (110, 111) 底径 4.6cm, 5.0cm を測り、比率は 1.24, 1.3 である。

II - a 類 (112~115) 底径 5.2~5.6cm, 器高 2.4~3.0cm を測る。全体的に見て底径に比べ、器高が低いように思える。特に 112 は低いように思える。

II - b 類 (116~123) 底径 5.5~6.0cm, 器高 3.4~3.6cm を測る。(118) は、底径 6.0cm, 器高 5.0cm, 口径 7.8cm を測る。台部の径が太く、皿部は浅く、屈曲している。(119) は、口径 6.5cm, 器高 4.8cm, 底径 6.2cm を測る。皿部は浅く、やや外反するような形である。(123) は、底径 5.8cm を測り、上部は杯状を呈している。

II - c 類 (124~126) 底径 5.6~5.8cm, 器高 4.8cm, 5.4cm を測る。(125) は、台部が細く高さがある。

III - a 類 (127) 底径 6.3cm, 器高 4.2cm を測る。

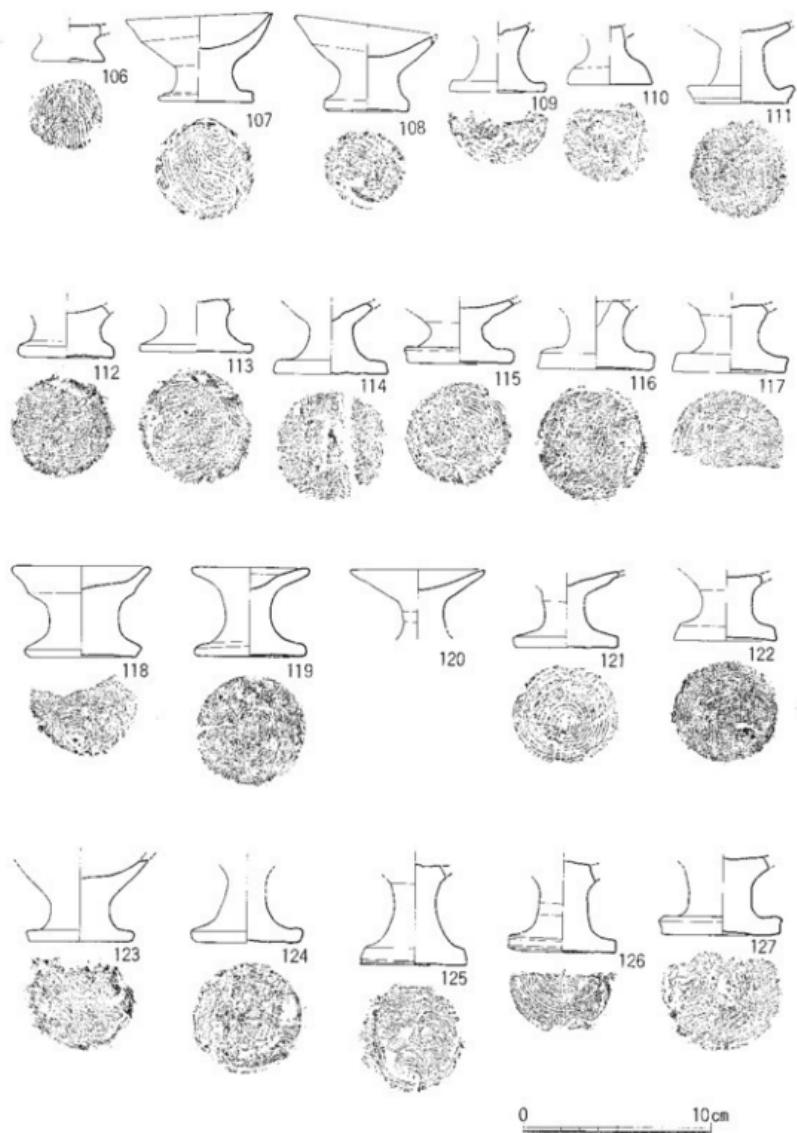
III - c 類 (128~132) 底径 6.4~6.8cm, 器高 4.6~5.6cm を測る。台部は細長く高さを有している。上部は皿状となるものと思われる。

IV - a 類 (133) 底径 7.0cm, 器高 2.7cm を測る。台部がかなり低く、広がった感じのするものである。上部は、皿状というより杯状を呈していると思われる。

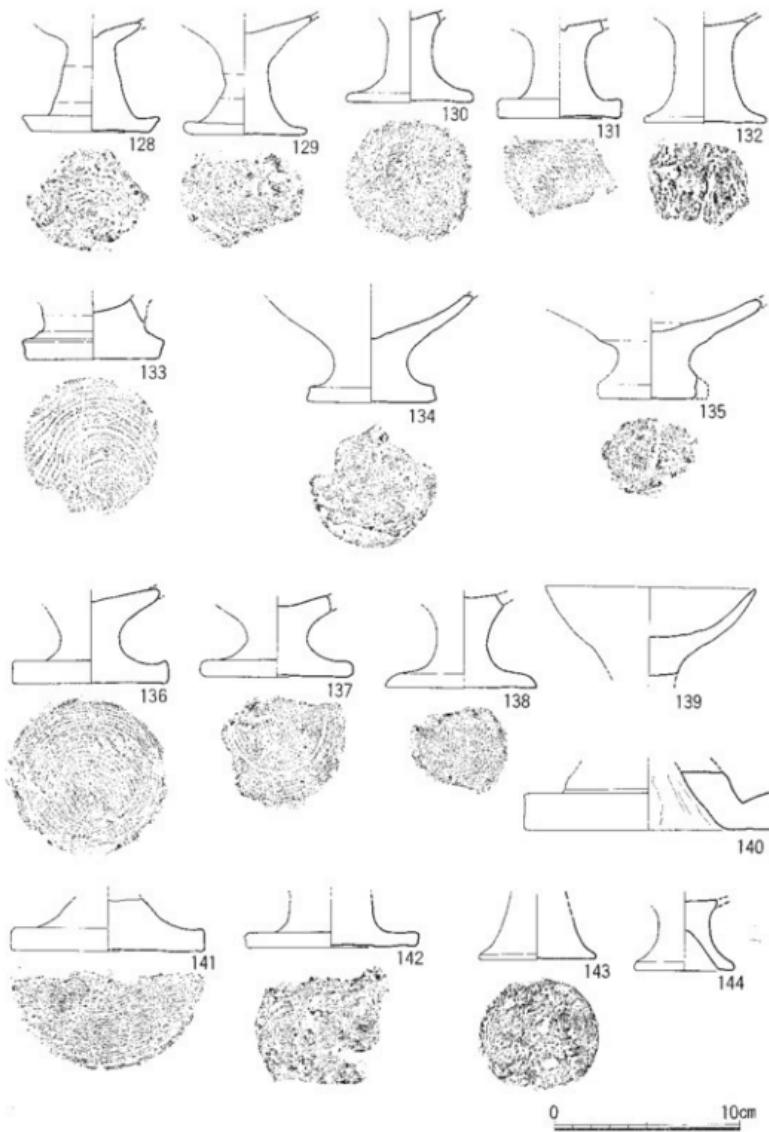
IV - b 類 (134~137) 底径 7.0~8.0cm, 器高 3.4~4.4cm を測る。(134, 135) は、台部の径に比し杯部が大きく広がるようであり、杯部にもやや深みを持つ。(136, 137) は台部の径がやや大きめになるようである。

IV - c 類 (138) 底径 8.2cm, 器高 5.0cm を測る。台裾部がかなり広がった形態である。

その他 (139~144) (139) は杯部であり、IV 類とした台部につながるものと思われる。(140) は内側が中空となっており、裾部をややふくらませている。(141) は、底径が 10.4cm とかなり大形である。(142) は台裾部はうすく広がり、筒部は直立に立ち上がる。(143) は、底部からほぼ



第161図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第162図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

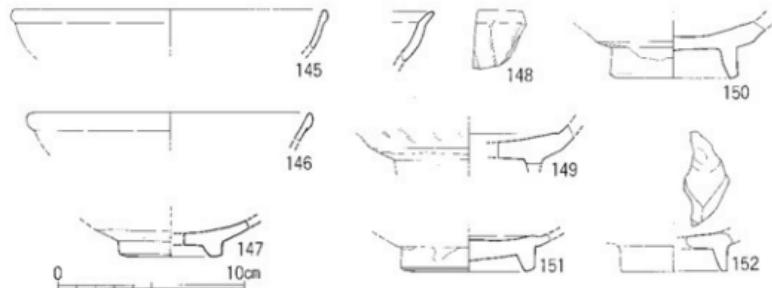
直線的に斜めに立ち上るため、台部がかなり太いように思われる。(144)は、台部を中空にするために削り取られている。

白 磁(第163～165図) 白磁は、碗の出土量が最も多く、次いで皿、1点のみであるが合子の破片が出土している。

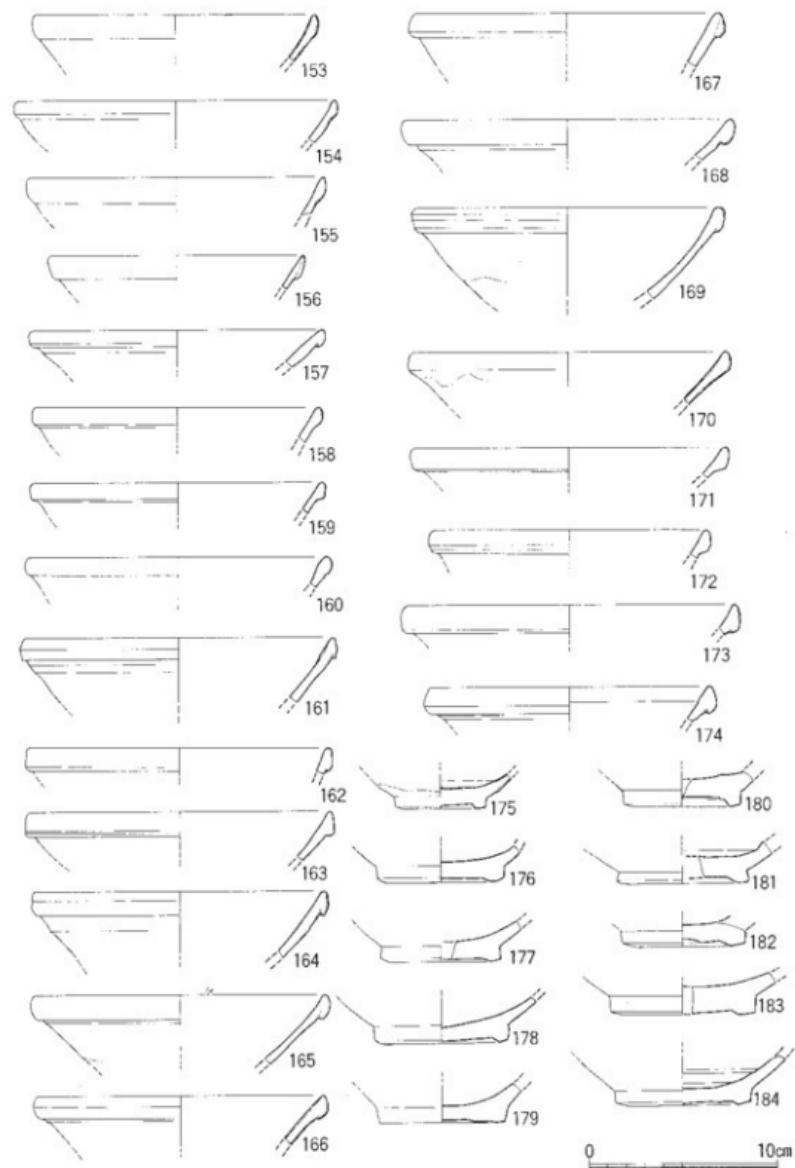
碗(145～198) (145)は口縁部に小さな玉縁を持ち胎土は純白で釉は白色を呈している。大宰府分類I-1類⁽¹⁾に含まれる。(146)は口縁部に小さな玉縁を持ち胎土は灰白色、釉はやや空色を帯びた灰白色を呈す。(147)は底部で高台の外面を垂直に、内面を斜めに削っている。釉は黄色味を帯びた灰白色を呈す。これらは大宰府分類のII類⁽²⁾に含まれる。(148)は碗で口縁部が少し外反し、外面に沈線を施している。胎土は乳白色で釉は白色を呈している。(149,150)は、(148)の底部になると思われる。(149)は体部外面に沈線が施されている。(150)は、高台部分がやや高さを持っている。(152)は皿で、内面に線彫曲線文を施しており、胎土は灰白色、釉は薄く透明がかっている。これらの白磁は、福岡市博多遺跡の分類⁽³⁾で0-I, II, III類とされたものである。

碗の(153～184)は、大宰府分類でIV類⁽¹⁾に含まれるものである。口縁部の玉縁が大きくなり、体部が直線的に開いている。胎土は灰白色を呈し細かい気泡を含む。釉は灰白色を呈し厚い。(153, 155, 156)は、玉縁の上下に幅を持つが厚さが薄いものである。(154, 157～161)は、玉縁がやや小さめである。それ以外は大きめの玉縁を持つ。(175～184)は、IV類⁽¹⁾の底部と思われる。全体に高台部分が厚く、高さのないものである。(180, 181, 184)は、内面目込みに沈線を持っている。(185～198)は、碗V類⁽³⁾と思われる。(185～187)は、釉が白色を呈しており、その他は灰白色を呈している。

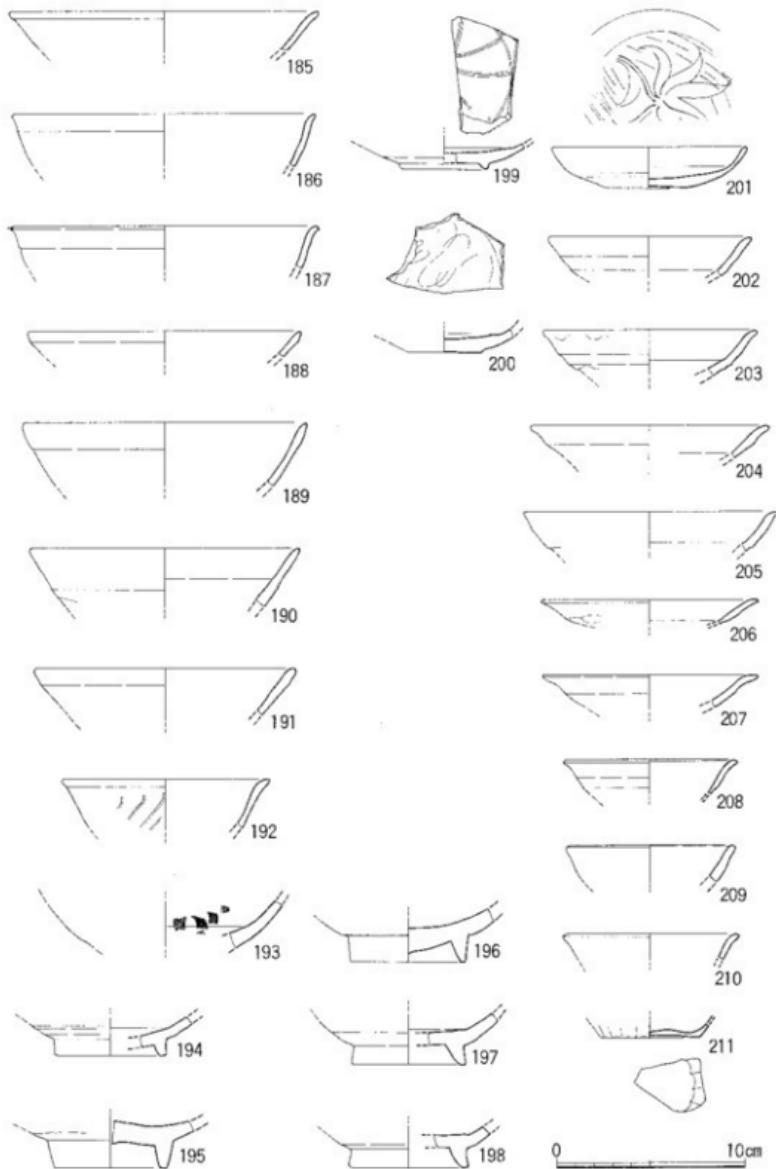
(193)は、V-2類⁽⁴⁾に含まれ、外面に櫛目文を入れている。(193)は、内面に櫛目文を入れている。



第163図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第164図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第165図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

(194～198) は、V類³⁰の底部である。(194) は、内底の目込みに沈線を入れている。

皿 (199～210) (199) は低く小さな高台を持ち、内面に櫛描きにより花文を配している。大宰府分類のⅥ-1-b類³⁰に含まれると思われる。

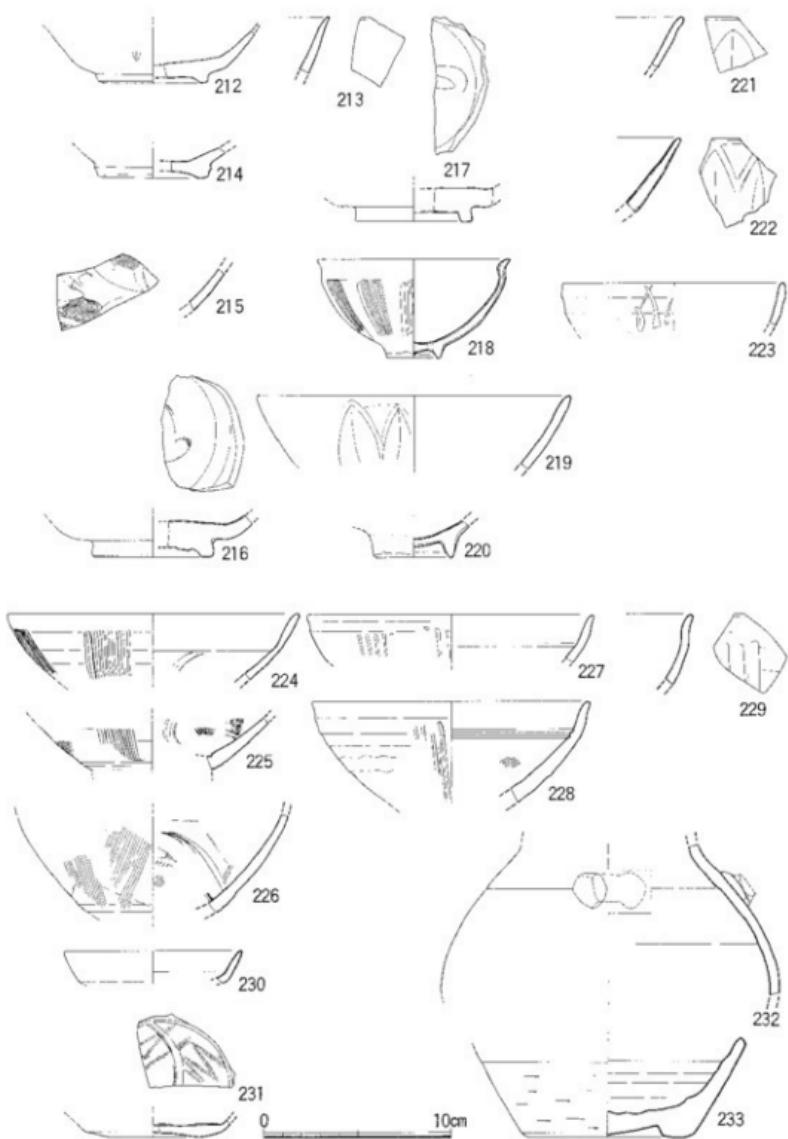
(200) は、内面に線彫曲線文が施され、釉は薄く黄味がかったり、氷裂がみられる。博多の分類で、0-I, II, III類³⁰とされるものである。(201～205) は、大宰府分類のⅦ類³⁰と思われる。(201) は、体部の途中で屈曲し内面に草花文様が彫られている。釉は灰白色で、底部外面を除く全面に厚く施されている。(206～210) は、口縁部が口禿状となっている皿である。口縁端部がやや外反した形態であり、(209, 210) は直線的に立ち上がる。(211) は、青白磁合子の底部で、底部外面と下部は露胎菊弁となっている。外面は菊弁文様となっている。

青磁 (第239図) 青磁は、越州窯系、龍泉窯系、同安窯系のものが出土している。越州窯系は3点のみであり、龍泉窯、同安窯系が同数出土している。

越州窯系青磁 (212～214) (212) は、越州窯系青磁の碗である。外底の重み焼き部分を除いた全面に施釉土されている。胎土は極めて密で精良であり、釉は茶黄色を呈している。外面に輪花を表現しており、内底に重み焼き目跡痕が残る。(213) は、碗の口縁部の破片であり直線的に開く器形と思われる。胎土は灰白色を呈し、釉は緑灰色を呈している。これらは大宰府分類のⅡ-2類³⁰に含まれると思われる。(214) は、碗の底部である。底径は復元で6.2cmを測り釉は薄緑色を呈している。外底に重み焼きの跡が残り、この部分にも施釉土されている。胎土は明茶灰色を呈し密である。高台の形態が低いことなどから高麗の可能性もありどちらとも判断しかねるものである。

龍泉窯系青磁 (215～220) (215) は、碗の体部の破片であり、内面に櫛描により花文様を施している。胎土は灰白色で釉は青味がかった緑色を呈している。大宰府分類のⅠ-3類³⁰に含まれる。(216, 217) は、底部の破片で内底にヘラ描により文様を片彫りしている。Ⅰ-4類³⁰に含まれる。(218) は、完形に復元し得るものである。口縁部が屈曲し体部が内湾している。器形によると大宰府分類小挽Ⅱ-3類³⁰に含まれるが、外面に幅1.3cmの櫛描文様が施されている。(219, 221, 222) は、外面に錦蓮弁の文様を有している。釉は(219, 221) が深緑色、(222) が青味がかった緑色を呈している。大宰府分類のⅠ-5, b類³⁰に含まれる。(220) は、碗の底部で高台の下部は露胎となり、赤茶色を呈している。(223) は、外面に線彫りの蓮弁を持ち釉は青味がかった緑色を呈す。

同安窯系青磁 (224～233) (224～226) は、外面に細かい櫛目を施し、内面は櫛描の弧線文が施されている。釉は明緑色のガラス質である。大宰府分類のⅠ-1, b類³⁰に含まれる。(227, 228) は、外面の沈線の幅が0.2cmであり5状施されている。(229) は、外面にヘラ状工具により片彫り風の沈線を入れる。釉が青味がかった緑色を呈している。大宰府の分類Ⅳ類³⁰に含まれる。(230) は、皿の口縁部の破片であり釉がガラス質を呈す。(231) も皿で内面にヘラにより片彫を櫛描に



第166図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

よりジグザグの文様を施している。外底には施釉されない。大宰府の分類I-1^四に含まれる。(232, 233)は、いずれも褐釉の壺である。(232)は、耳の部分が欠けている。外面にうすく緑色の釉が施される。(233)は、上げ底状の底部で外面にあまり施釉されていない。

陶器(第167図) (234)は、常滑焼の甕と思われる。口縁部は折り返されており上下に肥厚している。肩はよく張り出しており体部にやや丸味を持ちながら底部に至る。外面肩部には「V」字状のスタンプ文様が施されている。また一部の破片には、沈線により曲線文が入っているようである。体部の外面下半は、板状工具によるナデ調整が行われている。内面はヨコナデが施されている。胎土は明茶褐色を呈し、外面肩部から上半には緑色の自然釉がかかっている。(235)は、常滑焼の壺の口縁部と思われる。口縁端部は上下に肥高しており内外面ともナデしている。(236)は、口縁部を欠く壺である。肩部から体部にかけて単線の三筋文を施している。肩部が張り出し、体部にかなり丸味を持ちふくらんだ形態である。外面の肩部から下半は下から上に向かってラケズリを行った後にナデ消している。内面は指頭によりナデしており肩部の内側はケズリ様のナデを施している。生地は赤茶色を呈し、肩部にはうすく緑色の自然釉がかかっている。常滑の三筋壺の形態に比して器高がかなり低いようであり、外面下半にラケズリをいたした後ナデするという手法からも常滑とは考えられず、他の産地の可能性がある。

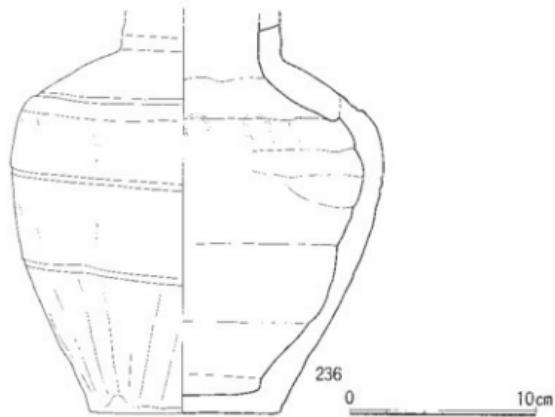
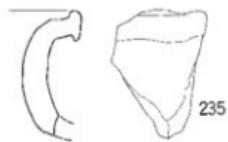
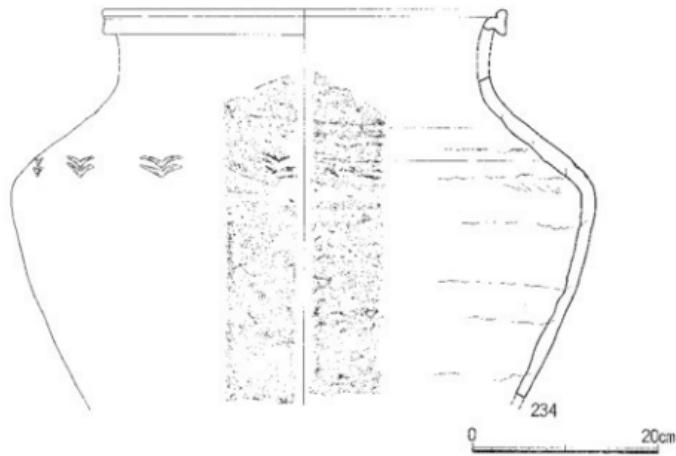
灰釉(第168図237) 四耳壺の肩と頸部の中間部分の破片である。外面に菊花の印花文があり、その上に4状の沈線が施されている。胎土は灰白色を呈し緻密である。釉はうす緑色のガラス質である。(240)は、壺の体部から底部にかけての破片である。胎土は灰白色で緻密であり、外面に明灰白色の釉が薄く施されている。これらは瀬戸の灰釉である。

山茶椀(第168図238~239) (238)は、碗で、底部を欠いている。体部は直線的に開き口縁部は外反して立ち上がる。器壁は薄く胎土は灰白色で緻密である。(239)は、皿で直線的に開き口縁部に至る。口縁端部は平坦面を有している。内底には指頭によるナデにより凹みがみられ、外底は回転糸切り痕が残る。これらはその特徴より美濃系の山茶椀と思われる。

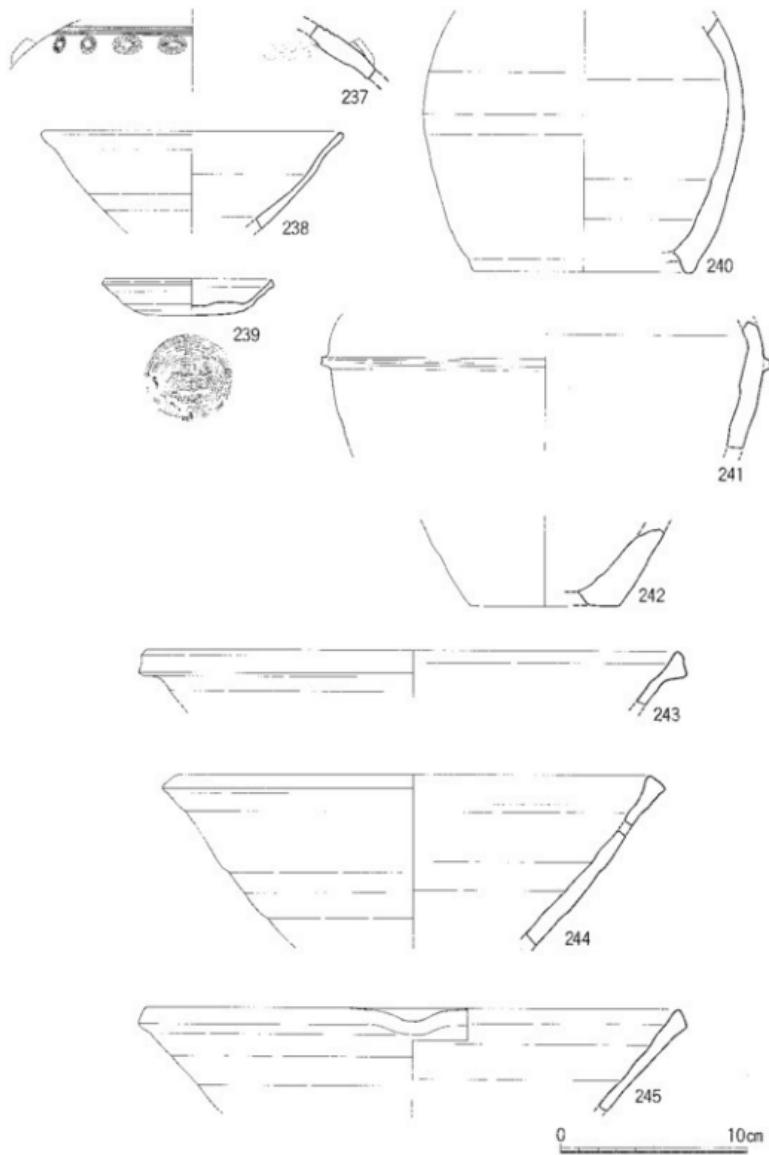
双耳壺(168図241, 242) (241)は、壺の肩部である。肩部に幅0.8cmの突帯をめぐらしており、現存しないが双耳が付くものと思われる。(242)は、この壺の底部と思われるものである。内外面ともにナデが施されており胎土は灰白色でやや粗く気泡を含んでいる。

東播系鉢^四(第168図243~245) (243)は、鉢の口縁部で口縁部外面に粘土を貼りつけ肥厚させている。胎土は砂粒を含みやや粗い。(244)は、体部が直線的に開き、ロクロ調整痕が残っている。色調は灰色を呈し、外側の一部が銀化している。胎土は砂粒、白色粒子を多く含んでいる。

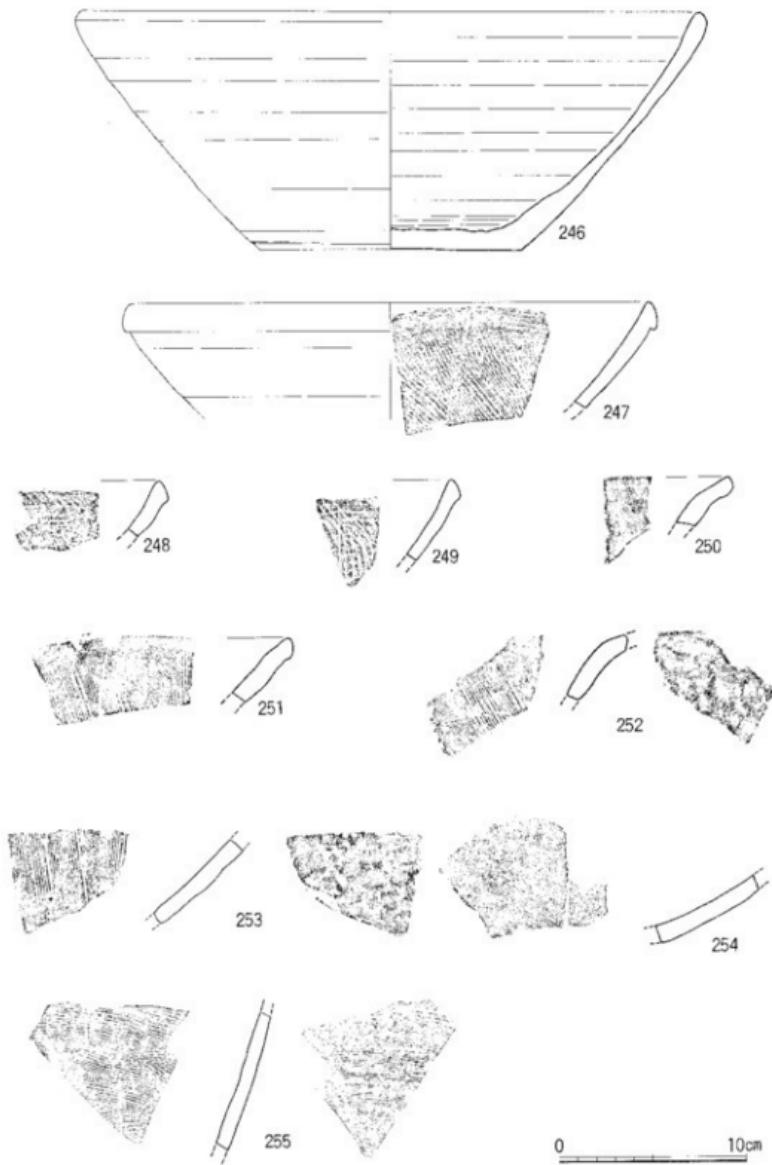
(245)は、鉢の片口部分の破片である。色調は灰白色、胎土は砂粒、白色粒子を多く含んでおりやや粗い。内面はよく使用してあり摩滅している。



第167図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第168図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第169図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

鉢（第169図）（246～254）は、須恵質の鉢で（246）以外は内面にカキ目が施されている。（246）は、片口鉢で、口縁部に丸味を持ちやや肥厚している。口径33cm、底径14cm、器高12.7cmを測る。（247）は、口縁部が肥厚し玉縁状を呈している。内面にカキ目を施し、色調は灰白色でやや軟質である。（248～252）は、口縁部近くの破片、（253）が体部、（254）は底部近くの破片である。（255）は、内面に横方向のカキ目に入る壺と思われる。

須恵器、甕（第170～175）（256～260）は、甕の口縁部である。（256）は、口縁部が緩やかに開き、端部に丸味を持つ。（259）は、口縁部が外反し立ち上がり、端部がやや引き上げられている。頸部外面に格子目叩きを有す破片は、叩き目の大きさ内面の調整によってA～Hまで分類した。

甕A（第170、171図）外面の格子目が幅0.5cmとやや大きく、叩き目の深さもやや浅い。内面は同心円叩きの後、ナデを施しており部分的には叩き目の痕跡がみられる。（261～272）は、灰色を呈し、（273～290）は黒色を呈し、外表は光滑を持っている。これらは同一個体と思われる。

甕B（第173図317～320）外面の格子目叩きはA類に近いものである。内面には細かいハケメが施されている。色調が灰白色で、焼成は極めて軟質である。

甕C類（第172図291～300）外面の格子目叩きはやや細かく、内面のハケメはやや粗いものである。色調は青灰色で焼成は良好である。

甕C類（第172図301～304）外面の格子目叩きは細かく、長方形を呈しており、内面はナデが施されている。

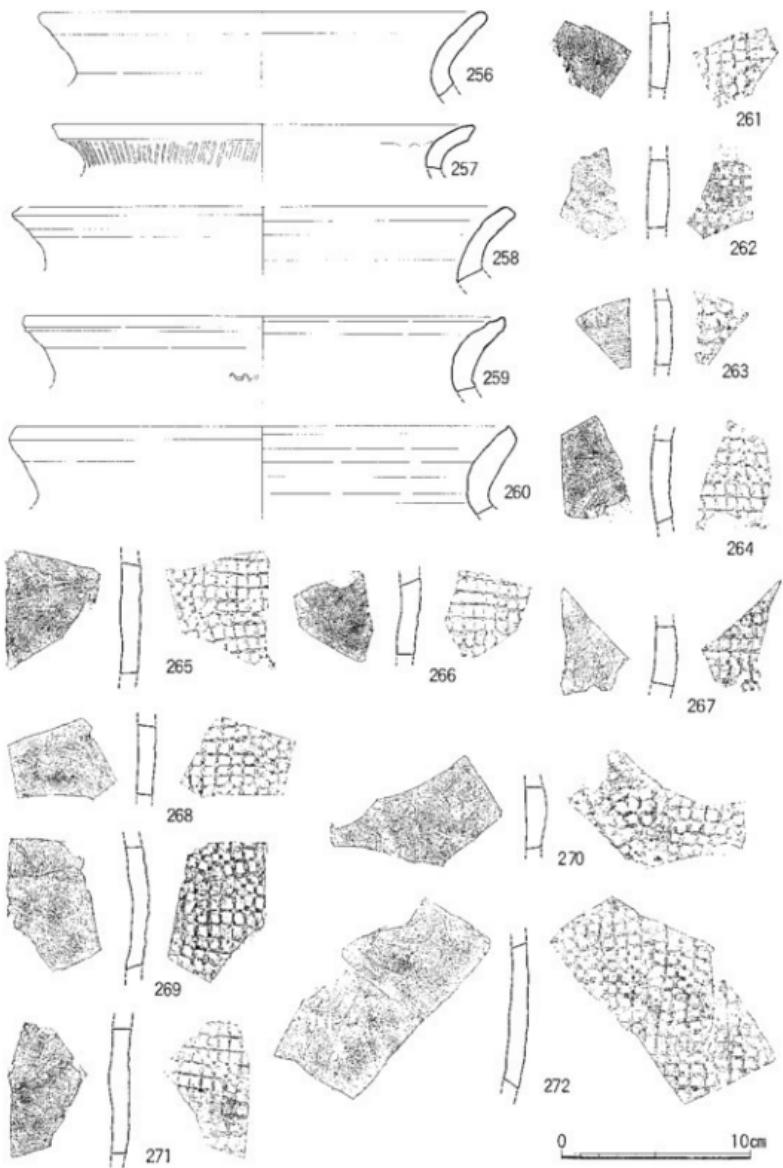
甕D類（第173図305～316）外面の格子目叩きは細かく、長方形を呈しており、内面のハケメも細かく、縱方向、横方向の複合するものもある。色調は桃白色を呈し、焼成は不良で極めて軟質である。

甕E類（第174図321～330）外面の格子目叩きは細かく正方形を呈しており、叩き目の深さはやや浅めである。内面は板状工具と思われるものでヨコナデが施されている。色調は明灰色を呈し焼成はやや軟質である。

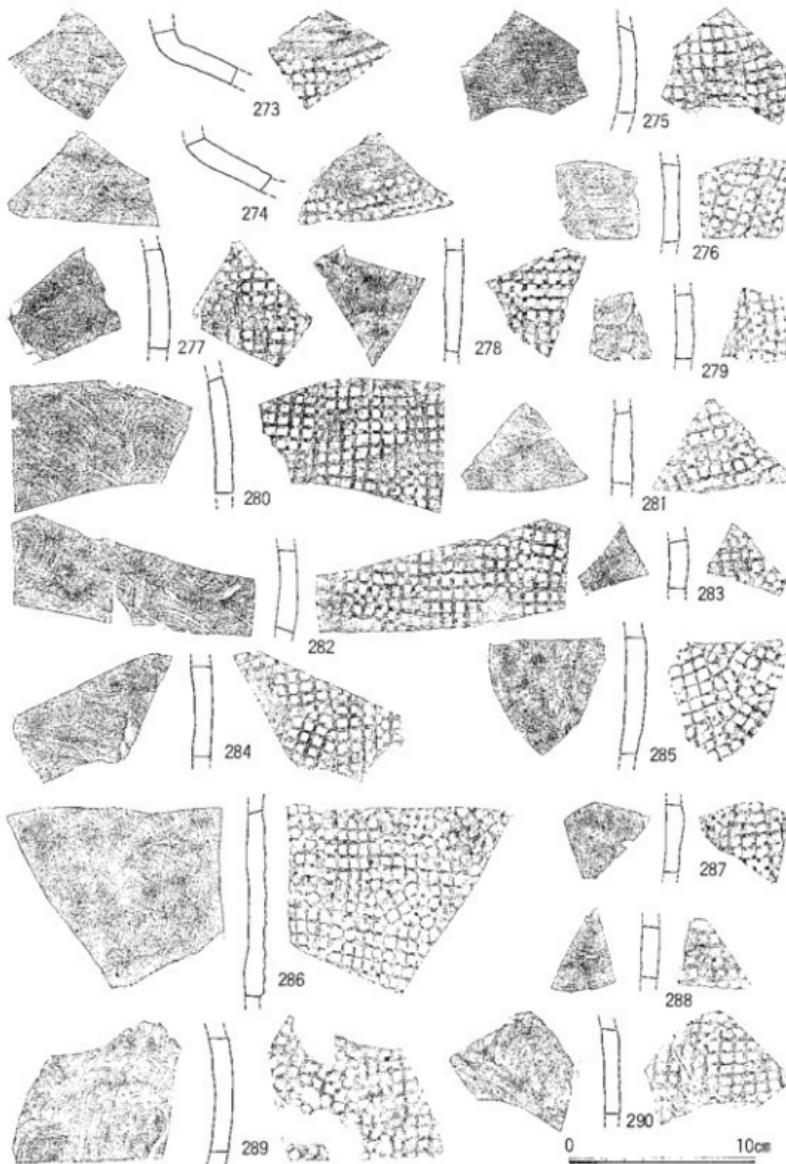
甕F類（第174図331～334）外面の格子目叩きは細かく叩き目の深さはやや深い。焼成はやや不良で軟質である。

甕G類（第175図335～340）外面の格子目叩きは細かく長方形を呈し、叩き目の深さは浅い。胎土は砂粒が多く暗灰色を呈している。

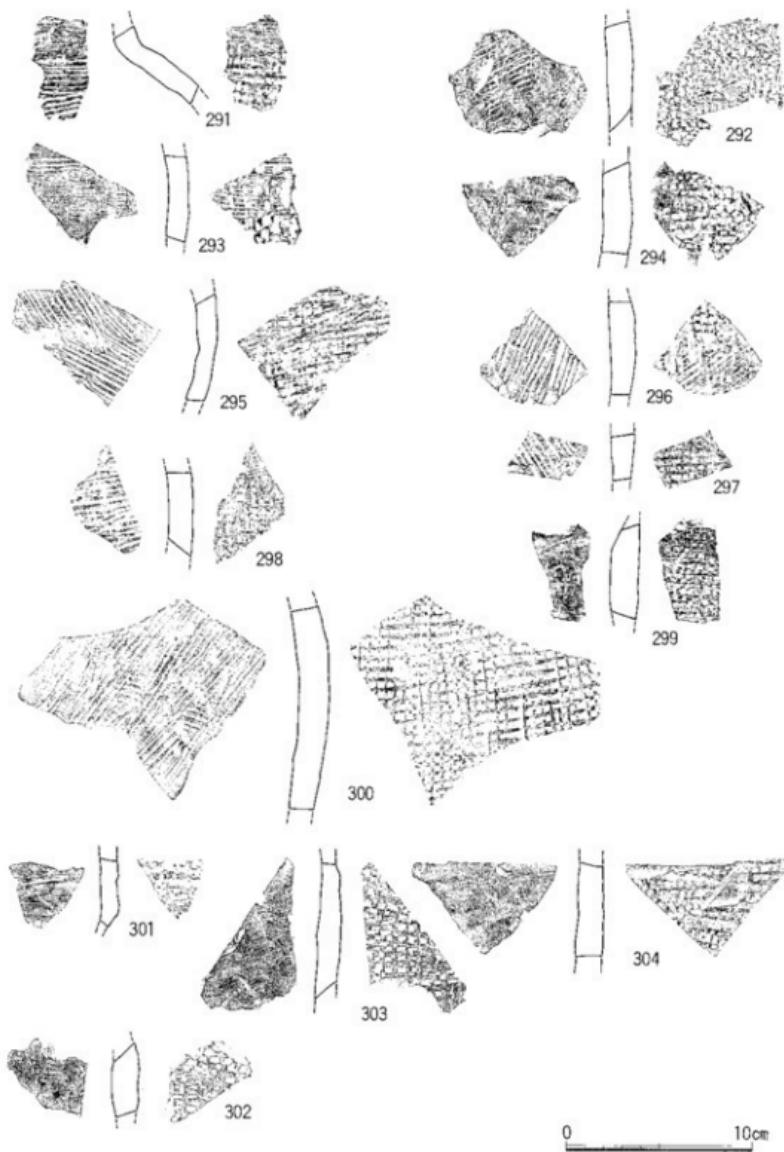
甕H類（第175図341～343）その他のものをH類とした。（341）は、外面の叩き目が平行叩きの中を方形に区切るようになっている。（342）は、外面の格子目叩きが不明瞭で内面に細かいハケメが施される。



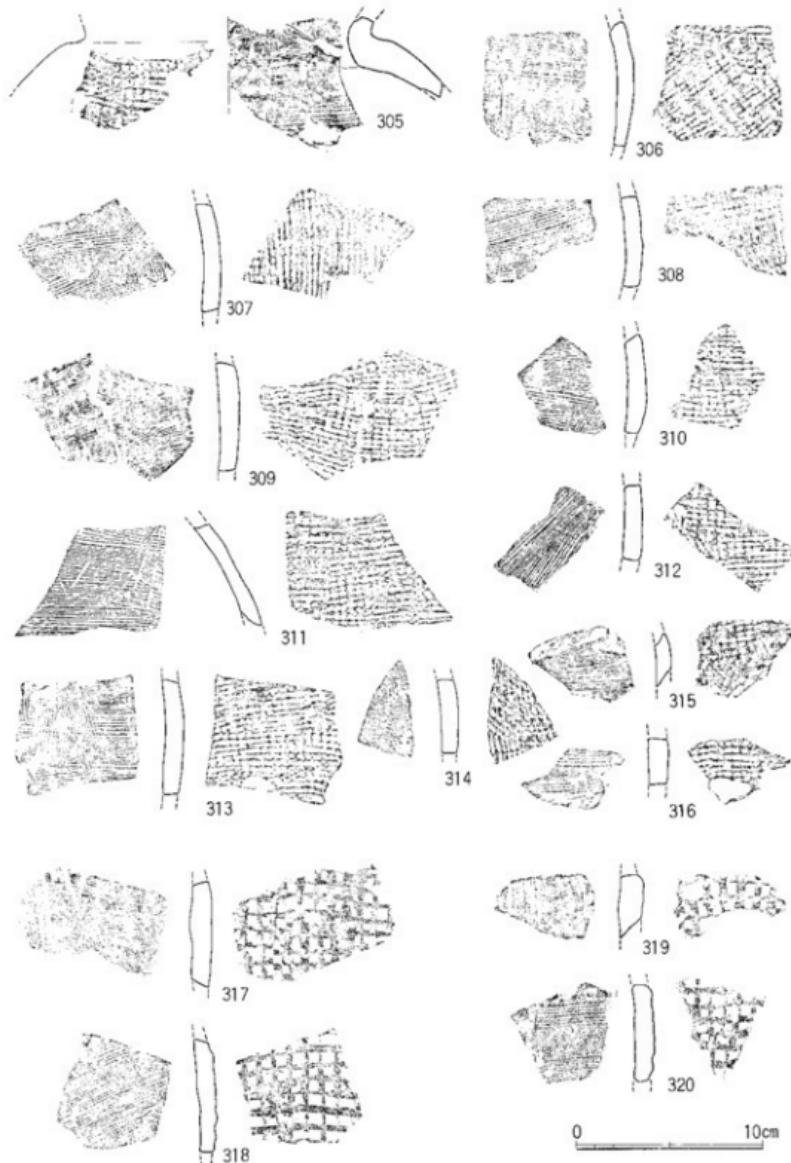
第170図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



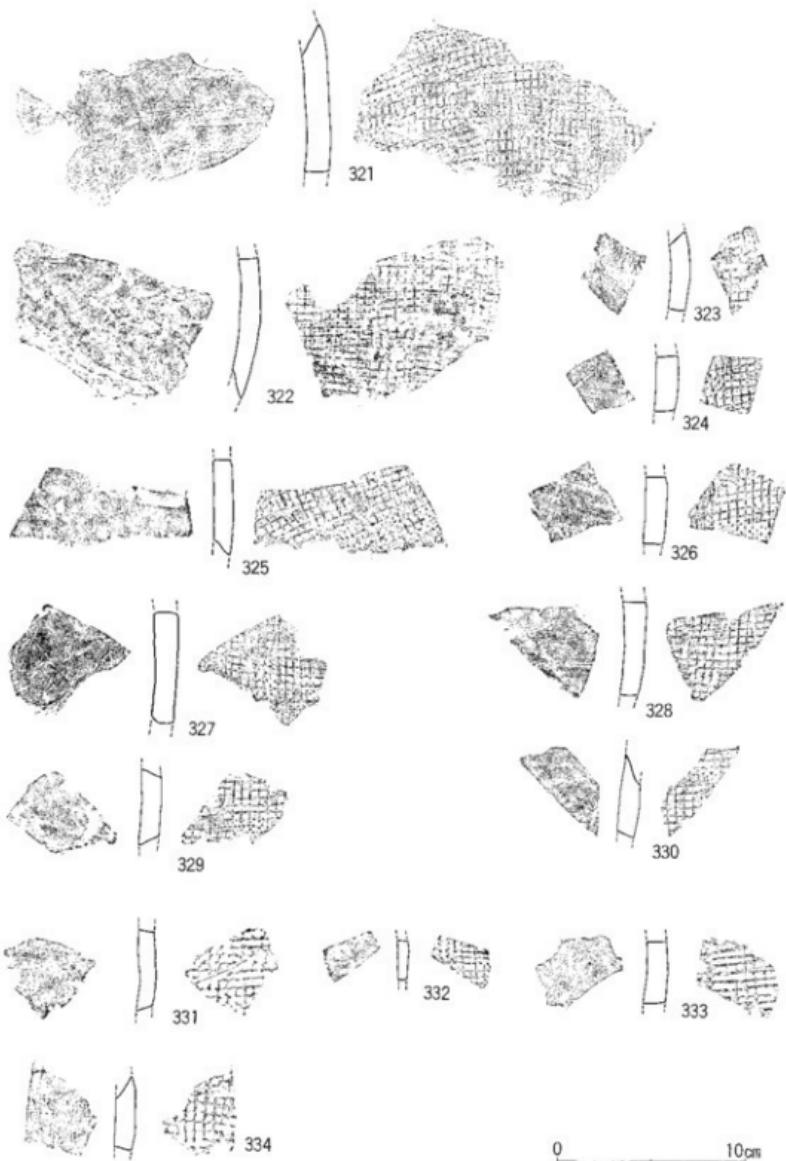
第171図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



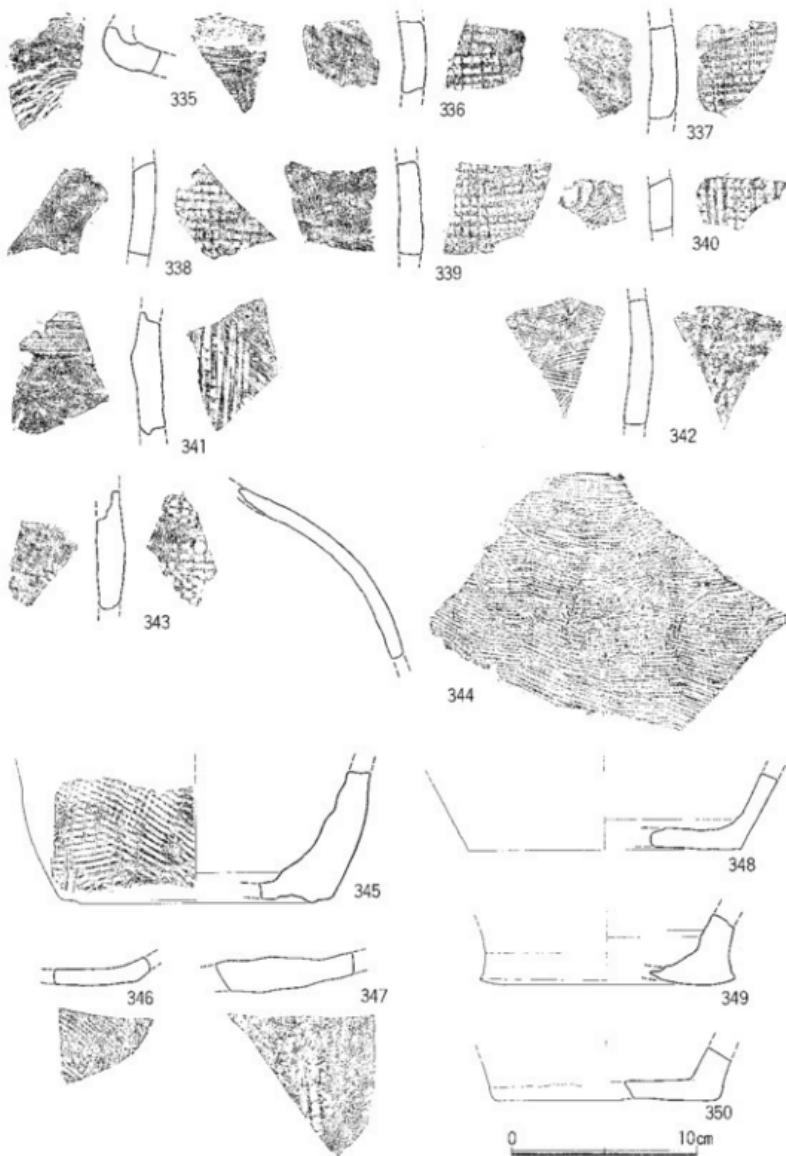
第172図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



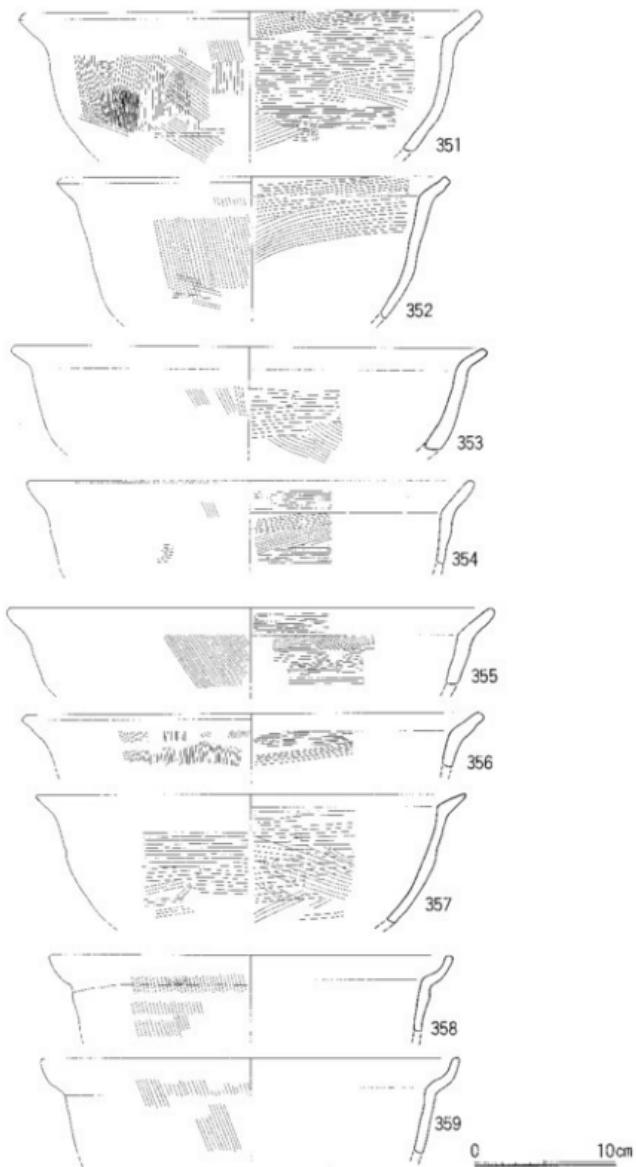
第173図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



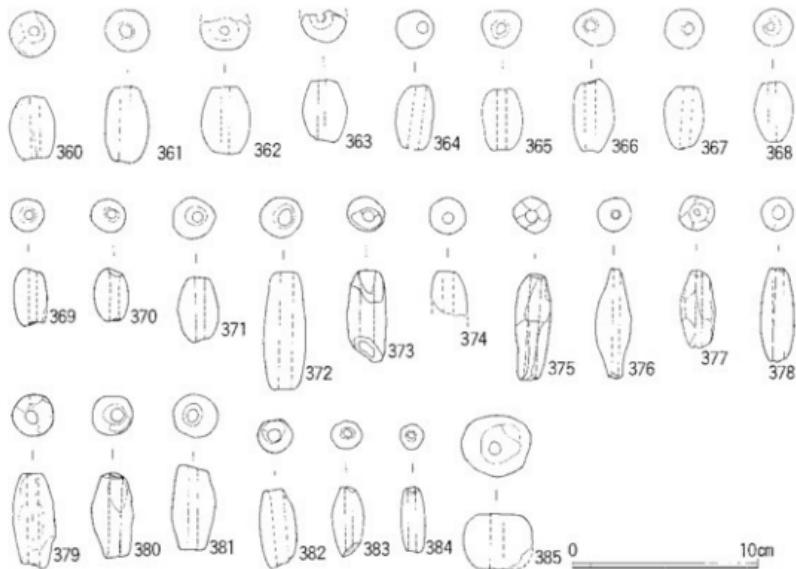
第174図 天満谷遺跡造構外出土遺物実測図



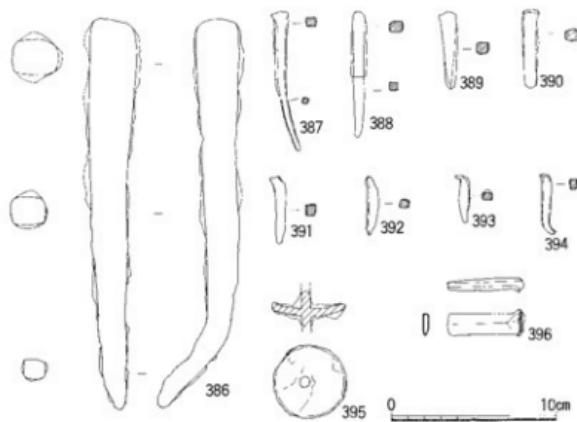
第175図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



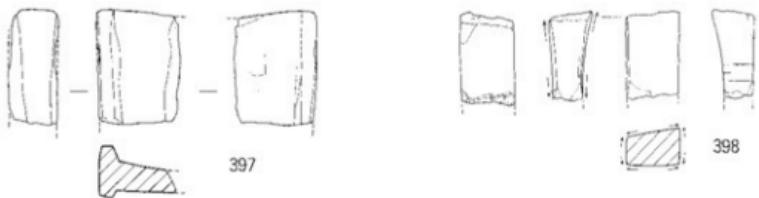
第176図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



第177図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

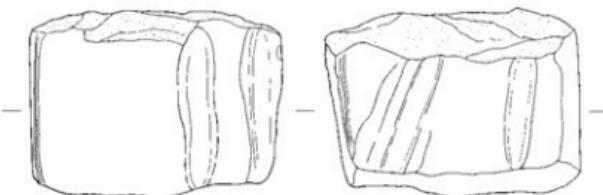


第178図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図



397

398



399

400

0 10cm

第179図 天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図

以上の甕の底部は不明であるが、(347)は底部と思われ外面に格子目叩きが残っている。内面はナデが同心円状に施されている。(346)は、底部で外面に細かい平行叩きが施されている。(345)は外面に平行叩きが施されている。(348)は、内外面ナデが施される平底である。(349)は、外反し屈曲し底部に至り、底部外面にやや丸味を有し、内面はナデが施される。器壁は薄く二次的に焼成を受けたようでややもろくなってしまっており、瓦質様の焼成となっている。

土 鍋 (第176図) 土鍋は前述の(35,36)は完形に復し得るがその他はいずれも破片である。口縁部の形態をみると(351~356)は口縁部が屈曲し、内面に稜線を有している。口縁端部の断面が方形を呈している。(357)は、口縁部が屈曲した後に内湾しながら立ち上がっている。口縁端部は断面が方形に近い。上鍋はいずれも体部外面に縱方向のハケメ、体部内面に横方向のハケメが施されている。口縁部の外面はヨコナデ、ハケメが施されている。(356,358,359)を除くすべての外面には、煤と思われる黒色の付着物がみられる。口径は29cm~30.8cmを測る。

土錘（第177図） 土錘の形態は、砲弾形、円筒形、球形に分けられる。（360～371）は、砲弾形を呈しており、上下の両端に平坦面を持ち中央がやや太くなっている。外面は風化しており手握により成形されている。（372）は、かなり細長い形態である。（375）は、外面に手握による指頭圧痕が明瞭に残っている。（376）は、両端が極端に細くなっている、孔の径と端部の径がほぼ同一となっている。（377～382）は、細長い筒状で長さも短いものである。（383,384）は、小形のものである。（385）は球形を呈し上下両端に平坦面を持つ。

鉄器（第178図） 鉄器は形態を判るものが少なく、図示したもの以外にも不明の鉄器が何点か見られる。（387～394）は、釘である。いずれも角釘である。（387）は、頭部が屈折しており先端に向け細くなっている。長さ8.5cmを測る。（388）は、長さ7.6cmを測り頭部は丸味を持つ。（389）は、長さ4.7cmと短く頭部の幅が広く、先端に向け細くなっている。（390）は、先端を欠いており、頭部が屈折している。（391,392）は、ともに短く頭部が緩く屈折している。（393）は、極めて短いもので頭部は屈折し、中央がふくらんでおり先端は細くなっている。（394）は、先端が緩く曲がっている。（386）は、不明鉄器で長さ23.5cmを測る。断面が方形を呈し先端部が緩やかに曲がっている。（395）は、鉄製の紡錘車で上下の両端を欠損している。（396）は、小柄の柄の部分であり、鉄の周りを銅板でくるんでいる。

硯・砥石（第179図）（397）は、硯でかなり欠損している。周縁部が上下とともに立ち上がるものである。（398）は、砥石で四面とも使用しており中央部に向け湾曲している。幅2.9cm、厚さ2.3cmを測りに面に線状の細かい磨痕が残っている。（399）は、玉磨砥石で上下の面に筋状の使用痕が2本づつ残っている。上下の面には、全体的に面が使用されているその中で筋状の部分は、幅1.5cm、深さ0.4cmを測る。（400）は、陶硯である。須恵質の円面硯であり脚部に三角形の透かしを持っている。

ま　と　め

遺物について

天満谷遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけて掘立柱建物址、溝等の遺構及び多量の土師質土器、輸入陶磁器、陶器、須恵器類が確認されている。県内でこの時期の遺跡としては、松江市出雲国庁址²⁶、同国分寺址²⁷、同国分尼寺址²⁸、同四王寺跡²⁹、同国造館址³⁰、同石台遺跡³¹、斐川町西石橋遺跡³²、三刀屋町京殿遺跡³³、太田市笠川遺跡、浜田市石見町国府跡³⁴があげられる。石台遺跡では土師質土器が分類されている。天満谷遺跡の土師質土器は、小皿、碗、壺、台付皿があり、台付皿が最も多く出土している。天満谷遺跡出土の小皿a、b、c類としたものは、石台遺跡では小皿b類とされている。天満谷遺跡出土の小皿d類がa類とされている。天満谷出土の碗a、b、

c類は、石台遺跡において椀aとされる。また坏a類は、杯F類とされている。これら土師質土器の時期は、編年が確立されていないので明確にはしない。しかし、本遺跡においては、SD-01内より小皿a類、椀a類、台付皿に白磁椀IV類^④が伴なって出土している。この白磁椀から時期を求めるに12世紀後半という年代が考えられる。また、斐川町西石橋遺跡においては、古墓と思われる土壙内より土師質土器の椀、皿、鉄刀が伴って出土し、この刀より12世紀後半から13世紀初頭といった時期が考えられている。これらのことにより天満谷遺跡出土の椀a類も同様の時期が想定されると思われる。天満谷遺跡においては、SD-02、03周辺より、椀a類、小皿a類が伴なって出土している。坏の時期であるが、本遺跡においては陶磁器に伴なって出土する遺構がない。しかし三刀屋町京殿遺跡においては坏a類に似た器形のものが、龍泉窯系青磁蓮弁文碗に伴なって遺構面より出土しており、13世紀後半から14世紀前半という年代が考えられている。松江市黒田畠土居遺跡^⑤においては、第Ⅳ調査区内の包含層で上、下層に別れる土師質土器の坏類がまとまって出土している。この下層出土の坏は体部に丸味を持つという特徴より、天満谷遺跡出土の坏a類に類似している。黒田畠遺跡においては、陶磁器等の供伴がなく時期は明確にされていない。しかし、椀形態のものより坏形態のものが新しいという見方もあり^⑥、坏類の方がやや後出的な可能性がある。

天満谷遺跡出土の台付皿、杯といった器種は時期の限定が極めて困難である。SD-01内においては、台付皿の小形のものと大形のものが白磁椀と伴なって出土している。しかし、他の台付皿は、分類をしたものとの時期的な変化としてはとらえられず、器形の分類にとどまっている。石台遺跡においても大量に出土するものの、包含層のため平安時代から鎌倉時代といった幅でとらえられている。台付皿は、一時期における形態のバラエティもかなりあるようである。

輸入陶磁器では、白磁が多く見られ椀-I類^⑦が大部分を占めている。白磁椀の中でI類^⑧に含まれる破片が1点(145)みられ、これらは越州窯系青磁(212)と同様の時期と考えられるもので、10世紀代と思われる。11世紀の白磁は玉縁の小さな椀(146、147)がある。また、博多遺跡群出土遺物の中で広南風^⑨の白磁とされているものと同様と思われるものが(148~152、200)である。椀IV類^⑩は、白磁出土数の中でも最も多く、天満谷遺跡の中で掘立柱建物址の建てられた主要な時期と思われる。

他の遺跡においても大きめの玉縁の付く椀IV類^⑪は、石台遺跡、国造館址、出雲国府址等で確認されている。椀II類^⑫は、石台遺跡においても確認されている。

青磁は、古いものでは越州窯系青磁が出土している。越州窯系青磁は、石台遺跡において確認されている。白磁椀I類^⑬も出土していることや、他地域においては国府関係の場所からの出土が多いことなどから本遺跡の建物に直接伴なうというよりも、国府からの移動と考えられる。龍泉窯系青磁は、I類からみられる。小椀で完形に復し得るもの(218)がある。蓮弁文様を持つ椀が破片

点数から最も多い。同安窯系青磁は、外面の櫛描が細かいものと、幅が広いものと、それらの中間の幅のものがみられる。龍泉窯系青磁I類²⁴と同様で、12世紀後半から13世紀前半頃と思われる。県内においては同安窯系青磁の出土例としては、国造館址がある。褐釉の壺は、県内の出土例はかなり知られている。中でも経塚出土例として、隱岐寺ノ峰経塚²⁵、神原経塚²⁶があり、その他では、的場古墓²⁷、石台遺跡でみられる。

国産陶器では、常滑系と思われる大甕が出土している。(234)は口縁の形態、焼成から常滑系と考えられているが、肩部外面に「V」字形の文様が刻まれている。(235)も口縁部の形態により常滑系と思われる。ともに時期は、鎌倉時代と思われる。(236)は、口縁部を欠損する三筋壺である。常滑窯の三筋壺と比べ、やや体部が上下に短くなっている、また胎土中に長石が多く含まれ生地が黒茶色を呈すことから、常滑以外の窯と考えた方が良いようであるが產地を断定するに至らなかった。瀬戸系の灰釉では、壺(240)、四耳壺(237)が出土している。(240)は、平安時代のものと思われるものである。(237)は、外面に印花文を有しており鎌倉時代、13世紀中頃とされる。美濃系の山茶碗と思われる、碗(238)、皿(239)が出土しておりこれらは13世紀中頃以前と考えられる。須恵器の壺で肩部に突帯の周るもの(241、242)は產地は不明であるが、平安時代のものと思われる。東播系²⁸の製品では、鉢が3点(243~245)出土している。これらは、12世紀後半から13世紀初頭の頃と思われるもので、県内では石台遺跡において魚住窯産の甕が出土している。また、安来市河原崎古墓²⁹出土の甕外面には、矢羽根状叩き成形痕がみられ東播系の製品の可能性がある。包含層中より出土した陶磁器からみると、12世紀代は白磁碗を中心とし、13世紀に入ると青磁、龍泉窯系、同安窯系がみられ、国産の陶器として、瀬戸系灰釉、美濃系の山茶碗、常滑の甕、東播系鉢といったものがみられる。鉢には、内面に櫛目痕を残しており、焼成もやや軟質のものである。これらは甕で外面に格子目叩き痕を残すものと焼成が似ているものもあることなどから在地の製品の可能性がある。この鉢の焼成と形態が同一のものは、松江市別所遺跡³⁰において出土している。

須恵器甕は、外面に格子目叩き痕を有するもので、従来亀山焼、勝間田焼³¹と称せられる一群である。県内では、広瀬町富田河床遺跡³²、東出雲町大木観願山古墳³³、松江市竹矢小学校蔵品、同国造館跡³⁴、同上東川津地内³⁵、同別所遺跡³⁶、鹿島町塙田遺跡³⁷、大東町狩山経塚³⁸、仁万町坂薙遺跡が知られている。天満谷遺跡出土の甕でA類としたものは、格子目の幅が広くかなり大きめの格子目で、内面は同心円叩きの後ナデ消している。B類としたものは外面に大きめの格子目叩きを有し内面にハケメを施している。大きめの格子目を有するものは、格子目が大きく不揃い、筋の線が太く内面に同心円叩きの後ナデカキメを施すという特徴より勝間田焼に類似する。甕c、d類は、外面の格子目叩きが細かく内面にハケメを有するという特徴より亀山焼に類似するが、d類

は焼成がやや不良で色調も桃白色、灰白色を呈することなどから亀山焼とは判断しかねるものである。また甕 e 類は、瓦質の焼成で外面の格子が細かく内面はナデ調整を行っており、前述の狩山経塚の甕に極めて近似している。狩山経塚出土の甕は、2面の直角厚縁和鏡を共伴することにより13世紀前半という年代観が得られている。国造館跡では、13世紀前半頃の長方形土壙SK-01を切り込んで掘られたSE-01内より細かい格子目叩き痕を有する甕片が出土している。外面に格子目叩きを有する甕は、狩山経塚、国造館跡等では13世紀前半という時期が考えられる。亀山、勝間田では、平安時代の甕は外面に粗い平行叩きを有し、内面は同心円青海波の叩きを有している。³⁶ 県内出土の甕では、大寺古墳封土中出土の甕³⁷がこの時期のものと思われる。亀山、勝間田では、鎌倉時代に入ると内面の叩き目をナデもしくはカキ目により消しており、これも大溝谷等より出土するものと同じ傾向を示している。底部の資料では、平底、丸底の両方があるが石台遺跡出土の底部³⁸は平底で、体部に格子目叩きを有し、天溝谷出土のものには、丸底と思われる底部外面に格子目叩きを残している。

遺構について

検出した遺構は、掘立柱建物、溝、柵列、ピット250個である。建物、柵列の柱以外にもピットは検出しているが、配列を確定し得ないものもあった。

建物は6棟確認しており、中でもSB-01、02は、幅0.5~3.3mの溝により北側、西側を囲まれた形となっている。SB-01は、建物と北側の溝の間に柵列が「L」字状に走っている。その柵列と建物の間からは、焼土土壙が検出されており火の使用が認められた。また、この土壙と一部切り合ってピットも検出されている。SB-03の南側にもSD-05が東西に走っており、建物との関連が考えられる。建物は、SB-05以外は東西方向に長いものである。柱穴は、素掘りで中には根石状に河原石をつめたものであった。SB-04のプランは確認していないが、径2cmの小礫を敷きつめて根石状の役割をしている。

溝状遺構では、SD-02、03のように建物の周囲をめぐるようなものがある。これは建物の周囲の水を流す溝としての役割が考えられる。SD-05、06は、上部に溝の幅にそって配石がみられるがどのような性格を持つのか不明である。

検出した遺構の時期は、建物の柱穴内等より遺物の出土が少ないと時期の決定は困難である。しかし、これらの建物は谷地形に厚さ50cmの茶褐色土を盛土して基盤をなしている。この土の中には、須恵器、白磁等も含まれており、本遺跡で最も古い遺構としてSD-01があるが、これは盛土の後早い時期に掘り込まれ、中より白磁碗の玉縁の付くものと土師器類が出土しており、それより12世紀後半と考えられる。これに先行する白磁、越州窯系青磁、円面鏡も出土するが、基盤造成時に国庁周辺より移動したものと思われる。建物では、SB-03のP-3内より龍泉窯系青磁と白

磁口禿の皿が出土し13世紀後半という時期が考えられる。

遺構の性格について

中世前半の建物跡が確認されたものは、県内では、国造館跡、京殿遺跡、笠川遺跡等である。

天満谷遺跡では、幅20mの谷の中に建物跡が建てられており、出雲國府跡とは直線距離で0.4kmであり、國府上層の建物跡、大屋敷遺跡の建物との関連も想定される。国衙としては、14世紀前半³⁰まで機能を果たしていたとされる。また、天満谷遺跡出土の遺物構成と国造館跡の遺物構成が良く似ていることも指摘される。国造館跡は出雲國造の館跡と推定される場所である。

天満谷遺跡では、谷を埋めて建物を造るという造成を行っていることや、意宇平野の一角を占めることより豪族の館址としての性格が考えられる。しかし、なぜ南北を低い丘陵に挟まれるという狭い場所を選んで建物を建てたかは不明である。

天満谷遺跡の調査で特筆すべきは、從来古墳群の存在が知られるのみであった大草丘陵にも國府上層に関連した中世の遺構の存在が確認され、この方面的研究にとって新たな問題を提起したことであろう。

注

1～5、7～13、15～22：

横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について -型式分類と編年を中心として」
『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978年

6：福岡市教育委員会『博多』

博多出土實業陶磁器分類表 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第105冊 別冊 1981年

14：6に同じ

23：大村敬謙・水口富夫編「魚住古墳群」、「兵庫県文化財調査報告書」第19冊 兵庫県教育委員会 1983年
森田 稔「東播系中世須恵器の生産と流通」(第5回中世土器研究集会資料) 中世土器研究会 1986年

24：松江市教育委員会『出雲國分尼寺跡発掘調査報告』 1970年

25：前島己基「出雲國分寺跡」

『八雲立つ風土記』在朝辺の文化財』 島根県教育委員会 1975年

26：前島己基「出雲國分尼寺跡」

『八雲立つ風土記』の丘周辺の文化財』 島根県教育委員会 1975年

27：『島根県松江市山代町所在・四王寺跡』 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ 島根県教育委員会 1985年

28：松江市教育委員会『出雲國造跡発掘調査報告』 1980年

29：島根県教育委員会『松江・石台遺跡』 島根県埋蔵文化財調査報告書 第X集 1983年

島根県教育委員会『石台遺跡』 1988年

30：川原和人氏の教示による

31：三刀屋町教育委員会『京殿遺跡-調査概報-』 1977年

32：島根県教育委員会『石見國府跡推定地調査報告』 1979年

33：注1に同じ

34：島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』 1982年

35：川原和人・桑原真治氏の教示による

36：注1に同じ

37：注1に同じ

38：福岡市教育委員会『博多』 高速鉄道関係調査(2) 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第126集 1986年

39：注1に同じ

40：注1に同じ

41：注1に同じ

42：注1に同じ

43：注1に同じ

44：近藤 正「高田寺／峰経塚・島根県下の経筒について」 島根県文化財調査報告書 第8集
島根県教育委員会 1976年

- 45：近藤 正「神原経塚・島根県下の経塚について」 島根県文化財調査報告書 第Ⅲ集
島根県教育委員会 1976年
- 46：山本 清「松江・の塙古墓群」 島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集 島根県教育委員会 1971年
- 47：注23に同じ
- 48：内田 才「安来・河原崎古墳」 島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅲ集 島根県教育委員会 1971年
- 49：松江市教育委員会「別所遺跡」 萩元A遺跡発掘調査報告 1984年
- 50：村上 勇「山陰の中世の焼き物に関する覚書」（松江考古第2号） 1979年
- 51：広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査班「富田川河床遺跡発掘調査報告」 1977年
- 52：東出雲町教育委員会「大木唯現山古墳群」 1979年
- 53：注28に同じ
- 54：注50に同じ
- 55：注49に同じ
- 56：赤武秀則氏の教示による
- 57：吉岡康輔「縄外容器からみた初期中世陶器の地域相—須恵器系中世陶器を中心にして—」
（『石川県立郷土資料館紀要』第14号 石川県立郷土資料館 1985年）
- 58：岡田博氏の教示による
- 59：池田義雄「古墳」出雲市の文化財 第Ⅰ集 1956年
- 60：島根県教育委員会「松江・石台遺跡」 島根県埋蔵文化財調査報告書 第X集 1983年
- 61：加藤義成「『文献上の出雲國史・3中世文書』『出雲國史発掘調査報告』」 松江市教育委員会 1970年

第11表(1) 天満谷遺跡出土遺物観察表

所番 調査 年	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	鑑定	備考
		口直	底直	厚					
136-1	白磁碗	17.0	7.2	7.45	体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は玉縁状となる。高台は奥く削り出され、底面は厚い。胎は高台近くまで施される。	黄白～灰白色	黄白～灰白色で、細かい黒粒を含む。	良好	
2	々	16.0			体部はやや直線的で、口縁部は玉縁状となる。	薄青白色	灰白色で黑色粒子を含む。	々	
3	々	16.1			口縁部は玉縁状となる。	薄青白色	白色	々	
4	々	15.0			体部はやや直線的で、口縁部は玉縁状となる。	軽白色	白灰白色で黑色粒子を含む。	々	
5	々		6.6		高台は外腹が直し、内腹は浅く斜めに削り出され、外腹下半は無釉と思われる。	灰白色	白灰白色で密。	々	
6	土師質器 土皿	8.1	3.4	2.2	体部は内湾ぎみに開き、先端は丸くおさめる。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	明灰灰色	細砂粒を含む。	々	
7	々		4.1		体部はやや内湾ぎみに開き、内外面ともに回転ナデ。底部は回転糸切り。	黄灰白色	砂粒を少量含む。密。	々	
8	土師質器 土台付皿	7.1	4.5	3.5	体部は直線的に大きく開き、縁部はやや内湾する。底部は直く、脚部はハの字状に開き、端部はやや平坦となる。脚底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	黄桃白色	砂粒を含まない。密。	良好、硬質	
9	々		6.8		脚部はなく、脚部は外反して開き、端部は上方に突出して平坦面をつくる。底部は回転糸切り後、内腹を削り出しして空にする。外腹は回転ナデ。	明灰白色	細砂粒を多く含む。密。	良好	
10	々		7.2		脚部は幅広になりとなり、脚部は水平に開き、脚部は上方に突出して平坦面をつくる。脚部は回転糸切り後、内腹を削り出しして空にする。外腹は回転ナデ。	明灰白色	砂粒を含まない。密。	々	
11	々		9.1		脚部はなく、脚部は外反して開き、端部はわずかに上方に突出して平坦面をつくる。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	灰白～黑灰色	細砂粒を多く含む。密。	々	
12	々	12.6	5.2	6.0	体部は直線的に開き、先端となり。体部は回転ナデ。全体に厚手。	明灰白色	細砂粒を多く含む。密。	々	
13	土師質器 土杯	16.3			体部は直線的に開き、先端となり。体部は回転ナデ。全体に厚手。	外一黒灰色 内一灰白色	砂粒を含まない。密。	々	
14	土師質器 土台付皿	15.1			体部は内湾ぎみに開き、口縁部は外反する。体部は内外面とも回転ナデ。	外一灰白色 内一黒灰色	砂粒を多く含む。	々	
15	土師質器 土杯	14.4	4.6	4.4	体部は内湾ぎみに開き、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	灰白色	細砂粒を少量含む。	々	
16	々		6.4		体部は内湾ぎみに開く。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	々	砂粒を含まない。密。	々	
17	々		5.2		体部は内湾ぎみに開く。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	明灰色	細砂粒を含む。	々	
18	々		7.0		体部は内湾ぎみで大きく開く。底部は回転糸切り、他は回転ナデ。	暗灰白色	細砂粒を多く含む。密。	々	
19	土師質器 土台付杯	13.4	6.4	3.9	体部は直線的に開き、先端となり。底部回転糸切り後、断面三角形の高台を残り付けた。内外腹とも回転ナデ。	明灰灰色	黑色粒子を含む。	々	

検査 番号	器種	生 量 (cc)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口 径	底 径	厚 さ					
138-20	土 器 質 器 皿	8.0	4.0	2.1	体部は内湾ぎみに開き、端部を大きくおきめる。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。	黄褐色	砂粒を含まない。密。	良好	
21	〃	7.6	5.4	1.7	体部は頗る内湾して立ち上がり、先細りの口縁部となる。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。	外一純白～灰褐色 内一黒灰色	細砂粒を多く含む。密。	〃	
22	〃	7.6	5.5	1.6	体部は頗る内湾ぎみに開く。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。	暗灰～赤桃白色	細砂粒を少許含む。密。	〃	
23	土 器 質 器 古 付 皿	8.9	5.7	6.0	体部は頗る開き、口縁部はやや外反し、先細りとなる。底部は模様がありとなり、脚壇部は面をつくる。脚底部は回転糸切り。他は回転ナデと思われる。	赤黃白色	細砂粒を少許含む。	〃	
141-24	土 器 質 器 皿	9.2	4.6	2.3	体部はやや外反して開く。底部はやや厚く、回転糸切り。他は回転ナデ。	桃灰色	砂粒を含まない。密。	〃	
25	〃	9.2	4.6	2.6	体部は直線的に開く。底部は厚く、回転糸切り。他は回転ナデ。	〃	〃	〃	
26	〃	9.6	4.6	2.3	体部は直線的に開く。底部はやや厚く、回転糸切り。他は回転ナデ。	桃白色	〃	〃	
27	〃	9.7	4.3	2.5	体部は直線的に開く。底部は厚く高台状を呈し、回転糸切り。他は回転ナデ。	〃	砂粒を少量含む。密。	〃	
28	〃	9.7	4.2	2.25	体部は直線的に開く。底部は厚く高台状を呈し。回転糸切り。他は回転ナデ。	〃	砂粒を含まない。密。	〃	
29	〃	9.5	4.4	2.3	体部は直線的に開く。底部はやや厚く高台状を呈し、回転糸切り。他は回転ナデ。	〃	〃	〃	
30	〃	8.8	4.1	2.3	体部はやや内湾ぎみに開く。底部は厚く、回転糸切り。	〃	〃	〃	
142-31	〃	7.5	3.0	1.7	体部は弧形との境がなく、内湾ぎみに開く。口縁部は頗る細くなる。内外面ともも摩滅のため調整不明。	〃	砂粒を含む。密。	〃	
32	〃	7.6	4.2	1.9	体部は直線的に開き、底部との境が明瞭でない。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。全体に薄手。	黄白色	砂粒を少量含む。	〃	
33	〃	7.7	3.6	1.9	体部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は先細りとなる。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を含む。密。	〃	
34	土 器 質 器 环	14.2	5.9	4.5	体部は直線的に開き、口縁近くで立ち上がり、脚部はわざかに外反する。底部は回転糸切り。他は回転ナデ。	外一暗黄褐色 内一桃白色	砂粒を少量含む。密。	〃	
144-35	土 器 質 器 鍋	29.0			体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外方へ彎曲し、内湾して立ち上がり、脚部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は上半が前方に向る。下半が後方に向るハケメ。内面は上半が横、あるいは斜め方向の、下半が横方向のハケメ。	黄灰色	數砂粒を含む。	〃	煤の付着は少ない。
36	〃	31.6		13.2	底部はほぼ平坦で、体部は内湾して立ち上がり、口縁近くでやや外反する。口縁部は外方へ彎曲し、内湾して立ち上がり、脚部は平底となる。口縁部はヨコナデ。体部外面は上半が前方に向る。下半が不整方向のハケメ。内面は上半が横方向の、下半が不整方向のハケメ。	外一茶褐色 内一黒灰色	数砂粒を含む。	良好	煤が所々薄く付着する。

標 識 番 号	器 種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
		口 徑	底 径	高 度					
145-37	青 磁		8.5		盤底がりの跡形を呈し、造形の富む高台と、斜め上方に開く、底状の突出部をもつ。内部は深出部と同位で上、下に切られ、下部にはヒョウターン形の溝しが施される。全体に薄い難が付着しており、裏面光端は釉を拭きとる。	深緑色	灰白色	良好	器種不明。
38	白 磁				体部はやや内湾し、口縁部は外反して、輪部は平坦となる。口縁部には無釉。	灰緑色	青灰白色	好	
152-48	白 桃 碗		6.6		体部はやや内湾して立ち上がる。高台は外面が直し、内側が浅く斜めに削り出されている。体部下方は無釉。内面見込みと体部の境に沈線状の段をもつ。	灰白色	灰白色	好	
49	土 師 質 器 台 付		6.3		底部は短く幅広がりとなり、脚部は横方向に伸び、輪部は平坦面をつくる。脚底部は回転み切り。他は回転ナデ。	桃灰色	砂粒を含む。密。	好	
50	土 師 質 器 皿		4.5		体部は先細りとなる。	好	好	好	
154-51	々	8.2	3.8	2.4	体部は直線的に開き、口縁部はやや立ち上がる。底部は厚く、回転系切り。他は回転ナデ。	灰灰白色	砂粒を少量含む。密。	好	
52	々	7.6	4.0	2.3	体部から口縁部にかけてやや内湾して開く。口縁部は薄く、底部は厚い。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃～桃白色	砂粒を含む。密。	好	
53	々				体部は直線的に開き、口縁部は立ち上がる。底部は回転系切り、体部は回転ナデ。	桃白色	砂粒を含む。密。	好	
54	土 師 質 土 器 皿	7.2	3.8	1.9	体部は内湾して開き、口縁部はやや外反する。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を含む。密。	好	
55	々	8.4	4.4	1.8	体部は直線的に開き、口縁部はやや立ち上がる。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	好	砂粒を含む。密。	好	
56	々	8.6	3.7	2.1	体部は直線的に大きく開く。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	好	砂粒を含まない。密。	好	
57	々	8.3	4.4	1.9	体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反し先細りとなる。底部は厚く、回転系切り。他は回転ナデ。	桃白～明茶 色	砂粒を少量含む。密。	好	
58	々	8.1	3.6	1.65	体部は直線的に開く。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	茶灰 色	砂粒を含む。密。	好	
59	土 師 質 器 杯	13.5	6.0	4.0	体部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は先細りとなる。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を含む。	好	
60	々	14.4	5.3	4.45	体部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は先細りとなる。底部は薄く、回転系切り。他は回転ナデ。	好	砂粒を含む。密。	好	
61	々	13.0			体部はほぼ直線的に開き、口縁部は内湾して立ち上がる。内外面とも回転ナデ。	好	好	好	
157-64	白 磁 瓶		7.4		高台は外面が直し、内面が浅く斜めに削り出されている。外部下半は無釉と思われる。	乳白青色	白色	好	
65	土 師 質 土 器		4.4		底部はやや厚く、回転系切り。体部は回転ナデと思われる。	茶白～白色	砂粒を含む。密。	好	

掲 番 号	品 種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	養 成	備 考
		口 径	底 径	高 度					
158-66	土 部 質 器 皿	7.3	4.3	2.05	体部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は先端となり。底部は回転系切り、他は回転ナデ。	外一桃紅白色 内一黃灰色	砂粒を多く含む。密。	良 好	
67	タ	8.4	4.5	1.7	体部は内湾ぎみに開き、口縁部はわざかに外反する。底部は回転系切り、他は回転ナデ。	赤黃白色	砂粒を少量含む。密。	ア	
68	土 部 質 器 皿	8.6	4.6	1.9	体部は内湾ぎみに開き、先端よりとなる。底部はやや厚く、回転系切り。他は回転ナデ。	桃白～明茶色	砂粒を含まない。密。	ア	
69	タ	8.5	4.2	1.95	体部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は細く、やや外反する。底部はやや厚く、回転系切り。他は回転ナデ。	外一明茶色 内一白色	ア	ア	
70	タ	8.3	4.4	1.9	体部は内湾ぎみに開く。底部は回転系切り、他は回転ナデ。	黄白色	砂粒を少數含む。密。	ア	
71	タ	7.8	3.8	2.15	体部は内湾ぎみに開く。底部は回転系切り、他は回転ナデ。	桃灰色	細砂粒を含む。密。	ア	
72	タ	8.4	4.3	2.3	体部は直線的に開く。底部はやや厚く回転系切り。他は回転ナデ。	外一桃白色 内一白色	細砂粒を多く含む。密。	ア	
73	タ	10.0	6.1	2.35	体部は内湾ぎみに開き、やや先細りとなる。底部は回転系切り、他は回転ナデと思われる。	外一灰白色 内一黄白色	砂粒を多く含む。密。	ア	
74	タ	8.1	3.9	2.15	体部はほぼ直線的に開き、口縁部は細い。底部はやや厚く、回転系切り。他は回転ナデ。	桃褐色	砂粒を少量含む。密。	ア	
75	タ	8.7	4.4	1.8	体部はやや内湾ぎみに開く。全体に厚手で、底部は回転系切り。他は回転ナデ。	外一桃白色 内一明褐色	砂粒を含まない。密。	ア	
76	タ	8.0	3.6	1.8	体部はほぼ直線的に開き、湯手である。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	外一桃白色 内一明褐色	砂粒を含まない。密。	ア	
77	タ	9.0	4.2	1.45	体部は内湾ぎみに大きく開き、口縁部はわざかに外反する。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白～白色	砂粒を含まない。密。	ア	
78	タ	8.3	3.7	2.0	体部は直線的に大きく開く。底部は厚く高台状を呈し、回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を少數含む。密。	ア	
79	タ	9.0	4.2	1.45	体部は内湾ぎみに大きく開き、口縁部はわざかに外反する。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白～白色	砂粒を含まない。密。	ア	
80	土 部 質 器 皿	8.2	3.5	1.7	体部は薄手で、直線的に開く。底部は回転系切り。他は回転ナデと思われる。	桃白色	砂粒を少數含む。密。	ア	
81	タ	7.6	5.1	1.5	体部は短く直線的に開き、口縁部はわざかに外反し、先細りとなる。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	赤褐色	細砂粒を含む。密。	ア	
82	タ			4.1	体部はやや外反ぎみに開く。底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を含まない。密。	ア	
83	タ			4.0	底部は回転系切り。他は回転ナデ。	ア	砂粒を少數含む。密。	ア	
84	土 部 質 器 皿	14.7	5.9	4.45	体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。底部はやや厚く、回転系切り。体部外面以外は丁寧な回転ナデ。	ア	細砂粒を含む。密。	ア	
85	タ	14.7	5.4	4.6	体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。底部は回転系切り。体部内面の一帯を除き、全体に丁寧な回転ナデ。	黄白色	砂粒を含む。密。	ア	

種番 図号	器種	底盤(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口徑	底径	厚さ					
158-86	土師質器 杯	14.7	5.8	4.7	体部は直線的に開き、口縁部付近で立ち上がる。底部は厚く、回転系切り。全体に丁寧な回転ナデ。	桃白色	砂粒を少量含む。密。	良 好	
87	タ	14.5	5.9	5.35	体部は直線的に開き、口縁部はやや内湾する。底部以外は丁寧な回転ナデ。底部はやや厚手。	タ	細砂粒を多く含む。密。	タ	
88	タ	14.2	5.4	4.0	体部は内湾ぎみに開き、口縁部は厚手。底部は回転系切り。体部外側下半以外は丁寧な回転ナデ。	桃白～明灰色	砂粒を少量含む。密。	タ	
89	タ		5.4		体部下半は外反して大きく開く。底部はやや厚く、回転系切り。他の回転ナデ。	外一明灰～赤色 内一灰色	タ	タ	
90	タ		6.0		底部は回転系切り。他の回転ナデ。	灰白色	細砂粒を多く含む。	タ	
91	タ		5.6		体部は内湾して立ち上がる。底部はやや厚く、回転系切り。他の回転ナデ。	黄白色	砂粒を多く含む。密。	タ	
159-92	土師質器 杯		5.7		体部は内湾して立ち上がり、底部は厚く、高台状を呈し、回転系切り。他の回転ナデだが、外側はロクロ痕が残る。	桃白～明灰色	砂粒を含まない。密。	タ	
93	土師質器		8.8		底部は回転系切り後ナデ。体部は回転ナデ。底部内面にはナデ。	黄白色	細砂粒を含む。	タ	
94	土師質器 高台付杯		9.3		体部はやや内湾ぎみに開き、高台は薄くハの字状に付ける。内外面とも回転ナデ。	タ	砂粒を少量含む。密。	タ	
160-95	土師質器 杯	11.5	5.3	3.7	体部は下位でやや内湾し、直線的に伸びる。底部は回転系切り。他の回転ナデ。	黄桃～白色	タ	タ	
96	タ	12.4	6.1	3.8	体部は下位で内湾し、直線的に伸びる。底部は厚く、高台状を呈し、回転系切り。他の回転ナデ。	赤桃白色	タ	タ	
97	タ	12.8	6.5	3.8	体部は下位で緩やかに内湾し、直線的に伸びる。底部はやや厚く、回転系切り。他の回転ナデ。	外一純白色 内一赤茶色	砂粒を少量含む。密。	タ	内面に一部黒色の付着物。
98	タ	11.5	6.0	3.4	体部は下位で緩やかに内湾し、直線的に伸びる。底部は回転系切り。他の回転ナデ。	桃白色で口 縁部は褐色	砂粒を含む。密。	タ	
99	タ	11.3	6.6	4.0	体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は直線的に伸びる。底部は回転系切り。他の回転ナデ。	桃白色	砂粒を含む。密。	タ	
100	タ	13.6	8.2	3.35	体部は下位で内湾し、直線的に立ち上がる。底部は高台状を呈し、回転系切り。他の回転ナデ。	黄白～灰白色	砂粒を少量含む。	タ	
101	タ	11.8		3.25	体部はほぼ直線的に開き、中位は薄くなる。底部は中央と周縁が厚く、回転系切り。他の回転ナデと思われる。	桃白色	砂粒を少量含む。密。	タ	
102	タ				体部は下位で内湾し、直線的に伸びる。底部は回転系切り。他の回転ナデ。	外一明黄褐色 内一赤褐色	タ	タ	
103	タ	12.4	5.2	2.9	体部は内湾ぎみに開く。底部はやや厚く、回転系切り。他の回転ナデ。	外一灰～暗 灰色 内一桃白色	細砂粒を多く含む。密。	タ	
104	タ		5.8		底部は厚く、回転系切り。他の回転ナデ。	外一桃白色 内一黄白色	細砂粒を含む。密。	タ	
105	タ		5.8		全体に厚手で、底部は回転系切り。他の回転ナデ。	明茶武色	砂粒を少量含む。密。	タ	

種 類 番 号	器 種	法 量(cm)		形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口 径	底 径					
161～ 106	土 器 實 器 合 付		3.9	脚部は低く、断面台形を呈する。脚底部は回転系切り、外側は回転ナデ。内面はナデ。	桃白色	砂粒を少量含む。密。	良好	
107	ク	7.9	5.2	4.8 体部は内湾ぎみに開き、口縁部はわずかに外反する。脚部は裾広がりとなり、脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り、他は回転ナデ。	黄白色	細砂粒を少 量含む。	ク	
108	ク	7.7	4.6	5.1 体部は内湾ぎみに開き、口縁部はわずかに外反する。脚部は裾広がりとなり、脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り、他は回転ナデ。	ク	砂粒を多く含む。密。	ク	
109	ク		5.2	脚部は裾広がりとなり。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部に回転系切り。他は回転ナデと思われる。	ク	砂粒を含まない。密。	ク	
110	ク		4.6	筒部は短く、腰底部は広い平底面を持つ。肩部が著しく調整不良。	ク	細砂粒を多く含む。	ク	
111	ク		5.0	筒部は裾広がりでやや長い。脚部は円錐状を呈し、端部は上方に突出して平底面をつくる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデと思われる。	桃白色	細砂粒を多く含む。密。	ク	
112	ク			筒部は短く、脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	ク	ク	ク	
113	ク		5.2	筒部は腰が大きく広がり、脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	黄白色	砂粒を少量含む。密。	ク	
114	ク		6.1	筒部は裾広がりとなり。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を多く含む。密。	ク	
115	ク		5.9	筒部は短く、腰広がりとなる。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	灰白色	砂粒を含む。密。	ク	
116	ク		6.1	筒部は腰広がりとなり。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデと思われる。	桃灰白色	細砂粒を含む。	ク	
117	ク		6.1	筒部は腰が大きく広がり、脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	明灰色	砂粒を少量含む。密。	ク	
118	ク	7.4	5.8	4.85 体部は直線的に開き。筒部は腰がりとなる。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。全体に鉛直形状となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデと思われる。	黄桃白色	砂粒を含む。密。	ク	
119	ク	6.2	5.9	4.7 体部は外反して開き、筒部は腰がりとなる。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。全体に鉛直形状となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	ク	ク	
120	ク	7.4		体部は直線的に開き、筒部は細い。内外面とも回転ナデ。	赤桃白色	砂粒を含まない。密。	ク	
121	ク		5.6	体部は直線的に開き、筒部は細く、腰がりとなる。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	外一桃白色 内一赤白色	ク	ク	
122	ク		5.5	筒部は裾広がりとなり。脚部は円錐状を呈し、端部は平底となる。脚底部は回転系切り。他は回転ナデ。	桃白色	砂粒を少量含む。密。	ク	

種番	品名	形態	手法の特徴	色調	胎土	熟成	備考	底盤（cm）		
								口 径	底 直 径	高 度
161-123	土 鋸 貝 器 合 付		5.8	体部は内側して立ち上がる。脚部は短く、脚底部は回転糸切り。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。	外一赤白色 内一黄白色	細砂粒を多く含む。密。	良 好			
124	タ			脚部は細長く、脚は大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄白色	砂粒を少量含む。密。	ア			
125	タ	5.8		脚部は細長く、脚は大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	桃白色	細砂粒を含む。密。	ア			
126	タ	5.7		脚部は裾広がりとなり。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	桃～黄白色	細砂粒を少量含む。密。	ア			
127	タ	6.3		脚部はやや太く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄灰白色	細砂粒を多く含む。密。	ア			
162-128	タ	6.2		脚部は長く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	明茶白色	砂粒を含む。密。	ア			
129	タ	6.7		体部は直線的に開き、脚部は長く、脚部が大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデと思われる。	黄白色	砂粒を少量含む。密。	やや軟質			
130	タ	6.6		脚部は長く、脚は大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	明黄灰色	砂粒を含まない。密。	ア			
131	タ	6.8		脚部は細長く、脚は大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄白色	砂粒を多く含む。密。	ア			
132	タ	6.7		脚部は長く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	桃白色	砂粒を少量含む。密。	ア			
133	タ	7.1		脚部は太くて短く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	薄茶灰色	細砂粒を多く含む。密。	ア			
134	タ	6.9		体部はやや内湾気味に開く。脚部は短く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデと思われる。	桃黃白色	砂粒を含む。密。	ア			
135	タ			体部は直線的に大きくなれる。脚部は短く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈すと思われる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄白色	ア	ア			
136	タ	8.3		脚部は細くて短く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は上方に突出して尖端をとくる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	桃白～暗灰色	細砂粒を多く含む。密。	ア			
137	タ	8.2		脚部は短く、脚は大きく広がる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は平坦となる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄白色	砂粒を多く含む。密。	ア			
138	タ	8.0		脚部はやや長く、裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、脚底部は先鋒りとなる。脚底部は回転糸切り。脚部は回転ナデ。	黄褐色	ア	ア			

番号	器種	寸法(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
162— 139	土器 土 台 付 皿	11.4			体部は内側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内部とも回転ナデ。	赤褐色	砂粒を含む。 密。	良好	
140	タ		13.6		肩部は大きい円盤状を呈し、頸部は広い平坦面をつくる。内部を削り出し、中空となる。	桃白色	砂粒を含む。	タ	
141	タ		10.4		脚部の裾は大きく広がり、脚部は円盤状を呈し、頸部は平坦となる。脚底部は回転系切り、他は回転ナデ。	黄白色	細砂粒を含む。 密。	タ	
142	タ		9.2		脚部は裾広がりとなり、脚部は円盤状を呈し、頸部は平坦となる。脚底部は回転系切り、他は回転ナデ。	明黄色	タ	タ	
143	タ		6.4		腹部はゆるやかに裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、頸部はやや平坦となる。脚底部は回転系切り、他は回転ナデと思われる。	桃白色で断面は黒褐色	砂粒を少量含む。 密。	タ	
144	タ		5.4		脚部はゆるやかに裾広がりとなる。脚部は円盤状を呈し、頸部は平坦となる。脚底部を回転系切り後、削り出して中空にしたと思われる。	薄桃白色	砂粒を少量含む。 密。	タ	
163— 145	白 陶	17.0			小さな玉縁状の口縁をもつ。	白色	白色	タ	
146	タ	15.4			玉縁状の口縁をもつ。	灰白色	灰白色	タ	
147	タ		5.6		高台は外面が直に、内面が深く斜めに削り出されている。外面下方は無物	タ	灰白色で密。	タ	
148	タ				体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。外面に櫻目文を施す。	白色	乳白色で密。	タ	
149	タ				内面見込みと体部の端に段をもつ。体部外端下方は無釉。	白褐色	白色	タ	
150	タ		6.9		細く、高い高台をもつ。高台以下は無釉。	白色	白色	タ	
151	タ		7.1		内面見込みと体部の端に段をもつ。高台は外面が直に、内面が斜めに深く削り出される。高台以下は無釉。	薄緑灰白色	灰白色	タ	
152	タ		5.7		細く、高台をもつ。外面は無釉。	薄緑白色	タ	タ	
164— 153	タ	15.4			体部はやや薄く、扁平な玉縁状の口縁をもつ。	淡褐色	灰白色で黑色粒子を含む。	タ	
154	タ	17.5			やや小さめの玉縁状口縁をもつ。	薄青白色	白色で細かな黑色粒子を含む。	タ	
155	タ	16.2			やや扁平な玉縁状口縁をもつ。	黄白色	灰白色	タ	
156	タ	13.8			体部は薄く、扁平な玉縁状口縁をもつ。	青白色	タ	タ	
157	タ	16.0			玉縁状口縁をもつ。	白褐色	タ	タ	
158	タ	15.7			玉縁状口縁をもつ。	灰白色	翠灰白色	タ	
159	タ	16.0			玉縁状口縁をもつ。	薄青白褐色	薄青白褐色	タ	
160	タ	16.6			玉縁状口縁をもつ。	薄緑灰白色	灰白色	タ	
161	タ	17.1			やや扁平な玉縁状口縁をもつ。	白色	タ	タ	
162	タ	16.5			やや扁平な玉縁状口縁をもつ。	薄綠白色	薄灰灰白色	タ	
163	白 陶	16.6			玉縁状口縁をもつ。	白褐色	灰白～黄白色	タ	

拂番	図号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	構成	備考
			口頭	底	側面					
164-	164	白磁碗	16.0			扁平な玉縁状口縁をもつ。	緑白色	灰白色	良好	
165	〃	〃	16.2			体部は直線的で、玉縁状口縁をもつ。	薄緑灰白色	〃	〃	
166	〃	〃	15.9			扁平な玉縁状口縁をもつ。	翠白潤色	〃	〃	
167	〃	〃	17.0			全体に厚手で、大きめの玉縁状口縁をもつ。内面は釉がやや厚い。	薄緑白色	真白色	〃	
168	〃	〃	17.9			大きめの玉縁状口縁をもつ。	〃	灰白色	〃	
169	〃	〃	16.8			体部はやや内凸して立ち上がる。やや大きめの玉縁状口縁をもち、外間に縁がみられる。外面下部は無釉。	白色	灰白色で黒色粒子を含む。	〃	
170	〃	〃	17.3			口縁はやや厚くなり、直な平坦面をもつ。	薄緑白色	灰白色	〃	
171	〃	〃	17.2			やや大きめの玉縁状口縁をもつ	〃	〃	〃	
172	〃	〃	15.2			やや人きめの玉縁状口縁をもち、外間に縁がみられる。	白色	白色	〃	
173	〃	〃	18.2			人きめの玉縁状口縁をもつ。	〃	灰白色	〃	
174	〃	〃	15.8			やや大きめの玉縁状口縁をもつ。	黄白潤色	白色	〃	
175	〃	〃	4.8			高台内面はやや浅く削り出され、外面向下方は無釉。	明茶灰白色	純白色	〃	
176	〃	〃	6.8			高台に外面が直に、内面が浅く斜めに削り出される。外面は無釉。	緑白色	灰白色	〃	
177	〃	〃	6.4			高台に外面が直に、内面が浅く斜めに削り出される。外面は無釉。	白潤色	〃	〃	
178	〃	〃	7.2			高台に外面が直に、内面が浅く斜めに削り出される。外面下部は無釉。	白色	〃	〃	
179	〃	〃	6.7			高台に幅広で、内面が浅く削り出されている。外面は無釉。	灰白色	純白色で直。	〃	
180	〃	〃	6.2			高台に外面が直に、内面が側面に削り出される。外面と内面の一部は無釉。	灰白色	灰白色	〃	
181	〃	〃	7.0			高台に外面がほぼ直に、内面はやや浅く斜めに削り出されている。外面は無釉。	白潤色	〃	〃	
182	〃	〃	6.7			高台に外面が直に、内面が浅く斜めに削り出されている。外面に無釉。	白色	灰白色	〃	
183	〃	〃	7.7			高台に外面が直に、内面は浅く斜めに削り出され、厚手。外面に無釉。	灰白色	〃	〃	
184	〃	〃	7.2			高台に外面が直に、内面は浅く斜めに削り出される。内面見込みと体部の境に沈縁状の段をもつ。外面は無釉。	薄緑灰白色	〃	〃	
185	〃	〃	16.7			口縁端部はやや外反し、丸くおさめる。	白色	白色	〃	
186	〃	〃	16.4			口縁端部はやや外反し、丸くおさめる。	〃	〃	〃	
187	〃	〃	16.6			口縁端部は外反し、丸くおさめる。	〃	〃	〃	
188	〃	〃	14.8			口縁端部はわざかに立ち上がり、外間に縁をもつ。	翠灰色	灰白色	〃	
189	〃	〃	15.3			口縁端部は外面がやや肥厚し、丸くおさめる。	灰白色	〃	〃	
190	〃	〃	14.5			口縁端部はやや先細りとなり、丸くおさめる。外面下部は無釉。	〃	白～黄白色	〃	

標 番	品 種	形 状 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口 幅	底 径	高 度					
164— 191	白 磁 碗	14.2			口縁部はやや肥厚し、丸くおさめる。外面に模様をもつ。	灰白色	灰白色	良好	
192	〃	11.2			体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反し、丸くおさめる。外面に摺挫沈文を施す。	薄灰白色	〃	〃	
193	〃				体部は内側して立ち上がり、内面見込みと外底の境に段を有す。内面に標準文を施す。	白色	白色	〃	
194	〃		6.0		高台は細く、ほぼ直立する。内面に段をもつ。外側下方は無釉。	灰白色	灰白色	〃	
195	〃		6.1		高台は高く、直立する。外側下方は無釉。	〃	〃	〃	
196	〃		6.2		高台は細く高く、直立する。高台以下は無釉。	白褐色	白色	〃	
197	〃		6.1		高台は高く、外側が直に、内面は斜め方向に削り出される。外側下方は無釉。	薄褐色	薄茶灰白色	〃	
198	〃		6.4		高台は高く、やや外反する。内面見込みと体部との境に段をもつ。外側は無釉。	〃	白色で密	〃	
165— 199	白 磁 皿		4.8		高台は小さく、外側が直に、内面が斜めに削り出される。内面に段を有し、放射状の標準文をもつ。外側は無釉。	白褐色	灰色で密	〃	
200	〃		3.9		内面に沈文を施す。外側は無釉。	乳灰色	明灰白色	〃	
201	〃	10.4	4.4	2.2	体部は上位で内側し、内面に花線状の段をもち、草花文が彫られる。	薄綠灰白色	灰白色	〃	
202	〃	10.8			体部は中位で内側に屈曲する。	灰白色	〃	〃	
203	〃	11.4			体部は中位でやや内側に屈曲し、内面に段を有す。口縁部はわずかに外反する。	薄青白色	〃	〃	
204	〃	12.8			口縁部はやや外反する。	薄綠灰白色	〃	〃	
205	〃	13.6			内面に段を有し、口縁部はやや外反する。	灰白色	〃	〃	
206	〃	11.6			口縁部は外反気味に開き、端部は釉をかけられ、平坦となる。外側下半は手持ちヘラケズリ	〃	〃	〃	
207	〃	11.4			口縁部は外反し、端部は釉をかけられ、平坦となる。	〃	〃	〃	
208	〃	9.4			口縁部はやや外反し、端部は釉をかけられ、平坦となる。	〃	白色	〃	
209	〃	9.0			口縁部はわずかに外反し、端部は釉をかけられ平坦となる。	青灰白色	灰白色	〃	
210	〃	9.4			口縁部は外反し、釉をかけられ、平坦となる。	灰白色	〃	〃	
211	白 合 子		5.2		外側下方は無釉。	青白色	白色で密	〃	
166— 212	青 磁 碗		6.0		体部は下位で内側して立ち上がる。高台は細く低い。外側に文様が彫り込まれる。疊付部は無釉。内面に目隠痕。	うす緑灰色	薄茶灰色	〃	
213	〃				口縁部は先細りとなり、端部はやや外反する。	綠褐色	灰色できめが細かい。	〃	
214	〃		6.0		低い高台をもつ。	灰綠色	明紫灰色	〃	

種類 図号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口縁	底径	厚さ					
166- 215	青磁 碗				体部片、内面にヘラおよび櫛状のもので文様を施す。	明緑色	灰白色	良好	
216	"	6.6			高台は断面四角で、底盤は薄い。疊付部は無釉。内面見込みに片割りの文様が施される。	薄緑色	灰白色	"	
217	"	6.8			高台は断面四角で、底盤は厚い。疊付部と高台内面は無釉。内面見込みに片割りの文様が施される。	"	"	"	
218	"	10.4	2.9	5.3	体部は内側して立ち上がり、口縁部は屈曲して端部が外反する。高台は細く、先端は無釉。体部内面に、8条を単位とする櫛状工具による放射状の文様を施す。	"	"	"	
219	"	17.0			体部はゆるやかに内湾する。外面に蓮弁文を彫り込む。	暗緑色	灰白～黄白色	"	
220	"		4.2		細く高い高台をもつ。疊付部は筋をかき取られている。	薄緑色	灰白色	"	
221	"				口縁端部はやや外反する。外面に蓮弁文を彫り込む。	明緑色	"	"	
222	"				口縁部は片割りとなり、端部はわずかに外反する。	明褐色	灰白色	"	
223	"	12.0			体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直になる。外面に退化蓮弁文を彫り込む。	明緑色	灰白色	"	
224	"	15.8			体部はやや内湾し、内面に沈線状の段を持つ。外面に16条を1単位とする櫛状文を施す。内面にも櫛状文。	淡明緑色	灰白色	"	
225	"		6.5		内面に沈線状の段をもつ。内外面に櫛状文を施す。	薄緑色	灰白色	"	
226	"				体部はやや内湾気味に立ち上がり。外面は櫛状文。内面はヘラ削ぎ文と櫛状文を施す。	薄緑色	"	"	
227	"	15.6			体部は内湾気味に立ち上がり。口縁端部はやや外反する。外面に櫛状文を施す。	明緑色	"	"	
228	"	15.0			体部は内湾気味に立ち上がり。口縁端部は2本の平行双線をもつ。櫛状文を施す。	薄緑色	"	"	
229	"				体部は内湾気味に立ち上がり。口縁部は屈曲後、外反する。外面に文様が片割りされる。	薄明緑色	灰白色	"	
230	青磁 皿	9.6			体部は下位で屈曲し、口縁部はやや先端よりとなる。	明緑色	灰白色	"	
231	"		5.0		体部は下位で屈曲し、底部はあげ底状となる。底外面は無釉。内面に櫛状文。	薄緑色	灰白色	"	
232	褐 四耳 盆				肩部外面に沈線状の段をもち、その位置に把手をもつ。内面は無釉。	褐色	灰白色で黑色粒子を含む。	"	胴部径： 18.2cm
233	"		9.2		頗る高い高台を割り出す。体部外表面はヘラ削り。内面はクロコ形模。	灰白色	灰白色で砂粒を少量含む。	"	
167- 234	壺	21.9			口縁部は折り返され。口縁部をつく。頭部は長く、肩部は折り出す。肩部外間に文様を押印する。	緑灰色	灰白色	"	
235	"				頭部はゆるやかに外反し、口縁部は上下で突出した口縁部をもつ。外面から口縁部内面に色々隙が付着する。	緑灰色	灰白色	"	

器 種 名	器 種 名	重 量 (g)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
		口 径	底 径	厚 度					
167— 236	臺		10.3		底部は平底で、胴部最大径は上位に あり、肩の援る形となる。肩部外 面から強部内面はヨコナダ。他は外 面が腹方向のヘラ削り様ナダ。内面 は回転ナダ。肩部外面に3本の沈線 を入れる。	暗茶灰色	砂粒を多く 含む。密。	良 好	胴部最大径 : 20cm
168— 237	灰 箱 (四)耳釜				肩部に4本の平行沈線と束花スタン ツ文を施す。内面に指頭圧痕がみら れる。	綠灰白色	灰白色	々	
238	山 烹 瓶	16.2			体部にはほぼ直線的で、口縁部はやや 外反する。内外面とも回転ナダ。	灰白色	灰白色で密。	々	
239	*	9.2	4.8	2.0	体部にはほぼ直線的に開き、口縁部 は肥厚して平坦面をつくる。底部外 面に回転糸切り、他は回転ナダ。	灰白色	砂粒を含ま ない。密。	々	
240	灰 瓢 壺		11.8		輪状高台をもつ。体部は内凸し、胴 部最大径はやや上位にある。内面は 回転ナダ。外表面は灰白色の釉が施さ れる。	々	灰白色	々	胴部最大径 : 17.1cm
241	須 悪 器 壺				体部外面上に断面方形の突起を貼り付 ける。内外面とも回転ナダ。	々	砂粒を少量 含む。		胴部最大径 : 24.3cm
242	*		10.0		底部は溝。外表面は調整不明。他は 内外面とも回転ナダ。	々	砂粒を少 量含む。密。	々	
243	東 豊 瓶 鉢	29.3			体部は逆ハの字状に開き、口縁部は 肥厚して平坦面をつくる。内外面と も回転ナダ。	々	白色の砂粒 を少量含む。密。	々	
244	*	16.9			体部は逆ハの字状に開き、口縁部は 肥厚して平坦面をつくる。片くちを もつ。内外面とも回転ナダ。	々	白色の砂粒 を含む。	々	
245	*	29.4			体部は逆ハの字状に開き、口縁部は 肥厚して平坦面をつくり、片くちを もつ。内外面とも回転ナダ。	々	砂粒を少量 含む。密。	々	
160— 246	須 悪 器 鉢	31.0	14.0	12.8	体部はやや内凹気味に開き、中位は 高くなる。口縁部はやや平坦となる。 底部外面はカチ。他は回転ナダ。	明灰色	砂粒を含む。 密。	々	内面下半は 使用摩滅痕 が著しい。
247	*	28.5			体部はやや内凹気味に開き、口縁部 は玉縁状を呈す。口縁部と体部外 面はヨコナダ。内面はハケメ。	淡白～灰色	砂粒を少 量含む。密。 やや軟質。	々	
248	*				口縁部は玉縁状を呈す。内面はハケ メ。外表面はヨコナダ。	外一灰 内一棕白色	砂粒を少 量含む。密。	々	
249	*				口縁部はやや玉縁状を呈す。内面は ハケメ。外表面はヨコナダ。	明灰色	々	やや不良	
250	*				口縁部は外傾し。玉縁状を呈す。 内面はハケメ。外表面はヨコナダ。	々	々	々	
251	*				口縁部は玉縁状を呈す。内面は横 方向のハケメ。外表面はヨコナダ。	々	々	々	
252	*				口縁部は外反する。内面はハケメ。 外表面はヨコナダ。	外一灰 白 内一灰 色	々	々	
253	*				内面はハケメ。外表面はヨコナダ。	明灰色	々	々	
254	*				内面はハケメ。外表面は指頭圧痕。	灰白色	細砂粒を含 む。密。	良 好	
255	*				内面は横方向のハケメ。外表面はヨコ ナダ。	灰～灰白色	砂粒を含ま ない。密。	々	
170— 236	須 悪 器 壺	24.0			口縁部は外反しながら立ち上がり。 喉部は丸い。全体に横ナダ。口縁外 面下部に弱め方向のタタキらしい痕 跡あり。	青灰色	砂粒含まず。 密。	々	

番号	器種	形質(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	厚さ					
170-257	須恵器 甕	22.6			口縁部は外反しながら立ち上がり、 腹部は断面三角形を呈す。横ナデによる 調整。外面下部はタタキの後、 横ナデ。	灰色	砂粒を少量 含む。密。	良 好	
258	々	26.0			口縁部は外反しながら立ち上がり、 腹部に至る。回転ナデによる調整。	青灰色	砂粒を含ま ず。密。	々	
259	々	25.6			口縁部は外反しながら立ち上がり、 腹部外面に低い実線を施す。口縁部 は横ナデ。腹部外面にタタキ目を施す。	外一灰褐色 内一灰白色	々	々	
260	々	26.4			口縁部は外反しながら立ち上がり、 腹部に至る。回転ナデによる調整。	々	々	々	
261	々				外面格子目印き。内面はナデ	外一黑灰色 内一灰褐色	々	良 好	
262	々				外面は格子目印き。内面は同心円印 きの後、ナデ。	々	砂粒を多少 含む。密。	々	
263	々				外面は格子目印き。内面はハケメ。	々	砂粒含ます。 密。	々	
264	々				外面は格子目印き。内面は同心円印 きの後、ナデ。	々	々	々	
265	々				々	々	々	々	
266	々				々	々	々	々	
267	々				外面は格子目印き。内面はナデ。	々	々	々	
268	々				々	々	々	々	
269	々				々	々	々	々	
270	々				々	々	々	々	
271	々				々	々	々	々	
272	々				外面は格子目印き。内面は同心円印 きの後、ナデ。	々	々	々	
171-273	々				頸部は横ナデ。肩部外面は格子目印 き。内面は同心円印きの後、ナデ。	外一白灰色 内一暗灰色	々	々	
274	々				肩上部はヨコナデ。下部外面は格子 目印き。内面は同心円印き。	外一灰白色 内一灰褐色	々	々	
275	々				外面格子目印き。内面同心円印きの 後、ナデ。	灰色	砂粒を少量 含む。密。	々	
276	々				々	外一灰褐色 内一暗灰色	砂粒含ます。 密。	々	
277	々				々	灰白色砂粒 を少量含む。 密。	々	々	
278	々				々	灰色	々	々	
279	々				々	々	砂粒含ます。 密。	々	
280	々				々	外一灰白色 内一灰褐色	々	々	
281	々				々	灰色	砂粒含ます。 密。	々	
282	々				々	々	砂粒を少量 含む。密。	々	
283	々				外面格子目印き。内面ナデ。	々	々	々	

機器番号	器種	法面寸法 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口幅	底幅	総高					
171-284	須恵器				外面格子目印き。内面同心円印きの後ナデ。	外-灰白色 内-灰色	砂粒含まず。 密。	良好	
285	タ				タ	タ	砂粒を少量含む。 密。	タ	
286	タ				タ	外-灰色 黒灰色 内-灰色	砂粒含まず。 密。	タ	
287	タ				外面格子目印き。内面ナデ。	灰色	タ	タ	
288	タ				外面格子目印き。内面同心円印きの後。ナデ。	タ	タ	タ	
289	タ				タ	タ	砂粒を少量含む。 密。	タ	
290	タ				タ	タ	タ	タ	
172-291	タ				外面細かい格子目印き。内面ハケメ。	外-灰色 内-青灰色	タ	タ	
292	タ				外面やや細かい格子目印き。内面ハケメ。	灰色	砂粒含まず。 密。	タ	
293	タ				外面やや長方形の格子目印き。内面ハケメの後、一部ナデ。	紫かかった 灰白色	砂粒を少量含む。 密。	タ	
294	タ				外面格子目印き。内面同心円印きの後。ナデ。	タ	微砂粒を少量含む。 密。	タ	
295	タ				外面格子目印き。内面ハケメ。	暗灰色	タ	タ	
296	タ				外面格子目印きの後。ハケメ。内面ハケメ。	灰色	砂粒を少量含む。	タ	
297	タ				外面格子目印き。内面ハケメ。	タ	タ	タ	
298	タ				外面格子目印き。内面ハケメ。	外-灰色 内-暗灰色	砂粒を少量含む。 密。	タ	
299	タ				外面細い格子目印き。内面ヨコナデ。	外-暗灰色 内-灰色	タ	タ	
300	タ				外面格子目印き。内面ハケメ。	灰色	タ	タ	
301	タ				外面細い格子目印き。内面同心円印きの後。ナデ。	タ	砂粒含まず。 密。	タ	
302	タ				タ	青灰色	タ	タ	
303	タ				外面細かく浅い格子目印き。内面同心円印きの後。ナデ。	灰色	微砂粒を含む。 密。	タ	
304	タ				外面細かい台形状の格子目印き。内面同心円印きの後。ナデ。	外-灰黑色 内-灰色	タ	タ	
305	タ				腹部は内外面ともナデ。肩部は外面格子目印き。内面はハケメ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。 密。	やや不良	
306	タ				外面格子目印き。内面ハケメ。	一部灰色 一部白灰色	砂粒を少量含む。 密。	タ	
307	タ				外面細かい長方形格子目印き。内面ハケメ。	暗灰色	タ	タ	
308	タ				タ	タ	タ	タ	
309	タ				タ	桃白色 一部灰色	タ	タ	
310	タ				タ	暗灰色	タ	タ	
311	タ				タ	タ	砂粒含まず。 密。	タ	

番号	器種	内観(目)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口	底	腹					
172-312	須恵器 便器				外面細かい長方形格子目印き。内面ハケメ。	模白色 一部灰色	砂粒含まず。 密。	やや不良	
313	タ				タ	模白色	砂粒を少量 含む。密。	タ	
314	タ				タ	灰 色	砂粒を含ま ず。密。	タ	
315	タ				タ	タ	タ	タ	
316	タ				タ	暗灰色	タ	タ	
317	タ				外面大きめの格子目印き。内面ハケ メ。	白 色	タ	タ	
318	タ				タ	タ	タ	タ	
319	タ				タ	タ	タ	タ	
320	タ				タ	タ	タ	タ	
174-321	タ				外面格子目印き。内面同心円印きの 後、ナデ。	灰 色	砂粒を少量 含む。密。	タ	
322	タ				タ	模白色	タ	タ	
323	タ				タ	タ	タ	タ	
324	タ				タ	タ	タ	タ	
325	タ				タ	外一茶灰 色 内一白灰色	タ	タ	
326	タ				タ	模白色	タ	タ	
327	タ				タ	灰 色	タ	タ	
328	タ				タ	明灰色	砂粒含まず。 密。	タ	
329	タ				タ	灰 色	タ	タ	
330	タ				タ	外一灰色 内一灰白色	タ	タ	
331	タ				外面細かく深い格子目印き。内面ナ デ。	白 色	タ	タ	
332	タ				タ	灰 色	砂粒を含む。 密。	タ	
333	タ				外面格子目印き。内面細かいハケメ。	タ	砂粒を少量 含む。	良 好	
334	タ				外面格子目印き。内面ナデ。	白 色	砂粒含まず。 密。	やや不良	
175-335	タ				外面平行印き。内面同心円印き。	外一茶灰色 内一黒灰色	砂粒を少量 含む。密。	良 好	
336	タ				外面長方形の印き。内面ナデ。	黒灰色	タ	タ	
337	タ				タ	タ	タ	タ	
338	タ				外面格子目印き。内面ナデ。	暗灰色	砂粒を含む。 密。	タ	
339	タ				外面長方形の深い格子目印き。内面 ハケメの後、ナデ。	外一灰黑色 内黑灰色	砂粒を少量 含む。密。	タ	
340	タ				外面浅い方形の印き。内面同心円印 きの後、ハケメ。	タ	タ	タ	
341	タ				外面斜め方向の印き。内面ヨコナデ。	灰 色	タ	タ	

標	番	目	法	量 (cm)	形態・手法の特徴	色	粘	成	備考
		口	藻						
		底	基						
		部	基						
175-	342	魚	底		外面タキの後、ナデ。内面ハケメ。	灰 色	砂粒を少量含む。密。	良 好	
	343	底	基		外面長方形の格子目叩き。内面ナデ。	灰白色	〃	〃	
	344	底	基		外面平行叩き。内面斜め方向のハケメの後、ナデ。	暗茶色	砂粒を多く含む。密。	やや不良	
	345	底	基	14.6	外面平行叩き。内面ナデ。	明灰色	砂粒を少量含む。密。	良 好	
	346	底	基		外面平行叩きの後、ナデから内面ナデ。	暗灰色	〃	やや不良	
	347	底	基		外面叩きの後ナデ。内面ナデ。	外一熟灰褐色 内一灰褐色	微砂粒を少量含む。密。	良 好	
	348	底	基	14.8	体部外面はヨコナデ。底部外面はナデか。内面は回転方向のナデ。	灰 色	微砂粒を少量含む。	〃	
	349	底	基	13.6	体部内外面ともヨコナデ。底部外面はナデ。	〃	〃	〃	
	350	底	基		体部内外面ともヨコナデ。底部内外面ともナデ。	〃	砂粒を少量含む。密。	〃	
176-	351	土	基	33.0	口縁部は「く」の字状に外反する。体部は内面気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ。一部にハケメを消した跡が残る。内面はヨコナデ。体部外面は横方向のナデか。内面は大きめのハケメの後、細かいハケメが施されている。	外一深茶褐色 内一淡黄褐色	0.1~0.2cm程度の微砂粒を含む。	やや良好	体部にやや厚めの炭化物が付着。
	352	土	基	30.6	11種類は「く」の字状に外反し、縁部は少し凹む。体部は内面気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ。一部にハケメを消した跡が残る。内面はヨコナデ。体部外面は横方向のナデか。口縁部及び体部内面は横方向のハケメが施されている。	外一茶褐色 内一淡黄褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒(雲母・石英等)を含む。	良 好	外面一部に葉付着。
	353	土	基	34.4	口縁部は「く」の字状に外反する。体部は内面気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデか。体部外面は縦方向のナデか。内面及び体部内面は横方向のハケメ。内部外面は調整が不明瞭。所々ヨコナデが残る。	淡黄褐色	0.1~0.2cm程度の石英粒をふくむ。	やや良好	外面一部に葉付着。
	354	土	基	31.6	口縁部は「く」の字状に外反する。体部は内面気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ。内面及び体部内面は横方向のハケメ。体部外面は斜め方向のナデ。	外一茶褐色 内一淡黄褐色	0.1~0.2cm程度の石英粒をふくむ。	良 好	外面に一部保付着。
	355	土	基	35.0	口縁部は「く」の字状に外反する。体部は内面気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ。内面及び体部内面は横方向のハケメ。体部外面は斜め方向のナデ。	茶褐色	石英等の微砂粒を含む。	〃	摩滅が著しい。表面にわずかに葉が付着。
	356	土	基	33.3	口縁部はやや外反したがら立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ。一部ナデで消してある。内面は横方向のナデ。	外一黑色 (炭化物付着) 内一淡黄褐色	0.2~0.3cm程度の砂粒(石英等)を含む。	〃	ハケメは浅く無い。
	357	土	基	30.8	口縁部は「く」の字状に外反する。体部は内面しながら立ち上がる。口縁部外面はヨコナデと思われる。内面は器面剥離が著しく調節不良。体部は内外面とも横方向のハケメによる調整。内面の口縁部と体部の境に突起が入る。	淡茶褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。	やや良好	表面にうすく葉がかかる。
	358	土	基	25.4	口縁部は内面しながら立ち上がる。体部との境がややくぼみ。内面には突起がある。口縁部はヨコナデ。体部外面は横方向のナデの後、ナデ。体部内面は調整不良。	外一淡茶褐色 内一淡黄褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒(石英等)を含む。	〃	摩滅が著しい。表面が凸凹している。

番号	器種	重量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	厚さ					
176-359	土師質鋤	30.0			口縁部は内側しながら立ち上がり、くびれ部は外側がやや凸り、内面がやや凹む。外圍は斜め方向のハケメの後、ヨコナテを施す。内面は調整不明。	黄褐色	0.2cm程度の石英を含む。	良好	
179-400	須恵器	9.0			円錐形。底部は中央にむかひわざかに盛くなり、よく使用しており摩滅している。回転ナゲによる調整。	青灰色	砂粒を少量含む。否。	*	

第11表(2) 石器計測表

No	種類	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考		
177-360	土師土鉗	3.3	2.4	0.5	16.4	半分破損		
361		4.0	2.3	0.6	18.4			
362		4.0	2.3	0.6	12.3			
363		3.3	2.4	0.4	8.64			
364		3.4	2.0	0.6	10.97			
365		3.2	2.2	0.5	11.7			
366		3.9	2.2	0.6	11.8			
367		3.5	2.1	0.55	11.3			
368		3.2	2.1	0.4	9.65			
369		3.1	1.8	0.4	7.77			
370		2.8	1.8	0.5	7.1			
371		3.5	2.1	0.45	12.2			
372		6.2	2.3	0.7	27.19			
373		4.9	2.1	0.8	11.09			
374		1.9		0.55	7.35			
375		5.6	1.8	0.6	17.72			
376		5.0	1.9	0.4	12.2			
377		4.1	1.9	0.4	13.2			
378		5.0	1.8	0.6	12.25			
379		5.1	2.2	0.6	20.34			
380		4.2	2.2	0.6	14.8			
381		4.5	2.3	0.5	18.84			
382		4.2	1.95	0.7	11.1			
383		3.7	1.8	0.4	8.0			
384		3.5	1.3	0.4	5.48			
385		2.9	3.7	0.7	37.3			
386	鉄器	23.6	(短幅)2.8	(短幅)1.4	213			
387	鉗	8.5	1.0	(端幅)0.2	5.95			
388	鉗	7.6	0.7	0.4	7.5			
389	鉗	4.7	1.0	(中間)0.7	5.7			
390	鉗	4.7	0.8		7.08			
391	鉗	4.05		(中間)0.5	4.95			
392	鉗	3.6	0.5		2.53			
393	鉗	2.8	0.6		1.76			
394	鉗	3.7	0.6		2.6			
395	粘土車	4.2	(盤幅)0.4	(柱幅)0.6	26.22			
396	不明	1.3			6.6			
397	石器	6.0	4.4	26				
398	砥石	4.9	2.9	(端幅)1.5 (盤幅)2.0				
399	砥石	13.4	9.8	10.2				

湯 谷 遺 跡

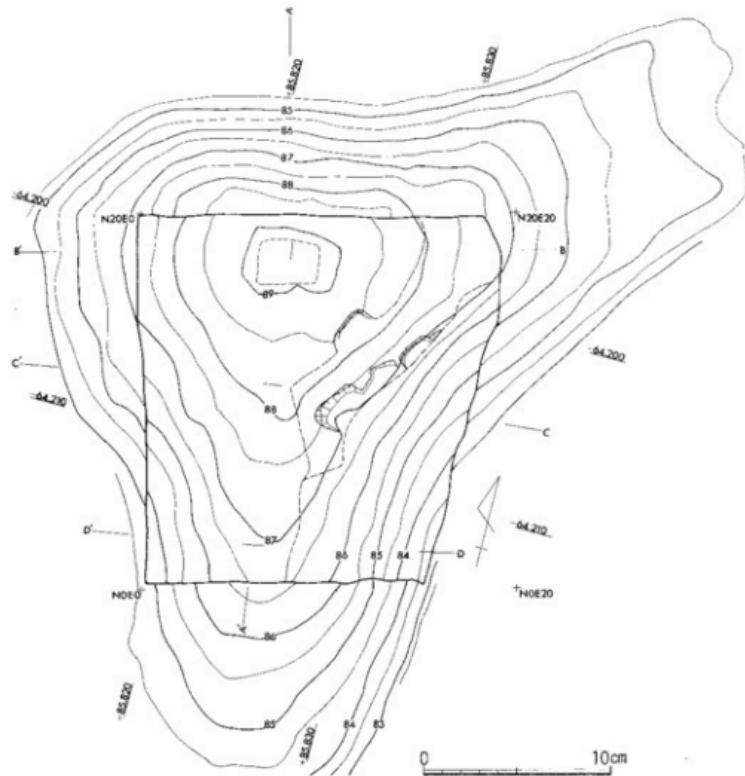
—八東郡東出雲町—

XII 湯谷遺跡

遺跡の概要

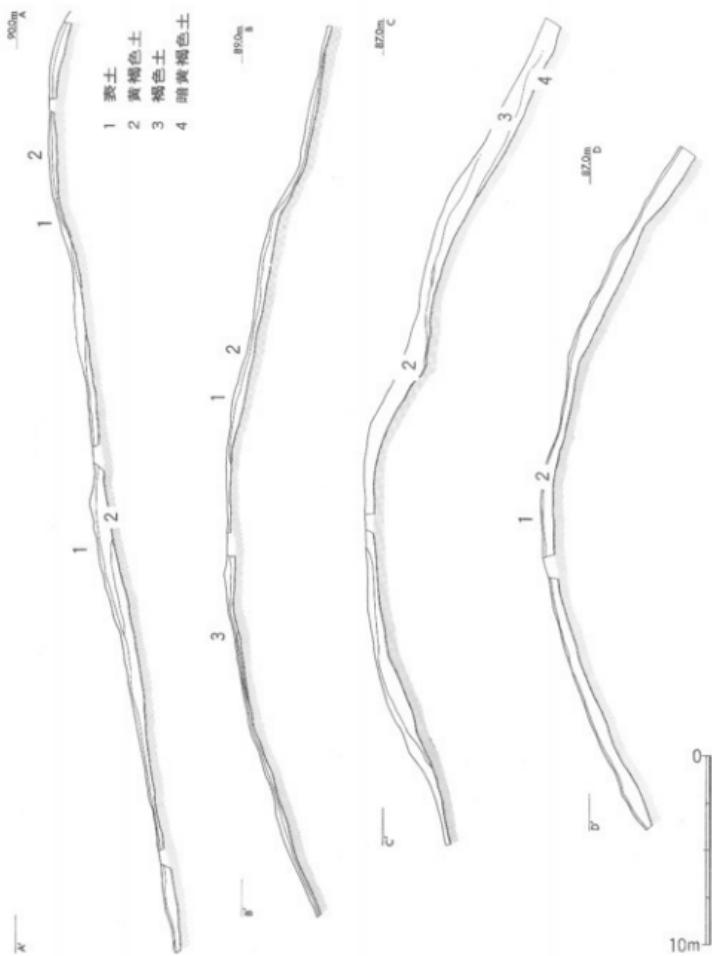
湯谷遺跡は、八束郡東出雲町春日の標高89mの丘陵頂部に位置している。意宇平野の南端を流れる意宇川より約450m南へ入った丘陵部で、ここからは意宇平野が望め、平野北側の出雲国分寺跡も見えるという高所である。谷を挟んで西側の丘陵部には、春日岩舟古墳、古天神古墳、百塚山古墳群といった大草丘陵古墳群が所在する地域である。

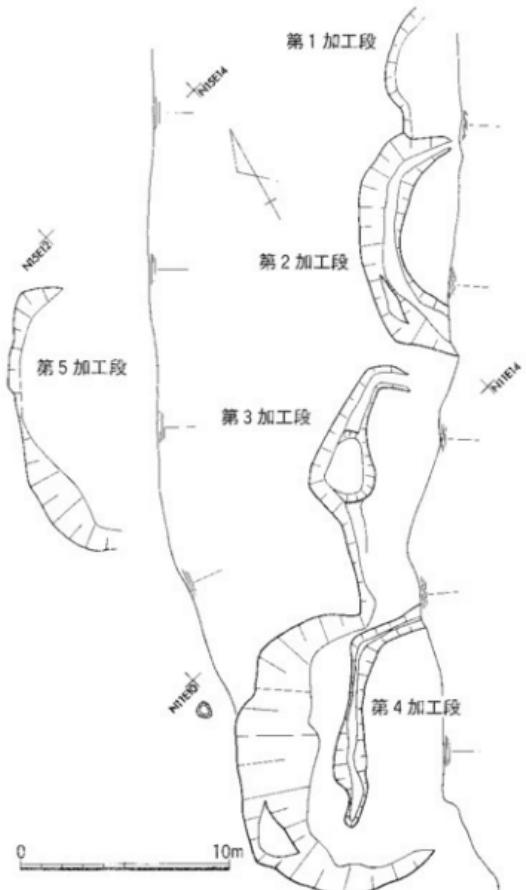
調査区は、丘陵が北東方向から南へ向って折れ曲る尾根上に設定した。丘陵は、尾根の幅10mを



第180図 湯谷遺跡地形測量図

第181図 湯谷遺跡土層図





第182図 湯谷遺跡検出遺構実測図

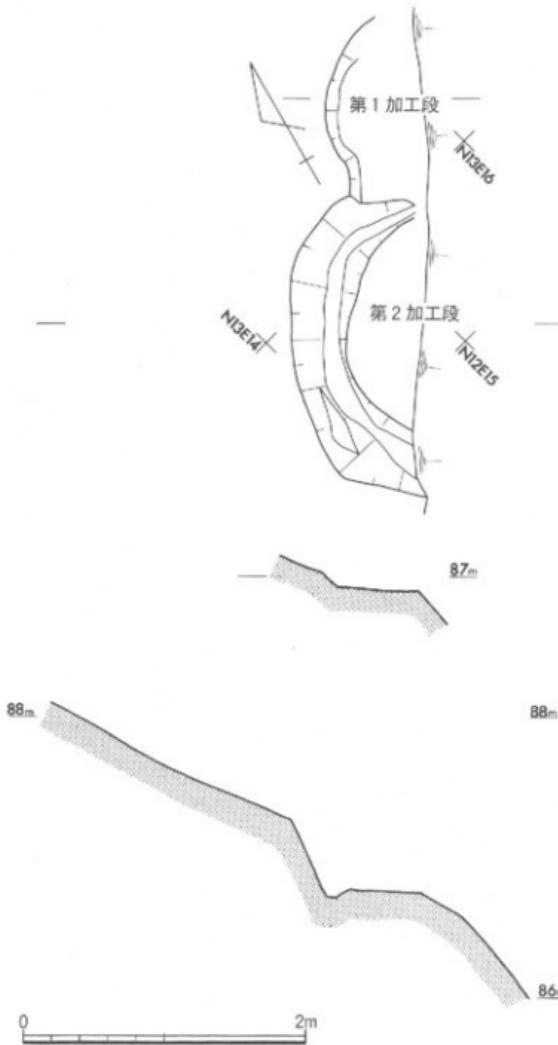
第1～4までは、ほぼ同一レベルで位置し、第5のみが約1.5m上部に位置している。これらの加工段から上の斜面はかなり緩やかであるが、加工段より下の斜面の傾斜が急となっている。また加工段の位置する絶面は、南東方向に向いて位置している。

第1加工段 加工段中最も東に位置し、床面の標高は86.7mを測る。丘陵斜面を弧状にカットし平坦面を作り出している。現存長1.3m、幅0.7mを測る。西側は第2加工段と切り合っており、東側は斜面によって削られている。床面は高さ0.15mと低く、覆土は、暗褐色土で、遺物は出土していない。

測り、調査区北側の最高部で15×10mの方形台状の高まりが認められた。南東斜面では、地形測量の結果、幅1～2mのテラス状の平坦面が見られた。尾根上では、表土下に厚さ20cmの黄褐色土が堆積し、その下は地山となっている。南東部の斜面では、厚さ20cmの黄褐色土が堆積し、その下が地山となっている。特に北側の方形台状の高まりには、土の堆積がうすく、表土の下が直ぐ地山といった感じであった。

検出した遺構

遺構は、南東斜面で加工段を5ヶ所検出した。当初、北側の方形台状の高まりが何らかの遺構と思われたが、地山面で精査したところ何も遺構は検出できず、自然地形であると判明した。加工段は、第1と第2、第3と第4がそれぞれ切り合っており、第5のみ単独で位置している。

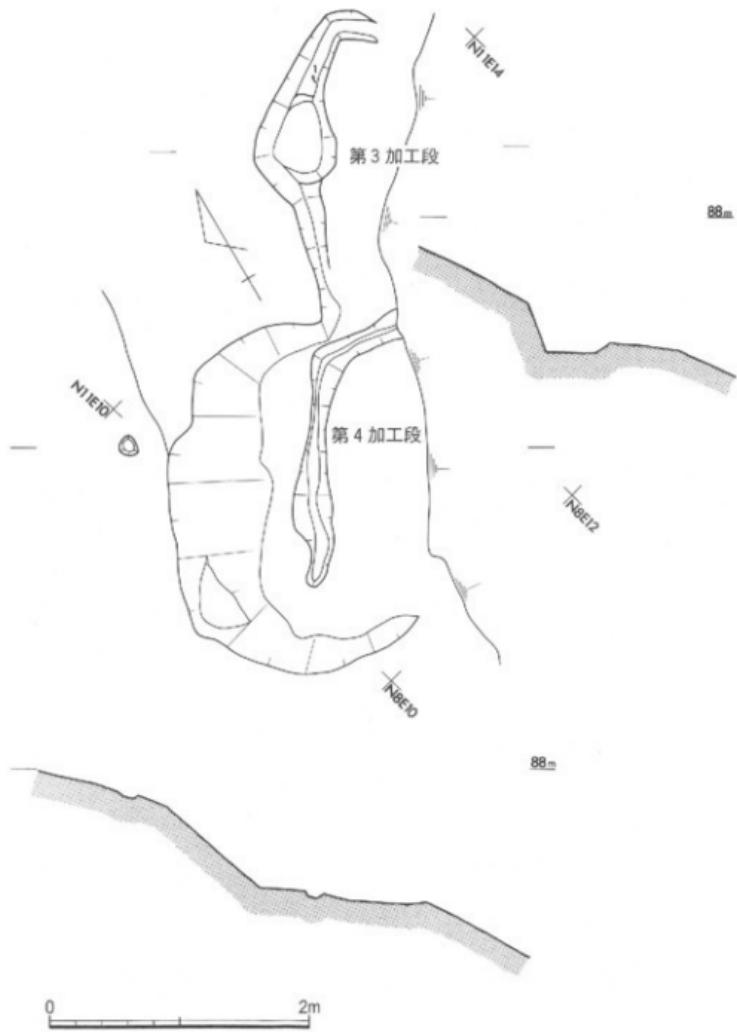


第183図 湯谷遺跡構造実測図

る。この土壤内の覆土は、暗褐色土に炭化物を多く含んでいる。加工段の覆土も暗褐色土である。溝からは、鉄釘1が出土している。鉄釘(第186図1), 長さ6.0cm, 断面方形を呈し、頭部はL字状に折曲している。重さ2.62gを測る。

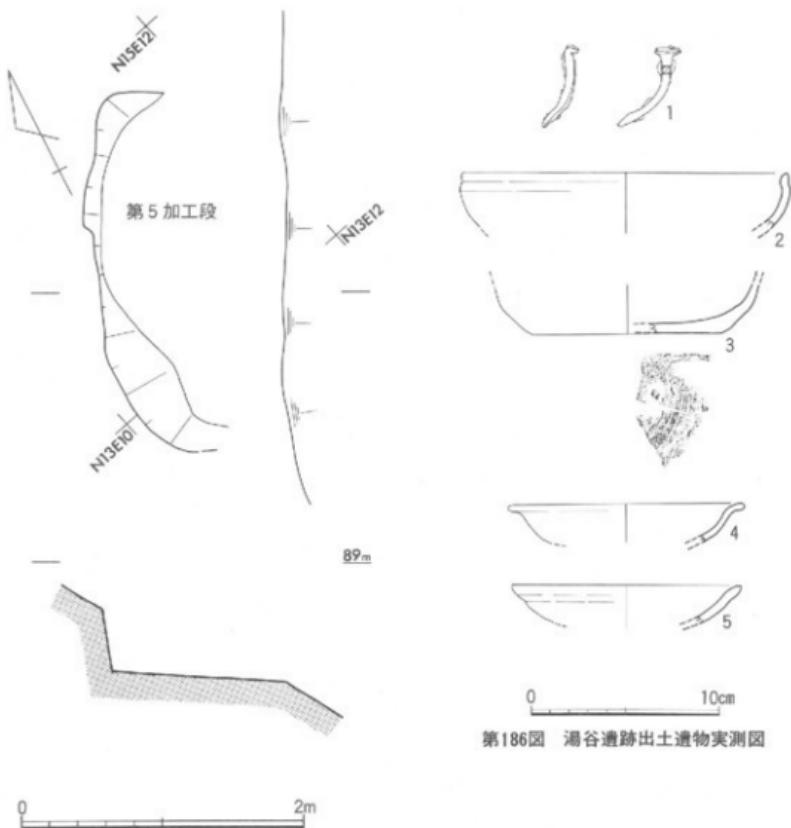
第2加工段 北側
を第1加工段と切り合っており、東側は斜面により流失している。平面形は、弧状を呈しており、壁際に底の幅0.2mの溝が周っている。現存長2.1m、幅0.95mを測る。西側の壁には、幅0.5m、長さ1.2mのテラスが作り出されている。壁の高さは、0.52mを測り、覆土は暗褐色土で覆土中より銅銭の焼け歪んで13枚が重なったものが出土地している。表面の文字は見えず、名は不明であるが、径は2.0cm~2.3cmである。

第3加工段 西側
を第4加工段と切り合っており、平面形は不整三角形を呈す。壁際には、底幅0.4mの溝が周ぐり、中央には長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mを測る土壤がある。



第184図 湯谷遺跡遺構実測図

第4加工段 加工段中の西端に位置し、平面形は隅九方形を呈す。長さ2.7m、幅2.0m、壁高0.6mを測る。壁の南西コーナーには、長さ0.6m、幅0.3mのテラスを作り出している。床面には、「L」字状の溝があり、幅0.2m～0.3m、深さ0.06mを測る。覆土は、黄褐色土に地山ブロックを



第186図 湯谷遺跡出土遺物実測図

0 2m

第185図 湯谷遺跡遺構実測図

混入し、遺物は出土していない。この加工段の西側には、直径0.25mのピットがあるが深さ4cmと浅いものである。

第5加工段 他の加工段より標高差1.5m上の斜面に位置している。長さ2.6m、幅1.4m、高さ0.4mを測る。覆土は、黄褐色土に地山ブロックを混入し、遺物は出土していない。

出土遺物（第186図）

(2・3)は、須恵器、环とともに加工段付近より出土している。(2)は、环の口縁部で、推定口径17.2cmを測る。体部に丸味を持ち、口縁端部がやや内側に折曲している。色調は青灰色を呈し、胎土は細かい砂粒を含む。(3)は、环の底部で、底径10.0cmを測る。底部回転糸切りにより

切り離されている。色調は茶灰色を呈す。（2・3）の時期はとも奈良時代と思われる。（4）は、白磁の皿で、加工段付近より出土している。体部がやや内湾し口縁部がやや外反する。推定口径12.5cmを測る。胎土は、明灰白色、釉はややくすんだ灰白色を呈して表裏全体にかかっている。器形と釉の特徴から15世紀後半～16世紀代と思われる。（5）は、土師器の皿で丘陵頂部より出土している。体部に丸味を持ち、口縁端部がやや外反している。内外面ヨコナデを施しており胎土は精選されている。

ま　と　め

今回調査を行った湯谷遺跡は、標高89mの丘陵頂部に位置している。この場所は意宇平野の南側の丘陵部ということで平野の大部分を見渡すことが可能である。検出した遺構は、幅1.3m～2.7mを測る住居址状の加工段である。この遺構は平野と反対側の南側斜面に築かれている。加工段は幅が狭く、柱穴等も検出していないことから住居等の性格は考えにくいと思われる。第3加工段では黒色土の覆土中より釘が出土し、第2加工段からは焼け歪んだ銅銭が出土していることより、この場で、火を使用したことが想定される。これらの遺構の時期は室町時代後期と考えられる。この時期には平野の周辺では、春日城⁽¹⁾、城山⁽²⁾、茶臼山城⁽³⁾が築かれており湯谷遺跡とこれら城跡との関連も考えられる。

注

(1)・(2)・(3) 「日本城郭大系」 島取、島根、山口、1980年

春日シヌン谷遺跡

—八束郡東出雲町—

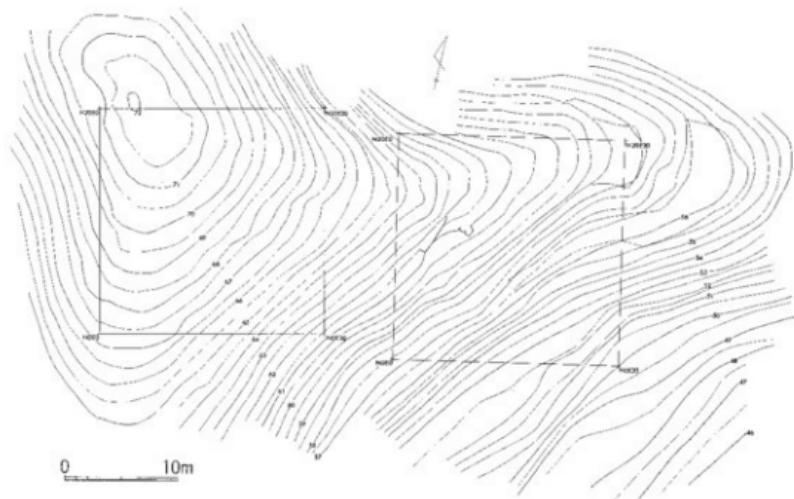
III 春日シヌン谷遺跡

遺跡の概要

春日シヌン谷遺跡の所在地籍は八東郡東出雲町春日シヌン谷365外となっている。

遺跡は標高約70mを測る丘陵上斜面にあって、前述した湯谷遺跡の南方約600mに位置している。周辺は、丘陵を縫うように谷が複雑に入組んでいる。

調査は昭和59年9月18日から調査区間周辺の樹木伐採を行い、続いて同20日から地形測量を実施した。この春日シヌン谷遺跡のある丘陵には2基の鉄塔建設が予定されていた。そのうちの1基は松江連絡線20号鉄塔と称され丘陵頂部に、もう1基同幹線19号鉄塔と称されるもので先の東側斜面に建設されることとなっていたため、それぞれ、20m×20mの調査区を設定し、前者を春日シヌン谷遺跡I区、後者を同II区と称して区別することとした。調査は2つの調査を平行して行なつたがII区から遺物が出土し始めたため、この調査区に主力を注ぐこととした。ここでは巨岩の陰から手握土器等が出土し、また斜面では夥しい土器片とともに住居跡状のテラスを4ヶ所検出した。これらは出土した土器から、いずれも古墳時代後期に属するものであることが確認された。一方I区



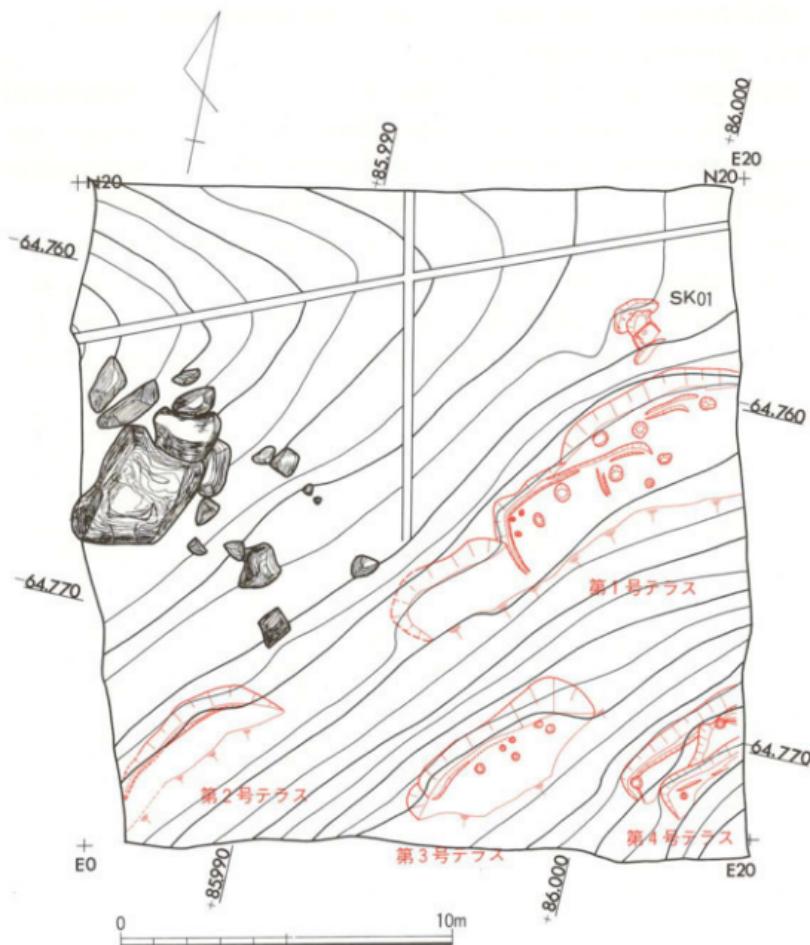
第187図 春日シヌン谷遺跡地形測量図

でも精査を試みたが遺構や遺物を検出するには至らなかった。

検出した遺構と遺物

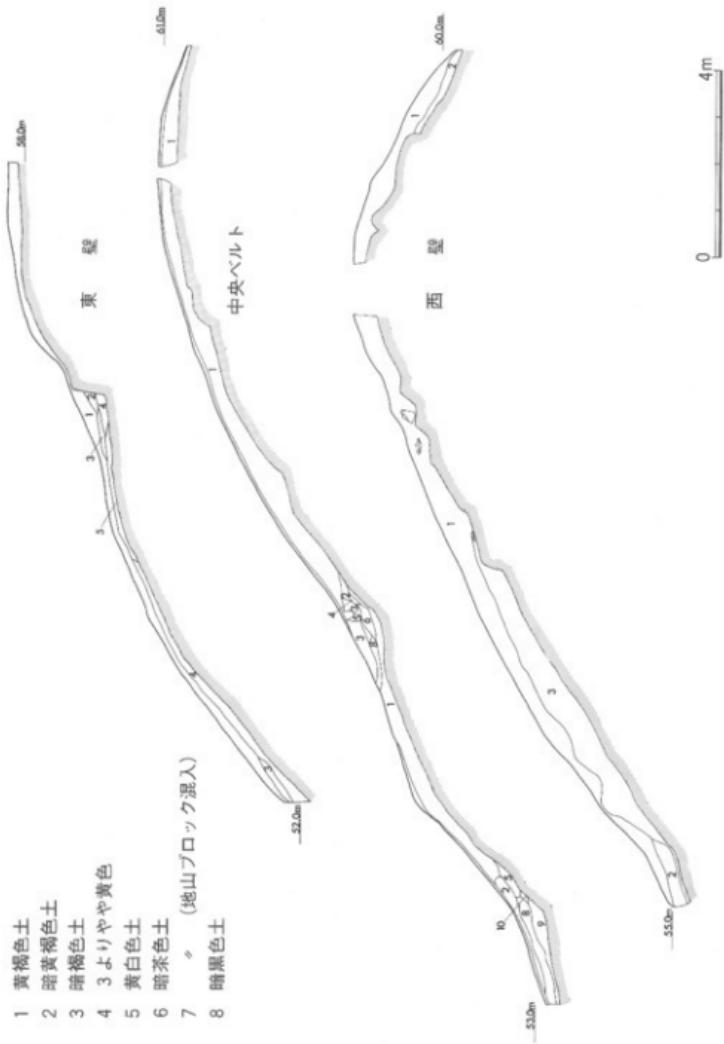
今回の調査で検出した遺構は春日シヌン谷遺跡Ⅱ区に限られた。ここではSK01とした小規模な土壙、テラス状遺構4を検出した。この他巨岩の陰から手摺土器が出土した。

以下順を追って、その説明を記すこととした。



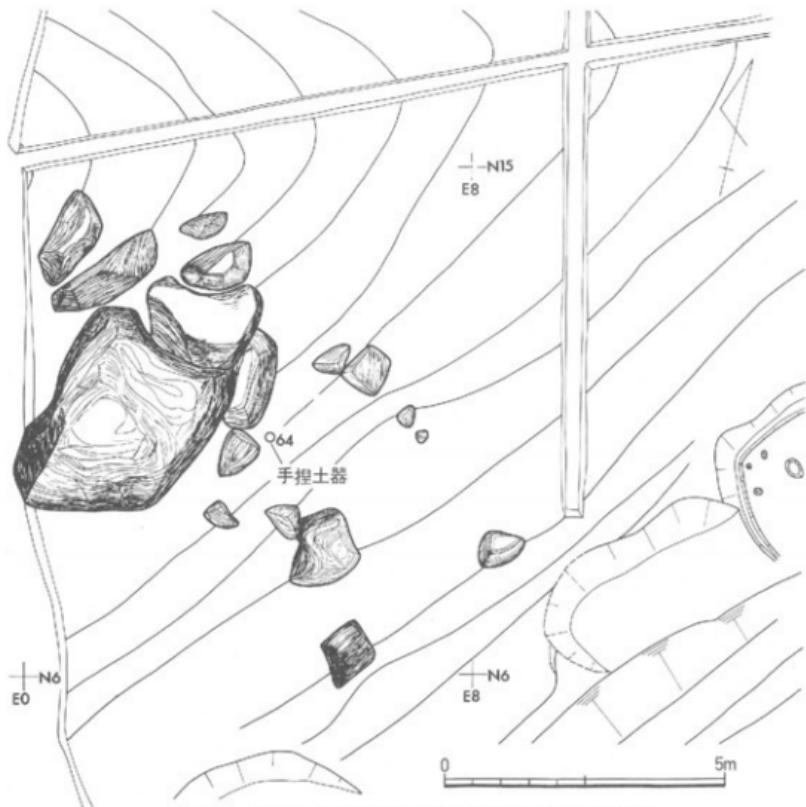
第188図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区検出遺構全体図

第189図 春日シヌン谷遺跡II区土層図



巨岩付近 東に延びる尾根の南側斜面上方に長径4m、短径3m、高さ1.5mを測る巨岩が認められた。これはこの山を形成する岩の露頭で、表土除去以前から上部の一端が露出していた。周辺に散在する石は元来は一体のものであったと推定された。また斜面下方で認められた石も地山面よりやや浮いた状態で認められたもので、これも同様なものであろうと考えられる。

最初に記した巨岩は上面がやや平坦になっている点が注意され、周辺に散在する石は後世、山道を作る折、破碎されたり動かされたりした形痕が認められる。巨岩の陰から出土した手摺土器もさほど大きな移動はないが、原位置を保っているとは言難い状態であった。しかし、原位置を保ってはいないとはいって、この巨岩付近から出土したことは重要で、このⅡ区全体の性格を考えるにきわめて興味ある資料を提供したことになろう。



第190図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区巨石付近手摺土器出土状態

SK01 東に延びる尾根の南側斜面。
傾斜変換点付近に穿たれている階段状を呈す掘り込みである。

このSK01は最上段に、東西110cm、南北70cm、深さ30cmを測る横長の土壌が掘られ、その南辺は、東西90cm、南北50cmにわたって剥えられている。さらにその南辺に東西80cm、南北50cm、深さ約20cmを測る段が掘り込まれており、その南辺に接して、東西110cm、南北30cm、深さ20cmを測る平面三月形を呈す段が掘り込まれている。

つまり3ないし4個の加工段を連結させた形となっている。最上段の底面よりやや浮いて炭化物、土師器壺片が散見された。下から2つ目の段には地山の石が5個置かれていた。土層の観察によると、土層は一様で段状を呈す個々の段の間には新旧関係は認められなかった。上段の底面には火を受けた形跡があり、出土した炭化物とあわせ考えると火を使用した遺構である可能性が高い。

第1号テラス

遺構が穿たれている斜面の上方は25度程度であるが、下方は40~45度とかなり急な傾斜となっている。第1号テラスとしてものは上方の比較的ゆるやかな斜面にあって調査区東壁中央から西に向って削り出された平坦面である。この平坦面は前述した斜面に80~60度の角度で掘り込まれるもので東西11m、南北1.4~3.4mの規模となっている。壁の上部は弧状を呈し、最も西方では「L」字状におさまる形となっている。壁沿には大小10個の柱穴状落ち込みや、浅いものではあるが2条の溝が認められた。弧状を呈す壁は3つの弧を連結させた形となっているが、東方に位置する2つは柱穴状落ち込みや溝の状況から2棟の住居跡奥壁が重複しているものと判断された。

東側に位置するものから順次SB01・SB02・SB02西側隣接平坦面と称し、説明を記すこととする。東側の住居跡SB01としたのは東側調査区壁から弧状に西に延びる長さ6mを測る壁を一辺とするものである。この平坦面には壁に沿って長さ1.5m、幅30cm、深さ3cmを測る溝がある。一方、西側にも壁に直行する形で南へ延びる長さ90cm、幅1.5cm、深さ5cmを測る溝がある。この2条の溝は現状では途切れた形となっているが本来は「L」字を呈す溝であった可能性が高い。壁に直行



第191図 春日シヌン谷遺跡 II 区 SK-01、実測図

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

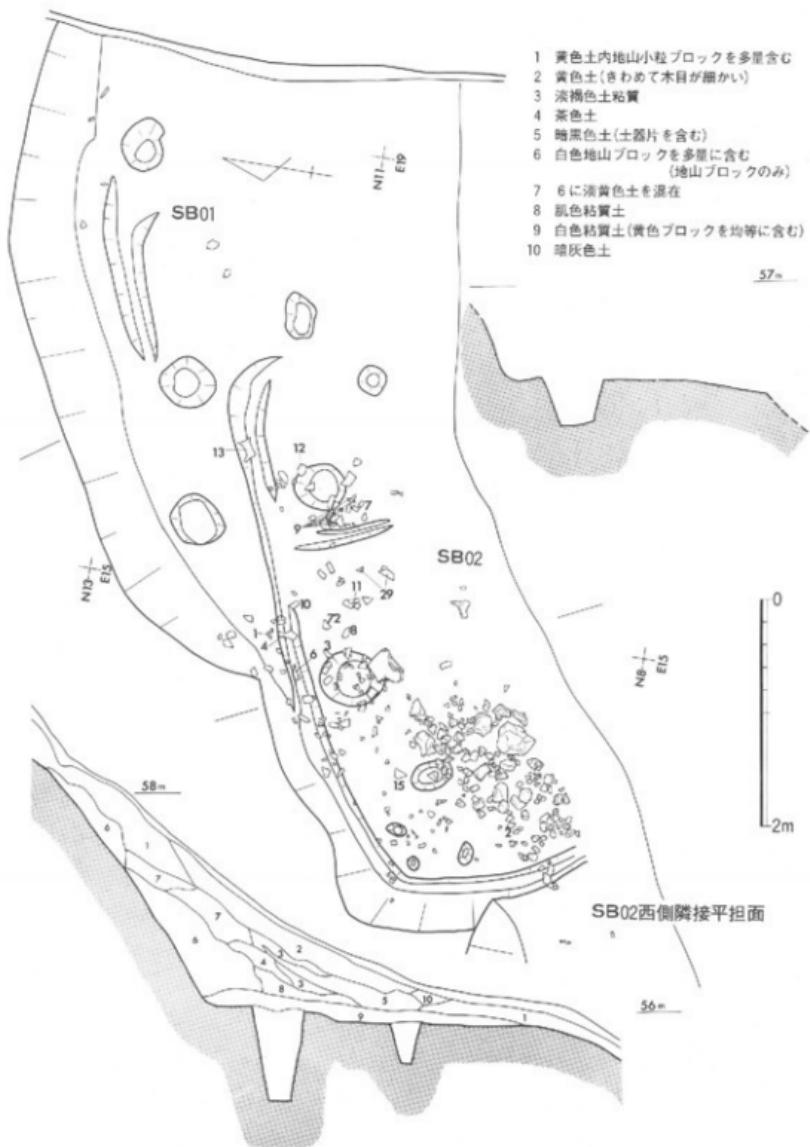
(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)

(Figure 191: Actual measurement diagram of SK-01, Nagaokasenumaya Site, II Area)



第192図 春日シヌン谷遺跡II区1号テラス実測図

する溝を西限とする平坦面には計6個の柱穴状落ち込みが認められた。

これらの柱穴状落ち込みはかならずしもSB01に伴うものとは限らずSB02のものである可能性も考慮されよう。

中央のSB02としたのは南に向って「コ」の字状に開く形に施溝された溝によって画される平面である。検出された柱穴状落ち込みは計5個あって、その法量は以下のとおりである。

溝は全長6.7m、幅20cm、深さ5cmを測るもので東端はSB01の西限を画すと考えられる溝と交差する形で始まり、壁に沿って走り、南へ向かい大きく屈曲する。壁に沿って直線をなす東西4mがこの住跡の一边を示すものと推定される。この溝に画された平坦面には夥しい量の土器小片や土製支脚が認められた。

SB02西側隣接平坦面としたものは、SB02の西に隣接する形で削り込まれている東西3.5m、南北1.5mを測る平坦面で柱穴や溝は認められず、土師器の小片が散見されるにとどまった。

第1号テラス上の遺構は重複しており、SB02西側隣接平坦面・SB01（古）→SB02（新）という関係が認められた。

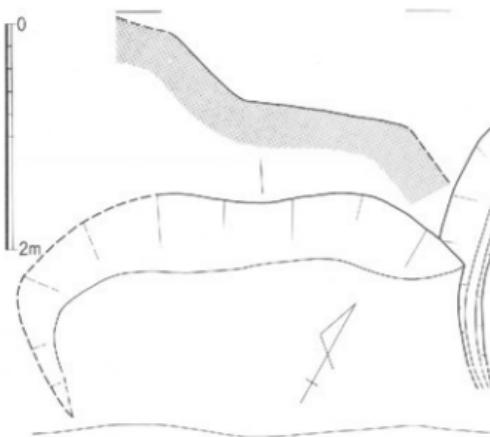
第1号テラス出土遺物

第1号テラスでは夥しい量の土師器片が出土したが、いずれも小片となっていた。出土分布はSB02内が最も密であったが、図示し得るものは僅少である。出土遺物は須恵器蓋坏（第194図1・2）、土師器甕（3～11）、瓶の把手（12）、土製支脚（13）等があって、これらは須恵器蓋坏の形態から山陰須恵器編年Ⅲ期のころに属するものと考えられる。

量的に多いのは土師器の甕で、「く」の字状の口縁をもち、内面ヘラ削り、外面は刷毛目調整がみられる。土製支脚は1点あって、上部の三支中央にヘラ描き「十」が認められる。

第2号テラス

調査区の南西隅で検出されたもので、斜面を東西約6mにわたって弧状に削ることによって上観三日月形を呈す平坦面が作り出されている。平坦面は幅の最も広いところで1.2mを測り、南辺はかな



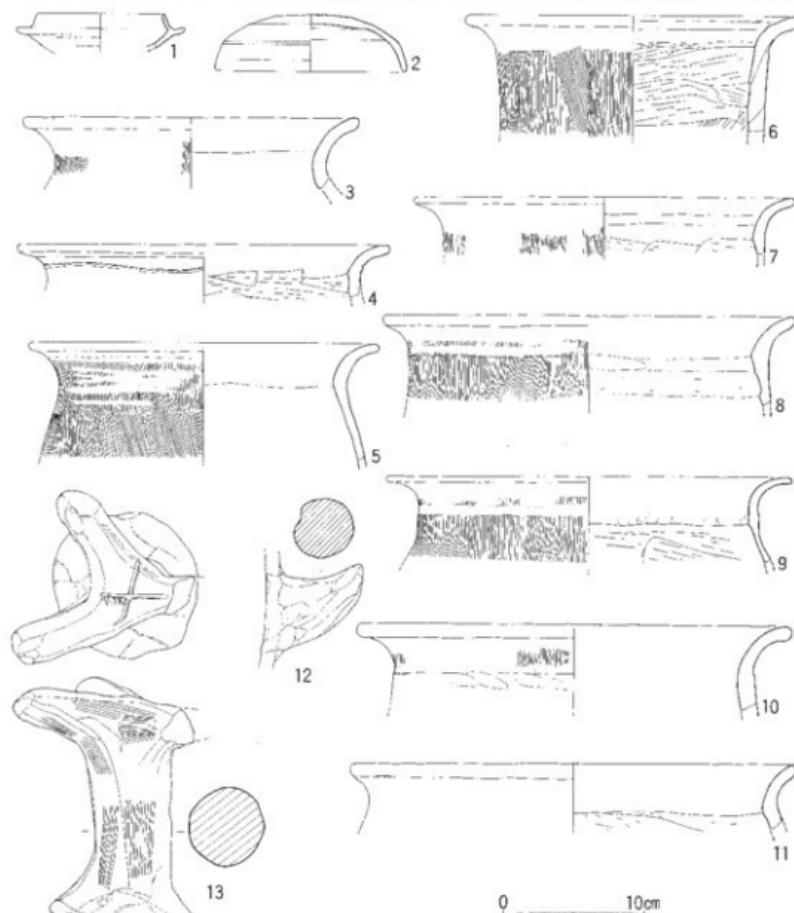
第193図 春日シヌン谷遺跡 SB02西側隣接平坦面実測図

り崩れているものと判断された。壁際に沿って幅20m、深さ3cmの溝が掘り込まれているが、両端は不明瞭となっている。精査を試みたが柱穴状落ち込み等は認められなかった。

このテラスから出土した遺物には土師器・須恵器・手摺上器・土製支脚等があった。これらはいずれも小片となっており、東西に走る溝のほぼ中央、テラスの東側南辺等に散見された。

第2号テラス出土遺物

第2テラスでは、テラスそのものの遺存状態が悪いことや、面積が狭いことも関連して出土遺



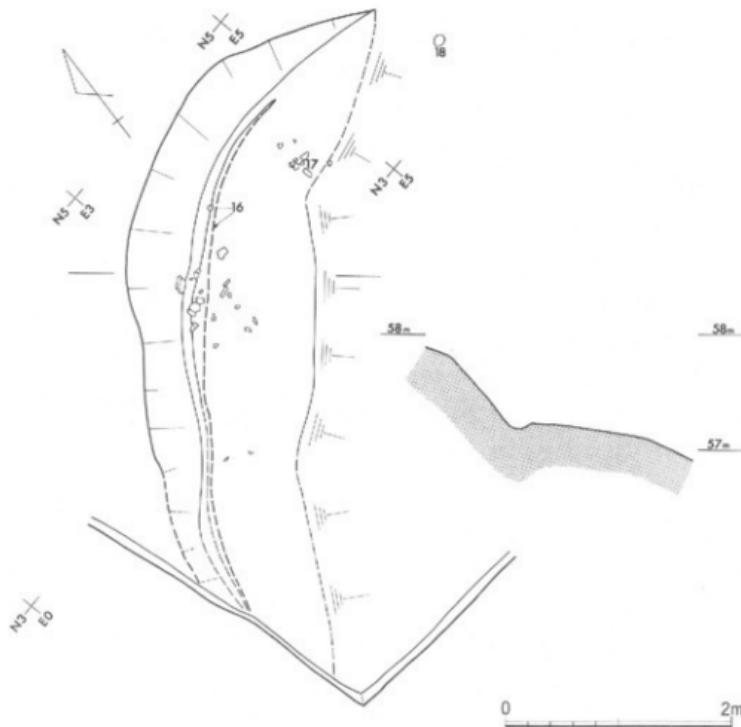
第194図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区第1号テラス出土遺物実測図

物は僅少であった。ここから出土した遺物には土製支脚・須恵器壺片・須恵器壺片・手捏土器・土師器壺（第196図）等があり、全形をうかがえるものは手捏土器がある。

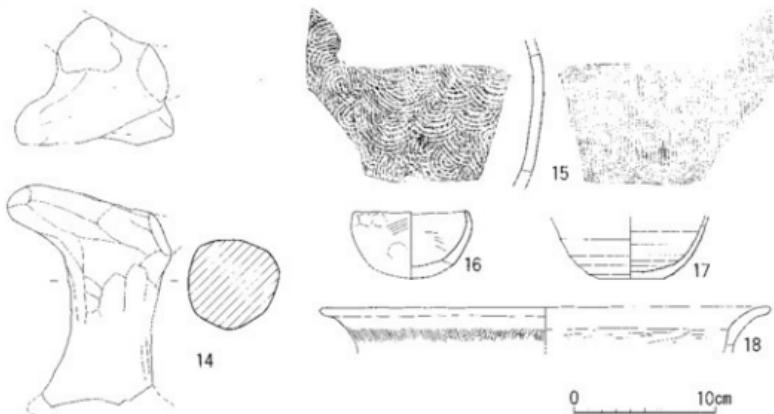
土製支脚（14）は上部3支のうち2支及び脚端部を欠損している。（15）は須恵器大壺の胴部の破片である。

第3号テラス

調査区南辺中央付近で検出したもので、斜面を東西約6mにわたって弧状に削ることによって平坦面が作り出されている。この平坦面は面積約7.25m²を測り、南辺は崩れ、大半が損われているものと判断された。床面はほぼ水平で堅緻な地山となっており、大小6個の柱穴状落ち込みが穿たれていた。西側の壁に沿って長さ1.5m、幅30cm、深さ5cmを測る浅い溝が認められた。柱穴状落ち込みの配置はまとまりがあるとはいえないが、第1号テラスの状況を参考にすると、住居跡の北壁の



第195図 春日シヌン谷遺跡II区第2号テラス実測図



第196図 春日シヌン谷遺跡II区第2号テラス出土遺物実測図

一部と考えて大過はないであろう。ただし、壁に沿って走るであろうと推定される溝内に柱穴状落ち込みが穿たれており、2棟以上が重複している可能性も考えられよう。

このテラス上からは土師器・須恵器の夥しい破片が出土した。テラス東端の柱穴状落ち込み付近出土の土器片は床面よりやや浮いた感じであり、上方から流れ込んだ状況を呈していた。一方、(22)以西の土器片出土状態はほぼ床面に接する形で認められた。後者の中には、鉄製の円板状品(第205図70)があり注意される。

第3号テラス出土遺物

第3号テラス出土遺物には土師器・須恵器(第198図19・20)・鉄器(第205図70)等があるが、いずれも小片となっており図示し得るものは僅少であった。

(19)は須恵器蓋坏身で、山陰の須恵器編年のⅣ期にあたるものである。(25)は土製支脚の脚部で、上半部分を欠損している。(21~24)は口縁部が「く」の字状に開く土師器甕類で、胸部内面は粗いヘラ削りとなっている。

第4号テラス

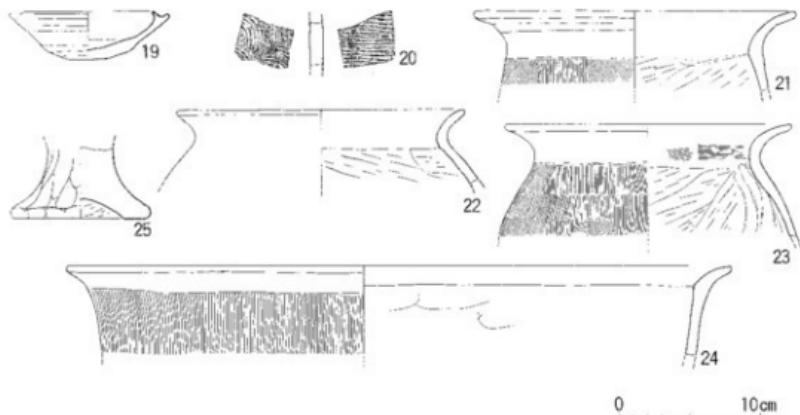
調査区南東隅で検出したもので、斜面に3段にわたって加工されている。最も上段のものは調査区東壁から西に向って延びる長さ4.5mを測る直線状の削り込みによって作り出されている。削り込み西端部は「L」字状に屈曲している。この屈曲した部分が住居跡の西隅にあたるものと判断され、これをSB01とした。先述した壁に沿って幅20~15cmを測る溝が走っている。溝が「L」字形に屈曲するあたりには径30cm、深さ12.5cmを測る柱穴状落ち込みが穿たれ、両者は重複しており、溝(古)→柱穴状落ち込み(新)という関係が認められた。削り込みによって画される現存平面積

は1.3m²を測り、きわめて狭いものとなっていた。それは溝の中央やや東よりの位置で、先の床面に別の住居跡SB02の一隅が重複するかたちとなっているためである。SB02検出平面積は約0.35m²を測る。SB01の壁とSB02の壁が接する付近に径30cm、深さ14cmを測る柱穴状落ち込みが穿たれている。これらはSB01（古）→SB02（中）→SB03（新）という関係が認められた。

上記のSB02の壁南を東西方向に走るSB03の壁が重複する形で認められた。SB03の東西辺は長さ2.5mを測り、西隅で南方へ「L」字状に屈曲する形となっており、この部分が同住居跡の西隅にあたるものと推定される。東西に走る壁に沿って、長さ1.7m、幅25cm、深さ3cmを測る溝が認められる。



第197図 春日シヌン谷遺跡II区第3号テラス実測図



第198図 春日シヌン谷遺跡II区3号テラス出土遺物実測図

SB03の残存面積は1m²を測り、南辺はかなり古い時期に崩れ落ちたことが遺物の出土状態からうかがえた。溝の西端南側に径28cm、深さ30cmを測る柱穴状落ち込みが穿たれている。穿たれている位置からしてSB03の西隅の主柱穴となる可能性が大きい。

この加工段周辺から出土した遺物には甕・土製支脚・櫃・須恵器蓋壺・土師器甕等があって、その出土分布は大きく、2つのグループに分かれる。一つは上方斜面に分布する一群、他の一つはSB01～03上層に分布するものである。これらはいずれも小片となっており、若干の須恵器甕が完形に復しめる程度であった。上方の地形は約45度を測るかなり急な斜面となっており遺構の存在は認められなかった。また第4号テラス上面を覆うように分布する遺物群は加工段の直上に接するものは僅少であった。第4号テラス出土遺物の大半が地山から約10～20cm上の層に含まれ、その層は調査区東南隅へ向ってかなり急角度で下降していくかたちとなっていた。これらの遺物群は上段の第1号テラスあたりから落下したものであろうと推定され、第4号テラス上面をおおうかたちとなったのは、急斜面を落下した遺物が狭いながら平坦面を呈していたため、ここに引っかかるというような状態になったからであろう。

第4号テラス出土遺物

第4号テラスの出土遺物は、上方から落下したか、あるいはそれ落ちたものがさらに上方からずれ落ちた土圧によって、押しつぶされたという状態で出土している。

(第200図)は第4号テラスSB02の壁上面から出土した甕の出土状態であるが、上記の件をよく示している。

(第201図)は甕で、高さ36.6cmを測る。上縁部及び体部奥壁を欠損しているが、円筒形の前半



第199図 春日シンン谷遺跡II区4号テラス実測図

部を逆「U」字形に削り抜き、その縁をやや肥厚させ甕口とするものである。体部外面は横方向刷毛、後に縦方向刷毛調整としている。内面には縦方向のヘラ削り痕が認められ、器肉は比較的厚い。

(第202図27~35)は須恵器蓋坏で、いずれも焼成は良好である。山陰の須恵器編年でいうⅢ期に属するものである。(36)は須恵器であるが、器種は不明である。

須恵器はこの他、甕の一部とみられる破片(37・38)がある。

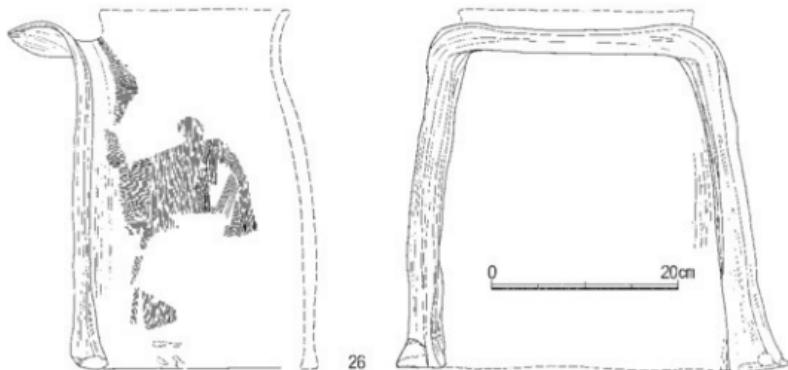


第200図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区4号テラス出土状態実測図

(39)は手捏土器で、手の平で成形した後外面を粗い横方向刷毛で肌を整えている。

土師器壺・甕類は、いずれも口縁部が「く」の字状を呈すものである。屈曲の程度が、ゆるやかな曲線を描きながら胸部に移り、肩部が認められないもの(43・44)と、同様な口縁部のつくりで撫肩ではあるが、やや肩が張るもの(42・45・46・48・49)と、口縁部が鋭角に屈曲するもの(41・47)の三種に大別される。調整は口縁部内外面とも横方向ナデとなっており、内面の一部に刷毛の痕跡が認められるもの(46・48・49)もある。胸部内面を粗い横方向ヘラ削りとするのは共通している。

(第203図51)は土製支脚である。上部が三支に分れるものであるが一支を欠損している。脚部裏面は深さ3.5cmまで削り込まれている。



第201図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区4号テラス出土竈実測図

(52) は上開きの円筒状を呈すもので、底径は10cmを測り内縁に径2.7cmあまりの剥離痕が認められた。これは(54)のような棒状を呈す仕切りが付けられていた痕跡で、このことからすると瓶の胴部下半であろうと考えられる。なお両者は同一固体でない。

(53)も同様な形態を示す瓶である。胴部中ほどに相対して、上方に反りあがる角状の把手か付けられている。高さ16.6cm、口縁径22cm、底径8.4cmを測り、底部には前記したような仕切りは認められない。

第4号テラス上方斜面出土遺物

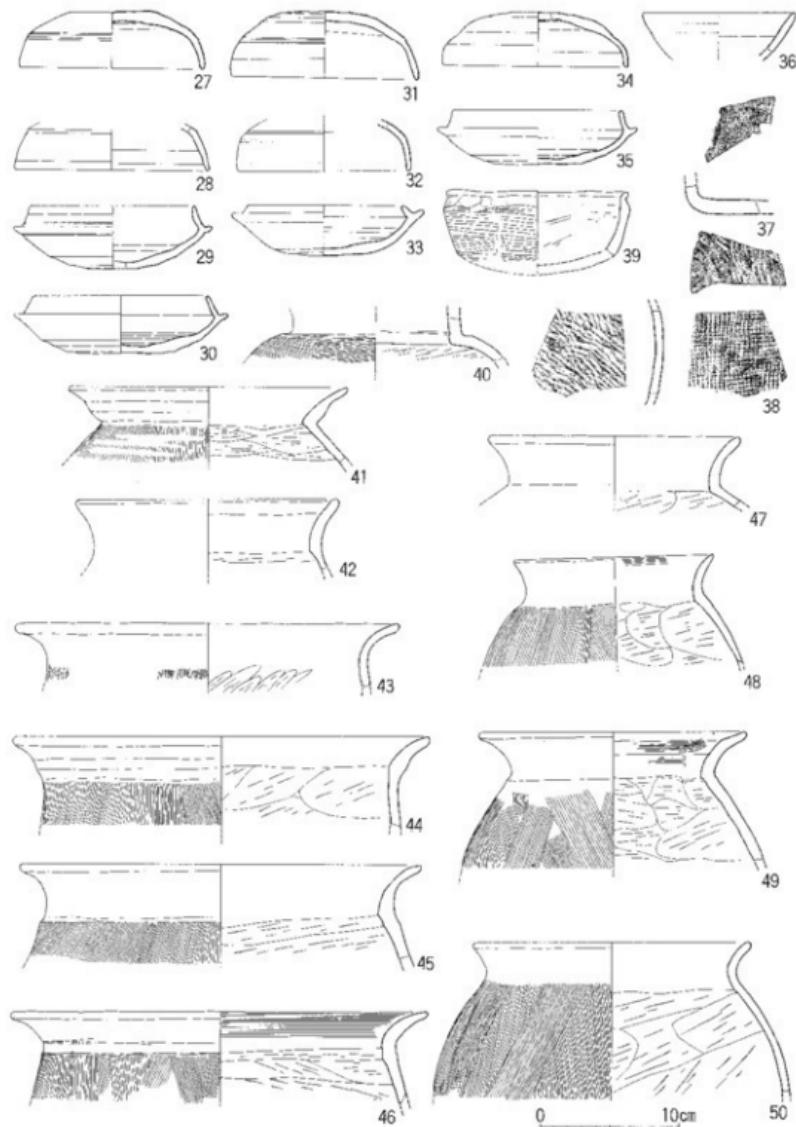
(第204図)に図示した遺物は、第4号テラス上方斜面で検出したものである。その出土状態は(第199図)に示すように散在する形であった。得られた資料は須恵器蓋坏の蓋1、身3、同高坏1があり、いずれも破損している。これらは山陰の須恵器編年のⅣ期に属するものである。

(61~63)は上師器甕の一部で、「く」の字形の口縁部をもつもので、頸部以下がややふくらむものと、ほぼ垂直に降下するものとに分けられる。甕の底部は僅少で(60)は底径8.5cmを測る平底となっている。これらは外面縱方向刷毛、内面はヘラ削りによって仕上げられている。

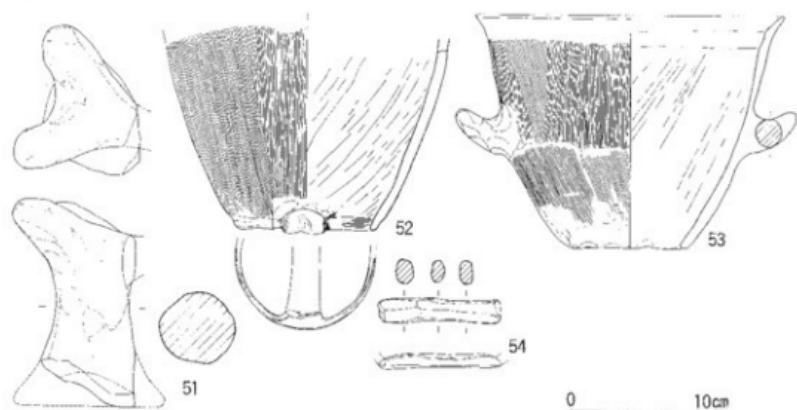
春日シヌン谷遺跡Ⅱ区出土小形遺物

(第205図)は春日シヌン谷遺跡Ⅱ区の調査区中から出土した各種小形遺物を図示した。(64)は手捏土器で、(第190図)に示したように巨石の陰から出土したものである。

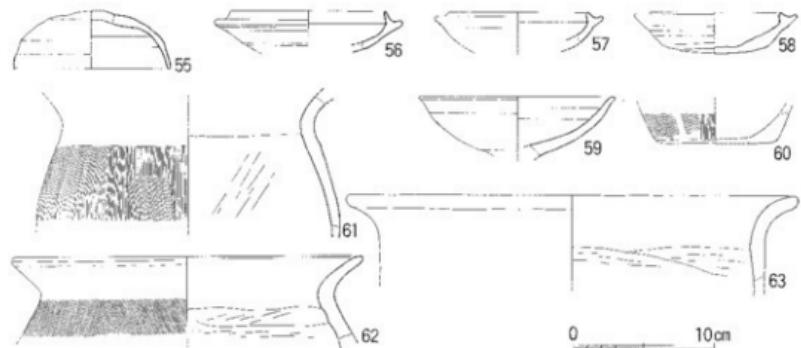
(65・66)は第3号テラス床面から出土した手捏土器である。同テラスからは(70)の鉄製品も出土している。これは径4.4cmの正円に近い板状品で、厚さ0.5cmを測り、上面がやや甲高となっている。



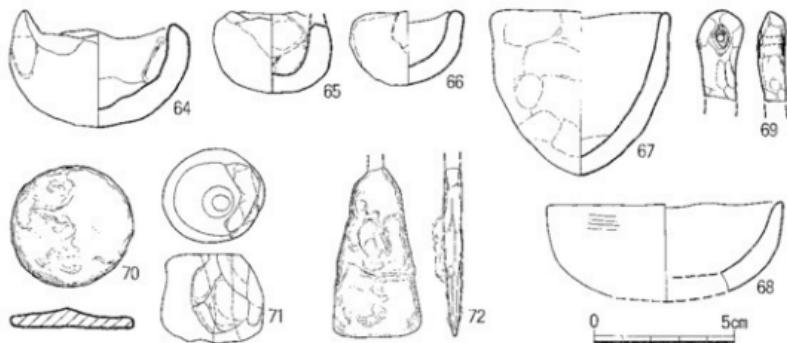
第202図 春日シヌン谷遺跡II区第4号テラス出土遺物実測図



第203図 春日シヌン谷遺跡II区第4号テラス出土遺物実測図



第204図 春日シヌン谷遺跡II区第4号テラス上方斜面出土遺物実測図



第205図 春日シヌン谷遺跡Ⅱ区出土遺物実測図

第4号テラスから出土した上製品には土錐状品(71)、棒状土製品(69)、手捏土器(67)がある。そのうち棒状土製品としたものは、断面楕円形を呈し、下半を欠損しているが、上端部は丸くおさめられ、径2.5mmの貫通孔が認められる。

(72)は第1号テラスのSB02の土器片内から出土した鉄器である。二等辺三角形を呈し、底部分が刃部となるものとみられ、やや薄くなっている。頂点部分は割離痕が見られることから、ここに軸状の茎が付く可能性も考慮される。

(68)は第4号テラスの上方斜面から出土した手捏土器である。おそらく第1号テラスから転落したものであろう。

ま　と　め

今回調査を実施した春日シヌン谷遺跡のI区では遺構や遺物は認められなかったが、II区では第1～4号テラスとともに須恵器・土師器等が多数出土した。

春日シヌン谷遺跡II区の大きな特徴は40～50度を測るかなり急な傾斜に遺構が認められることがあった。そのうち第1号テラスとした最上段に位置するものは柱穴状落ち込みがあることから、おそらく上屋が存在したであろうと推定し、柱穴状落ち込みの集中する一定の範囲を東からSB01、SB02と呼称することとした。それらとSB02の西側にあって柱穴状落ち込みが認められないSB02西側隣接平坦面の間には重複関係があり、SB01・SB02西側隣接平坦面（古）→SB02（新）という関係が認められた。

この第1号テラスで土器等の遺物が集中して出土するのはSB02であり、重複関係でも明らかなように、ここが後まで使用されたことをよく示していた。

第2号テラスは面積も狭く、柱穴状落ち込みも認められなかったが須恵器甕・壺片・土師器甕片

の他、手捏土器・土製支脚が出土した。

第3号テラスでは大小6個の柱穴状落ち込みが認められたがその並びはまとまりを欠くものであった。ここからも夥しい量の土師器甕・須恵器蓋坏片の他、円板状鉄製品、手捏土器、土製支脚等が出土した。

第4号テラスでは住居跡の一隅とみられる加工が3棟分重複して検出され、SB01(古)→SB02(中)→SB03(新)という関係が認められた。ここでも夥しい量の土器類が出土した。その主なものは土師器甕、瓶、須恵器蓋坏、土製支脚、手捏土器それに甕が1個体分等であった。

これらの遺物の他に第4号テラス上方斜面から出土した土師器、須恵器片がある。この遺物は第1号テラスのSB01あたりから転落したものと考えられ、第4号テラスで認められた遺物のなかにも同様なものが、かなり含まれていると推定された。

今回の調査で出土した遺物の中には須恵器蓋坏が多く認められた。第3号テラス、第4号テラスの上方斜面で山陰の須恵器縦年でいうⅥ期のものが若干見られる他はⅤ期のものが大半を占めていた。

のことから春日シヌン谷遺跡Ⅰ区の遺構は古墳時代後期でも後半に属するものであるということができるよう。

ところで当遺跡のように斜面を棚状に加工して平坦面を造り、居住空間を確保する方法がみられる遺跡は近年県下でも数例が知られるようになってきた。それらと比較すると斜面は南面し、陽あたりは良好であるとはいえ、急傾斜で、地山はかなりもろく一度雨がふると地崩れを生ずることなどが指摘できる。調査中、地山の露頭が上方斜面から落下する例がしばしばあって定住地としては危険をともなうことが予想された。また平野からかなり奥まった丘陵斜面に位置していること等、先の例とはやや趣を異にしていると言えよう。それは遺物の面からも言えることで、調査区西辺に接した巨岩の陰から手捏土器が、また第3号テラスから円板鉄製品⁽¹⁾が、さらに第4号テラスでは指頭大の棒状先端に円孔を穿つ用途不明土製品等が出土していることである。このような非実用的要素の大きい遺物は從来祭祀遺物⁽²⁾と称されてきた。春日シヌン谷遺跡もそのような観点から検討してみる必要のある遺跡と言うことができよう。なお、この丘陵一帯は銅の鉱脈があり、地山の露頭にもかなりの銅成分を含むことが注意される。

注

報文中的須恵器の時期分類は、山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971年に従った。

(1) 第3次学術調査隊『宗像沖の島』宗像大社復興期成会 1979年では鏡の模造品とされている。

(2) 大堀哲雄『奈紀遺跡』 1978年

第12表 春日シヌン谷遺跡出土遺物観察表

標 査 番 号	器 種	法 量 (cm)	形態・手技の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
	口 底 底 高						
194-1	須 惠 器 壺	9.0	回転ナデ。	灰 色	0.1cm程度 の砂粒を少 量含む。	良 好	
2	須 惠 器 壺	13.6	4.1 天井部から全体にかけて丸くカーブ を描く。底盤から口縁部にかけて外・ 内面とも回転ナデ。底盤は外側へラ 削り内面回転ナデ。	白っぽい灰 色	0.1~0.2cm 程度の砂粒 を多く含む。	やや良好	
3	土 筒 器 壺	24	口縁部は外反しながら立ち上がる。 外側に斜下部は瓶内方向の刷毛目。口 縁端部及び口縁内面にかけてヨコ ナデ。	暗赤黄褐色	0.1cm以下 の砂粒を多 く含む。	やや不良	風化著しい。
4	〃	26.6	口縁部は大きく外反する。口縁外面 はヨコナデ、鋭い沈線を有す。口縁 上部内面はヨコナデ。下部にヘラ削り。	暗黄褐色	0.1cm程度 の砂粒を含 む。	良 好	〃
5	〃	25.0	口縁部は大きく外反する。口縁部は 内外面ともヨコナデ。体部内面はヘ ラ削り。瓶部から胴部の外表面に縱方 向の刷毛目。	淡黄色	砂粒あまり 含まず。	〃	
6	〃	24.0	胴部は直線ぎみに底部に向ってぼ んぼん。口縁部内外面ともヨコナデ。 胴部外面に縱方向の刷毛目。内面は 複方向へのヘラ削り。	明黄色	小粒の砂粒 を少許含む。	〃	
7	〃	27.1	口縁部は外反しながら立ち上がる。 口縁部及び内面はヨコナデ。口縁 下部外面は縱方向の刷毛目の後ヨコ ナデ。瓶部外表面縱方向の刷毛目。内 面ヘラ削り。	暗黃褐色	0.1cm以下 の砂粒を多 く含む。	〃	
8	〃	29.0	口縁部はやや外反しながら立ち上 がる。口縁部はヨコナデ。胴部外面縱 方向の刷毛目。内面縱方向へのヘラ削り。	〃	0.1cm以下 の微砂粒を 多く含む。	やや不良	
9	〃	29.0	口縁部は大きく外反しながら立ち上 がる。口縁部はヨコナデ。肩部以下 外表面縱方向の刷毛目。内面側方向の ヘラ削り。	黄褐色	0.1cm程度 の微砂粒を 多く含む。	良 好	
10	〃	31.0	口縁部はやや外反しながら立ちあが る。口縁部外表面に縱方向の刷毛目 の後、ヨコナデがかすかにみられ る。胴部外面に一部指觸痕が度有り。	暗黄褐色	微砂粒を多 く含む。0.5cm程度 の砂粒を含む。	やや不良	評価不明。
11	〃	31.7	口縁部はやや外反しながら立ち上 がる。口縁部はヨコナデ。胴部内面に 横方向のヘラ削り。	暗黄褐色	0.1cm以下 の微砂粒を 多く含む。	〃	
12	土 筒 器 把手		角状を呈す。指撫によるナデ。	茶褐色	0.1~0.2cm 程度の砂粒 を含む。	良 好	
13	土 筒 器 土製支撑		三ツ又状の突起を付ける。基部は末 広がりで底部は凹む。一部にヘラ削 りと指撫によるナデらしきものが認 められる。	黄褐色	0.1~0.2cm 程度の砂粒 を含む。	〃	全体に磨滅 著しく調整 は不明顯。
196-14	〃		三ツ又状の突起を付ける。基部は末 広がりで底部は凹む。一部にヘラ削 りと指撫によるナデらしきものが認 められる。	赤褐色	0.2cm程度 の砂粒を含 む。	〃	風化著しい。
15	須 惠 器 壺		外面は叩き模、内面は青釉波紋。	青灰色			
16	土 筒 器 手	8.0	手捏。砂粒の移動が認められるので ヘラ削りの後、ヨコナデの可能性有 り。口縁部に指觸圧痕。体部に粗い 刷毛目が認められる。	淡黃白色	0.1~0.2cm 程度の砂粒 を含む。	良 好	風化著しい。
17	須 惠 器 壺	4.6	外面へラ削り。内面回転ナデ。	暗灰色	0.1~0.3cm 程度の砂粒 を含む。	やや良好	ロクロ回転 有まり。

特徴番号	番種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口	底	側					
196-18	土器	32.0			口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は断面三角形を呈す。受け部は丸く、わざかに外方にひびき、底部は大きくゆるやかに立ち上がり受け部に至る。底部外面はへつ切りの後、指捺ナデ。口縁部ナデによる調整。	赤黄褐色	0.1cm以下 の砂粒を多く含む。	良 好	
198-19	須恵器	9.0	1.7	3.4	わざかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は断面三角形を呈す。受け部は丸く、わざかに外方にひびき、底部は大きくゆるやかに立ち上がり受け部に至る。底部外面はへつ切りの後、指捺ナデ。口縁部ナデによる調整。	白灰色	0.1cm程度 の砂粒をわずかに含む。	やや不良	
20	須恵器				外面は叩き瓶。内面は青海波紋。				
21	土器	22.7			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部はヨコナデ。腹部外側は腹方向の削毛目、内面はへつ切り。	暗黄褐色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を含む。	やや不良	
22	*	20.4			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部はヨコナデ。腹部内面へつ切り。	赤黄色	0.1cm程度 の砂粒を若干含む。	*	腹部外面調整不明。
23	*				口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。口縁部腹方向のナデ。腹部内面は断続的に腹方向の削毛目有り。腹部外側は腹方向の削毛目、内面には腹方向の指捺ナデの後、ななめ方向のへつ切り。	淡黃色	砂粒は殆ど含まない。	良 好	
24	*	47.0			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部腹方向のナデ。腹部内面に腹方向の削毛目、一部黒斑有り。内面は腹方向のへつ切りの後ナデ。	外一淡白黃色 内一赤黃色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を少し含む。	*	
25	土器				基部はハの字状を呈す。外面は指壓によるナデ。基部はヘラ削りの痕跡。	外一赤褐色 基部一淡白黃色	0.1cm程度 の砂粒を含む。	*	
26	土器		36.6		削毛目及びナデ。削毛目の一部がナデにより削かれている。内面に腹方向へつ切り痕有り。	黃褐色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を多く含む。	*	
202-27	須恵器	13.1		4.0	口縁部は丸く内湾気味に立ち上がる。天井部は平型、天井部と口縁の間に低い枕縫を一本入れる。天井部の内面はへつ切り難し後ナデか? 内部は一定方向のナデ。口縁部は回転ナデ。	外一灰褐色 内一灰褐色	0.1cm程度 の砂粒を少々含む。	やや良好	一部口縁付近に緑色の自然釉がかかる(うぐいす色)。
28	*	14.0			口縁部は丸く内湾気味に立ち上がる。天井部と口縁の間に低い枕縫を二本入れる。天井部は回転ナデ。天井部外側は丸みを帯びる。	暗灰褐色	0.1cm程度 の砂粒を少々含む。	良 好	
29	須恵器	11.8		約4.5	立ち上がりは内傾しながら立ち上がり、口縁部は丸く、二本の枕縫を入れる。受部は水平で傾く。底部は平底であるやかに広がり受部に至る。口縁部は回転ナデ。底部外面はへつ切り、内面はロクロ回転に伴う一定方向のナデ。指捺圧痕が残る。	外一暗灰色 内一灰色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を少々含む。	*	
30	*	12.5	3.8	4.1	立ち上がりは内傾しながら立ち上がり、口縁部は丸く、二本の枕縫を入れる。受部は水平で傾く。底部は平底であるやかに広がり受部に至る。口縁部は回転ナデ。底部外面はへつ切り、内面はロクロ回転を利用した一定方向のナデ。指捺圧痕が残る。	やや白っぽい灰褐色	0.1cm程度 の砂粒をわずかに含む。	*	
31	須恵器	13.4		4.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり、内面に至る。天井部は丸みを呈し、口縁部と天井部の境に浅い枕縫を二本入れる。口縁部は回転ナデ。天井部はへつ切り。	外一暗灰褐色 内一白灰色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を含む。	やや良好	

地図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口縁	底縁	深さ					
202-32	須恵器蓋	12.4			口縁部は内側しながら立ち上がる。口縁部と天井部の間に浅い沈線を二本入れる。口縁部は回転ナゲによる調整を施す。	やや黄味がかった灰褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。	良好	
33	須恵器杯	11.2			立ち上がりは内側しながら立ち上がり、端部は丸く、受部は水平で細い。天井部は丸弧でやや広がり受部に重なる。各所に回転ナゲによる調整、底盤はへラ切りの後、コピナデか?	カーキ色がかった灰褐色	0.1~0.3cm程度の砂粒を含む。	やや不良	
34	須恵器蓋	13.2			口縁部は内側しながら立ち上がり、天井部は丸みを帯びる。天井部に指頭圧痕が残る。他是回転ナゲによる。	黄灰色	0.1cm程度の砂粒を含む。	良好	
35	須恵器杯	12.2			立ち上がりは内側ながら立ち上がり、端部は丸く、受部はボヤキなく、底盤は平底でやや広がり受け部に盛る。底部外沿はへラ削り。他是回転ナゲによる調整。	暗灰褐色	0.1~0.3cm程度の砂粒を含む。	〃	
36	須恵器	11.0			口縁部はわずかに内側しながら立ち上がり端部に重なる。回転ナゲによる調整。	白灰色	0.2cm程度の砂粒を含む。	不良	
37	須恵器蓋				外面回転ナゲ、内面青苔紋。				肩部?
38	土器器蓋				外面叩き模。内面青苔紋。				
39	土器器手舟	13.0			手舟。口縁部外側は指頭凹成、端部はナデ、胴部外側は粗い刷毛目。内面はへラ削り。			良好	
40	土器器				口縁部は内外とも横ナデ。鼻部から両面にかけて外側は横方向の刷毛目、内面はへラ削り。	口縁部内外面赤色風呂を述べ	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	〃	
41	土器器	20.0			口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁下部はややくらむ。胴部外側は横方向の刷毛目、内面は横方向のへラ削り。	赤茶色	0.1~0.2cm程度の砂粒を多く含む。	〃	
42	〃	19.0			口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部は丸い。口縁下部内面に横方向のへラ削り。他はコナデによる調整。	淡黄色	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	〃	
43	〃	27.6			口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸い。口縁下部内面よりななめ方向のへラ削り。他はコナデによる。外面に一部刷毛目もあり。	暗黄褐色	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	〃	
44	〃	29.0			口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸い。口縁部は横ナデ、胴部外側は横方向の刷毛目、内面は横方向のへラ削り。	赤黄色	0.1~0.2cm程度の砂粒を少量含む。	〃	
45	〃	30.0			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部外側は横方向の刷毛目が横ナデによって消されたと見られる。内面は横方向の刷毛目。胴部外側は横方向の刷毛目、内面に横方向のへラ削り。	外一暗黄褐色 内一赤黄褐色	0.1cm以下 の砂粒を多く含む。 胴部は0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。	〃	
46	〃	18.1			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部外側は横ナデ、内面は横方向の刷毛目を入れた後、横ナデとみられる。胴部外側は横方向の刷毛目、内面は横方向のへラ削り。	暗褐色 口縁内部に朱痕	0.1cm以下 の砂粒を多く含む。	〃	
47	〃	14.4			口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部外側は横ナデ、内面は横方向の刷毛目を入れた後、横ナデとみられる。胴部外側は横方向の刷毛目、内面は横方向のへラ削り。	外一暗黄褐色 内一暗黄褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。	不良	風化著しい

標 番	種 類	法 量(回)			形態・手法の特徴	色 調	砂 土	構 成	備 考
		口 部	底 部	側 面					
202-49	土 鈎 器 變	19.8			口縫部はかなり外反しながら立ち上がり、端部は丸い。口縫部外面は横方向のナデ。内面は横方向の刷毛目。頭部外面は縱方向の刷毛目。内面は横方向のヘラ削り。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	良 好	全体にスヌ状の炭化物が付着。
50	〃	20.0			口縫部は外反しながら立ち上がり、胸部は丸味を呈す。口縫部はヘラ削り。頭部外面は縱方向の刷毛目。内面はななめ方向のヘラ削り。	外一淡赤褐色 内一黃白色	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	〃	一部角はん有り。
203-51	土 鈎 器 上脛支撑				三ツ又状の突起を付ける。底部は凹みヘラ削りを兼ねる。	黃褐色 底部は黒色	0.1cm程度の石壳が混入。	〃	全体に磨滅が著しい。
52	土 鈎 器 底	10.0			体部はわずかに内湾しながら基部に至る。基底部に棒状のしきりをつける。体部外面は横方向の細い刷毛目。内面はななめ方向のヘラ削りを兼ねる。基底部外面に指頭圧痕の後、横方向の刷毛目。内面は横方向の刷毛目を残す。	赤褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒を含む。	〃	外面に黒はんが認められる。
53	〃	22.0			体部はさほど張らずゆるやかに口縫から基底部に至る。口縫部はナデ。体部外面は横方向の刷毛目。内面はななめ方向へのヘラ削りを兼ねる。基底部は指頭圧痕により刷毛目が不明瞭。	淡黄色	0.1~0.3cm程度の砂粒を多量に含む。	〃	
54	〃				私の底部のしきり棒。両端部がわざかだら上方に向けてゆるやかにカーブしている。中央部は上向きにゆるやかにそる。全体に指頭によるなどで、成形箇点。				
55	須 惠 器 蓋	11.0		4.1	口縫部は内湾しながら立ち上がり、天井部は丸い。口縫部と大井部の境に一本の浅い洗線を兼ねる。天井部外側の所に指頭圧痕が残り、ヘラ切り薙の後、指ナデか? 他は回転ナデによる調整。	白灰色	0.1~0.3cm程度の砂粒を含む。	〃	
56	須 惠 器 坏	11.1			立ち上がりは内湾しながら立ち上がり外側がやや凸む。受部は水平で短い。回転ナデによる調整。	黃褐色	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	〃	
57	〃	9.8			立ち上がりは短く、断面三色彩を呈す。受部はほぼ平で短い。回転ナデによる調整。	青い状色	0.1cm以下 の微砂粒を少量含む。	〃	
58	〃	9.3		2.9	立ち上がりは内傾しており、断面三色彩を呈す。受部は水平や上方にのびる。底部は平底であるやかに広がり、受部にはいる。口縫部は回転ナデ。底部外面はヘラ切り薙しの後、スピナデを施す。底部内面は不整方向のナデ。	くすんだ灰 色	微砂粒を含む。	やや不良	
59	須 惠 器 坏	14.0			环部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸くかに外反する。环部内面はロコロ回転による一定方向のナデ。他は回転ナデによる調整。	黄褐色がかった 灰褐色	0.1~0.2cm の砂粒を含む。	〃	
60	土 鈎 器 變 ~ 壁		8.5		磨耗著しく詳細不明。	淡黄色	0.1~0.2cm 程度の砂粒を多量に含む。	良 好	
61	土 鈎 器 變				頭部外面は縱方向の刷毛目。内面はななめ方向のヘラ削り。頭部は横ナデと思われる。	外一赤褐色 内一黃白色	0.1cm程度の砂粒を多量に含む。	〃	風化著しい。
62	〃	25.0			口縫部は大きめ外反し、端部は丸い。口縫部は横ナデ。頭部外面は細かい刷毛目。内面は横方向のヘラ削り。	外一アズキ 色 内一黄茶褐色	0.1~0.3cm 程度の砂粒を多量に含む。	〃	

検査番号	器種	法量(㎤)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
203-63	土器				口縁部は外反しながら立ち上がり、喉部は少し。腹部はほぼ直線的に下がる。腹部内面は横方向のヘラ削り。他に不明。	外一暗黄褐色 内一黄茶褐色	0.2~0.3mm程度の砂粒を含む。	やや不良	風化著しい。
64	土器	5.9		4.21	手捏。内面は横方向のナデ。一部指頭圧痕が残る。外底部中心に指頭圧痕が残る。	黄褐色 一部黒灰色	0.1cm程度の砂粒をわずかに含む。	良好	
65	*	4.0		2.8	手捏。内面に指頭圧痕と横方向のナデが残る。	外一黒灰色 一部黄褐色 内一1/2 黑灰色 1/2 黄褐色	0.1~0.2cm程度の砂粒を多く含む。	*	
66	*	3.6		2.65	手捏。内面に指頭圧痕が残る。	黄褐色	0.1cm程度の砂粒を含む。	*	風化著しい。
67	*			5.5	手捏。表面には指頭圧痕が残る。内面はユビナデ。	黄褐色	0.1~0.3cm程度の砂粒を多く含む。	*	
68	*	8.5			手捏。外面の一部にわざかに刷毛目が残る。赤色顔料は比較的厚く施されている。内面にはやや流れこんでいる。内面に横方向あるいはななめ方向のナデ。	外正面一赤 断面一黄白色	0.1cm程度の砂粒を少量含む。	*	
69	*				粘土組状の土製品。0.3cm程度の穴があいている。	赤黄色	0.1cm以下の微砂粒を含む。	やや不良	
70	鉄器 内装状 鉄製品				中央部がややもり上がる。裏面は比較的フラット。				
71	土器	3.6			外面に指頭圧痕。両端より穿孔を行なう。	赤褐色	砂粒を含む。		
72	鉄器				頸部断面は方形。端部にするといは内部がある。				

小深原遺跡・西ノ谷遺跡

—八東郡八雲村—

XIII 小深原遺跡・西ノ谷遺跡

調査の経過

島根県教育委員会は昭和58年・59年両年度にわたって、中国電力株式会社が計画する鉄塔新設に伴い、松江市南郊の意宇川下流を対象に埋蔵文化財に関する調査を実施してきた。

これに継続して昭和60年度は意宇川下流平野の南に位置する八束郡東出雲町・同八雲村・能義郡広瀬町・同伯太町を対象に実施することとなった。これら広域にわたるものの中には遺跡であるか否かを即断しがたいものがあった。このため年度初めから試掘調査を実施し、本調査を実施する必要があるものと、ないものとを選別することとした。

八束郡八雲村の南隅にある小深原遺跡、西ノ谷遺跡については昭和60年6月3日～6月22日かけて試掘調査を実施した。結果、小深原遺跡では縄文土器片・石錐を、西ノ谷遺跡ではポイント形石器・黒曜石剣片等が出上り、両遺跡については後日、本調査を実施することとなった。この後6月25日～8月20日にかけて能義郡伯太町内の試掘調査を実施し、小深原遺跡・西ノ谷遺跡の本調査を開始したのは9月2日であった。

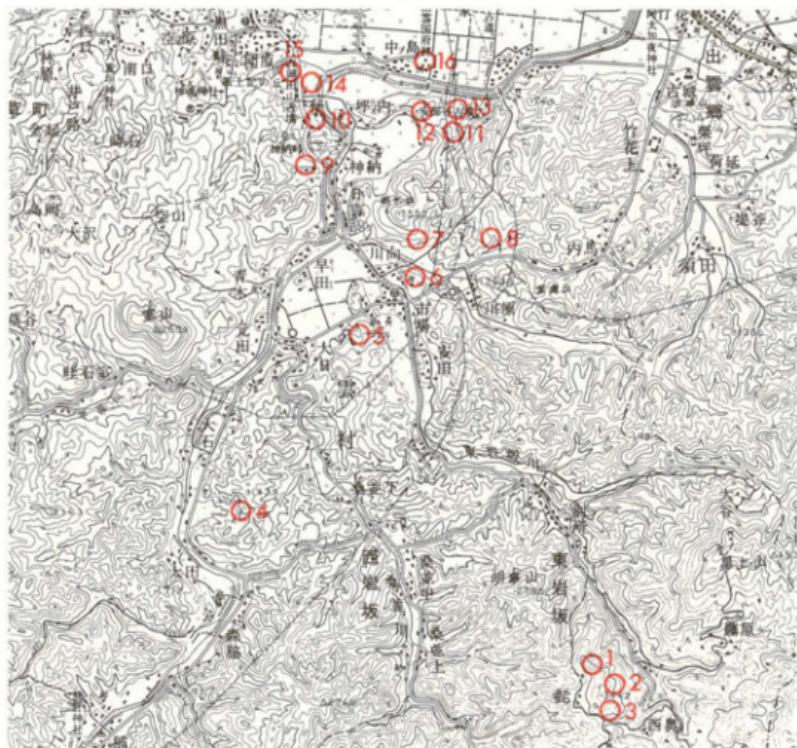
位置と歴史的環境

小深原遺跡(1)・西ノ谷遺跡(2)が存在する八束郡八雲村は松江市の南方約8kmに位置し、北西側は松江市に、南西側は大原郡大東町に、南東側は能義郡広瀬町に、北東側は八束郡東出雲町にそれぞれ開まれるかたちとなっている。ここは松江市南郊に展開する意宇川の上流にあたり、村内の谷間から流下する支流を集め、村の中央を縦断した後、意宇川下流平野に注ぎ込んでいる。

今回調査を実施した2つの遺跡は意宇川の支流のうち最も東にある東岩坂川を遡った西岸、標高334mを測る尾根上に位置している。

昭和52・53年に八雲村教育委員会によって実施された遺跡分布調査によれば、村の北端に位置する雨乞山山麓の雨乞山古墳(7)、その南辺の丘陵に群集する増福寺古墳群(6)、禪定寺古墳群(5)等古墳時代後期の遺跡に集中しており、村の南端には周知の遺跡は全く知られていなかった。

昭和59年3月、諸調査に先駆け現地踏査を行ったところ、西ノ谷遺跡のある尾根上は松江市街をも含めた一体が眺望できることや、尾根の各所に不自然な平坦面があることが注意された。また西ノ谷遺跡に至る斜面は畠地となっているが、耕作土中に黒曜石製鏃・剣片が散見された。この地は南に向かってゆるやかに傾斜しており、背は西ノ谷遺跡等がある尾根が屏風状を呈すかたちとなっている。このことから冬季は北西方向からの季節風を十分防ぐことができることや、付近に水場があること等から縄文時代にも定住可能な場所であると考えられた。そこで、字名を付し人佐平遺跡



1. 小深原遺跡 2. 西ノ谷遺跡 3. 大佐平遺跡 4. 松迫遺跡 5. 中山古墳群 6. 増福寺古墳群
7. 雨乞山古墳 8. 善三郎谷横穴 9. 神納横穴 10. 御崎山古墳 11. 古天神古墳 12. 百塚山古墳群
13. 安部谷横穴群 14. 岩屋後古墳 15. 岡田山古墳 16. 出雲国府跡

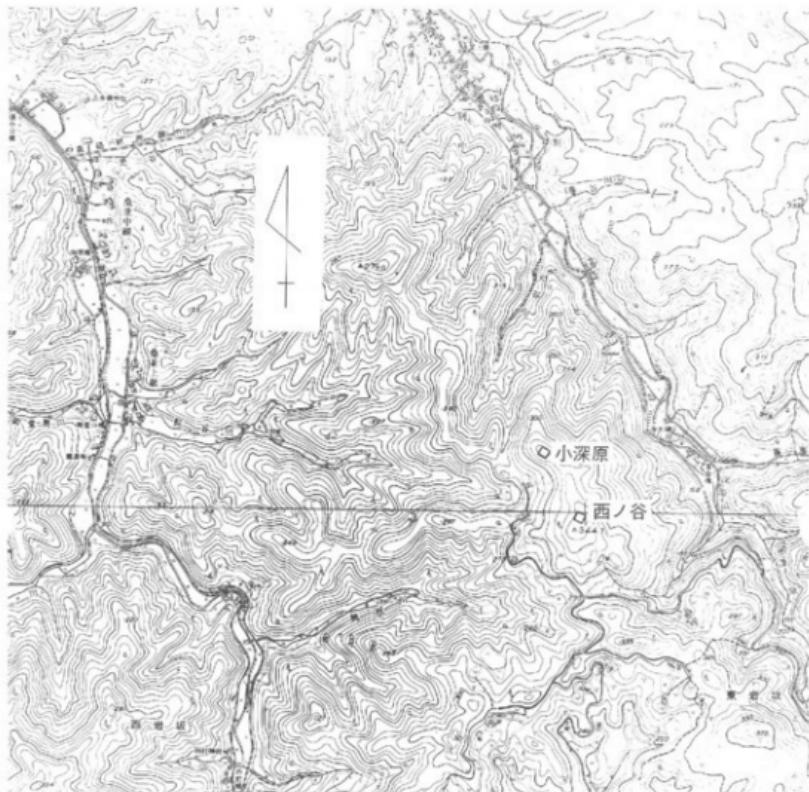
第206図 八雲村及び意宇川流域主要遺跡分布図 (1:50,000)

(3)とすることとした。以上が小深原・西ノ谷遺跡周辺の環境である。

小深原遺跡

遺跡の概要

小深原遺跡の所在地籍は八東郡八雲村大字東岩坂3240外で、後述する西ノ谷遺跡はその南方に位置し両者間は約300mを隔たっている。



第207図 小深原遺跡・西ノ谷遺跡周辺地形図 (1:20,000)

小深原遺跡は昭和60年6月10日～6月22日にかけて試掘調査を実施した。調査方法は鉄塔建設予定地15m×15m内に幅2mの試掘溝を中央で交差する形に設定して行った。

予定地の中央から北へ延ばした試掘溝内から石錐1点、繩文土器片2点出土した。一方、予定地中央から西へ向って設定した試掘溝西端では小炭を焼いたと推定される浅い皿状の土壤1個を検出した。土層を見るために予定地南辺に沿って東南隅から長さ5m・幅2mの試掘溝を設定し、表土から深さ1.2mまで掘り下げて包含量の厚さを確認した。その後、試掘溝を埋めもどして本調査にそなえた。

本調査は同年9月2日から開始した。まず15m×15mの調査区に中央で直交するように土層観察畦を設定し調査を進めた。土層観察畦によって4分割された調査区内の北側をI区・西側をII区・

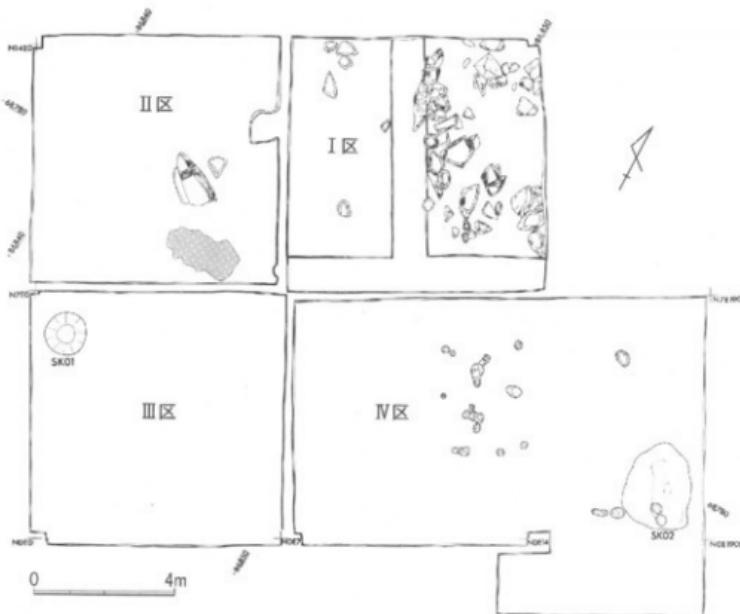
東側をⅢ区・南側をⅣ区と呼称することとした（第208図参照）。

検出した遺構

今回の調査で検出した遺構は土壌2、炭化物集積遺構1である。

I 区

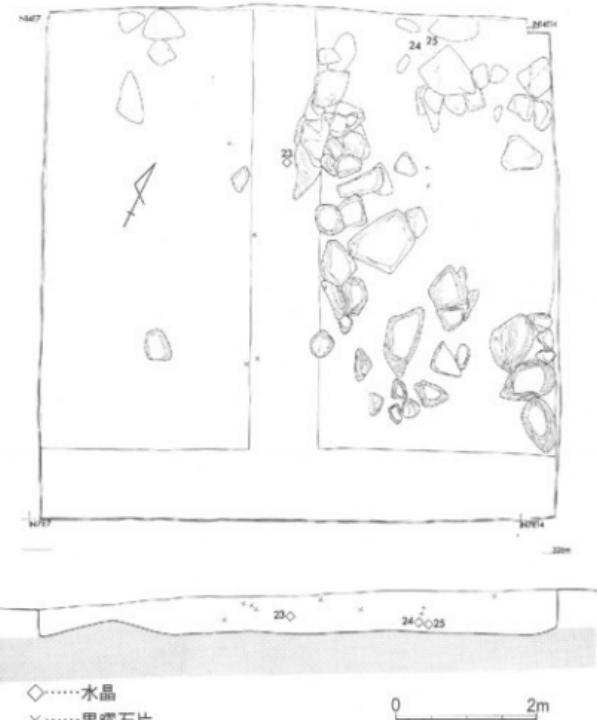
I区は南北に走る尾根筋のはば中央に位置している。調査区内の表土約10cmを除去すると、径0.5～1.0mを測る石群が確認されれば南北の方向につらなり、これは人為的なものか、地山の露頭であるのか判断しえないものであった。そこでまず調査区内の南壁に沿って幅1mの溝と、その中央から北へ直角に伸びる幅1mの溝を設定し、石の下端の状態と土層の観察によってそれを判断することとした。その観察からすると地山内に走る岩脈の露頭であると判断された。つまり調査区内における土層堆積状況は表土下に黄橙色土が約50cm堆積しており、さらに下層には細かい砂粒を含む黄色土の堆積が認められ、土層観察によりこの黄色土は地山と判断された。ところで確認された岩脈の中で中央に位置していたひとつは径1.0m以上ある大形の円錐体を思わせるものであった。こ



第208図 小深原遺跡遺構配置図

れは他のものがいずれも上部が尖った形となっているのに対し円錐体を逆転させた形となつておる、しかも上平坦部はほぼ水平を保ち、テーブル状を呈していだ。周辺からは黒曜石剥片が出土しており、このことから先の石は石器製作時の作業台のような機能をはたしたものであろうと想像された。

調査区内からは縄文土器片 2 点（第215図 2, 4）、黒曜石片 9 点、水晶 3 点が出土した。縄文土器片は調査区北壁中央より南へ 2 m の



第209図 小深原遺跡遺物出土状態

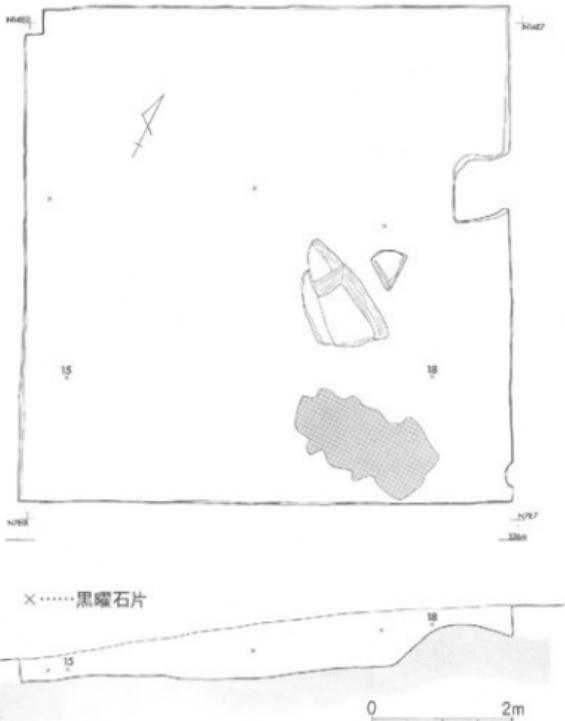
地点で出土している。外面に縄文がかすかに認められ、内面はナデによる調整が施されている。このうち 4 は口縁部である。この 2 点の土器片は同一個体とは思われないがともに色調は淡黄茶色を呈し、胎土は 1 mm 程度の砂粒を若干含み、焼成は良好である。黒曜石片はいずれも剥片である。水晶は調査区内に設定した中央を南北に走る試掘溝を掘った際にその溝部のやや北側から 1 点と、北壁沿いに確認された岩脈の付近から 2 点の計 3 点が出土した。これらはいずれも長さが約 1.5 m 程度の無色透明で断面六角形を呈している。水晶の母岩となりうる石は周辺にないことから、黒曜石と同様に他所からはこぼれてきたものと判断された。これら出土遺物はすべて表土下約 20~40 cm の黄褐色土中より出土している。以上のように I 区では若干の遺物を得たが、遺構を検出するには至らなかった。

I 区

I 区は I 区の西隣に位置する。調査区内における土層の堆積状況は I 区と同様で、表土約 10 cm を

除去すると黄橙土が約50cm堆積しており、さらに下層は細かい砂粒を含む黄色土が認められ、この土層観察により黄橙色土の下は地山と判断された。調査区中央やや東寄りの地点から径1.0mを測る石が確認されたが、これはその下部の大半を地山中に没しているためⅠ区の岩脈と同様の地山の露頭であろうと判断された。

この調査区からは炭化物集積遺構を検出した。これは調査区内の東南部南壁寄りの位置で確認されたもので、長径1.9m、短径1.2mの平面形は極めて不整なものである。深さは5cmから10cmを測り、この上層堆積



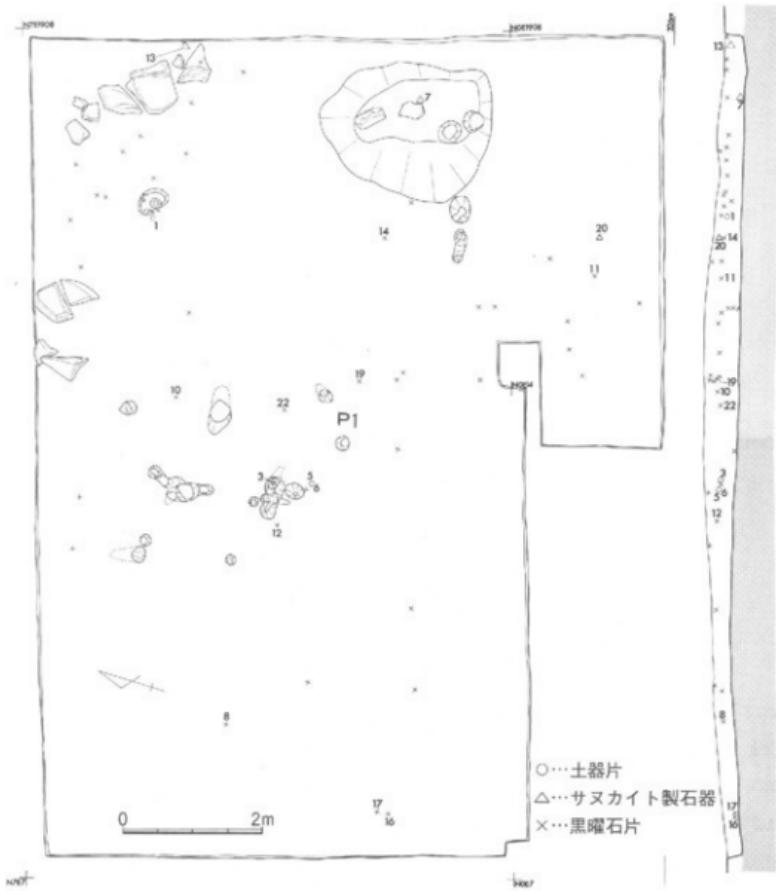
第210図 小深原遺跡遺物出土状態実測図

状況は暗褐色の粘性を含む土の堆積が認められ、この土層中より多量の炭化物を確認した。しかし炭化物以外の出土はみられなかった。この炭化物集積遺構は表土を除去する際の比較的上層から確認されたことから比較的新しい時期にこの場所で火を焚いたものであろうと想像された。

出土遺物は黒曜石片が5点出土した。これらはいずれも剝片であり表土下約35cmの黄橙色土中より出土している。

Ⅱ 区

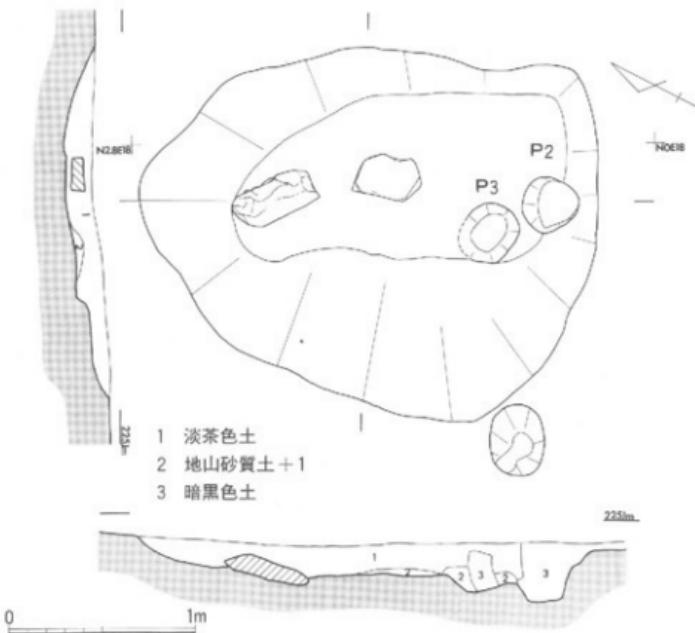
Ⅱ区はⅠ区の南側にあたり、南北に走る尾根筋のはば中央に位置する。この調査区では東壁沿いからピットのプランを4個検出した。このピットの並び方は円形に配置される住居址の柱位置を思わせた。そこで東に50m²の拡張区を設定した。これを便宜上Ⅲ区隣接拡張区と呼称することとし、調査を進めた。その結果、Ⅲ区隣接拡張区内から土壤Ⅰ、ピット5穴、さらに地山内の岩脈を検出した。



第211図 小深原遺跡遺物出土状態

Ⅱ区及び隣接拡張区内における土層の堆積状況はⅠ区・Ⅲ区と同様で、表土約10cmを除去すると黄橙色土が約50cm堆積しており、さらに下層には細かい砂粒を含む黄色土の堆積がみられ、この層より地山と判断した。調査区北壁沿いの東寄りに径約0.5m～1.0mを測る2個の大きな石が確認されており、隣接拡張区からも岩脈が確認されている。これらは位置的に考えてもⅠ区から続く岩脈の一部で地山の露頭であると判断された。

Ⅲ区の東壁沿いから検出されたビットのプランは住居址の柱位置を想像させたが、調査の結果、隣接拡張区は先のビットに対応しうるものは検出されなかった。また精査の結果、その大半は木の



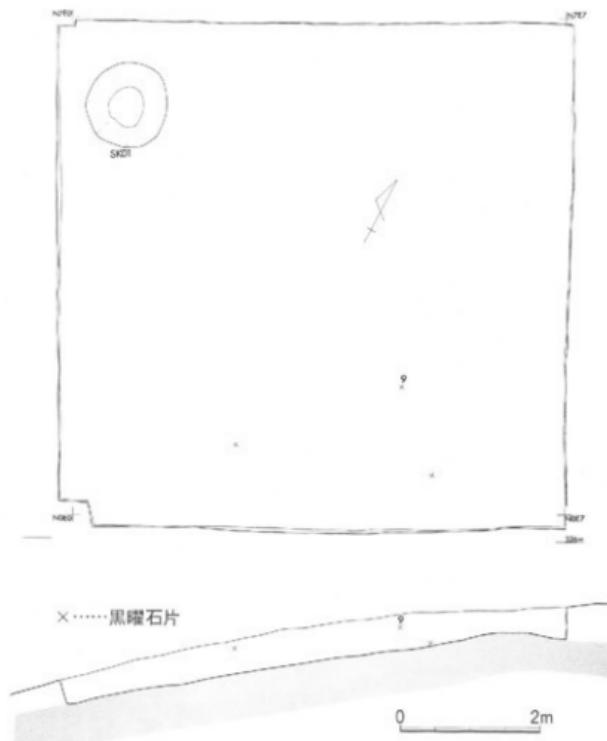
第212図 小深原遺跡 SK-01 実測図

根による搅乱を受け、人為的なものであるかどうかは判断しがたいものであった。しかしそれらの中で P₁（第211図参照）は径18cm・深さ30cmを測り、底部の掘り方もしっかりしたもので人為的なものであろうと考えられた。

Ⅲ区隣接拡張区内では土壤（SK-01）、ピット（P₂・P₃）を検出した。SK-01はⅢ区隣接拡張区の東壁沿いや南側に位置しており、主軸を南北に向けた長径2.45m・短1.90m・深さ0.15mの不整な橢円形プランを呈するものである。この土壤内には暗茶色土が堆積しており、土を除去した際に側よりP₂・P₃が確認された。P₂は径60cm・深さ20cm、P₃は径58cm・深さ10cm程度の浅いものである。2つのピットは隣接しており、淡黄色の土が堆積していた。土壤との関係は不明である。土壤中央部から北側にかけて40cm前後を測る石が3個検出された。うちほぼ中央に位置するひとつは厚さ15cmを測るほど四角形の偏平な形をしており土壤床面より約6cmほど浮いた状態で検出されているため、この土壤と何らかの関係があるものと想像された。他の石は土壤内の地山から露出するもので岩脈の一部と判断された。

出土 遺物

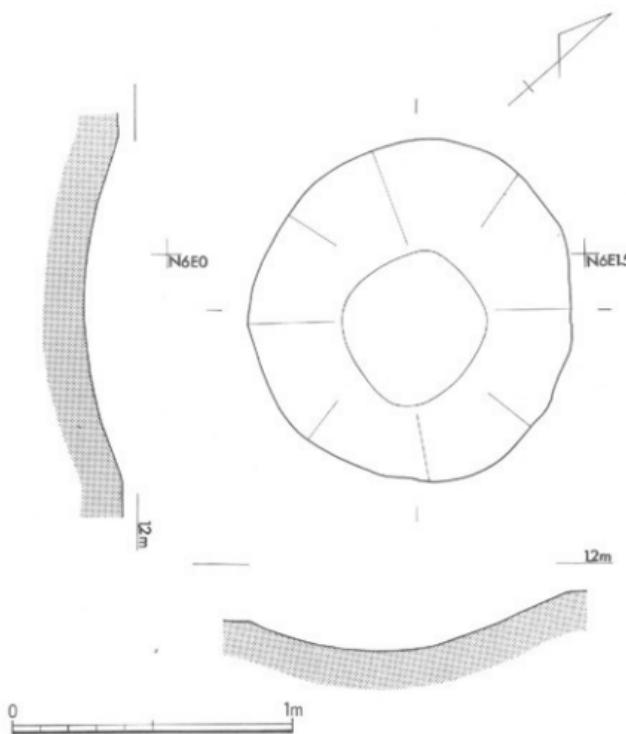
この調査区内より出土した遺物は黒曜石片等45点の他に石錐・土器片があり、他の調査区に対して比較的多いことが注意される。さらに注目されることは黒曜石の原石（第217図22）が出土していることで、これは長さ12cm・幅8cm・厚さ3cmを測り、Ⅱ区の東側、隣接拡張区とはば境を接する地点から出土した。この原石は、石器の素材となる剥片を三面より剥ぎとられたと考えられ、周辺からは黒曜石の石錐を始めこ



第213図 小深原遺跡 SK-02 実測図

まかい剥片も出土していることからこの地で加工を試みたことを示唆するものであった。黒曜石の石錐は完形品1点（第216図8）と一部欠損するもの2点（同図10・11）が出土している。剥片は大・小出土しているが第217図の16・17は接合資料でこれらは打撃によって2個の剥片に分割している。腹面側は素材面をそのまま残し、背面側には自然面と調整剥離がみられる。また材質は異なるがサヌカイト製の石錐1点（第216図7）、石錐1点（第217図20）が出土している。さらに縄文土器片が4点（第215図1・3・5・6）出土した。これらの土器片はいずれも小片でしかも風化が著しいため時期を特定することはできなかった。このうち1・3は口縁部と思われる。

以上の出土遺物はすべてⅠ区・Ⅱ区同様、表土下約30cm前後の黄褐色土中より出土している。出土分布は調査区及びⅡ区隣接拡張区内の中央部・北東部・西部とはば3つのグループに分けられる。調査区内ほぼ全域にわたって幅広い分布を示しているが、しいて言うなら中央部から東部にかけてその分布が特に目立っており尾根筋にあたる若干の高まりが認められる場所に集中する傾向を見せ

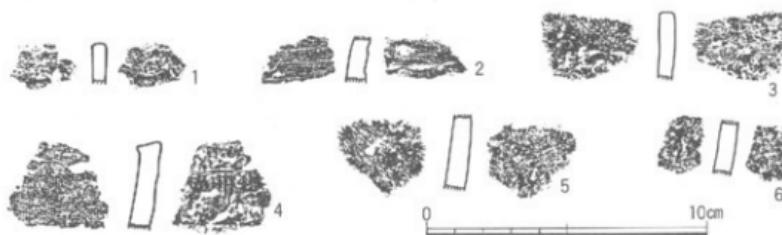


第214図 小深原遺跡 SK-02 実測図

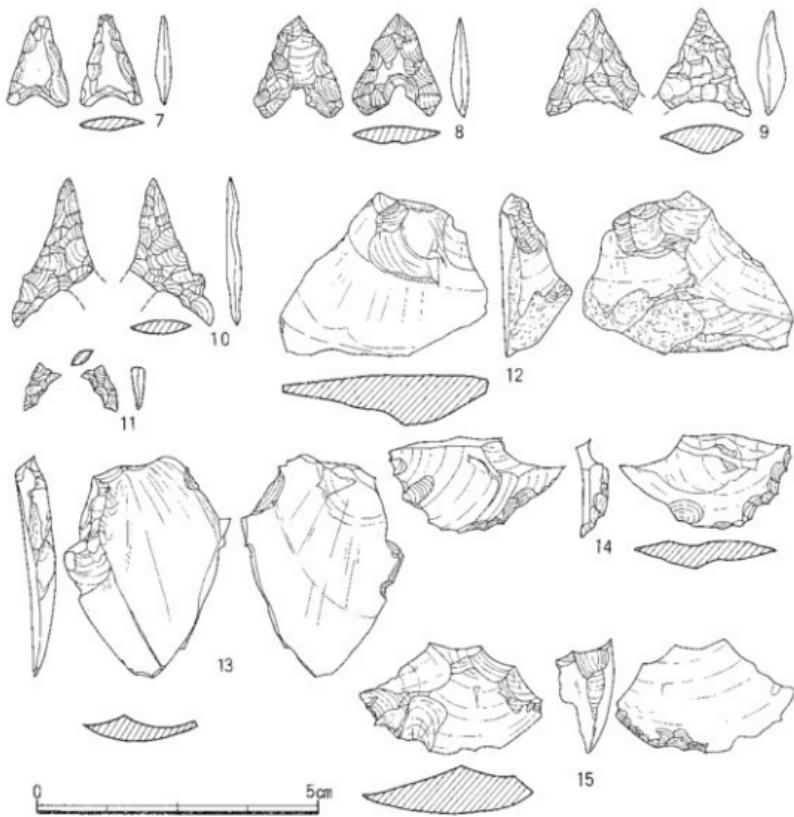
ているといえよう。

IV 区

Ⅲ区の西側に位置する。調査区内の土層堆積状況は表土約10cmを除去すると黄橙色土が約50cm堆積しており、さらに下層は砂粒を含む黄色土の堆積が認められ、この層より下を地山と判断した。



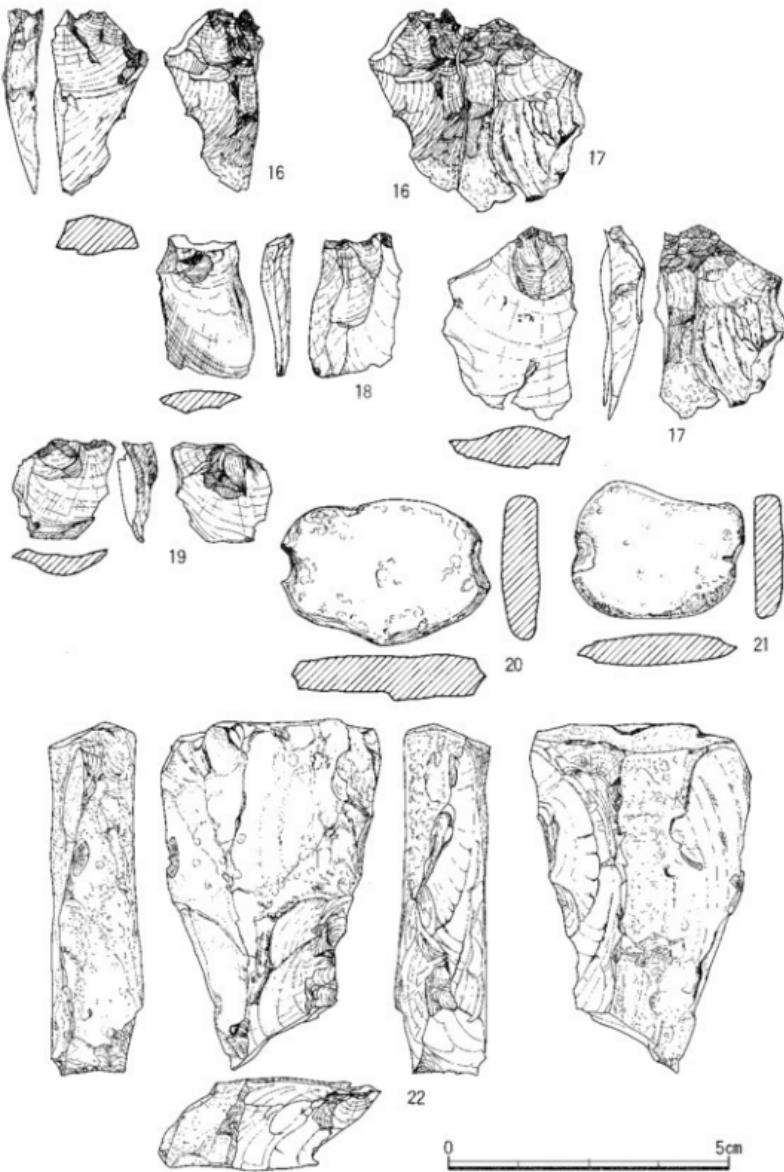
第215図 小深原遺跡出土遺物実測図



第216図 小深原遺跡出土遺物実測図

この調査区からは南西部より直径1.2mのはば正円形プランをなし、深さは15cmで底は浅く皿状を呈す土壤（SK-02）が検出された。この土壤は地表の腐植物を取りはらった際に表土上からすでに確認でき、表土除去時には少量ではあるが炭化物の堆積も認められた。土壤表面はかなりの高温によって熱せられたとみられ、よく焼きしまっていた。以上の理由からこの土壤は比較的新しい時期に小炭を焼いた跡と判断された。

この調査区内からは黒曜石片等が3点出土したが、この数は他の調査区と比較すると最も少なく、このうち1点は石鏃（第216図9）である。腸ぐり部の片方が欠損しており調査区内のやや東南部より出土した。他の2点は剥片である。石鏃と剥片1点は表土下約20cmから、もう1点の剥片は表土下約60cmの黄褐色土と地山のはば境から出土した。



第217図 小深原遺跡出土遺物実測図

第13表(1) 小深原遺跡出土遺物観察表

器 器 名 称 番 号	器 種	重 量 (g)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口 径	底 径	厚 さ					
215-1						淡黄色	石英砂粒を含む	ややもろい	
2					表面にやや凹凸あり。裏面は横方向に細かい条痕が走る。	こげ茶色	石英砂粒を多く含む(1mm以下)	良 訓	
3						淡茶色	砂粒を多く含む(1mm程度)	〃	
4					縞文焼がみられる	淡黄茶色	砂粒をやや多く含む(1mm程度)	〃	
5						淡黄色	鐵砂粒を多く含む(1mm以下)	〃	
6						淡白黄色	鐵砂粒を含む(1mm以下)	ややもろい	

第13表(2) 小深原・西ノ谷遺跡出土石器計測表

No	種類	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重 量(g)	備 考
216-7	石 鋸	1.6	1.1	0.2	サスカイト	0.2	全体に風化著しい
8	石 鋸	1.8	1.6	0.3	黒曜石	0.5	
9	石 鋸	1.95	1.5	0.5	黒曜石	0.9	一部欠
10	石 鋸	2.6	1.5	0.2	黒曜石	0.45	一部欠
11	石 鋸				黒曜石	0.2	
12	剝片	3.2	2.9	0.9	黒曜石	7.9	表皮が残在す
13	剝片	3.9	2.9	0.5	サスカイトorケツワ岩	4.25	
14	二次加工のある剝片	2.3	1.7	0.5	黒曜石	2.45	剝離面にやや風化がみられる
15	剝片	3.2	1.9	0.8	黒曜石	3.35	調整時に破損した跡がみられる
16	剝片	6.5	3.4	1.4	黒曜石	22	一部表皮が残在す
17	剝片	6.8	4.7	1.5	黒曜石	37.75	下部は刃のように鋭い。一部表皮が残在す
18	剝片	5.0	3.4	0.8	黒曜石	14.0	つぶ状の創跡が認められるが、発掘時のものと思われる。
19	剝片	3.5	3.5	5.6	黒曜石	9.5	一部、表皮が残在す
20	石 鋸	7.5	5.1	1.2	不明	74.5	
21	石 鋸	6.1	4.8	1.0	不明	40.1	
22	原石	12.3	7.8	3.3	黒曜石	346.4	
23	ボイント	12.5	2.9	1.0	安山岩系	42	
24	剝片	5.4	1.5	0.7	黒曜石	8	風化がみられる

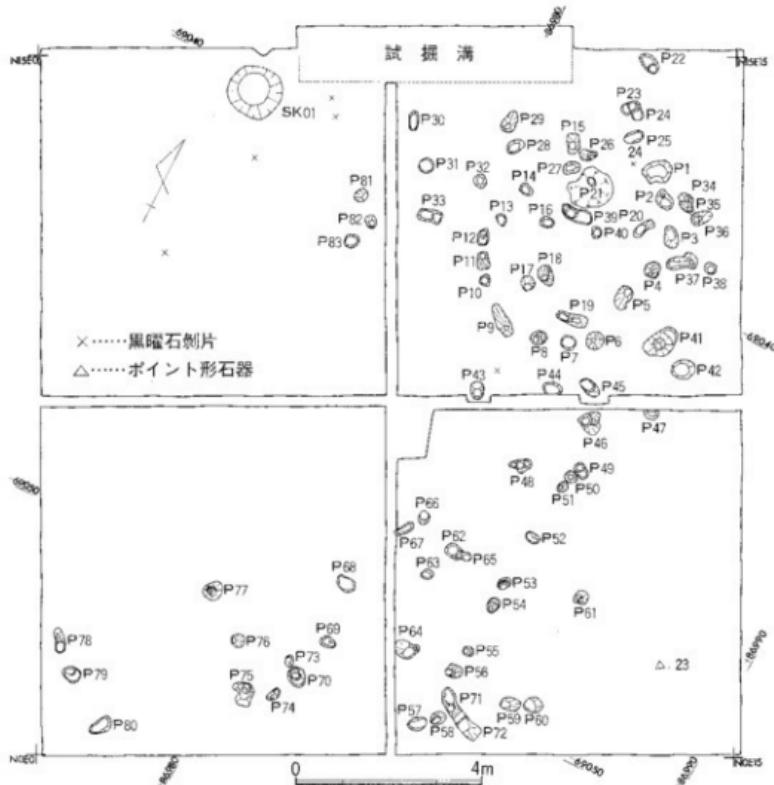
西ノ谷遺跡

遺跡の概要

西ノ谷遺跡の所在地籍は八東部八雲村大字東岩坂2429-2外で、村境に近い標高344.2mを測る山頂にあって、先述した小深原遺跡からは、南へ約300m隔っている。

本調査に先がけ昭和60年6月3日～6月22日まで試掘を実施した。これは鉄塔建設予定地であるところの一辺15mの方形区画の対角線上に幅2mの試掘溝を設定して行った。結果、若干の柱穴状落ち込みを検出、黒曜石剣片、ポイント形石器等を得、縄文時代の遺跡であることを確認した。

先の試掘調査をもとに同9月2日から10月30日まで本調査を実施し、多数の柱穴状落ち込み等を



第218図 西ノ谷遺跡検出遺構実測図

第14表 西ノ谷遺跡検出柱穴状落ち込み計測値表

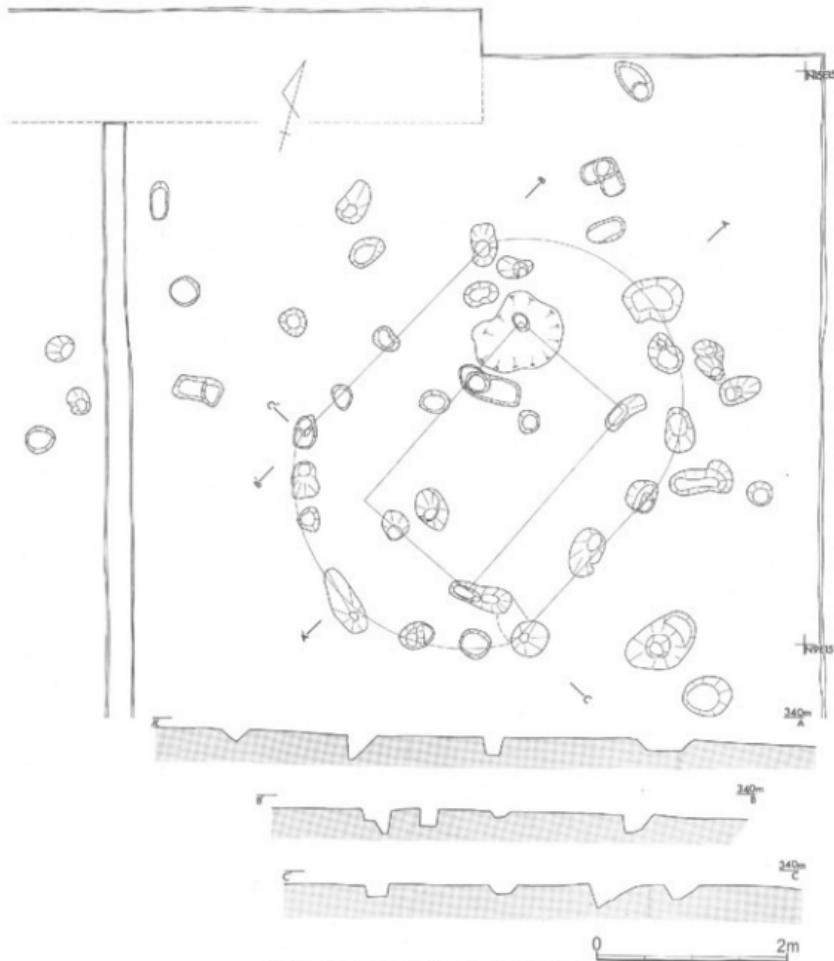
単位: cm

No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
上縁径	63	40	45	27	47	27	35	30	53	33
下端径	40	20	20	18	20	15	14	10	20	10
深さ	12	21	18.5	17.7	38.8	21.4	75	22	22.5	22.7
No	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20
上縁径	41	25	37	23	25	19	30	22	46	26
下端径	10		19	12	20	15	29	11	12	
深さ	28	29	19	7	20.9	18.5	23	27.2	37	25.8
No	P 21	P 22	P 23	P 24	P 25	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30
上縁径	上縁欠損	50	28	40	22	20	20	41	23	38
下端径	15	11	15	15	14	12	18	16	38	11
深さ	30	16.9	24.5	12.5	24.4	17	22	12	11.5	25.8
No	P 31	P 32	P 33	P 34	P 35	P 36	P 37	P 38	P 39	P 40
上縁径	32	32	30	27	25	26	26	18	30	22
下端径	22	27	12	11	20	12	10	10	11	9
深さ	92	43.4	26.5	24	38	20.6	20.3	28.8	19	20
No	P 41	P 42	P 43	P 44	P 45	P 46	P 47	P 48	P 49	P 50
上縁径	80	51	51	43	38	40	43	22	48	25
下端径	15	10	30	25	18	12	30	20	30	20
深さ	32.5	61	23	14	27.5	35.5	8	15	24	22
No	P 51	P 52	P 53	P 54	P 55	P 56	P 57	P 58	P 59	P 60
上縁径	28	20	32	22	30	20	32	24	25	20
下端径	9	8	28	10	18	10	10	8	11	9
深さ	16	21	26	15	24	31	21	23	22	30
No	P 61	P 62	P 63	P 64	P 65	P 66	P 67	P 68	P 69	P 70
上縁径	25	20	40	30	28	20	50	35	25	18
下端径	10	8	20	20	18	10	25	16	14	12
深さ	23	23	6	9	16	18	11	15	5	51.8
No	P 71	P 72	P 73	P 74	P 75	P 76	P 77	P 78	P 79	P 80
上縁径	60	30	50	35	25	17	30	17	30	26
下端径	15	15	22	22	20	10	5	5	10	8
深さ	32	15	13	35	45	11	30	11	13	9
No	P 81	P 82	P 83							
上縁径	35	27	29	21	33	29				
下端径	18	10	14	10	28	20				
深さ	21	22	26.4							

検出した。柱穴状落ち込みは調査区北東隅と南東、南西にかけてみられ、北東隅の群は円形に廻ることが注意された。

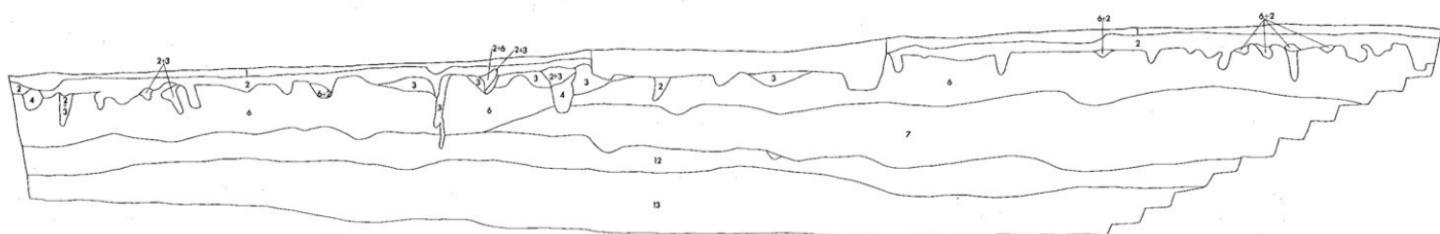
検出した遺構

この調査区で検出した遺構は柱穴状落ち込み82個、小炭焼成用の施設と考えられる土壙SK01であった。これらはいずれも腐植土及び淡茶色土を除去する時点で検出した。



第219図 西ノ谷遺跡SB-01実測図

345m



345m



- 1 淡茶色(苔や木の根によって擾乱された層)
- 2 淡茶色(石器等の植物を含む)
- 3 明黄色
- 4 黒褐色
- 5 暗褐色+灰褐色
- 6 明褐色
- 7 褐色
- 8 灰灰色
- 9 淡黄色
- 10 灰白色
- 11 黒色
- 12 黄褐色
- 13 黄褐色
- 14 明褐色



第220図 西ノ谷遺跡調査区土層図

-335~336-

